

フランの異世界召喚記

松雨

とある日、八雲紫の気まぐれで開催された博麗神社での宴会に紅魔館の皆と一緒に参加し、楽しんでいたフラン。

そうして宴会が終わって帰ると、突然現れた魔方陣によって紅魔館ではない場所へと飛ばされ、その場に居た人間に攻撃されるも難なく返り討ちにする。

その後、自身の居るこの場所が『外の世界』であると察し、魔方陣から戻れないと知ったフランは、いっその事この状況を楽しもうと決意した。

これは、八雲紫が迎えに来るまでフランが異世界を廻りながら仲間作り・困り事の解決・現地魔法を交えた戦い等をしつつ、そこでの冒険を楽しむ物語である。

※後日談の時系列は都合上、バラバラになります

※後日談の受け付けを終了し、完全に完結致しました

目次

第1章 カーテンド王国 王都編

フラン、異世界に召喚される	1
フラン、王都の宝石店に行く	11
フラン、冒険者となった瞬間に絡まれた	19
フラン、初めての採取依頼	28
フラン、強盗犯の犯行を阻止する	36
フラン、異世界の魔法を覚える	43
フラン、襲撃者を撃破する	52
フラン、魔物の討伐依頼を受ける	61
フラン、パーティーを組む	68
フラン、ミアと共に王都のお祭りに行く	77

フラン、ワイトの父の店を守る	86
ミア、ワイトの母を救う	95
フラン、王都を出る	102
フラン、助けた冒険者に二つ名をつけられる	110
主人公組解説・使用魔法	118
第1章主人公一行以外の登場人物・魔法解説	129
第2章カーテンド王国 シャーム編	139
フラン、依頼の紙を盗られる	139
フラン、地竜の親子と相對する	148
フラン、シャームの冒険者たちに認められる	157
フラン、観光を楽しむ	165
フラン、少年に弾幕を教える	172
フラン、学園に練習試合を見に行く	180

サラ、魔法大会勝利の妨げとなる者を観察する	187
フラン、疑似弾幕ごっこをする	196
第2章主人公一行以外の登場人物・魔法解説	206
第3章カーテンド王国ルービエ編	213
フラン、大会会場の警備に行く	213
フラン、2人の試合を観戦する	221
フラン、いかにもな輩を制圧する	228
フラン、魔法大会決勝戦を観戦する(その1)	234
フラン、魔法大会決勝戦を観戦する(その2)	241
フラン、この世界で初めて同族に出会う	249
フラン、厄介事に首を突っ込む	255
フラン、ルーバヌ砦に行く	261
フラン、防衛戦に参加する	267

フラン、ギラムス伯爵一家と戦う	273
フラン、聖教会の一派と小競り合いをする	280
フラン、吸血鬼に対する根深い不信感を感じる	286
フラン、エア率いるパーティーと共に行動する	292
フラン、吸血鬼に対する悪い感情の払拭に挑む	298
フラン、危機を察知して隣国へ	304
第3章 主人公一行以外の登場人物・魔法解説	311
第4章 ノストライト皇国 エリユカル編	321
フラン、ヴァーミラと契りを交わして姉になる	321
フラン、パーティー名を決める	328
フラン、波風を立てる	335
フラン、謎の宝石を見つける	341
フラン、貴族と一触即発	347

フラン、精霊の親子に出会う	354
フラン、久しぶりの休息	363
フラン、皇国の魔法研究者と遭遇する	371
フラン、皇国兵士とやり合う	378
フラン、魔法祭に向けて練習を始める	386
フラン、氷炎の中で舞う	394
フラン、ミアの師匠の故郷へと出発する	403
第4章 主人公一行以外の人物・魔法解説	411
第5章 ノストライト皇国 ミロミス編	417
フラン、妖精の飛び交う村に着く	417
フラン、魔境と化した妖精の森へと足を踏み入れる	425
フラン、狂気を纏いし闇と化す	433
フラン、後処理に奔走する	441

ギルド本部での会議、紛糾する	449
フラン、ミアの師匠に会う	458
第5章主人公一行以外の登場人物・魔法解説	465
第6章ノストライト皇国シェイニーク編	471
フラン、ギルド本部に呼ばれる	471
フラン、会議場にて強烈な印象を残す	479
フラン一行、皇都で目立つ	488
フラン、魔導剣士のイベントに参加する	497
フラン、新人冒険者をイビりから助ける	505
フラン、採取依頼の護衛をする	513
紅魔館一行、八雲紫と共に異世界へ乗り込む	520
フラン、皇都観光をする	533
フラン、皇帝の子に翻弄される	542

フラン、自身をレミリア達が探しに来ている事を知る	550
フラン、皇城へ行く	557
フラン、依頼の為に皇都を発つ	565
第6章主人公一行以外の登場人物・魔法解説	573
最終章 護衛依頼編	581
フラン、盗賊団を撃破する	581
フラン、エリエス達と再会する	589
フラン、ミロミスを発つ	597
フラン、親子を感じる	604
フラン、幻想郷へ皆と共に帰る	613
最終章 主人公一行以外の登場人物・魔法解説	626
後日談(時系列バラバラ)	633
友と呼ばれし皇帝	633

学園交流会 その1 ……………

学園交流会 その2 ……………

第1章 カーテンド王国 王都編

フラン、異世界に召喚される

「博麗神社での宴会楽しかったなあ〜」

紫が計画した、幻想郷のそうそうたる面々が一同に介する宴会に私を含む紅魔館に居る全員で参加してきた。

突然どうしたのかと聞いてみたら、外の世界に行った時に臨時収入があったらしく、せっかくだから楽しく賑やかな宴会を自費で開くかと言うことになったのと。

なんか後で無理なお願い事でもされそうな気がしなくもなかったけど、今気にすることではない。じっくり楽しもう。

その後は皆で用意された食事を平らげたり、魔理沙と軽めの弾幕ごっこをしたり、一発芸を披露したりして宴会をじっくり楽しんだ。

そうして疲れていつもの地下室に帰り、休憩していたときにそれは起こった。地面に巨大な魔方陣の出現だ。

直感でこの上に立っていたら不味いと思って離れようとするも……

「何で動けないの!？」

体が固定されてしまつてまともに動くことが出来ない。そうこうしている内に魔方陣の輝きが強くなり、思わず目を瞑る。

少し時間をおいた後に目を開けるとそこは、私の見知った地下室ではなく、どこか分からない城の玉座の間だったので少なくともここが幻想郷ではないことは明白だった。

辺りを見回し、豪華そうな椅子に座っていた王様らしき人物と目があつた瞬間、いきなり火の弾を大量に乱射してきた。

いきなりの事で驚いた私だったが、着弾するギリギリのタイミングで霧化して回避することが出来た。

ここは幻想郷ではないからスペルカードルールなど存在しない。

相手はこちらを殺すつもりで攻撃してくるのだ。何かしら反撃をしなければ殺さ

れる。

その現実が突き付けられた時、私は反撃を決意した。その際仮に殺してしまっても致し方ないと。

「召喚の準備が整いましたよ、王様」

「ずいぶん長かったが、ようやくこの時が来たのか」

「ええ。召喚でやって来た者に強力な加護効果を付ける為、何回も実験を繰り返しましたのでね。侵攻計画の障害が現れたときの為、万が一に備えて」

1ヶ月前、王様からとある計画の実行の為に強き者を異世界から召喚せよとの指示を受け、王都に居る優秀な魔導師や召喚術士等の中でも選りすぐりの者を集め、『加護召喚術』の開発を突貫で行っていた。

並大抵の辛さではなかったものの、何とか乗り切って実用まで漕ぎ着ける事が出来た。

「なるほど。ただ、そんな強力な加護を与えても大丈夫なのか？ 反抗してきたりとかは……」

「大丈夫ですよ。召喚した最もな理由を考えておくので。仮にそうなったときの為に選りすぐりの者たちと魔力を封じる魔道具も用意してあります」

「そうか、分かった。では早速始めろ」

「了解です!!」

そうして魔導師6人に召喚術士5人、魔力が枯渇した時の予備要員10人が定位に付き、加護召喚に入る。

『我らの魔力を贄として……出でよ、加護召喚!』

そう唱えると、地面に描いた魔方陣が輝き始める。同時に物凄い勢いで魔力が吸いとられ、体に力が入りずらくなってきた。

「皆さん耐えてください！ もう少して召喚が成功しますよ」

「ぬうう!!」

踏ん張る事30秒、一瞬目が眩む程の閃光が発生して思わず目を瞑る。少し経った後、目を開けると召喚魔方陣の真ん中に金髪で赤い瞳、綺麗な魔法石のぶら下がった歪な形の羽を持つ少女が立っていた。

相対して居るだけで体力を削られていきそうな位の圧力と魔力を感じた事から、あの少女がかなりの大物だと言う事は間違いないので、召喚は成功したのだと判断した。

しかし、その少女を見た王は私が予想出来ない位の馬鹿なことをやらかした。

なんと、その少女に向かっていきなり攻撃魔法を叩き込んだのだ。更にそれに続き、待機していた魔導師たちもあらんかぎりの魔法を放ち、現場は火や氷の塊が飛び交う地獄と化してしまった。

「ちょっと王様、何してるのですか!?!」

「……お前たちの召喚したあの者は人ではない。人ではないならこの国には必要ないから消えてもらおうとな」

「今はそんな事言ってる場合じゃ——」

王様を嗜めようとした時、魔法を放った魔導師1人の背後に赤い霧が集結して、

そこからあの金髪少女が現れた。

「な……」

「勝手に呼んでおいて、人じゃないからっていきなり殺そうとしてきたんだから、これくらいは身を守るために仕方ないよね？ おじさん」

少女はそう言うと、その魔導師に蹴りを入れて吹き飛ばした。私は彼に駆け寄ると、咄嗟に魔法で防御したお陰で死にはしなかったらしいが、骨が折れているのもう動けなくなっている。

私は思った。王は竜を怒らせた。

そこからは少女の独壇場で、次々に放たれる魔法や剣撃を避けつつ魔導師に接近し、一撃で気絶させる。剣士や槍使いと言った兵士には大小様々な光の弾を大量にお見舞いして制圧していた。僅か三分足らずであった。

そうして自身を攻撃してきた人だけを倒した後、椅子に座っていた王様の下に向かった少女。この後起こりそうなことを想像し、いつでも動けるように備えておく。

「ねえ、あなた王様？」

「……そうだ」

「ふーん、運が良かったね。もし昔の私だったら……」

妙な形をした棒を持つ右手を上げ、『禁忌レーヴァテイン』と少女が言うと、それに炎が纏わって自身の身長位の燃え盛る炎の剣が出現した。それを王様に当たるギリギリの位置に振り下ろし、側にあった装飾品ごと床を粉碎した後に……

「こんな風になってたかもね。ふふっ」

狂気を感じる笑みを浮かべながらそう言ったのを聞いた瞬間、あまりの恐怖に脚が鉄の塊になったかのように重く感じて動けなくなる。

周りを見回して見ると、王様を含む玉座の間に居る全ての人も私と同じように動けないようだ。

「あ、そうだ。王様、あなたに最後に1つだけ質問いい？」

「何だ？ 答えられることなら良いが……」

「私を元居た所に返してもらえない？」

「お前を召喚したのはワシではないので無理だ。あそこに居る赤い髪で赤いフードを被った者に聞くといい」

（え、不味い！ 召喚することばかり考えてて送り返す魔法なんて考えてない。ああ、殺されるかも……）

王様にそう言われた少女がこちらに歩いて近づいてくる。

言葉を慎重に選ばなければこの場で死んでしまうかもしれないと、今日ほど人生でここまで死を覚悟したことは今までなかった。

「で、そう言われたんだけどどうなの？ 私を元居た所に返せる？ お姉ちゃん」

「申し訳ありません！ この召喚は一方通行で貴女を返すことが出来ないのです」
「はあ。じゃあ帰るにはあのスキマ妖怪に見つけてもらわないと駄目なんだ……と
言う事は普段絶対に見れない外の世界を楽しむチャンスでもあるんだよね。落ち込んでても仕方ないから楽しいことでも考えよう」

正直に言うと、少女は凄く落ち込む。そうかと思えば何か楽しいことを想像したらしく、笑顔になる。

それを見てひとまず、死の危険を脱した事に私は安堵した。

（てか、スキマ妖怪って何だろう？ あの子の知り合いかな）

自分には関係ないことを考えていると、再び話し掛けられる。

「それとお願いがあるんだけど、いい？」

「あ、はい！ 私に出来ることなら何でも！」

「ここから近い所に宝石を売れる店ってある？」

「ありますよ。この城を出てからすぐの所に」

そう言うと少女は自分の羽についている青い魔法石と同じ形の物を私に渡してきた。

「ならこの魔法石、いくらで売れそう？」

「っ！ この魔力ならそうですね、予想ですが、金貨10枚位で売れると思います。」

あ、この世界の貨幣価値の説明をするとですね……」

貨幣価値の説明をした後は簡単にこの国についての説明をし、身分証明としてギルドに冒険者として登録した方が何かと便利なことも説明しておいた。

「ふーん。これを売れば高級宿暮らしをしても5日は持つ、帰るまでも冒険者登録をした方が何かと便利、目立つから羽は隠しておけと。分かった、ありがとう！」

そうして全てを説明し終えた後、私は攻撃されなかった魔導師に少女を城の出口

まで案内させた。自分が行けば良かったかとも思ったが、少しでも早くこの圧力から解放されたかったので仕方ないと思うことにした。

ここまで読んで頂き感謝です。

フラン、王都の宝石店に行く

理不尽な理由でいきなり攻撃してきた人たちを撃退し、城を出た後、私は宝石店に向かっていた。

「確か『蒼宝の館』だったっけ？ 全体が青い外観の建物みたいだからすぐに見つかると思ったけど、意外と見つからないなあ。それにしても、日光浴びた時に蒸発しなかったのは何でだろう？」

私には全く分からないけど、お陰でこうして昼間に堂々と外を出歩けるのは嬉しい。まあ、日光を浴びた瞬間にヒリヒリした弱い痛みを感じる程度には影響を受けているので、早急に魔法石を売って得たお金で日傘を探して買おう。

「あああ……全然見つからない。おまけに体から煙が開始めるし」

30分位歩いても全くそれらしき建物が発見出来ない。そうこうしている内に日光を直に浴びている腕や脚、顔と言った部分から少しずつ蒸発し始めた。痛みは相変わらず弱く、まだ行動に支障はないけど……

「このまま体から煙を出しながら歩くなんて怪しいよね……」

吸血鬼がここではどう思われているのかなんて分からない。

だけど王様のあの様子を見ていたら、この国では国民の末端まで他種族が忌み嫌われていた可能性が高いと思う。

そうになると、私が吸血鬼だとバレてしまえば……外の世界を楽しむどころか無事に帰れるか怪しくなってしまうだろう。

そう考え、日陰で休まなきゃと思った私は即座に大通りから少し外れた路地裏に入ってしまった。

すると、すぐに蒸発が収まってヒリヒリした痛みも一瞬で消え、地味に消費していた体力も回復してきたので、この選択は正解だった。

「空を飛びながら探せば簡単そうだけど、そんな事したら『私は人じゃありませんよ〜』と、自分から盛大にバラすことになるよね……」

土地勘のある人1人一緒につけてもらえらるるようになれば良かったし、地図をもたえれば良かった。

今さら公開しても遅いけどさ。

そんな事を考えながら路地裏のベンチで休憩していると、向こうからいかつい感

じの風貌をした若そうな男の人が2人と女の人が1人、私を見つけたのかこちらの方に歩いてくる。

「おい、嬢ちゃん。何やってんだこんなところで？ 王都とは言え、路地裏は結構危ないぞ！」

「えっと……この魔法石を売るために蒼宝の館ってお店に行きたいんだけど、歩いて探しても場所が全然分からなくて、今は疲れて休んでたところなの」

実際は全く疲れていなくて、日光で身体が蒸発し始めたからなのだけけど、それを言うと今後に支障をきたす可能性が高いから最も納得の行く理由をでっち上げ、持っていた青い魔法石を彼らに見せる。

「……すげえなこれ。こんなに魔力がぎゅっしり詰まってる魔法石見たことねえぞ」
「これ使えば良質な魔道具が作れるわね。いや、どっちかと言うと魔導武具向きかもしれない……」

「ねえ、そんなに凄いの？ これ」

「そりゃあもう！ 嬢ちゃんの行く店に売ればかなりの量の金貨を貰える位にはな。それにしても、こんなものをどこで……」

「知り合いからもらったんだ」

まさか自分の羽から取った魔法石とは言えず、知り合いからもらった物と言う事にしておいた。

「そうか。じゃあ嬢ちゃん、今から俺らがその店まで案内するから付いてこいよ」

「良いの？ ありがとう、お兄さん！」

「ハハハ！ 嬢ちゃん、俺らお兄さんって呼ばれる歳じゃないんだよ。もう50になっただけだぜ」

「あ、そうなの？」

どうやら目の前の3人組が目的の店まで案内してくれるみたいなので、一緒に付いていく。

まるで迷路のような路地裏を進むこと5分、看板に蒼宝の館と書かれた小さな青い外観のお店に到着した。

こんなに目立たない場所にあるなんて思わなかった。そりゃああれだけ歩き回っても見つからなかったわけだ。

「入るぞ。店主、居るか？」

「居る……何だあんたか。また何か買いにでも？」

「違う違う。この店に売りたいものがあるって嬢ちゃんを連れてきただけだ」

「ほう。あんたの後ろについてきていたあの金髪の子ね。売りたいものは……手に持っている青い魔法石か？」

「あ、うん。そうだよ」

そうして私は、出てきた店主のおばさんに持ってきた青い魔法石を手渡す。その瞬間、おばさんの顔が先ほどとはうって変わってにこやかな物になり、あらゆる角度から魔法石を見渡しながら独り言を呟いていた。

「なんと素晴らしい魔力の多さと質の良い魔法石なんだこれは!? 魔道具や武具、他にもいろんな事に使えるわ。そうなると売却額は……金貨13枚だろう」

「おお、やはりその位は行くのか」

「当たり前だ。こんなに良質かつ大きさもあるのだからそれくらいは当然！」

その後、簡単な手続きを経て魔法石を売却し、対価として金貨13枚をもらって店を後にした。

「ここまで付き合ってくれてありがとうお兄……おじさん」

「おう！ あ、路地裏抜けるまで付き合うぜ。危ないからな」

「うん！」

そうして来た道を戻り、路地裏を抜けて、私を店まで案内してくれた3人組と別れた。

魔法石を売ってお金を得ると言う目的を達成したので、次は日傘探しをする事に決めた。

「あ、さっきの3人組に日傘を売ってるお店を知ってるかどうか聞いておけば良かったな」

今更そう思っても仕方がないので、町を歩いていたら人に声をかけて日傘が売ってる店があるか聞いてみる。

そして5人目に聞いた時、日傘を売っていると言うお店の情報を聞き出せたので、町の人の好意で案内してもらった。

「ここが日傘を売ってる店だ。そういや言い忘れたが、ここの日傘やたら高いぞ。その分耐久性は高くて軽いし、魔法とかにも強いからな」

「そうなんだ。でも、それについては心配しなくても良いよ。ちゃんと用意はして

あるから」

「そうか。確かに金貨13枚もあれば十分だろうな」

店に入り、店内を歩き回ってよさそうな日傘がないか見て回る。

どの傘もかなりの高級品らしく、1番安い物でも銀貨7枚はするみたいだ。

「どれにしようかな……あ、これにしよう」

店内を歩いていて私が気になったのが、全体的にほんのり赤みがかっていて何かの花の絵が描いてある日傘だった。

「すみません。これ下さい」

「はい。えっと……『紅夜の日傘』ですね。金貨1枚、銀貨6枚になります」

銀貨は持っていないので金貨2枚を出した。

「金貨2枚……お釣りは銀貨4枚です」

「はい。ありがとうございます」

そうして店員さんが鍵を外し、紅夜の日傘を受け取ってお店を後にした。

ここまで読んで頂き感謝です。お気に入り登録と星評価して下さい方にも感謝です。励みになります！

※この世界の貨幣価値は銅貨↓銀貨↓金貨↓白金貨の順に高く、銅貨10枚で銀貨1枚、銀貨10枚で金貨1枚、金貨100枚で白金貨1枚です。

フラン、冒険者となった瞬間に絡まれた

「へえ。嬢ちゃん冒険者になるのか」

「まあね。知り合いからもらった魔法石のお陰でしばらくは宿泊まりでも良いけど、いずれそうする訳にもいかないしそれに、世界を見て回りたいからね」

ひとまず最低限この世界で生活していくのに達成必須の目標、お金の調達と日傘の購入を達成した私は、最後の冒険者登録をする為にギルドに向かっていった。

日傘の店を出てすぐ、通りがかった荷馬車の運転手にギルドの場所を聞いたら、偶然その近くに用事があるらしく、ギルドの近くまで乗せてってもらえる事になった。

「……でもな嬢ちゃん、冒険者は危険な職業だぞ。葉草採取の依頼とか近場へ届け物の依頼ならまだしも、ランクが上がっていくにつれて受けることになる魔物の討伐依頼だと、下手すれば死ぬ事だってある。それに、護衛依頼じゃ対人戦だってやるかもしれないぞ？」

「うん。それでもやるつもりだし、覚悟はしているよ！」

「そうか。そこまで言うなら止めんが……まあ、死ぬなよ」

そう話をしてしていると10分程経ち、ギルドの近くまで到着したのでそこで降り、買った日傘を差して冒険者ギルドへと向かっていく。

途中、行く人々の視線を感じる回数が増えてきた気がする。日傘を差して歩くのがそんなに珍しいのかな？ まあ、確かに日傘を差してる人はほとんど見かけないけど。

そんな事を考えながら探すこと5分、看板に『冒険者ギルド』と書かれている建物を見つけたので中に入る。

「凄い人ばかり……まるで幻想郷でやった宴会みたい！」

冒険者らしき人以外にも若い人間の男女からお年寄り、見た目が人間以外の種族の人たちが賑やかにお酒を飲みながら盛り上がっていた。

「えっと……あの耳が長い人がエルフで、背が小さくてヒゲが濃い人がドワーフだったよね？ パチュリーの図書館にあった本に書いてあったから合ってるはず。私と同じ吸血鬼は……居るわけないか。昼間だし」

幻想郷には居ない種族の人たちを見て好奇心が刺激されていた。それにしても、

あの人間至上主義で人外嫌いの王様が居る街の事だから人以外の種族は殆ど居ないかと思っただけ、そうでもないみたい。自分の視界に入らなきゃ良いって感じなのかな？

そんな事を考えながら、冒険者受付と書かれた紙が貼られている場所に向かい、受付の人に声をかける。よく考えたらこの世界の文字を私は知らないはずなのに、読めると言うのも不思議だよなあ。

「どうしたの？ あ、冒険者に？」

「そう。お願いできる？」

数秒の間、彼女が私をじっくり見た後……

「分かった。じゃあこのカードの裏に名前書いたらそれに貴女の魔力を流して。それで登録は完了するから」

「はい！」

面倒な手続きでもあるのかと思ったら、カードに自分の名前を書いた後にちよつと魔力を流すだけで登録が完了するらしいので、言われた通りにやった。すると、魔力を流したカードが淡い光を放つ。

「これで登録は終わり。あ、そうしたらランクの説明だね」

彼女によればランクにはF～Sまであり、登録したばかりの初心者はFから始まり、そこからCランクまでは依頼を一定数こなすことで上がり、以降のBランクからはそれに加えて試験官による昇格試験を受ける必要があるらしい。

その他にも半年依頼を受けなければ問答無用で冒険者カードが失効、やむを得ない場合以外で冒険者同士でやり合った時は程度により失効か降格となるこの事だった。

15分間の説明が終わり、晴れて冒険者となる事が出来た私は早速依頼を受けようとクエストボードと言う、今受ける事が出来る依頼が貼り出されているのに行こうとしたら……

「お前みたいな雑魚ガキには冒険者なんてまだ早い。家に引っ込んで寝ていればいいんじゃないの〜」

「そうだな、ガハハ！」

いきなり失礼な発言をしてきた男2人に割り込まれてしまい、依頼を受ける事が出来なくなってしまった。

と言うか私、あの男たちよりはずっと年上なんだけど。

構うのも面倒になってきたので、適当にあしらう事に決めた。

「いきなりなんなの……邪魔だから退いてくれない？」

「あ？」

「だから邪魔なの。退いて？」

「うるせえ！」

「はあ……依頼受けるのに邪魔、だから退け」

「……」

こりゃあ駄目だ、埒があかない。さてどうしようかと考えていると……

「じゃあ、そんなにフランちゃんを雑魚ガキだと思うのなら戦ってみてくれない？」

それで彼女が負けたら依頼を諦めてもらう、もしお前たちが負けたら依頼を彼女に受けさせて然るべき罰を受けてもらう。それで良いだろうか？」

「上等じゃねーか！ あんな雑魚一撃で捻り潰してやるさ！」

「よし、決まりだな。あ、それとフランちゃんごめんね。勝手にこんなこと言って、でもきつと、貴女なら大丈夫」

「え？ あ、うん……」

冒険者登録した時に対応してくれた人が、あの面倒くさい2人に対して私との戦闘を提案し、勝った方の要求を受け入れると言った所、相手はやる気のようにだったので私も参加することになった。

正直戦うしかないなと思っていたので、彼女の提案はこちらにとっても都合が良かった。

「じゃあ3人共付いてきて。裏にある魔法の練習場で戦ってもらうから」

彼女の誘導の下、この建物の裏にあると言う魔法の練習場に到着した。

「この戦いのルールは相手を戦闘不能になるか降参するまで追い詰めた方の勝ち。それで良いね？」

「ああ。もちろん」

「うん。分かった」

「では、戦闘始め!!」

そう彼女が言った瞬間、相手が拳で先制を仕掛けてきたのでこちらも拳で対抗した。

「互角だと……」

「そんなわけないでしょ！」

相手の拳を受け止めた左腕に更に力を入れて弾き飛ばした所に弾幕ごっこ仕様の通常弾幕を雨あられのように叩き込む。

そのタイミングでもう1人の男が剣で斬りつけて来ようとしたので攻撃を中断して回避、弾幕を高密度広範囲かつ無造作にばらまいて牽制しながら距離をとる。

「くっ……この光弾、流石に数が多すぎないか!？」

「確かに高密度に展開された光弾ではあるが、避けられないほどでもない。威力も低めだから、回避しつつ被弾しそうなやつだけ叩き落とすぞ」

やはり、弾幕ごっこ仕様の通常弾幕だと威力不足か。そう思った私は、スペルカードを使って勝負を一気に決める事にした。

「早く冒険したいから、そろそろ終わりにさせてもらおうね！」

「何い!？」

「……『禁忌 カゴメカゴメ』」

あの2人の周囲に網目状に弾幕を展開、行動範囲を大幅に制限する。

「閉じ込められた!? だがしかし、こんなもの……ぎゃああ!!」

「あ、言っておくけどその緑色の弾幕、さっきの奴より威力高いから舐めてかかる
と痛い目見る……もう遅かったね」

「ちいい!」

そうして仕上げに大きい弾幕を数個扇状に放ち、網目状に展開した弾幕にぶつ
けて弾く。

弾かれた緑色の弾幕が更に他の奴を弾き、それが繰り返された結果彼らの周りは
地獄の状況になっていた。

「おいちょっと不味いぞ! アイツの言った通り、あの威力の光弾はさっきの奴よ
り威力がかなり高い。どうにか全部回避だ!」

「四方八方から襲いかかってくるのに全部回避って言っても……ぐあ!」

「あ、やべ。剣が折れた……」

「マジかよ!? さっきより光弾の密度が増してきたのにそれはヤバ……あああああ
!!」

最終的に、四方八方からランダムに襲いかかって来る弾幕に対処仕切れなくなっ

た彼らがまともに受けてしまつて気絶し、この勝負は私の勝利となつた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録と星評価して下さいました方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、初めての採取依頼

「やっぱり見立て通り、2人相手でも余裕で倒しちゃった。流石だよフランちゃん」

「そう？ ありがとう！」

あの戦いで勝利した後、改めて依頼を受けようとクエストボードの方に行こうとした時、私と男の人2人との戦いを提案した女の人に呼び止められたので、練習場の椅子に座って話していた。

「ねえ。何で私が勝つって分かったの？」

「フランちゃんが冒険者登録をしに私の所に来た時に、能力である程度貴女のステータスを把握してたから。だって最初、こんな小さな子が冒険者なんてやって大丈夫かって思ってたし」

「なるほど。それで、どこまで私の事を把握してるの？」

「貴女の名前と種族、能力の一部。流石に全部は無理」

「結構分かってるね」

なるほど。目で見た人物のステータスをある程度把握する能力で私とあの2人を見て、余裕で勝てるくらいの力の差を読み取ったから戦ってみれば良いと言った訳か。

それにしても、自分の情報が一部とは言え筒抜けなのはあまり気分的に良いものではない。けど、知られたのがこの人で良かったと思った。

「もちろん、この能力で分かった事は誰にも言わないから。私が誰かに言ったせいで何か起こったら嫌だし。特に貴女の種族、吸血鬼はこのカーテンド王国だとあまり良いイメージないからね」

「あ、そうなんだ。なら、そうしてもらえると助かるな」

それを聞いて、なおさら自分の種族がこの人以外にバレないように気を付けようと思った。

すると突然、この人が懐から赤い液体の入った手のひらサイズの瓶を3つ、私に渡してきた。

「あと、これをあげる」

「この瓶に入ってる赤い液体って……まさか、血？」

「そう、私の血。もし、吸血衝動が辛くなったらこれ飲んで。特殊な保存魔法が掛けておいたから1カ月は持つはず。貴女が戦っている時に勝手にやったんだけど、お節介だった？」

「そんなことないよ、凄く嬉しい！けど、その傷早く治さないと……それにそんなに沢山血を採って大丈夫なの？」

戦っている間に自分の血を採取して瓶に入れ、保存魔法を掛けていたと彼女がそう言った。どうりで近づいて来た時に血の臭いがしたわけだ。

「大丈夫……『クイックヒール』！」

そう彼女が唱えると、腕の傷をまばゆい光が包み込んであっという間に傷を治してしまった。血を失った事による影響も見たところなさそうだった。

「凄い、回復魔法だよねそれ！」

「そう。あのくらの傷だったらすぐに治せる中級回復魔法」

その後彼女は回復魔法についての話を、私は弾幕やスペルカードについて色々話した。30分位話し込み、さて採取依頼を受けに行こうとした時……

「そう言えば、まだフランちゃんに自己紹介してなかったから今する。私の名前

は『スーフア』。呼ぶときは呼び捨てで。よろしく」

「分かったよスーフア！」

スーフアの自己紹介が終わった後改めてクエストボードに向かい、最低ランクで受けられる依頼の中から葉草採取の依頼の紙を取り、依頼受付の人にそれを渡す。「カフィールの採取依頼ですね。王都から近くにある林に自生している回復葉製作に必要な葉草です。そこまでの地図と葉草の特徴が書かれた本をお渡ししますの
で、本日中に10本で1つの束を6束お願いします。弱いですが、魔物も出る可能性
がありますのでもし危機を感じたら逃げてくださいね」

「分かりました！」

そうして地図と葉草の特徴が描かれた本、縛る為の紐ひもをもらって出発した。

良く考えたら幻想郷で弾幕ごっこか宴会、買い物で外に出た事はたまにあって
も、今日みたいな理由で外に出た事はなかったなあ。こう言うのもたまには気分転
換にいいかも。

王都の門から出て整備された道を、そんな事を考えながら歩いてみると、少し離
れたところに目的の林を発見したので急いで向かう。

「さてと、カフィール探そう」

到着してすぐに目的の薬草カフィールを探し始めた。本によれば白い花びらを持ち、60cm位の背丈の草で20〜30本で群生していることが多いと書いてあるからすぐに見つかるかと思っていたけど……

「何でこういう時に限って全然ないの……」

たまたま運が悪いのか、もう既に他の冒険者が採取し尽くしたのかは分からないけど何故か1時間探してもほんの3本しか見つかっていない。このペースだと今日中に見つかるかどうか怪しくなってきた。

それでも根気よくウロウロしながら探していると遂に、カフィールの群生を発見した。

「ようやく見つけ——」

とその時、目の前を緑色でこん棒を持った私と同じくらいの背丈の魔物数体が駆け抜けていった。

「確かゴブリンって言ったよね。さて、カフィールを……あっ」

改めて採取をしようとした時に、無惨にもさっきのゴブリンに踏みつけられてバ

ラバラになったカフィールが見えた。

せっかく見つけたのにアイツらのせいでまた探さなきゃいけなくなつたし。

誰もいない草原で愚痴っけていても意味ないので再び探し始めると、今度は30分で群生を発見することが出来た。

「今度こそは……」

辺りを見回してみてもゴブリンは居なさそうなので採取を始めた。

傷をつけないようにゆっくり丁寧に引っこ抜き、10本をまとめて1束にする。そうして3束目をカバンにしまい、4束目に取りかかろうとした時、今度は豚のような魔物が現れて武器を振り回しながら斬りかかってきた。その時にラバラにされたカフィールが見えて……

「……いい加減にしてよ!!」

長時間探し回り、やっと見つけたカフィールを2度も目の前でバラバラにされて怒りの頂点に達した私は、豚の魔物に有らん限りの魔力と殺気を込めてぶつけた。すると、豚の魔物は斬りかかろうとした姿勢のまま硬直して後ろに倒れてしまった。

「ああもう!」

こうしてイライラを引きずりつつも、何とか夕方には目標の数を揃えることが出来たので、せっかく採ったカフィールを傷つけないようにしながら運び、ギルドに戻った。

受付の人にカフィールの束を渡そうと向かうと、そこに2人組の若い冒険者が居て、何かを慌てて話しているようだった。私はその話になったので後ろに立って待ちながら聞くことにした。

「聞いてくださいよ！俺たちあの林で化け物を見たんです！とてもじゃないけどゴブリン討伐なんて危なくて……」

「はいはい落ち着いて下さい。で、その化け物とは？」

「とんでもない殺気と魔力を放ち、日傘を差しながら歩いていた金髪の女の子です！まるで悪魔に出会ったかのような……」

（それって私じゃん……）

心当たりがありすぎてなんだか気ままずくなってきたので、まだ時間もあるしもう少し時間を置いてから来ようと、一旦外へ出ようとした時に受付の人が2人に対してこう言った。

「なるほど。今貴方の後ろに居る子ですか？」

「え？」

そう言って彼らが私の居る方を向いて目が合うと……

「……………あああああ!!」

大きな叫び声をあげながらひっくり返って気絶してしまった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価して下さいました方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、強盗犯の犯行を阻止する

「えっと……カフィール6束持ってきました」

「はい、確かに受け取りました。かなり良好な状態で持ってきてもらえたので少し報酬を上乗せして銀貨3枚となります」

あんなことがあって若干気まずい雰囲気の中、持ってきたカフィールの束を受付の人に渡し、報酬の銀貨3枚をもらった。初めての依頼にしては大変な思いをしたものの、何とか今日中には依頼達成が出来たので良かった。

そうしてギルドを出ようとした時、夕方だったので宿を見つけなければいけないことを思い出したので、入り口近くに居た冒険者に聞いてみる。

吸血鬼は本来、今から活動の時間だけどそれでは冒険を楽しめないと判断した私は、人間の生活サイクルに合わせることに決めた。

「あの、もう夕方だから宿に泊まりたいけど私、ここに来たばかりで場所を知らないの。どこかにいい宿あったら教えてくれる？」

「……あ、すまん。このギルドの2階は簡易的だが、宿泊施設になってるぞ。狭

いし食事は出ないが、銀貨1枚で1泊と言う安さで泊まれる。もし泊まるならギルドの受付に声をかけてくれ。それと、この真向かいに位置する宿では、3食の食事付きで部屋も広いが、1泊金貨2枚と銀貨3枚とかなり高めになってるから、こっちはお金に余裕があるときしか泊まれないが」

「なるほど……じゃあギルド2階の所に泊まろうかな。私1人だけだし、そんなに広くなくてもいいから。あ、教えてくれてありがとうおじさん！」

「え？ ああ……」

お礼を言うと、冒険者のおじさんは緊張感が解けてホッとしていた。そう言えば宿の場所を聞いた時少し固まっていたけど、もしかしてヤバイ奴扱いされてる？ まあ、あの気絶した冒険者2人の話と私を見た時の様子からそう判断されたとしても仕方ないか。

その後、言われた通りに受付の人に声を掛けて、宿泊料金である銀貨1枚を支払って2階にある個室へと向かい、扉を開けて中に入る。

部屋の中は清掃がきちんとされていて綺麗で、窓から外の景色も見える為雰囲気は結構良い。唯一気になったおじさんから言われた部屋の狭さは、1人で泊まる

私には全く問題ない程度の物だった。

「今日1日だけで色々あったんだからきつと明日も明後日も楽しいことあるんだろうなあ。幻想郷に帰れたらこの世界でやった冒険とかの話をお姉さまたちにしよう！」

明日以降に起こるであろう楽しい出来事を想像しつつ、夕日が沈んでから少しして私も眠りについた。

そうして次の日の朝、窓から差し込んできた日光によるヒリヒリとした痛みと共に目が覚めた。身体を見てみると、少しだけではあったが煙が出ていた。

「危なっ！」

日光を浴び、身体から煙を出している所を誰かに見られたりしなくて良かった。大したダメージではないので、直接浴びない場所に少しいれば今の日光で受けたダメージの回復は容易だ。

3分位休んだ所で、この部屋を出て1階の依頼受付エリアに降り、今日も採取依頼を受けようと思ったのでクエストボードに向かう。

「うーん……ないなあ」

どれだけボードを良く見てみても私のランクで受けれそうな依頼が1つも無い。念のために受付の人に採取系の依頼がないか聞いてみたが、そこでも無いと言われた。

このままじっとしているのも退屈で仕方ないので外に出て、王都を見て回ることにした。

「そう言えば朝ごはんまだ食べてなかった……飲食出来るお店ないかな？」

20分程捜し回っていると、デカイ木の看板に『ワイバーンレストラン』と書かれていた店を見つけた。どうやらここはワイバーンと呼ばれる魔物の肉をメインに提供しているところのようだ。

という事で私は、この店のメイン料理を食べる為に店に入る。

「いらっしやいませ〜」

「早速で悪いけど、ワイバーンのお肉を食いたいからお願い！」

「分かりました」

どんな感じで出てくるのかを楽しみに待つこと30分、美味しそうな香りを漂わせる肉料理が出されてきた。

「お待たせしました。ワイバーンのステーキです」

「ありがとう！」

運ばれてきたワイバーンのステーキを口の中に入れ、良く噛みしめて食べる。とても柔らかく、溢れてくる肉汁も相まって感動を覚える位の美味しさだ。

料理を食べ終えた後、受付の店員にステーキ代である銅貨8枚を支払って店を出発した。

さて次はどこに行こうかな。そんな事を考えながら歩いていると、とあるお店らしき建物の前になにやら人だかりが出来ているのが見えた。騎士や杖を持った魔導師と言った人たちもその場に集まっていたので、これはただ事ではなさそうだ。

「ザルソウ、やっと見つけましたよ。その人を離しなさい！ 一体何回強盗の罪を犯せば気がすむのですか!?!」

「……1つ聞くが、離せと言われて離す馬鹿がどこに居るんだ？ え？」

「くっ……」

どうやらザルソウと言う男が、女の人を首にナイフを当てて人質に取っていると
言う様子だった。

それを見た私は、奴らが良く見える位置まで移動して様子を伺う。こういう場合は下手に行動を起こすと犯人を刺激してしまい、最悪の事態となってしまうからだ。周りの人が様子を伺っている間、犯人もこちらの出方を伺っている為か、膠着状態に陥ってしまった。

そして10分後、しびれを切らした魔導師の1人がザルソウに向けて光の弾を放ち、人質を助けようとしたが……

「ふん！」

彼のその声と共に発生した風の塊によって光弾が打ち消されてしまい、人質を助けることが出来なかった。その光景を見た私はすぐさま起こりそうな事を予想し、ザルソウの持つナイフをターゲットにありとあらゆる物を破壊する程度の能力の発動準備に入る。

「俺の要求を受け入れていればこの女は助かったろうに……残念だ」

（来る！）

その発言を聞いた私はすぐさまありとあらゆる物を破壊する程度の能力を発動させた。

「きゅっとして……ドカーン!!」

ナイフに向けた右手を握りしめた瞬間、ザルソウの持っていたナイフが粉々に砕けて崩壊し、女の人を傷つけることはなかった。

「……は？」

「何が起きたか知らないが、今だ！ 確保おー!!」

そうして周りに待機していた魔導師や騎士の人たちが一斉に襲いかかり、ザルソウを捕らえて女の人を救出する事に成功、最悪の事態を防ぐことに成功した。

「ふう……良かったあ〜」

全て終わったのを見届けた私は、すぐにこの場を離れて王都歩きを再開した。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、異世界の魔法を覚える

「次はどこに行こうかな」

人質をとっていた強盗の犯行を阻止した後、王都内を歩きながら次にどこへ行こうか考えていた。

「さっきから鎧着た兵士が多いなあ」

その事件の影響か、私の歩いている商店街には複数の警備隊らしき兵士が慌ただしく行き来しているが、町行く人たちの活気は失われてはいなかった。流石に店の周辺からは人が居なくなったようではあるが。

「お姉ちゃん……ちょっと良い？」

「何？ 私に何か用事でもあるの？」

そうして王都の風景を楽しみつつ、大通りなら少し外れた所にある雰囲気怪しい建物の前を通りすぎた時、私と見た目が同じかそれ以下の男の子に話しかけられた。

目には涙を浮かべていたので恐らく、何か不味い事が彼の身に起こってそれを解

決して欲しくて私に話しかけてきたのだろうと思った。

一体何を頼まれることになるのかな？ 親捜しか落とし物、道案内やお金の要求のどれかかもしれない……そう考えていると、全く予想していない答えが帰ってきた。

「僕のお父さんのお店で何か買ってって頂けませんか？」

「え？ お店の商品を？」

「はい！」

「……別にそんな簡単な事なら泣いて頼まなくたって良くない？ 良ければ訳を聞かせてもらいたいんだけど……」

言われた頼みは、お店の商品を少しでも良いから買ってくれと言う物だった。それなら別に泣いて頼み込まなくても良くないかと思ったので、どうして泣いてまで頼み込んで来たのかを聞かせてもらった。

彼によると、前までは生活にも余裕が出来るくらい盛況していたらしいが、とある日店に『怖い人』が来てからお客さんが激減して、たまに来てくれた地元のお客さんには嫌がらせ、冒険者にはあらぬ嘘を吹き込むと言う始末で、今ではほとんど

誰も来ずに生活が大幅に厳しくなった事をお父さんに聞かされたからだと言う。

「……分かった。お金の許す限りだけど、何か買って来てね」

「ありがとう……」

話を全て聞き、冒険者である私なら恐らく大丈夫だろうと判断したので何か買っていく事にした。いざとなったらスペルカードを本気仕様で使うだけだし。

彼の案内により怪しい雰囲気醸し出す建物の中に入ると、そこにはあらゆる種類の品物がところ狭しと並べられていた。妙な形をした魔力を感じる剣、瓶に入れられた用途不明の液体等、見たことのない道具も中にはあった。

「ここってどういう店なの？」

「えっと……」

「ワイト、誰か来たのか」

「あ、お父さん。久しぶりにお客さんだよ！」

店の奥から、黒いローブを着た男の人が現れた。あの人をワイトと呼ばれる彼のお父さんのようだ。

かなり強い魔力を感じるので、腕の立つ魔導師なのだろう。

「わざわざ来てくれてありがとう。最近は殆んど来てくれなくてね、生活すままならなかったんだ」

「あ、どうも。それは彼からここに来る時に全部聞いたので、何と言えば……」

「そうか。まあゆっくりしてってくれ」

軽くワイトのお父さんと会話を交わした後、店内をじっくり見て回る。

そうして店の奥の方にあった淡く発光して浮き上がる巻物が置いてある場所に入る。

「ワイト、この浮かんでる巻物って何？」

「えっとね、これはお父さんが開発した魔法の巻物って言って、中に特殊な方法を使って魔法を封じていて、この巻物を開けた人が封印されてた魔法が覚えられる物だって言ってた。お父さん、この説明で合ってた？」

「ああ。その説明で合ってるぞ」

なるほど、開くだけで魔法が覚えられる物と言う訳か。そんな便利なものがあるなら使ってみたい気がしたので、値段を聞いてみたら攻撃や防御・回復系魔法の巻物は金貨30枚、生活系魔法の巻物は金貨5枚と言われた。作るのに物凄い手間と

お金が必要だかららしい。

よく考えてみれば、そんな便利で手間がかかり、なおかつ高コストな物をたった1人で開発したのだから、値段が高くなるのも当たり前前だろう。

「て言うかさ、そんなにお金がかかるなら作るの止めるなり、今あるのを売るなりすれば生活だって少しは……」

「今店に置いてあるのは余裕がある時に作った奴だ。今は作ってない。それに、これを売ろうとして努力をしたこともあるが、ことごとく失敗しててな。もう完全にインテリアと化しているよ」

売ろうとしても売れないと言う事なら仕方ないだろう。

「嬢ちゃん、興味があるのか？ それなら今回に限って1つだけなら安くしておくぞ」

「本当!? ありがとう！」

攻撃と防御は弾幕とスペルカードで、回復は再生能力で取り敢えず良し、となると選択肢は生活系魔法の巻物だが、さてどれにしようか。

そんな感じですよ5分間考えた結果、自分が身に付けている物全てを綺麗にし、消

臭もしてくれると説明にあった魔法『サウディオラ』が封印されている巻物に決めた。

「ワイトのお父さん、これ下さい」

「ああ。金貨2枚で良いぞ」

そうしてお金を支払って魔法の鍵を解除してもらい、手に入れた巻物を開く。すると、頭の中にこの魔法のあらゆる情報が流れ込んできたと同時に、巻物は光となって消滅したようだ。

「嬢ちゃん、サウディオラを使ってみてくれ」

「分かった……『サウディオラ』」

私がそう言うと、淡い光が身体全体と持ち物を数秒包み込んだ後消滅した。

効果はしっかりあったようで、さっきまで砂や埃などで汚れていた日傘がまるで新品同様に綺麗になっていた。

「凄い便利な魔法……これが練習なしで使えるようになるなんて……」

「気に入ってもらえたようで何よりだ。まあ、その魔法自体は冒険者たちにありふれた物で、練習すれば得る事が出来る。ただ、練習する手間が省ける点ではかなり

有用だろう?」

「そうだね!」

かなりなんて物ではなく、物凄く有用と言うべきだと思った。

他にも興味をそそられる魔法の巻物がいくつかあったものの、高すぎて買えないので諦めて店を後にした。

「残りのお金は金貨5枚……まだ大丈夫だけど、この調子で使ったらすぐに消えるよね」

このままだと、ものの2日〜3日程度で全部使ってしまうのは明白であったので、買い物を自制し、採取依頼があればそれをこなして早くランクアップを狙い、魔物の討伐依頼などを受けれるようになるかと私は決意した。出来るかどうか不安だけだ。

それにワイトが言っていた『怖い人』と言うのも気になるな。盛況していた店を傾けるためだけに住民にすら危害を加える危ない存在がこの王都に潜んでいると言ふ事だから、少し警戒する必要があるが、そうさ。

その後どこに行こうか迷っていたが、ギルドに採取依頼が出てないか確認をする

ので戻ろうと決めた。王都歩きの前に1回確認したばかりではあるけど、念の為だ。

歩くこと15分後、ギルドに到着したのでクエストボードの前に行き、採取依頼を探していると後ろから声をかけられた。

「フランちゃん、今大丈夫？」

「うん、大丈夫だよスーファ。何か用事？」

「そう。実は貴女を呼んで欲しいとこのギルドマスターに言われた」

スーファが声をかけてきたのは、ギルドマスターに私を呼んできてと言われたかららしい。そんな呼ばれるような事した覚えは……もしかして強盗犯の時のあれかな？ それしか心当たりがない。

取り敢えず断る理由などないので、私はスーファの案内でギルドマスターの居る部屋に入っていった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも

感謝です！
励みになります！

フラン、襲撃者を撃破する

「良く来てくれた。俺はレイゼ、このギルドマスターをしている者だ」

「こんにちは、ギルドマスターのレイゼさん。私はフランドール・スカーレット、フランと呼んで！」

「分かった。それでわざわざフランを呼んだ理由はな、お前に特別な恩賞を与える為だ」

「特別な恩賞？」

「そうだ。ザルソウって知ってるか？」

「うん。王都に出歩いてる時に女の人を人質にした強盗犯がその名前で呼ばれたのを聞いたよ。ナイフを刺そうとしてたから、能力で壊して助けたけど」

ギルドマスターのレイゼによれば、あの女の人を人質に取っていた強盗犯のザルソウと言う男は、多くの盗みや強盗を繰り返していた悪人だったらしい。

王都のギルドと王都守備隊が協力して追っかけていても捕まえないほどの隠蔽・探知能力に優れた人物とのこと。戦闘能力もそこそこ高いみたいだ。

私が遭遇した時は、わざと町の警備を薄くして泳がせておき、盗みや強盗をやらかした所を取り押さえると言う作戦をしていた途中で、後少しと言う所で守備隊がやらかしてしまって人質をとられてしまった時だったらしい。

「でも、その後すぐに立ち去ったのに名前まで何で分かったの？」

「ほら、これだよ」

そう言ってレイゼが取り出したのは、私のギルドカードだった。どうやら気づかない内にあの場所に落としていたらしい。

「つまり私が能力を使ってナイフを壊した所を目撃した人が居て、その人が私に落としたカードを届けようとしたけど何らかの理由で無理だったから、ここに届けられたと。その時に情報が伝わった訳と」

「その通りだ。それにしても、奴に気付かれずにナイフだけをピンポイントで粉碎するとはね。届けに来た騎士も驚いてたぞ。突然後ろから現れた紅い日傘の金髪少女がナイフに右手を向けて、きゅっとしてドカーン!! って言ったら、その瞬間にナイフがあり得ない砕け方したってな」

まあ、ありとあらゆる物を破壊する程度の能力だから最大で隕石を破壊した事も

あるし、それ以下の物体であれば問題なく破壊できるだろう。

「それでレイゼさん、特別な恩賞とは一体？」

「ああ、それはだな——」

レイゼが恩賞の内容について何か言おうとした時、この部屋の扉が壊れる位の勢いで開き、スーファが慌てて入ってきた。

「レイゼ、大変！ 変な男1人と女2人が受付のフロアで暴れてる。あの店寄った金髪のがキ出せやって叫びながら」

「なんだと!? 分かったすぐ行く。それにしても、あの店って何だ？ ヤバい噂しか聞かないあの怪しい雰囲気の店の事か？」

「分からない。けど、もう負傷者も出てる。今は何とか冒険者が止めてるけど、運悪く腕の立つ人が居ないから押されている」

まさか、ワイトの言っていた『怖い人』の嫌がらせか？ いや、それにしても酷すぎるそれに、冒険者には噂を流すだけだど聞いていたけど……仮にそうだとしたら、私があのお店に寄ってから帰るまでつけられていたと言う事になる。

「フランはここに——」

「私も行くよ!」

「いや、でも……」

「心配しなくても大丈夫。危なくなったら逃げるから!」

「分かった。無理をするなよ」

そうしてレイゼと共に現場へと向かうと、そこは戦場と化していた。冒険者たちの抵抗によって受付の人たちは何とか守られているが、突破されるのも時間の問題だろう。

「貴様らしい加減にしやがれ!! 俺のギルドで好き勝手暴れまわって何がしたい!」
「ふん! ギルドマスターのお出ましかい。何がしたいって? お前の隣に居る金髪のカギを寄越してもらいたいのさ。我らの雇い主が進めているあの店を潰して、あのジジイの研究成果と魔道具を根こそぎ頂こうと言う計画の邪魔になりそうなのでな」

多分あの3人がワイトの言っていた『怖い人』なのだろう。それにしても雇い主か。と言うことはアイツらをけしかけた黒幕がどこかに居るのは確実だ。

さて、これ以上関係ない人たちに危害を加えられては困るから、ここは私自ら出

の方が良いだろう。

「あんたたちの雇い主、本っ当にくだらなないね！研究成果と魔道具が欲しいなら自分で努力をすればいいのにさ」

「へっ！知るかよ。それよりもガキ、こっちに來い。抵抗するのならコイツら死んでも知らないぞ？」

「それ、本気で言ってる？」

「当たり前だろう！」

ああ、こりゃ駄目だ。アイツらには1度分かってもらう必要がある。ならば……

「そう。じゃあ私、今からあなたたちを半殺しにするね。ふふっ」

「「っ！！」」

『禁忌フォーオブアカインド！』

私はすぐさまスペルカードを発動、分身を3人作って合計4人の自分にする。

「レイゼさん！周りを覆うようにバリア的な魔法かけられる？」

「よし分かった！『魔法物理結界』！」

レイゼがそう唱えると、1階の休憩スペースを覆うようにして光の結界が発動

した。

「これで大丈夫だろう。存分にやりな！」

「ありがとう！ さてと……」

これで周りの被害を考える事なくアイツらと戦える。

「分身した!？」

「そう。これで4対3だから、数の上でも私が有利になった。あと、分身たちは全員私と同等の力を持っているから、せいぜい頑張っただけ」

「……」

そこから私と分身は3人に向かって一斉に弾幕を発射する。空間を埋め尽くさんとする程の密度で放たれたそれは、威力は低めではあるものの、着実にアイツらの体力を削って行く。

「ぐっ！ 『対魔法障壁』」

弾幕の制圧射撃を食らわせていた3人の内の1人、女の人が障壁を展開しながら本体の私に接近して蹴りを見舞って来たので、その足を受け止めてから投げ飛ばす。そこに他の2人を攻撃していた分身たちが合流し、あらゆる物理攻撃を叩き

込んでダウンさせた。

「くそっ！ おのれええー！！」

「はあああ！！」

1人が倒され、これは不味いと思ったのか2人同時に襲いかかって来たが、4対2と数の有利が拡大したのもあって少しずつ追い詰め、遂に分身の蹴りが女の脚を捉えた。

「あああああー！！」

脚の骨が折れたのだろう、のたうち回って苦しんでいる。とても戦闘どころではなさそうだ。

「くそ！ くそ！ くそおおー！！」

最後の1人は剣で襲いかかって来たので、私はとあるスペルカードで迎撃する。
『禁忌レーヴァテイン』

炎を纏った自分の身長ほどの剣を生成、相手のデタラメな攻撃を全て捌き、疲労した所に薙ぎ払いを食らわせて吹き飛ばしてダウンさせた。こうしてギルドに危害を加えてきたアイツら全員に死にはしない程度のダメージを与え、制圧する事に成

功した。

そうして私は負傷した人の元に向かい、私があのお店に寄ったせいでこうなったことを謝罪した。

「ごめんなさい！ 私のせいでこんなことに……」

「俺は大丈夫だぜ。あのお店に寄ったと言う下らん理由で襲撃して来た馬鹿共が悪いんだからな」

「ええ。それに、偶然彼女がきっかけであっただけで、遅かれ早かれこうなっていたかもしれないしね」

「確かに。よし、取り敢えずその話は終わりにして壊れた場所の修復をするぞ。負傷者はスーファさんの回復魔法に任せて、後は……」

そうしてまだ負傷していない冒険者たちが、半殺し状態の3人の元に向かう。

「さて、貴様ら。この落とし前、どうつけてくれるんだ？」

「ねえ。あんたらにこんなことを命令した黒幕は誰？」

「言う訳ないだろ……」

彼らの言った雇い主の情報を聞き出すために尋問が始まった。最初は抵抗してい

たものの、レイゼがスーファにアイツらを回復させ、私にまた半殺しにしてもらう無限地獄を味わってもらおうことになるぞと脅した瞬間、抵抗しなくなっただけを話し始めた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入りや星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、魔物の討伐依頼を受ける

「それは本当だな？」

「……あ、ああ！ 我らは元傭兵で、ここを襲撃したのも我らの雇い主、メルティオン魔道具会会長のフォウン・メルティオンによる、小規模の魔道具店を調査し、有益そうな魔道具、もしくはお抱えの職人が居ればそれをどんな手段を使ってでも安値で手に入れてこい。逆らったら潰せ。それを邪魔するものが居れば排除せよとの指示によるものの関係で……」

襲撃者の3人に対する冒険者たちの尋問の結果、彼らはいよいよ先日まで傭兵組織で傭兵をしていた人たちで、大きなミスをやらかしてクビになった所に目をつけたフォウンに大金で雇われ、命令に従っていたとのことらしい。

「しかし、あの人がそんな事をねえ」

「でもこれで納得がいった。フォウン会長が良く護衛依頼を出す理由が。こう言った事を小規模魔道具店にし続けた結果、多くの店主やその関係者から恨みを買って襲われるからか」

そりゃそうだ。そんな略奪者みたいな事をしていれば恨みの1つや2つは買うだろう。私がおもしその立場だったら、そいつの事を恨むのは確実に、下手すれば殺してしまうかもしれない。

「うーむ。この出来事にフォウン会長が関与しているのはほぼ確定だろうが、いかんせん確たる証拠がないから今はどうも出来ない。今後俺と他数名のスタッフで何とか証拠を集めて王国の調査隊に突き出し、会長の座から引きずり下ろして公衆の目の前で謝罪させよう。もちろん、今まで与えた損害を補填させ、賠償金を払わせるのを確約させるつもりだ」

こうして、襲撃者の3人から黒幕の正体などの情報を聞き出した後王都守備隊の兵士をレイゼがギルドに呼び、3人を連れていつてもらった。

「ふう。後始末は完了つと……あ、そうだフラン。さっきの恩賞の話の続きなんだが、強盗確保のアシスト報酬金貨15枚だ。それと、お前のランクを特例でEに上げておいたぞ。これでスライムやゴブリンと言った魔物の討伐依頼が受けれるようになる」

「え、金貨15枚!? それに、ランクアップも……いくらなんでも早すぎない? あ

りがたいけどさ」

「それだけあのザルソウが厄介極まりない相手だったと言う訳だぞ」

全てが終わった後、レイゼから恩賞の話の続きを聞いた時は驚いた。金貨を15枚もらえる上にランクまで上がるからだ。

そうして私は恩賞である金貨15枚をもらったのに加え、ランクアップをしてもらったので、討伐依頼を受けてみようかと早速クエストボードに向かう。

貼られている討伐依頼の中でEランクで受けられるものは……スライム討伐・ゴブリン討伐・リトルオーク討伐の3つのようだ。

ゴブリンは採取依頼の時に会っているからやめよう。スライムとリトルオークには出会ったことはなかったので、その2つのどちらかに選択肢を絞る。

「うーん……よし、スライムにしよう！」

ひとまず今回はスライムにしておこうと決め、クエストボードから紙を剥がし、受付の人に渡す。

「スライム7体討伐の依頼ですね。あの魔物は打撃が非常に効きづらいので斬撃か魔法で討伐する事をオススメします。今回の依頼場所は王都の南門を出て、草原

を真っ直ぐ50分行った所にある村です。馬車を使えばすぐに着きますが、どうします？あと、地図はありますか？」

「ないです。歩きで行くので問題ありません」

「分かりました。少々お待ちください」

受付の人はそう言うと、奥の筒状丸められた紙を取り出して私に渡してくれた。

「これがこの辺一帯の地図です。今後の冒険にも役に立つと思います」

「はい！ありがとうございます！」

そうして地図を受け取った私は出発の準備を整え、王都の南門から出る。

「そよ風が気持ちいいな」

雲が殆んどない晴天の中、紅夜の日傘を差し、そよ風に運ばれてくる草原の香りを楽しみながら歩いている。比較的天候が穏やかであり、魔物の生息数も少ない場所の為絶好の風景スポットとしても人気らしい。

確かに、見渡す限りの緑色の景色に晴天・草の香りを運ぶそよ風が加われば絶好の風景スポットとしても人気が出るのも分かる気がした。

こうして草原の風景を楽しみながら歩くこと40分、目的の村へと到着した。王

都とは違い高い建物は無いが、周りを風景スポットの草原に囲まれていて、雰囲気も良いのでとても落ち着く。

そんな事を思っていると、誰かに話しかけられた。

「もしかして、依頼を受けていただけた冒険者の方でしょうか？」

「はい。そうです！ 私はフランドール・スカレット、みんなからはフランと呼ばれているので、あなたもそう呼んで下さい」

「分かりましたフランさん。それで早速なのですが、スライムの討伐をお願いしたいです」

「分かりました！ それでスライムはどこに居ますか？」

「こちらです。案内しますね」

案内をされた所は、野菜などが植えられている畑であった。所々何かに食い荒らされたような痕があり、これが恐らくスライムによる物なのだろう。

辺りを見回していると、まだ無事な野菜を何かが覆い尽くしてしまったのが見えた。

「あいつです！ うちの野菜を片っ端から食い荒らしていくので退治しようとした

のですが、冒険者の人達みたいな魔法も使えないし、素早いから大変で……それで運良くクワやら斧で何とかダメージを与えても、すぐに再生してしまつて。その上まだ出てきてしまつて」

「なるほど。任せてください！ すぐに退治してきますから」

そうして私はスライムに向けて力を込めた弾幕を1つ放つ。それがスライムの中心部分を貫くと、再生する事なく消滅していった。なるほど、中心部分がスライムの急所と言う訳か。

その後もゼリーみたいな姿をしたスライムを見つけ次第、同様の方法で討伐していく。30分も経つとようやく見かけなくなつたので、恐らくこの畑から消えていなくなつたのだろう。

「これで多分しばらくは大丈夫だと思いますよ！」

「ありがとうございます！ お陰さまで助かりました」

こうして突然の乱入等のトラブルもなく、無事に依頼を達成させる事に私は成功した。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入りや星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、パーティーを組む

「えっと……あった。これか、スライムの魔結晶。綺麗だな」

畑を荒らしていたスライムを依頼通りの数討伐した後、証拠となる物を探していた。

討伐依頼を受け、村に出発しようとして呼び止められた時に討伐達成の証拠品についての説明を私は急ピッチで受けていた。

スライムやレイス等の自分の形を殆んど持たない不定形の魔物は、核を破壊して討伐すると消滅してしまうらしい。

じゃあどうやって討伐したと証明するのかと聞いたら、不定形の魔物が、死の際に固有の残存魔力が結晶化した『魔結晶』と呼ばれるものを落とすからそれをギルドに提出する事によって証明すると。1体につき1つ必ず落とし、それ以上の数を落としたり、逆に落とさないと言う事は絶対にないとのこと。スライムの場合は薄い水色らしい。

「よし、これで7個……」

「あの……ありがとうございます！」

「いえいえ、これが私の仕事です。それに、こういう感じで冒険するのが好きなので大丈夫です！」

「それと、これも持って行ってください」

「良いんですか？ ありがとうございます！」

こうして、目的のスライム7体討伐の証拠である魔結晶を回収し、畑の野菜を1つおまけでもらった私は、お昼を村にある食堂で食べて、少し休んだ後来た道を歩いて戻る。

「野菜をもらったのは良いものの、これどうやって食べたら良いんだろう？ ギルドに戻ったらスーフアに聞いてみようかな」

そんな事を考えつつのんびり歩いていると、向かいから歩いてきた冒険者らしき人が突然、私に向かってこう叫んできた。

「危ない、コクカクロウだ！ 避けるおー!!」

後ろを振り向くと、カラスを巨大化させたような私より少し大きな『コクカクロウ』と言うらしい鳥が襲いかかって来るのが見えた、そのせいで反射的にスperl

カードを宣言した。

『禁忌レーヴァテイン』!!』

不意打ちであったので、炎を纏う剣を一切の手加減なしで振り下ろしてしまった。その為、コクカクロウは真っ二つになった上に燃え上がり、更に剣の勢いが余って地面を粉碎してしまった。

ハツとして碎けた地面を見ると、そこにはコクカクロウの存在はなく、1枚の羽が偶然残っているだけであった。

「……」

どう考えても地面に小さいクレーターのようなものを作る程の攻撃をするのは、不意打ちされたからとは言えやり過ぎた。相手が人でなくて良かった。仮にこれを町中でやらかそうものなら大変恐ろしい事になっていただろう。

それに、今の光景を見た私の前に居た冒険者の人たちがなにやら話し込んでいるのが見える。なんか面倒な事になりそうだったので1枚の黒い羽を拾い、逃げるようにしてこの場から立ち去った。

早く戻りたい一心で草原を駆け抜け、王都まで戻ってきた私はギルドに駆け込む。

「お、フラン。スライムは倒したのか？」

「そうだよ！ 余裕だったし」

「まあ、そうだろうなあ。分かりきっていたが……ん？ その黒い羽は、コクカクロウのだよな……」

「うん。スライム倒し終わって帰ってくる時に後ろから襲いかかって来たから討伐したんだけど、やり過ぎてこれしか残らなかったの」

「……消し飛ばしたのか。一応コイツCランクの魔物なんだけどな」

中に居たレイゼとそんな会話をした後、ギルドの受付にスライムの魔結晶を提出する。

そうして依頼を達成し、銀貨9枚の報酬をもらう事が出来た。

「依頼も終わったし、夕飯食べに行こうかな。ワイバーンレストラン以外のところに行きたいけど……」

そうは言っても、ワイバーンレストラン位しか知らない。他のところで食べたければ探すしかないのだが、お腹が空いているので出来れば早く食べたいし、王都中の飲食店を探し回っていれば夜になってしまうだろう。そうなれば店がしまっ

まうだろう。

と言う事でワイバーンレストランに夕飯を食べに行く事を決めた。

その時ふと、思い付きでレイゼとスーフアも誘ってみようと思つて誘つてみた所、2人もちやうどそこに食べに行こうとしていたらしく、快く了承してくれたので一緒に行く事になった。

何気ない世間話でもしながら店に入り、ワイバーンのステーキを頼んで待つ。

「それにしても、フランもここに行こうとしていたんだな。まあ確かに、この店の肉料理は上手いから行きたくなるのも分かる気がするぞ」

「王都の中にある肉を使った料理店の中でもダントツで美味しい。若干待ち時間が長い気がするけど、そんなの気にならないくらい満足出来る」

「そうそう。ワイバーンを使った肉料理がメインだけど、他のメニューも負けないくらいあるってのが凄くない？」

みんなで話をしながら待つっていると、頼んだ料理が届いたので食べ始めた。

考えたら今日2度目のステーキだったが、美味しいから良いや。流星に毎日飽きるから食べないけど。

運ばれてきた物を食べ終わり、会計を済ませた私たちはギルドに戻った。

もうすっかり日も落ちて夜になったので、ギルドの受付に銀貨1枚を支払い、2階の宿泊施設に泊まる。今度は日光に焼かれないように窓をしっかりと閉めて眠りについた。

そうして次の日の朝、日光に焼かれた痛みではなく普通に目を覚ました。

今日は息抜きに採取依頼でも受けようかとも思ったので、1階に降りてクエストボードに向かい、探していると……

「フランちゃん、おはよう。ちょっといい？」

「スーフア、おはよう。何か用事？」

「うん。と言っても、用事があるのは私じゃないけど」

「そうなんだ。いったい誰が？」

話を聞いてみると、14歳のミアと名乗る女の子が私に用事があると、寝ている時にギルドに来たとのこと。何の用事があるのかと聞いてみても『フランちゃんが来てから話します！』との一点張りだそうだ。

一体なぜミアと名乗る女の子は私を指名したのだろうか。用事とは一体何なの

か。色々気になることはあるが、とりあえず会議室で待っていてもらっているらしいので行ってみる。

スーフアに案内され、会議室に入る。するとそこに居たのは、銀髪蒼瞳で雪のよ
うな白い肌の女の子だった。

「あ、フランちゃん？」

「そうだよ。私に用事があるって聞いたから来たけど、どんな用事なの？」

「えっとね……どうかわたしと一緒に冒険をして下さいませんか？」

聞けば彼女、冒険者登録をして冒険者になってEランクになったのは良いものの、回復魔法と極低威力の攻撃魔法しか使えないらしくまともに魔物と戦えないらしい。なので他の人と冒険しようと声をかけたものの、全部断られてしまったと。それでもう諦めようかと思った時に私が初心者に突っかかる奴に絡まれても余裕で排除していたのを見て、この人となら何故か上手く行きそうな気がすると思い、チャンスを伺って訪ねたと言うらしい。

(一緒に冒険か……悪くないかも)

そう思ったけど仲間になる以上、私が人ではなく吸血鬼であると言っておかなけ

ればならないだろう。ミアがそれでも良ければ良いけど。

なのでミアに聞いてみる。

「良いよ。でも私、人間じゃなくて吸血鬼なんだ。それでも良ければ一緒に行こう」
「……わたしはそんなの気にしないよ。フランちゃんと言う存在と冒険がしたいから。種族なんてどうでもいい」

どうやら私が吸血鬼であると言う事はミアにとって問題ですらないらしい。なら断る理由などないので了承する。

「分かった。これからよろしくねミア！」

「うん！ フランちゃんの足手まといにならないようにわたし頑張るからね！」
こうして私は、ミアと言う仲間と共に冒険をする事になった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、ミアと共に王都のお祭りに行く

「さてと、採取系の依頼は……ないか」

「ないね」

ミアとパーティーを組んだ後、当初の予定通りに採取依頼を受けようとクエストボードを見てみた。しかし、昨日に続いて採取系の依頼が1つもなく、あったのは魔物の討伐依頼ばかりだった。

「思ったんだけど、このギルドに来る依頼って大体が討伐系だね。そんなに魔物が出るのかこの王都周辺って」

「人が沢山居るからじゃないの？ 仮にもここ、一国の中心だし」

確かに言われてみれば、討伐系の依頼の場所は王都周辺であることが多い。ミアの言う通り、安全確保の為だろう。

今日は1日中のんびり過ごすか、討伐依頼をまた受けるかの2択で迷っていると、ミアがこう言ってきた。

「迷ってるなら王都の中を見て歩かない？ わたしとフランちゃん一緒なら楽しそ

うじゃん」

「そうだね。確かに良いかも！」

王都を回る事自体は1人の時にやってはいたが、まだ全部を見て回れた訳ではない。それに、今日は仲間になったミアも居る。2人で見えて回る王都は少し違って見えるかもしれないと思ったので提案に乗り、王都観光をする事にした。

ワイバーンレストラン方面に行った事はあったので後回しにして、反対側に歩き始める。

時折、召喚初日に私が一撃で気絶させた人たちを見かけてお互いに目があうも、向こうが速攻で視線を反らした上に逃げていった為特に何も起こらずに済んだ。

「フランちゃん、あの人たち何で急に逃げていったの？」

「あはは……何でだろう」

まさか王城内部で身を守る為とは言え、あの人たちを殴って気絶させたり威圧したなどとは流石に言えなかったので、分からないふりをした。

そうして大通りをのんびり歩いていると、噴水広場に差し掛かった。何かイベントでもやっているらしく沢山の屋台があり、人が集まっていた。まるで雰囲気は幻

想郷の人里でやったお祭りみたいだ。

気になったのでそばに居たおじさんに聞いてみた所、1年に1回やる『王国建国祭』と言う祭りらしい。

それならきつと楽しいものだろうと思ひ、祭りに行つてみない？とミアに聞いてみた所、目を輝かせながら頷いたので行くことに決めた。

「凄い人だよね〜！ フランちゃん！」

「うん、確かに凄いよね！ こんなに人が居るお祭り私初めてだし」

雰囲気は人里のお祭りにそっくりだったけど、そこに居る人たちの量が半端ではない。何とか日傘を差しながら歩く位は出来るものの、どこの屋台も沢山の人が並んでいてかなり待つことになりそうだった。

「この『クモダコ焼き』屋台なんかどう？ わたしこれ好きなんだよね〜」

「クモダコ焼き？ 何それ？ 蜘蛛みたいなタコって事？」

「違うよ。空にある雲の方。隣の国に雲が出るくらいの高さを泳いでるタコがいてね、それを捕まえて焼いて食べるんだ〜」

「へえ〜。分かった、じゃあ並ぼう！」

確かタコって海の生き物だったっけ？ だとしたらなぜ空をタコが飛ぶことが出来るのだろうか。霊夢や魔理沙みたいなタイプで飛ぶのかなあ。

幻想郷には海がないのでそう言った類いの生物は居ない。なので当然知識も殆んどない。

たまたま読んだ海に関する本に書いてあったのを覚えていなければ、タコが海の生き物であると言う事は絶対に分からなかっただろうし、そもそも海と言う存在すら知らなかっただろうと思っていた。

が、しかしこの世界には空飛ぶタコと言う、海ではなく空に住む奇っ怪な奴が存在するらしい。そうなるにあの本に書かれていた、『タコは海の生き物』と言う記述も怪しくなってきた。本が本当は空を飛ぶ生き物だと書くこうとして間違え、海の生き物と書いてしまったのではなからうか。

そんな事を考えながら40分、ようやく私たちの番が来た。

「おじさん、クモダコ焼き2つ下さい！」

「分かった。じゃあ2つで銀貨1枚だ」

「はい」

後ろが詰まっているのであまりモタモタするのは良くない。商品を受け取るとすぐに列から抜け、噴水広場に備え付けてある食事用の席に座って食べる。

「ん〜！ 美味しいねこれ！」

「でしょ〜」

初めて食べる異世界の空飛ぶタコの味・食感は、私にとっては新鮮なものだった。例えようがないけど、とにかく美味しかった。

じっくり味わった後、他の屋台の食べ物も食べてみようと思った私たちは、再び歩きだした。照りつける太陽は雲によって隠され、降り注ぐ日光が大幅に少なくなったので日傘を差す必要がなくなったので畳む。

正直この人混みの中を日傘を差しながら歩くのは結構大変なので天気が曇りになったのはありがたい。

そうして次に並んだのは、さっきまでもの凄く人気で待ち時間が驚異の2時間超えだったらしい『ラッシュューエンの肉と野菜炒め』だ。

先ほど通ったときに比べれば並んでいる人の数はかなり少ないが、それでもまだ多い。

待つこと50分、もう並ぶのやめようかと思った時に私たちの番がやって来た。

「おじさん！肉と野菜炒め2つお願い」

「あいよ！銀貨1枚と銅貨5枚だ」

「分かった！」

肉と野菜炒めを2人分受け取り、再び食事用の席に向かうが案の定、座るところがなかったので仕方なく立ちながら一緒に食べる事になった。

そうしてじっくり味わいつつ食べ終わると、容器を返却場所に返し、噴水広場周辺を歩き回る事にした。

その途中、有名ならしい魔導師が魔法を披露するイベントがやっていたの発見し、興味をそそられたので見ていた。そうしたら何故か壇上に上がる事になってしまった。観客に聞いてみたら、このイベントはそう言う事があるらしい。

「魔法使えるかって聞いて来たのはそう言う事だったわけね。弾幕とスペルカードで大丈夫かな？」

「凄いいじゃん！フランちゃん頑張ってる〜」

イベントスタッフの誘導の元壇上に上がって軽く自己紹介をした後、通常弾幕に

ほぼ全種類のスペルカードを披露した。あの魔導師の後だったので不安だったけど、この世界には存在しない為かかなり良い感じの雰囲気になった。

「あんな魔法見たことないよ！ あれが弾幕ってのとスペルカード？」

「そうだよ。あれで魔物と戦ったりするんだ。さっき見せたのは威力をかなり控えた奴だけだね」

ミアにも満足してもらえたので良かった。

そうしてイベントが全て終わったので、再び王都を見て回り始める。

1時間位、道中にある店に寄りつつのんびり歩いていると、あの怪しい雰囲気
の建物が見えてきた。1周回って来たようだ。

「ん、お客さんかな？ 誰か入っていったね」

「どうしたのフランちゃん？」

「あの店にお客さんが入っていくなんて珍しいって思ったんだよね……でも何か妙な予感があるのは何故だろう？」

「良い事なんじゃないの？ もし気になるなら行ってみたら？」

「うん。そうする」

お客さんらしき人がワイトのお父さんの店に入っていったのを見計らって私たちも後に続いた。

そうして店に入ろうとした時、ワイトのお父さんと恐らくさっき入って行ったお客さんとの言い争いが聞こえてきたと思えば、突然ドアが吹き飛び、それに巻き込まれて私とミアは怪我を負ってしまった。

「っ！ミア、大丈夫!？」

私は自前の再生能力があるので、かすり傷程度の傷なら直ぐに治るが……

「フランちゃん、大丈夫。このくらいならどうってことはないよ」

そう言うとミアの腕のかすり傷がみるみるうちに塞がっていき、10秒程で完全に治癒した。とんでもない再生能力だと思った。

「わたし、攻撃力も防御力も弱いけど、回復力なら物凄いあるから。今くらいの軽い傷なら『常時中回復』の能力のお陰で回復魔法すら要らないんだ」

そんな会話をしていると、今度はワイトのお父さんが壊れたドアから吹き飛ばされてきた。

「ぐうう……」

「な!? ミア、回復魔法をお願い！」

「任せて『エクスヒール』! ん? 毒の状態異常……『メデイカルナス』」

そうやってミアが治療を行っているのと、店の中から杖をもった嫌な雰囲気を醸し出している白髪のおじいさんが出てきた。

ここまで読んで頂き感謝です! お気に入り登録や星評価をして
下さった方にも感謝です! 励みになります!

フラン、ワイトの父の店を守る

「大丈夫!？」

「ああ、銀髪の嬢ちゃんの回復魔法のお陰でな」

「良かった。それでワイトのお父さん、あのおじいさんは誰なの？」

「アイツはな、俺の店をこんなにも追いついたんだフォウン会長だ。突然乗り込んで来たかと思えばいきなり上級毒魔法『ヴェノムインフェルノ』を放ってきて、この有り様だ……」

「そう言えば、ワイトは大丈夫なの!? 見かけないけど……」

「大丈夫だ。俺が結界を張って防いだからな。そもそもあいつの目的は俺だし」

「どうやら、あの白髪のおじいさんがフォウン会長のようだ。上級毒魔法と聞いたので、かなり上位の魔導師でもあることが分かる。」

ワイトは結界のお陰で毒を受けずにすんでいるらしかったので良かったと思っ
た。

そんな事を思っていると、フォウン会長がミアに向かって恐ろしい事を言い、魔

法を唱えた。

「ちっ！ フランとか言う奴も厄介だが、この魔法の毒すら簡単に消し去るあやつの方が厄介だな。先に消しておこうか」

「え……」

「『ディザストダークネス』」

杖をミアに向けてそう言うと、足元に黒く輝く魔方陣が現れる。このままでは不味いと直感した私は、考えるよりも先にミアを突き飛ばし、代わりにその上に立っていた。その瞬間魔法が発動し、溢れ出る闇の魔力が私に襲いかかる。

「何い!? しかし、回復魔導師を消せなかったのは残念だが、これでいくらなんでも……」

「私に、こんなものは効かない!!」

「……何故効かぬ!?!」

夜の王、闇を統べる者とも言われる吸血鬼である私にとって闇属性の魔法や物理攻撃は、『攻撃』ではなく、『そよ風』に感じる。

フォウン会長にとって相当自信のある魔法だったらしく、私が無傷で立っている

事が相当堪えているようだった。

(うーん……)

街中で強力な魔法を平気で放つような危ない輩と長時間戦闘していると、この王都が瓦礫だらけの場所となる可能性もあるから、早く決着をつけなければならぬだろう。

かといって早く決着をつけようとすれば、必然的に高威力の攻撃が必要となって結果的に瓦礫だらけの都に、下手すれば死人が出るかもしれない。

さてどうしたものか。そう考えていると、ワイトのお父さんがこう言ってくれた。「今フランとフォウンの戦闘空間に対魔法結界を張っておいた！魔法の打ち合いなら耐えてくれるはずだから、思いっきり死なない程度にやってくれ！」

「ありがとう!!」

最高のタイミングで最高のサポートをしてくれたワイトのお父さんに感謝しつつ、私のスペルカードの中で最高の切り札をここで出した。相手は相当な力を持っている人間だ。だからこれを使っても死にはしないだろう。

「フォウン、最後に聞くけど何でこんなことしたの？」

「この国でワシの物よりも魔道具の質が良い存在と、魔道具で金を稼ごうとする存在、魔道具でワシよりも民の信頼を得ようとする存在が許せぬからだ」

「……」

一応聞いてみたが、ここまで根が腐ってる人間だと分かると、私の心はこの時点ではつきりと決まった。『切り札で決着をつける』と。

『秘弾そして誰もいなくなるか?』

そう宣言した瞬間、私の姿は霧のように消える。

「消えた!? どこに……ぐっ!」

これは90秒間相手からのあらゆる攻撃やスキルが効かない無敵状態になり、こちら側からは弾幕や魔法攻撃し放題になると言うスペルカードだ。攻撃にも防御にも使えるがその分クールタイムがかなり長い上に他のスペルカードが使えず、魔法に使う魔力の量も上がる為使いどころを間違えれば状況がひっくり返る可能性もある。

翼の霧化を解き、フOWN会長の周囲を飛行しながら弾幕をひたすら浴びせかける。時々私の居る場所に雷が飛んで来るが、攻撃が効かないので問題は無い。

「ぬう……こっちの攻撃は全く効かず、更に相手からは攻撃し放題。なんて魔法だ……」

度重なる弾幕攻撃を受け続け、疲労困憊なフォウン会長。飛んで来る雷も弱くなってきているので魔力が枯渇し始めて来たのだろうか。

これで終わりにする為、最後の弾幕攻撃に入ろうとした時にちょうどスペルカードの効果が切れる。もちろん、今まで隠してきた翼も丸出しである。

「タイミング悪すぎでしょ……」

「何とお主、人間ではなかったのか……道理で」

案の定、そう言う反応であった。ミアは事前に人ではない事を伝えていた為、至って冷静だった。ワイトのお父さんも特に反応はなかった。

「フランちゃんの翼綺麗〜」

「あはは……ありがとう」

そのようなやり取りをしていると、再びフォウン会長が動き出し、杖の先に灼熱の火炎を収束させ始めた。

「人間ではないのなら、容赦はしなくても良い。『フェルノ——』」

魔法の名前を言いかけた時、フォウン会長に向かって猛烈な冷気を放つ光が襲う。その威力は凄まじく、彼が魔法を中断して展開した防壁を数秒で破壊し、本人を氷の牢獄に閉じ込めた。

この魔法の主は一体誰なのだろうかと思ひ、辺りを見回す。すると、会長の背後に紫色のローブを着た水色の髪に金色の瞳の女の人居て、部下らしき人を2人連れていた。

「フォウン会長、ガツカリです。こんな事をしていたなんて」

「お前……いや、貴女は……」

「私は王都守備隊の魔導師アイシェ！王都の民から乱闘騒ぎの報を受け駆けつけて来てみれば、少女に対して暴行を働いていた、それだけではなく王都を瓦礫だらけの土地に変え、人命を脅かす魔法をためらいもなく放とうとするとは、地に落ちたものですね！」

どうやら、王都の人からの報を受けて駆けつけて来たようだ。まあ、あれだけ派手に暴れば誰かに通報されても不思議ではないだろう。

私との戦闘に加え、あれだけの氷属性魔法を防壁で防御したとは言え、食らった

フOWN会長はもう動く体力すらないほどになっていた。

「さて、貴方たち。この者を連れて行きなさい！」

「了解しました!!」

そうしてフOWN会長は、アイシエの部下に腕輪をかけられて連れていかれた。

「襲われてましたが、大丈夫ですか？」

「私は大丈夫！」

「わたしも問題ないよ」

「俺は大丈夫だが、家の中がフOWNのせいと毒まみれになっていてどうしたものかと……」

「そうですか。うーん……」

家の中は毒水によって汚れているらしく、魔法の巻物以外の魔道具が毒等で使物にならなくなっていると言う。一番手間とお金がかかっている物が無事なのは良かったが、それでも大変な損害である。

「毒の水がなくなればいいの？ それならわたしに任せて！」

そう言ったミアがお店の中に入っていったすぐ後、眩い光と共に蒸発するような

音が数秒間聞こえた。そして、それが収まると中から出てきてこう言った。

「終わったよ。毒は消え去ったからもう大丈夫！」

「もう大丈夫ってミア、毒は大丈夫なの？ それに今なんの魔法使ったの？」

「わたしに状態異常は効かないから大丈夫！ 今使ったのは広範囲浄化魔法のピュリファイって言う魔法だよ。範囲内の状態異常にかかった人を治す効果もあるやつだから、回復魔法でもあるし」

「そうなんだ。凄いね！」

「私も驚きました。まさか、最上級の浄化魔法をこうも易々と使えるとは……あ、そうだ。一応事情聴取がありますので、皆さん私についてきてください。それと金髪紅瞳の貴女、翼はどうか出来ますか？」

「あ、はい」

そう言われて出しゃばりなしだと言うことを思い出した私は急いで翼を霧化させた。

こうして毒の浄化を終えた私たちはアイシエに誘導され、王都守備隊の人たちの居る建物へと行くことになった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

ミア、ワイトの母を救う

今回の話はいつもより都合により、少しだけ短めです

「着きました皆さん。王都守備隊の待機所ですよ」

アイシエに誘導されて到着したのは、王城の側にある比較的大きな教会のような建物のある場所だった。普段は守備隊待機所の関係者しか入れないらしいが、今回のように事情聴取をする際は特別に入ることが出来るとのこと。

建物の中を進み、大きめの綺麗な装飾の施された部屋に案内される。

「豪華な部屋だな。事情聴取するに足らぬ好待遇だと思わないか？」

「確かにね。もっと狭いかと思ってた」

「まあ事情聴取と言っても貴方たちが犯罪を犯したわけではないですから。ただ何があったのか詳しく話を聞くだけですし、そもそも今日使える部屋がここしかないというのもありますね」

なるほど。確かに私たちは魔法で戦闘をしたものの、助ける為に戦っただけであくまでも被害者の立場。フォウン会長のように加害者ではない。

それに、そう言う事情がなくても使える部屋がここしかないならここを使うしかないだろう。

なんて事を考えていると、アイシエが隊長を呼んでくると言っこの部屋を一旦出ていった。

15分後、隊長らしき若い男の人を連れたアイシエがこの部屋に戻って来た。その時剣をもった若い男の人と目が合った一瞬、ゾクツとするようなプレッシャーを感じた。仮に戦うことになったら、剣での戦闘はやめた方が良さだろう。

「あーどうも。僕はえつと……この王都を守る守備隊の隊長してるヤノークと言います。君たちが今回の騒動に巻き込まれたって言う？」

「うん。私はフランドール・スカーレット、フランって呼んで！」

「わたしはミアです。フランちゃんと一緒にパーティー組んで冒険者やっています」

「俺は今回直接被害を受けた者で、魔導師やってるヴァーレだ」

「僕はホワイトです！」

一通り隊長のヤノークとの自己紹介を済ませた私たちは、本題に入った。

「なるほど。フォウン会長がそんな事をしていたのか……」

「ああ、今日だっていきなり店に入ってきたかと思えばヴェノムインフェルノを放ってきて、息子を守る結界を張る代わりに俺がまともに受けて死にかけて、フランたちが偶然居なかったらどうなっていた事か……」

ワイトの父ヴァーレが、今までフォウン会長による策略により受けた事についてを全て洗いざらい話していた。その途中、目に涙を浮かべながらヤノークに対して訴えかける姿を見ると、私なんか想像出来ないほど辛かったのだろうと言う事が分かる。

何せヴァーレの妻、つまりワイトの母がフォウンの手の者による『モタプルカス』と言う、身体の生命維持に必要な魔力が崩壊していく呪いを多重掛けされて重体に、素早く魔力を供給しながら王都病院に駆け込んだおかげで今も何とか死んではないが、呪いの術式が複雑怪奇かつ強固な為誰も解除出来ず、常に危険な状況にいると言うのを聞いたからだ。ちなみにそれを掛けた術者は死んだらしい。

「本当に申し訳ない。僕たちがもっと早くにフォウン会長を捕まえていれば……証

抛を早くに掴んでいけば！」

「ヤノークさん、あんたのせいじゃない。だから、大丈夫だ」

それを聞いたヤノークは、もっと早くに証抛を掴んでいけばこんなことにならずに済んだと悔しがっていた。

少し経って落ち着いた後、ヴァーレがこう質問をした。

「話を変えるが、捕まったフォウン会長はどうなるんだ？」

「うーん。恐らくだけど、今までやらかしていった人たちへの賠償金が白金貨150枚以上、王都内での破壊・殺人未遂に魔道具店に対する恐喝等で多分死ぬまで投獄されると思う」

「そうか……」

ヴァーレが話を終えた後、私たち2人もありのまま起こった事を全て話し、ホワイトも言える事は全て話した。

「ヴァーレとホワイト。辛い中話を聞かせてくれてありがとう。あ、そうだ。皆もし何か要望があるなら言ってくれ。僕に出来る事があれば何でもしようと思う」

「じゃあヤノークさん、病院の場所を教えて！もしかしたらホワイトのお母さん、

ミアが何とか出来るかもしれないから！」

「分かった。今から教え……いや、その程度なら僕が案内しよう」

こうして事情聴取を終えた後、もしかしたらミアの回復魔法によってなんとかな
りそうな希望が出てきたので、ヤノークに病院まで案内してもらった。

「ちよっと良い？」

「はい。なんででしょうかヤノークさん」

「この病院に魔導師ヴァーレの妻メイが入院しているよねおたほ」

「してますね。それが何か？」

「依頼により、腕の立つ回復魔導師を連れてきたので、どうかメイの元に連れて
いって頂けないだろうか」

「俺からも願います！」

「分かりました。ヴァーレ様がそう言うのであれば」

病院の門をくぐり、受付の人にヤノークがお願いして更にヴァーレもお願いをす
ると、すぐにメイの元に連れていってもらえた。

そうしてそこにいた寝込んで苦しむ彼女をミアが見たその瞬間、長々と魔法を唱

え始めた。どうしたのかと聞くと、これだけ物凄い呪いが多重掛けしてある為、普段使う略詠唱の回復魔法では太刀打ちが出来ないから詠唱をしているとのこと。

「かの者を蝕む呪いよ消え去れ。安寧を与えよ……『ピュリファイ』」

魔方阵が発光し、辺り一面を眩い光が包み込んだ。そうして光が収まり、メイの方を見ると、苦しみで歪んでいた顔が穏やかなものに戻っていた。ミアもそれを見て安心したらしく……

「冗談抜きでキツイよ。もう魔力がほぼ空っぽだし」

そう言ってきた。確かに、最上級浄化魔法を使っても疲れを見せなかったミアが、冷や汗を垂らしながらフラフラしているところを見ると、今回の呪いを打ち消すのに相当な魔力を消費したのだろうと言う事が分かる。

「メイさん、分かりますか？ 苦しみは消えましたか？」

「大丈夫か!? メイ、俺だ！」

一時の沈黙の後……

「……ヴァール？ 大丈夫、苦しみは消えたから……」

「よ、良かったあああー!!」

こうして、数々の回復魔導師が匙を投げた呪いを解除することにミアが成功した。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、王都を出る

「ヤノークさん……あのミアって女の子、我が病院の呼んだどの回復魔導師がなし得なかった事をやり遂げましたよ……」

「ああ、僕もまさかここまでとは思わなかった。魔力崩壊の呪い『モタプルカス』の多重掛け、王都の回復魔導師ですら匙を投げたその解呪をたった数分で成し遂げるとは……」

ミアがワイトの母のメイにかけられた呪いを解いた後、周りに居た王都病院のスタッフやヤノーク、別件で来ていた他の魔導師が近づいてきて彼女を称えた。

「貴女凄いわね！ 一体どこでそれほどの回復魔法を得たの!？」

「師匠に教わったり、魔導書を漁ったりして得たよ。後はひたすら練習して回復力を上げたり、略詠唱や詠唱破棄でも発動出来るようにしたりかな。オリジナル回復魔法も1つだけどあるし」

「オリジナル!? どういうのか使ってみせてもらえないかしら？」

「呪いを解くのに魔力ごっそり使ったから今日は無理。明日ギルドに来てくれれば

良いけど……あ、立ってるのも辛い」

質問されている途中、ミアが立っているのも辛そうにしていたので、2人の間に割って入って話を中断させる。そして側に居たヤノークに頼んで背負ってもらい、全員で病院を後にした。

何処に運べば良いのか聞かれたので、王都のギルドの2階にある宿泊施設までお願いした。

ギルド内に入った時にミアは、既に魔力を多量消費した事による疲れから、ヤノークの背中であぐらをかいて眠っていた。

「あ、すみません。今5人分の部屋空いていますか？」

「え、ヤノークさん!? あ、はい。空いていますよ」

「そうですか。じゃあ、銀貨5枚で」

宿泊費用はヤノークが全て出してくれたので、私たちは先に宿泊施設に向かい、眠っているミアをベッドに寝かせた。

外はもう暗く、特にやることもなかったので各自部屋に戻って寝ることになった。私も同じで、夜に出歩くつもりはなかったので寝ることになった。

そして次の日……

「フランちゃん……起きて……」

「ん……あ、おはよう。体調は大丈夫？」

「うん！ お陰様でこの通り、絶好調だよ」

昨日の魔力を多量に消費してフラついていたのが嘘のように回復していたミア。それどころかほんの僅かだが、魔力が増えている気がした。

「ミア、その青い腕輪って何？ 昨日は着けてなかったけど」

「これ？ フランちゃんが寝てるときに、王国の回復魔導師連合って組織の人が来てね、その人からもらったんだ」

綺麗な装飾の施された腕輪を着けていたので何なのか聞いてみたら、王国の回復魔導師連合と名乗る組織からもらったと言う。見せてもらったら、腕輪には『王国1の回復魔導師ミアに送る』と刻印があった。

確かに、数々の回復魔導師が匙を投げた呪いをあっさり解いたのだからこの扱いかも納得だ。

「ねえミア、突然なんだけどさ、今日王都を出て他の町に行きたいなって思ってる

「ただけど良い？」

「他の町に？ わたしは良いよ、任せるね！ じゃあお世話になった人に挨拶しない」と

「確かにそうだね。もちろん挨拶してから行くよ」

そんなようなやり取りをしていると、私の居る部屋に扉をノックする音が聞こえ、ギルドの受付の人が入ってきた。何でも、全身傷だらけの女の人がミアに用事があるらしく、呼びに来たと言う。

「その用事ってなに？」

「オリジナルの回復魔法を見せてくれるってミアさんと約束したから来たらしいですよ。それにしても、そんな物を開発するなんてミアさんって凄いですね」

そう言えば昨日王都病院でそんなような事を言っていた女の人が居た気がする。まさか回復魔法を見せてもらいたいから、わざわざ傷を作ってきたのだろうか。いや、流石にそれはないか。

とにかく理由はどうであれ、全身傷だらけの人を放っておくわけにはいかないの
で、その治療の為に下へ向かう。

ギルド1階に降りると、早速その人が座る席の方に私たちは行った。

「あ、ミアさん……どうか私にオリジナル回復魔法をお願いします！」

「分かったけど、その傷一体どうしたの？」

「それはですね、考えてみたら回復魔法を見せてもらうにはダメージを受ける必要がありましたので、自分で傷を作ってきました！」

「えええ……」

「……」

まさかの予想通りにわざわざ回復魔法を見たいが為に傷を作ってくるなんて人が存在するとは思わず、衝撃を受けた。

「まあ、取り敢えずオリジナル回復魔法で治療するね〜。『ホーリーヴェール・リジェネ』」

ミアがそう唱えると、薄い白色をした光の衣が傷だらけの女の人を優しく包み込んだ。すると、時間が経つにつれて全身のあらゆる所に出来た傷が徐々に塞がっていき、5分も経つとすべての傷が綺麗さっぱり消えてなくなっていた。

「これがオリジナルの回復魔法……」

「そうだよ。瞬間的な回復力は既存の物に劣るけど、この魔法は持続するようにしてあるから、効果が切れる1時間の間ずっと回復するよ。おまけで状態異常を回復させて、新たに防ぐ効果も付けておいたし」

これほどの凄い魔法を開発してしまうとは、やはりただ者ではない。努力もそうだが、才能がなければこれほどの事は出来ないだろう。

そうしてミア独自の回復魔法をその身で体感した女の人は満足しながらギルドを出ていった。

「よし。ミアの用事も終わった事だし、皆さそって朝食取ろう！それに、お別れの挨拶もしないと」

「うん。じゃあわたし、皆を呼んでくるね！」

ミアは2階に行つて皆を呼びに行き、私はレイゼとスーファを呼びに行った。少し経つて皆が集まると、もう王都を出ようとしている事を話す。

「という訳で、今日私たちは王都を出て他の場所へ冒険しに行こうと思ってるんだ」
「そうか。まあ冒険者だし、色んな場所を見て回りたいと思うのも分かる。ただ、どこに行くか決まってるのか？」

「いや、実はまだこれから……」

王都を出ることは決まっていたが、次にどこに行くのかは決まっていなかったの
で、正直に話す。すると、レイゼが王都から近い町をいくつか候補にあげてくれて、
更に地図まで用意してくれた。

それらをよく見て考えた結果、一番近い『シャーム』と言う町に決めた。それで
も歩きで行ける距離ではない為、荷馬車を依頼して行くことを勧められたのでそう
することにした。

「よし！ ちょっと待ってる。今から荷馬車と運転手を借りてくるからな」

「分かった。ありがとう！」

そう言ってレイゼは外に出ていった。待っている途中、何回も断っているのに、
こんな女の子2人だけじゃ危ないから俺が護衛してあげようなどと言ってくる面
倒な人たちが居たので、仕方ないので殺気で威圧して黙らせた。そのせいで気まず
い雰囲気になっちゃったけど。

30分程経った頃、レイゼが借りてきた荷馬車が到着したので乗り込む。

「皆ありがとうねー！」

「頑張ってたなあ！ 死なないでくれよー！」

こうして皆の見送りの元、次の町のシャームに向けて出発した。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価して下さいました方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、助けた冒険者に二つ名をつけられる

「嬢ちゃんたち、シャームの町には何の目的で行くんない？」

「特に何かしに行くわけじゃないよ。ただ単に行ったことのない場所に冒険しに行くだけだし」

「そう。行ったことなくて王都から一番近い町に行こうって考えてて、そこがたまシャームの町だったってだけなんだよね」

「なるほどね」

王都を出発した私たちはとある森の、比較的荷馬車が通りやすい森道を進んでいた。運転手の人に聞いたら、魔物がわりと出やすい森ではあるけどここが一番シャームの町に行く近道になるらしい。

「あ、そうだ。魔物とか盗賊が出たら金髪の……確かフランちゃんって言ったっけ？ よろしく頼むよ。レイゼさんに聞いたけど、Eランク冒険者とは思えない程滅茶苦茶な強さって聞いたからね。仮に怪我したとしてもミアちゃんだっけ？ 王国一番の回復魔導師って言ってたし」

「なるほど……もしかして、わざわざ魔物が出やすい森を選んだのって……」

「もちろん、レイゼさんの言っていたフランちゃんが強さを信じてるからだ。でなきゃCランク以上の冒険者数人連れてかないでこんな森通らないぞ」

なるほど。レイゼが私たちの情報をあらかじめ伝えておいてくれたから、普段は危険で通らないような場所を通っている、つまり魔物が出て来ても大丈夫だと期待されていると言う事だろう。

「そう言うことならもちろん、魔物とか出たら任せろ！」

「怪我しないのが一番だけど、その時が来たらわたし頑張ります！」

そんな感じで運転手と会話を交わしていると、後ろの方から何かが複数近づいてくるような音がしたので見てみると、イノシシのような生き物が5頭こちらに向けて走ってきていた。獲物か何かだと思っただろう。

このままだと荷馬車に大きな被害が出そうなので弾幕で討伐することにした。

森に余計な被害を与えないように、1頭ずつ高威力の弾幕で倒すことにしよう。

「……それ！」

よく狙いをつけ、放った青色の弾幕はしっかりイノシシもどきを捉え、大ダメー

ジを与えて吹き飛ばす。

上手く行ったので2頭目以降も同じように弾幕を放って倒し、少し外したものの、襲ってきたイノシシもどきは全員討伐した。

「流石だね〜」

「うん。森への被害も殆んどないし、上出来だね」

そうして襲ってきたイノシシもどきを討ち取って、しばらく森の中を順調に進んでいると急に荷馬車が止まった。その勢いでミアと一緒に仲良く、顔から床にダイブしてしまった。

「痛ったあ……」

「フランちゃん大丈夫？」

「うん。でも急にどうしたんだろう？」

不思議に思っていると、運転手の人と男の人が話すこんな声が聞こえてきた。

「おい、危ねえ……どうしたその傷」

「ご、ごめんなさい！ 実は、襲われてまして……」

「襲われている？」

話を聞いてみると、どうやら盗賊がこの先で出没したらしい。で、その盗賊とテイマーと呼ばれる人が使役する限りなくBランクに近いCランクの魔物『オーガ』6体に襲われ、仲間がどんどんやられていったと言う。何とか助けを呼ぼうとしていた時にこの荷馬車を見つけ、すがる思いで接触を図ってきたと言う。

「ふむそれなら……フランちゃん、ミアちゃん。と言う訳なんだ。大丈夫かい？」
「大丈夫。どうせそこ通るのに邪魔なのなら、その人たちが居なくてもやらないとダメだろうし」

「わたしは回復だけなら良いよ」

「なんだか知らないけども、ありがとうございます！」

そうして私たちは男の人の仲間を襲い、シャームへの道を塞ぐ盗賊とオーガと呼ばれる魔物を排除するべく、荷馬車で近くまで男の人を乗せて向かうことになった。

「居ました、あれです！」

「うわあ……何この絶望的な戦力差」

「フランちゃん、早く行こう！」

「うん！」

少し開けた場所に出ると、2人の冒険者が10人の盗賊と7体のオーガに襲われているのが見えた。1体オーガが増えている。

側には負傷して倒れている人が2人、このまま治療しなければ死んでしまうだろうが、周りの敵が邪魔すぎる。

「森への被害を考えてる場合じゃないよね……『禁弾過去を刻む時計』！」

青い十字型レーザーに小さい赤い玉の弾幕を織り混ぜて敵の集団に放つ。赤玉に気をとられている隙に十字型レーザーは縦に回転しながらオーガの群れを通過、3体を真っ二つにして1体の腕を斬り飛ばし、一気に戦力を削ぐことが出来た。

盗賊にはこれを使うわけにはいかないので、通常弾幕と他のスペルカードで対処する。

「うわああー!! オーガが真っ二つに……」

「なんだ今のは!?!」

過去を刻む時計でオーガの半分を排除した事により、ずいぶん混乱しているみたいだった。

その隙に通常弾幕を、負傷者や戦闘中の冒険者に気を付けつつばらまきながら接

近する。

「な、なんだお前は！」

「えっと……今貴方が襲っている人たちの仲間に助けてって言われただけの冒険者だよ盗賊さん」

そう言うと、ソイツが私に向かってナイフを持って襲いかかって来たのでそれを弾幕で弾き、よろけた隙に蹴って吹き飛ばして気絶させる。

隙をついたティマーがけしかけてきた残りのオーガは、火力控えめの『禁忌レーヴァテイン』で排除した。

その光景を目の当たりにした残りの盗賊が逃げようとしたので……

「**これだけの事しておいて、自分たちだけ逃げられると思った？ ずいぶんおめでたい人たちだね**」

思いつきり殺気で威圧してあげたら全員大人しくなったので、少し離れた所にいるミアと運転手を呼んだ。

「ミア、終わったから負傷してる冒険者たちを治してあげて！」

「分かった！」

「運転手さん、あの盗賊を何かで縛り上げてもらえる？ シャームの町で引き渡すから」

「了解。それにしても凄いなあ……」

そうして威圧で大人しくなった盗賊たちを縛って荷馬車に放り込み、負傷者をミアの回復魔法で治した後、荷馬車に乗り込んだ。元々広かった為乗り込むことが出来たものの、冒険者や捕まえた盗賊込みで20人近くは流石にキツイ。

「あ、どうも。紅魔の少女様、助けて頂いて感謝です！」

「蒼銀の天使様も、怪我を治していただきありがとうございます」

道中助けた冒険者から妙な二つ名をつけられて呼ばれていた。町の中に入った時までそう呼ばれても困るので、自己紹介を軽く済ませる。

そうして予定を大幅に過ぎて森を抜けて夕方になった頃、ようやくシャームの町に到着した。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価して下さい方にも感謝です！ 励みになります！

主人公組解説・使用魔法

主人公組の解説です。物語が進んで行くにつれて情報を更新していく為、別枠での解説です。ネタバレ情報、独自設定と言った要素も存在します。そう言った物が無理だと言う方は飛ばして頂けると助かります。

へゞ紅魔の少女ゞフランドール・スカーレットゝ【種族】吸血鬼

紅魔館に住んでいる吸血鬼『レミア・スカーレット』の妹。昔と違い、割と活発で明るい性格。博麗神社での宴会後に地下室でのんびりしていた所、異世界に召喚された。

いきなり召喚された上、理不尽極まりない理由で殺されそうになった為、正当防衛で王城の魔導師や召喚術士と戦って制圧した。昔と違って狂気が抑えられた状態の為、手加減をしたので王城内部が血の海にならずに済んだ。これにより、彼女は王国の王を信用しなくなる。

なお、召喚時に加護として吸血鬼の弱点である日光や流水等にある程度の耐性が付き、暗闇や火炎に対する耐性がかなり上昇した。それでも完全には無効化出来ないもので、基本的には日中の行動には日傘などの日光を遮る物が必要である。闇属性は全く効かず、火属性に対してもほぼ無効と言う強力な耐性を持つ。

その反面光属性に対してはかなり弱く、水属性にも若干弱い。召喚加護があるとは言えそれらの属性を扱う敵に対しては慎重に事に当たる必要がある。

状態異常については即死と呪いは効かず、その他の異常にも基本高い耐性がある。しかし、睡眠と魔浄（悪魔や幽霊、吸血鬼等と言った魔物にしかかからない異常）には比較的弱い。

【使用魔法】

《攻撃系魔法》

コメトルフエン
『焰星落とし』

遙か上空から燃え盛る隕石を超高速で落とし、その際の衝撃波と大爆発で辺り一面を壊滅させる、土と火の複合属性最上級魔法。使う者の技量や魔力量によって非常に大きく手数や威力、消費魔力が左右される。略詠唱や詠唱破棄で発動させる事

は絶対に出来ない。

『アグヘルフレア』

対象の下方から強力な火柱を発生させ、それを中心に強力な火の波動が周囲に放たれて広範囲を焼き尽くす、火属性最上級魔法。火柱の内部はエクスフレアよりもさらに高温になっていて、中程度以下の火属性耐性ではダメージ軽減出来ない威力を誇る。

『魔導マジカルアローの矢』

純粋な魔力で作られた矢を展開した魔方阵から発射し、対象を攻撃する魔法。かなり自由が効く魔法であり、発動者の技量によっては追尾機能付与・各属性や状態異常の付与・破壊力の増大等の効果をつけたりする事が出来る為、級で分けられない。

《支援系魔法》

『チェーンパラライズ』

特殊な光を放ち、当たった相手に超高確率で麻痺の状態異常を付与する中級魔

法。近くに居る相手にも連鎖して当たる性質がある。

《生活系魔法》

『サウディオラ』

あらゆる汚れや異臭を消し去る。汚れや異臭の度合いや掛ける範囲によって魔力消費量が変わる。あくまで魔法の為、魔法を受け付けない人や物に対しては効果がない。主に冒険者や商人がこの魔法を重宝している。

【使用スペカ】

『禁忌レーヴァテイン』

炎を纏い、振るえば弾幕を撒き散らす剣で相手に攻撃するスペルカード。自身の意思で弾幕をなくしたり増やしたり出来る。

『禁弾 スターボウブレイク』

自身の羽に付いている魔法石を象った、色とりどりの綺麗な光弾を上空に打ち上げ、落下させて攻撃するスペルカード。

『禁忌カゴメカゴメ』

相手を中心に網目状に緑色の弾幕を展開させて行動を制限、すぐ後に大弾幕を放って弾幕を弾いて結界に跳ね返させ、四方八方からの地獄の弾幕嵐を見舞うスペルカード。

『禁忌フォーオブアカインド』

3人の独自に動ける分身を作り、自分を合わせて4人で弾幕戦闘を行うスペルカード。

『四炎剣クアトロレーヴァテイン』

3人の自分の分身と共に、相手に反撃の隙を与えずレーヴァテインによるダメージを与える連携スペルカード。連携する相手が自分自身である為極めて相性が良いが、分身が1人でも欠ければ使えなくなる。

〈蒼銀の天使〉ミア・メルシエンス 【種族】人間

王都で生まれた、銀髪蒼瞳の回復魔導師の少女。見ただけでどんな状態異常にか

かっているか見極める能力を持っている。

殆んどの回復魔法を無詠唱や略詠唱で扱うことが出来、自分自身でも創作魔法を作ってしまうほどの才能を持っているが、攻撃魔法は何故か練習しても初級がなんとか様になる程度しか使えない上、武器の扱いも下手である。

パーティー自体に入ったことはあるが、戦闘能力の無さに腹を立てられて回復魔法で役に立っているにも関わらず追い出される事があった。その為冒険者ではあるものの、フランに出会うまではランクが全く上がらないでいた。

人を種族や見た目では判断せず、接触してみた時の雰囲気等の要素で判断する性格の為、彼女を疎ましく思う者は少ない。

生命神の加護を生まれながらにして持っている為、あらゆる状態異常が全く効かない上、受けた傷が自動で回復し続ける体質を得ている。

属性耐性も非常に高く、光属性や水属性は無効化、風属性や土属性にも高い耐性を持つが、闇属性や火属性には僅かに弱い。

【使用魔法】

《回復系魔法》

『ホーリーヴェール・リジエネ』

自分の体質を参考にした、彼女の創作回復魔法。対象を光の衣で包み込んで1時間の間自動で傷を回復させ、更に状態異常も完全に防御する効果を与える。その分消費魔力はかなり多めになっている。

『エクスヒール』

回復系の上級魔法。対象者のあらゆる怪我を短時間で治すことが出来る。

『メデイカルナス』

回復系の上級魔法。対象者のあらゆる状態異常(即死以外)を短時間で治すことが出来る。

『ピュリファイ』

毒や呪い等で汚染されている空間を一瞬で浄化する事が出来る効果と、状態異常を回復させる効果を持っている、浄化・回復系の最上級魔法。範囲を狭めたり、詠唱等で魔力を込めれば込めるほど効果が跳ね上がっていく性質がある。

《他系統魔法》

『ライトカモフラージュ』

ミアの師匠が彼女の為に創作した魔法。自分と自分が触れている相手に対して、周りの風景に同化させて見えなくさせる効果を与える。クールタイムが長く、効果時間は短い消費魔力は少ない。

へヴァーミラ・スカーレット 〔種族〕 吸血鬼

【特殊能力】『あらゆる場所に在る水と、その状態変化を自由自在に操る』

見える範囲に在る全ての『水』やその状態変化を意のままに操る事が出来る、彼女特有の能力。水属性や氷属性攻撃を自動防御してくれる副次的効果もあってかなり強力であるが、発動には自身の魔力が必要な上、起こす現象の規模によって使用量が大きく変化してしまう。

王都で活動していた、服飾屋のレオネと言う男と一緒に住んでいた黒い長髪に琥珀色の瞳を持つ吸血鬼の少女。推定400歳前後で、身長はフランよりも僅かに高い程度である。互いの血を飲むこの世界の吸血鬼の儀式を経て、1ヵ月程前にフランの妹になった。

とある国の吸血鬼一家の末っ子としてこの世に生を受けたが、吸血鬼として異質な性質を持っていたのに加えて性格もその一家の全員と真反対であり、他にも色々な理由から禁忌の魔法を使われて記憶を消された後、そのまま捨てられてしまった為、レオネに名付けられるまでは名前が存在しなかった。

しかし、血を吸わずとも水を大量に取り込むことで生き延びる事が可能と言う、もはや吸血鬼とは思えない体質に偶然気づいたお陰で何とかレオネに拾われる30年程前まで生き延びる事に成功した。

吸血鬼の種族特性によって、光属性には弱くて闇属性は効かない。本来なら水属性にも弱いはずであったが、生まれ持った能力によって無効化されている。他は水属性が全く効かず、風属性に少し耐性を得ているものの、反動で火属性や雷属性に

は非常に弱い。しかも何故かは不明だが、怪力や再生能力が弱くなっている。

状態異常については、フランとほぼ同様の耐性を持っているが、こちらの方が若干睡眠に強い。

性格は基本的に穏やかで、滅多な事では怒らない。しかし、食事や睡眠の邪魔をされたり、大切な人を傷つけられた際は能力が暴走しかける位怒る。他には、感情が高ぶったりした時に制御が効きづらくなってしまう、周囲に冷気が放出される事がたびたびある。

【使用スペルカード】

『天水降りし氷星』

上空に展開された魔方陣から綺麗な輝きを放つ氷の弾を雨のように降らせ、攻撃するスペルカード。中には追尾効果のある弾や、不規則な軌道の弾もある為、回避は結構難しい。

『神滅ミストルティン』

蒼く輝く長弓を生成し、それに紅い稲妻を纏わせた蒼く輝く矢をつがえて放つス
ペルカード。フランのレーヴァテインとほぼ同等の威力を誇る。氷結の状態異常付
与に光属性の敵に対する非常に強力な特効効果も存在する。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

投稿前にチェックはしてありますが、仮に解説に抜けている所がある等、何か指摘があった際はよろしくお願ひします。

第1章 主人公一行以外の登場人物・魔法解説

第1章の主人公一行以外の登場人物に、出てきた魔法の解説です。前半に人物、後半に魔法の解説と言う感じになっています。

何か間違い等があればご指摘の程を宜しくお願いします。

※魔法の解説に関しては、主人公一行の扱う魔法の一覧と全く同じ解説の物がいくつか出てきます。

〈カーテンド王国国王オーレス・カーテンド〉

【種族】人間

カーテンド王国の国王。とある計画の為に異世界から強い者(人間)を召喚する計画の主導者でもあった。

大の亜人(人間以外の種族)嫌いである。その程度は、召喚されて目の前に現れ

た吸血鬼であるフランに対し、条件反射で部下に対して排除を命じてしまう程である。

亜人はこの国には必要ないと豪語はしているものの、何故か自国に住んでいる彼ら彼女らに対して進んで迫害等をするように命じない為、意外にも評判は悪くない。但し、目の前に現れれば条件反射で排除を命じてしまうが。

〈王都のギルド受付嬢 スーファ〉 【種族】 ハーフエルフ

カーテンド王国の王都にある最大のギルドで受付嬢をしているハーフエルフの女性。

目で見た対象のステータス(名前や種族に能力の一部、極めれば能力の全てと心の中)を見極める力を持っている為、フランの種族や名前も初対面で言い当てた。人間だろうと亜人だろうと分け隔てなく接するその姿から、王都での人気はそれなりに高い。

〈王都のギルドマスター レイゼ〉 【種族】 人間

カーテンド王国の王都にある最大のギルドでマスターをしている男。

王国最大ギルドのマスターだけあってその実力は高ランク冒険者レベルであり、並やそれ以下の攻撃や魔法なら避けなくても傷1つ付く事はない。

冒険者成り立てのフランと共に食事に行ったり、困っている初心者を見かけたら仕事を中断してまで助けに行く性格である。

〈魔道具店の店主息子ワイト〉【種族】人間

王都のとある魔道具店店主の息子。殆んど客が来ずに困っている父親の為にお客を呼び込む地道な活動を進んでする位には親孝行な子供である。

実は父親以上に魔法の才能があるのだが、本人も他の人も未だに気づいてはいない。

〈魔道具店の店主ヴァーレ〉【種族】人間

王都のとある魔道具店店主。ある時からフォウン会長の間接的な妨害工作によって店の客が激減し、閑古鳥が鳴いてしまっても諦めない心の持ち主である。

どれだけ忙しい時でも息子と関わる時間を作る信念を持っていて、それを破った事は1度もない。なので息子との関係は良好である。

自前で魔道具を作ってしまう技術力を持っていて、しかも魔導師でもある為魔法の扱いにも長けている。

〈魔道具店の店主妻メイ〉【種族】人間

王都のとある魔道具店主の妻。とある日、フォウン会長の手の者により呪術『モタプルカス』を多重に掛けられ、王都の病院にて解呪の治療を受けていたが治らず匙を投げられた時、ミアに助けられた。

まるで聖人の様な慈悲深い心の持ち主である為、病院にもかなり多くの御見舞いに訪れる人が居た位だ。

〈メルティオン魔道具店会長フォウン・メルティオン〉

【種族】人間

王国でかなりのシェアを誇っていたメルティオン魔道具店の会長。

表向きは自力でここまでのしあがってきたやり手とされているが、実際には有能な魔道具店の商品と技術者を脅して吸収、従わなければその店を潰しにかかると言った悪どい事をやったからであり、本来の実力ではここまで大きくなることはなかった。

しかも、前述の通りの悪どい事を自分ではなく部下にやらせ、更に口封じまでやる位狡猾である。

性格は欲望に忠実だが慎重。しかし、思い通りに事が進まないとは慎重さに欠けてしまう。

〈王都の強盗犯 ザルソウ〉【種族】人間

王都の守備隊が総力をあげても何故か捕まえない程の厄介な犯罪者。

それは隠蔽・逃走の技術が非常に高く、戦闘能力もそれなりに高い事が要因である。

最後は通りすがりのフランの能力により突然ナイフが破壊された事に衝撃を受け、その隙を突かれて逮捕された。

〈王都守備隊魔導師 アイシエ〉【種族】人間

王都守備隊に所属する人間の魔導師。種族由来の高い魔法適正を持つエルフの魔導師の中でも特に優れた魔導師から教わり、自分でも必死の努力を重ねた結果、人間の中ではかなり優れた存在となった。

魔法を使って悪事を働く存在を、例えばそれが彼女の親友や親であろうとも許さない信念を持つ。

〈王都守備隊長 ヤノーク〉【種族】人間

王都守備隊の隊長を勤めている人間の剣士。彼の剣を扱う技術はカーテンド王国内でトップクラスで、相手より力が劣っていたとしてもある程度なら関係ない位である。

人から剣を教えてくださいと頼まれた事が何度かあるが、教え方が下手すぎる(本人自称)と言う理由で全て断っている。

【登場魔法】

《攻撃系魔法》

『ヴェノムインフェルノ』

浴びた者に強烈な苦痛を与える毒の水を放つ、上位毒魔法。触れただけでも効果が出てくる程強力であり、残留性も高く危険な魔法。

『ディザストダークネス』

対象の足元に黒く輝く魔方阵を展開し、そこから紫色の稲妻のようなものを伴った闇の魔力を解放、それを浴びせて相手に強烈なダメージを与える、闇属性上位魔法。発動までのラグがある為回避されやすいが、訓練によって短縮が可能。

《生活系魔法》

『サウデオラ』

あらゆる汚れや異臭を消し去る。汚れや異臭の度合いや掛ける範囲によって魔力消費量に変化する。あくまで魔法の為、魔法を受け付けない人や物に対しては効果

がない。主に冒険者や商人がこの魔法を重宝している。

《回復系魔法》

『クイックヒール』

眩い光で傷を包み込み、回復させる中級魔法。他の中級回復魔法に比べて回復力は若干劣るが消費魔力が少なく、それほど練習せずとも練習詠唱時間が大幅に短くて済む。

『ピュリファイ』

毒や呪い等で汚染されている空間を一瞬で浄化する事が出来る効果と、状態異常を回復させる効果を持っている、浄化・回復系の最上級魔法。範囲を狭めたり、詠唱等で魔力を込めれば込めるほど効果が跳ね上がっていく性質がある。

『エクスヒール』

対象者のあらゆる怪我を短時間で治すことが出来る、回復系の上位魔法。

『メイカルナス』

対象者のあらゆる状態異常（即死以外）を短時間で治すことが出来る、回復系の上位魔法。

《防御系魔法》

『魔法物理結界』

魔法と物理攻撃の両方に防御効果を発揮する光の結界を展開する、防御系の上位魔法。範囲を広げれば広げるほど防御効果は低下し、狭めれば狭める程防御効果は上昇する。

『対魔法障壁』

攻撃魔法に対して高い防御効果を発揮する光の障壁を展開する、防御系の中位魔法。範囲を広げれば広げるほど防御効果は低下し、狭めれば狭める程防御効果は上昇する。

『対魔法結界』

回復以外のあらゆる魔法に対して非常に高い防御効果を発揮する光の結界を展開する、防御系の上位魔法。範囲を広げれば広げるほど防御効果は低下し、狭めれば狭める程防御効果は上昇する。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

第2章 カーテンド王国 シャーム編

フラン、依頼の紙を盗られる

「王都とは違って、のどかな田舎町って感じが良い所だね」

「うん。向こうみたい賑やかなのも良いけど、ここみたいにのんびりした雰囲気
の町も良いよね」

シャームに着いた私たちは、荷台部分につけられている窓を少し開けて、町の景色を見ながらひとまずギルドを探していた。捕まえた盗賊集団を引き渡す為の場所を聞くためだ。

そうしている内に商店街に荷馬車が差し掛かった時、店主や買い物をしているお客さんがこちらを見て驚いている。

そりゃそうだ。窓から見えるのは、荷台にこれでもかと人間が詰まっている場面なのだから、驚いたとしても不思議ではない。私だってそんな荷馬車見たら同じ反

応ずると思うし。

「うゝん。運転手さん、まだ見つからない？」

「ああ。田舎町だから見つかるかと思ったけど甘かったみたいだ。すまんミアちゃん、フランちゃん」

「大丈夫だよ！」

「じゃあフランちゃん、わたし降りて町の人に聞いてくるね」

「ミア、お願い。気をつけてね」

よく考えたら最初からそうすれば良かったような気がしたけど、町の景色とか雰囲気は堪能出来たから良しとしよう。

邪魔にならない場所に荷馬車を止めてもらい、ミアを待っていると、すぐに誰か人を2人連れて戻ってきた。見た感じ、この町の衛兵だろう。

「で、ミアさんでしたか。ここに盗賊集団が？」

「うん。わたしと一緒のパーティーの人が捕まえた盗賊が居るの」

「分かりました。おい、縛られているらしいが気を付けろよ」

「了解です」

そう言葉が聞こえた後、荷台の後ろ側に付けられた扉が開くと、衛兵たちが驚いた。

「うわあ……何これ。人間がすし詰め状態に……」

「これ全員盗賊なのか？」

「あ、衛兵さん。金髪で紅い瞳の人は違うよ。わたしと

一緒のパーティーの人だから。あと、わりと重装備の5人も盗賊じゃない」

「そうですか。と言うことは、この11人の盗賊を取っ捕まえたのが金髪で紅い瞳の子と言う訳ですね。にわかには信じられないですけど」

「うん。フランちゃんって言うんだけど、本当だよ。あつという間にオーガ7体を討伐して、盗賊たちも1人で制圧したし」

ミアが色々説明してくれたお陰でトントントン拍子に話が進み、この盗賊集団はシャームの町管轄の警備組織が引き取ってくれることとなった。去り際、宿の場所を聞いたら商店街を抜けてすぐの所にあるらしいので、そこをこの町にいる間の滞在場所にすることに決めた。

そうして商店街を抜け、宿に着いた。今まで乗せてきてもらった荷馬車の運転手

にお礼とお金を渡してから降り、中に入った。

「はい。いらっしやいませー！」

「2人泊まれる部屋ってどこか空いてない？」

「ちよつと待っててくださいね……空いてますよ。すぐそこの部屋なら」

「分かった。それで、一泊いくら？」

「銀貨6枚です。1日3食付きなら金貨1枚です」

考えた結果、ずつと宿に閉じ籠もる訳でもないし、依頼を受けてあちこち出歩く事が多いだろうと判断し、食事はなしで泊まることにした為、銀貨6枚を支払って部屋に入る。

「ミア、お休み」

「うん。フランちゃんお休み」

寝る前に洗淨魔法サウディオラを自分とミアにかけてからベッドに横になり、眠りについた。

そして次の日の朝……

「おはよう。フランちゃん起きて」

「……ふああ。おはよー」

「で、今日は何する？」

「うーん。どうしようかな」

取り敢えず初めて来た町だし、まずはギルドを探してと思ったのでそれをミアに提案すると、了承してくれたのでそうすることになった。

宿を出て昨日通った商店街に行き、たまたま買い物をしていた冒険者の人にギルドの場所を聞くと、案内してくれるとのことなのでありがたく付いていく。

商店街の途中にある道の方に行き、少し歩いた後にあつた王都のギルドと同程度の大きさの白色の建物の前で止まった。ここがシャームのギルドらしい。

「どうもありがとう！」

「おう！ 冒険頑張れよ！」

そうしてギルドの中に入って行き、早速クエストボードに貼られている依頼をじっくり吟味する。

採取系の依頼はなく、討伐依頼だけがずらりと並べられていた。

「ゴブリンにスライム、リトルオークに……ん？」

貼られている紙の中に目立つ色で緊急につきランク不問、腕の立つ者募集と書かれた討伐依頼があったので見てみる。内容は『リトルグランドドラゴン』と言うBランクの魔物が通商路付近に居を構え、側を通る荷馬車や冒険者等を襲って物流が滞り始めているので討伐してくれと言うものだった。

「Bランク……でもドラゴンか。行ってみるかな」

「フランちゃん決まった？」

「あ、うん。これにしようかなって」

「リトルグランドドラゴンってBランクじゃん。まあ、油断しなければフランちゃんなら行けそうな気がするし、良いと思うよ」

ミアの了承も得たのでその紙を取り、受付に向かおうとした時にいきなり誰かに突き飛ばされ、更に依頼の紙まで盗られてしまった。

顔を上げて見てみると、物凄い重装備の男の人が依頼の紙を持っているのを見た。

「ちょっと何すんのさ！ それ私たちが受けようとして先に取ったんだけど」

「へっ！ お前、身の程知らずだな。ただの小娘がグランドドラゴンに勝てるわけないだろ。こう言うのはBランクの俺様にこそ相応しいってもんだ！」

無理な主張を言うだけ言ってからその紙を受付に渡しに行こうとする。

「おいお前！ 人の横取りするな。さっさと返しやがれ！」

「そうよ！ 返しなさい！」

「あーあ、お前終わったな。喧嘩売った相手が悪すぎた」

「ああ？」

「王都で噂になってる冒険者だぞ。何でもCランクの魔物であるコクカクロウを一撃で消し炭に、ギルドに襲撃してきたフォウンの手先を1人で撃破、フォウン本人との戦いも余裕で無傷とか。少なくともその依頼を受けるだけの實力はあるはずだ」

王都でやったことがずいぶん噂になっているようだった。まあ、あれだけ派手に立ち回れば噂にもなるか。

「ハハハ！ そんなわけないだろ、ただの噂だ。ほら俺様が依頼を受けるから早く手続きをしやがれ」

やんわり拒否する受付の人を脅かして無理やり依頼を通させ、さっさと立ち去っていった。

「何なのさアイツ！」

「フランちゃん、大丈夫？」

「ミア？ うん、私は平気」

「フラン、すまん。止められなくて」

「貴方たちが悪いわけじゃないから気にしないで。止めてくれようとしたし。あ、それよりも怪我大丈夫？ ミア、治してあげて」

「分かった」

さっきの男を止めようとしたときに受けただろう傷を、ミアの魔法で治してあげたら凄く喜んでくれた。

それに受付の人が申し訳なさそうにこちらに来て、何か欲しいものお詫びに1つくれると言うので、魔導書が欲しいと言ってみたら、本当にもらえたので良かった。何でも、ここではメジャーな物だったらしい

そうして、こんなことがあったので一旦出直すことに決め、ギルドを後にする。

もらった魔導書を読みながら宿の部屋でのんびり過ごしたり、商店街で昼食を取ったりして過ごした後に改めてギルドに行くと、あの時の男の人が大怪我をして

床に寝かされて治療されているのを見かけた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星登録して下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、地竜の親子と相對する

誤字脱字修正・余計な文字などの消去・違和感を感じた部分の修正を行いました。
ストーリーに変更はありません。

「何この状況……取り敢えずミア、治療をお願い」

「分かった。はいみんな、治療するから退いて」

「ちょっと嬢ちゃん！今重傷の人の治療中……あ、その腕輪王国一の回復魔導師に送られる奴ですよ。失礼しました！」

「こりゃ派手にやられてるね。『エクスヒール』！」

上級回復魔法を唱え、大怪我していたあの時の男を治療したミア。周りの人が流石王国一の回復魔導師だと褒めてくれていたので、自分の事じゃないのになんだか嬉しい気がした。

「さて、あんた。一体何があったのか教えてもらおうか」

「ああ。実はな……」

男の説明によると無理やり依頼を受けた後に、指定の場所に準備をしてから行ってリトルグランドドラゴンと戦えたまでは良かったものの、想定以上の物理耐性に苦戦していたらしい。

で、それだけならまだ問題なかったみたいだが、更にとある魔物が出現したせいでこの大怪我を負う羽目になったと言う。

「アイツの親竜が出てくるなんて冗談じゃねえよ!! 2体同時に相手なんて鬼畜だろ! 偶然通りかかったAランク冒険団が居なきゃ死んでたわ俺」

「リトルグランドドラゴンの親竜ってまさか、Aランクの魔物の『グランドドラゴン』!?」

「ああそうだ! ってか、グランドドラゴンしか居ねえだろお前馬鹿か?」

「馬鹿はお前だざまあみろ! あんなことするから天罰食らったんだ。死ななかつただけありがたいと思え」

「なんだとお!?!」

今にも乱闘騒ぎに発展しそうなこの状況にどうするか判断しかねていると、声を

上げた人が居た。あの男が言っていたAランク冒険団『バスター』と名乗る5人のリーダーだ。

「今はそんな事で争っている場合じゃありません！ 負傷者も居たのでひとまず逃走用魔法煙幕弾で何とか逃げれましたが、このまま放置するわけにはいきませんので、僕らと一緒に何人か……」

「それじゃあこの2人とかどうだ？ 1人は王国一の回復魔導師ミア、もう1人は王都で凄い奴だと噂の少女冒険者フランだ。聞いたことないか？」

私たちに関する噂を聞いたことのある人が、あのAランク冒険団と共にグランドドラゴンを討伐するメンバーに推薦してきた。まあ、最初から行くつもりではいたのでありがたいけど、果たしてこの人たちがどういう判断を下すのか気になった。「申し訳ないですが、私たちはまだ王都に行ったことがないので知らないですね。そんなに凄いですか？」

「話せば長くなるんだが……」

噂を知らない彼女たちが知ってる人にどう凄いか聞くと、あれやこれやとどんな話が盛られていって、最終的には私に相對した者は全て火剣で爆殺されるとま

で言われた。

「いや、そこまではしないって！ まあ、魔物が後ろから不意討ちしてきたら分からないけども」

流石にこれ以上話を盛られると困るので、会話に割り込んで盛られた部分を訂正しに入る。

その後の話し合いの結果、グランドドラゴン討伐隊のメンバーに私たち2人が参加することに決定した。

「と言う訳でフランさん、ミアさん。よろしくお願いします」

「はい。よろしくお願いします！」

「回復だけだけど、わたし頑張ります！」

早速準備を始め、念には念を入れて逃走用の魔法煙幕弾を用意して、出発した。途中まで荷馬車で向かい、その後は歩きでグランドドラゴンが占拠していると言う通商路に向かっていると、耳をつんざくような咆哮が上空から聞こえた。

「来たぞ、グランドドラゴンだ！ 戦闘態勢を取れ！」

見ると、凄く大きな濃い茶色の鱗を持つ竜と一回り小さい竜がこちらに向かって

急降下して来ていた。

試しに通常弾幕を戦闘仕様で放つが、案の定あまり効果がなく、突撃を止められなかった。そこでその場から離れる。少し経った時、さっきまで居た場所に竜たちが降り立った。

「こんなんじゃ効果ないか。仕方ない、周りの被害を考えてたらやられてしまう。『禁忌レーヴァテイン』!!」

全力を込めた炎を纏わせ、大きい方を一旦バスターの人たちに足止めしてもらい、小さい方に斬りかかる。

回避行動をとられたが、腕1本を斬り落として胸の鱗に切り傷を与えた。

「ガアアア!!」

その瞬間、大きい方が激昂してバスターの人を蹴散らし、こちらに向かって来た。「それ！ ほーら！」

鋭い爪による攻撃を避け、避けきれない分はレーヴァテインで受け止める。巨体による攻撃力は凄まじく、受け止めただけで全身に鋭い衝撃が走った。

「流石ドラゴン、強い！ だったらこっちも戦闘仕様の全力スペルカードで行く

よ……『禁弾 スターボウブレイク』!」

私の翼に付いている魔法石のような形をした色とりどりの弾幕を空高く打ち上げ、ドラゴン親子の元に雨が降っているような感じで落下させる。

それを大きい方が上空に向けて土属性のドラゴンブレスを放った為、半分程度を消されたが、残りの半分はしっかり当てることが出来た。

そこそこのダメージは与えられたみたいで、所々から出血している。

「凄い……何て魔力と身体能力なの？あの人の言っていた王都で噂の少女冒険者ってのは本当だったようね」

「ミアさんだって凄いで。この光の衣を纏わせる回復魔法、受けた傷が自動で回復するんだ。こんな魔法見たことないぞ」

蹴散らされたバスターの人たちもミアのサポートによって小さい方に対して優位に立ち回れているようで、このまま行けば討伐は上手くいくだろう。

「フランさん、小さい方は任せて下さい！申し訳ないですけど大きい方、お願いします！」

「分かった、任せて！」

こうしてリトルグランドドラゴンはバスターの人たちとミアで、グランドドラゴンは私でと言う図式が出来上がった。後ろから不意討ちで襲われる心配がなくなり、戦いやすくなったのでありがたい。

「さて、次行くよ！ 『禁忌 カゴメカゴメ』」

時折くる鋭い爪による攻撃や土属性魔法を避けつつ、スペルカードを使う。

前使った時よりも弾幕の密度・威力・速度を大幅に上げ、本気で仕留めにかかる。スターボウブレイクで与えた傷を更に広げ、鱗の薄い部分を貫通したりさせる等、かなりのダメージを追加で与えることが出来た。

このままスペルカードを連発すればいけるだろうと思っていた時、グランドドラゴンが予備動作なしでドラゴンブレスを放ってきた。直撃コースだった。

「油断した！ えっと…… 『manaの衣』！」

咄嗟にもらった魔導書の防御系魔法のページに書かれていた魔法を唱えた。簡単な魔法みたいなので奇跡的に発動はしたものの、練習をロクにせず、本を見た程度の知識で魔法が持続するはずもなく、ブレスの途中で解除されてしまった。

「ふう……」

ダメージをそこそこ負ったものの、ドラゴンブレスを何とか耐えきる事に成功した私は、切り札となるスペルカードを使う。

「危なかったよドラゴンさん。でも、これで終わらせてみせるよ……『秘弾そして誰もいなくなるか?』」

90秒間絶対無敵になるスペルカード、私の切り札を使う。

突然攻撃対象の私が消えた為か、辺りをキョロキョロし始めたグランドドラゴン。

「食らえ！」

翼を展開し、空中を飛びながらひたすら弾幕を全力で発射する。たまにドラゴンブレスが空中を飛んでくるも、見当違いの方向の為気にせず発射し続ける。

そして90秒が過ぎてスペルカードの効果が切れた頃、遂にグランドドラゴンを倒す事に成功した。

ミアたちの方も見てみると、リトルグランドラゴンが倒れているのが見えた。こうして無事に誰も欠けることなく討伐を終える事が出来た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、シャームの冒険者たちに認められる

午前1時頃に日間ランキングを見たら、79位に本作が入ってるのを見てビックリしました。読んでくれている人にお気に入り登録や星評価をしてきている皆様のおかげです！ありがとうございます！

「ねえ、リーダーさん。何してるの？」

グランドドラゴンたちを討伐し、証明として角を3本取った後に竜肉や傷ついていない鱗や爪をバスターのメンバーたちがナイフ等の道具を使って剥ぎ取っていたのを見た。竜肉は食料の為だと分かるが、鱗や爪って何に使うのか全く分からなかったので、リーダーに聞いてみた。

「上級土属性武器や防具・高級魔道具製作に使えそうな素材集めだよ。グランドドラゴンの素材は最適だからね。それに……」

どうやら討伐したグランドドラゴンの鱗などの部分は、その丈夫さや魔力の豊富

さから上級武器や防具・高級魔道具によく使われるらしい。

今回討伐して剥ぎ取った素材を商業ギルドの素材買取受付まで持っていけば、この量でも金貨20〜25枚となるほどだと言う。凄いい需要がある素材なんだなあと思っ
た。

「そう言えば、フランちゃんってランク何だっけ？」

そんな話をしてしていると、突然リーダーが私のランクを聞いてきた。不思議に思っただけど特に隠すような事でもないので正直に答える。

「Eランクだよ！」

「ハハ……あのデータラメな強さでEランクとか嘘だろ……まあいいや。それで、今まで剥ぎ取りした覚えはある？」

「ないよ！今まで討伐したことあるグランドドラゴン以外の魔物は、スライムにコクカクロウって奴なんだけど、スライムは弾幕1発で倒したら消滅したし、コクカクロウはレーヴァテインで燃えていなくなったから」

Eランクだと正直に答えたら苦笑いされた。先ほどの戦闘のせいだろうな。

その後にも剥ぎ取りした覚えはあるかとも聞かれた。今まで討伐したことのある

魔物は自然消滅するか消し飛ばしてしまっていた。なのでしたことないと答えると、スライムは性質上仕方ないとしてもコクカクロウの方は素材としても有用らしく、もう少し手加減してやってくれと呆れられた。

そうして全ての素材を剥ぎ取り、どう考えても入りそうにない大きさの革の袋に全て詰め込んだ。一体何の魔法が使われているのだろうか。

「さて、ギルドに戻りましょう。それにしても、グランドドラゴンをこんなにも早く討伐できたのもこの2人、特にフランさんの活躍が大きかったですね」

「実力だけならSランク冒険者ですよこの子。見たことないオリジナル高威力魔法を使いますし、身体能力が凄いですから」

会話をしながら停めた荷馬車の場所まで行って乗り、そこから休憩なしでシャームの町へ戻ってギルドに向かい、討伐の報告をする。

「ただいま戻りました！ 無事にグランドドラゴン討伐してきました！」

「おお！ 流石バスターの人たちで」

「いえ。リトルグランドドラゴンの方は僕たちですが、親のグランドドラゴンの方は全部このフランちゃんが1人で討伐してくれました」

「「……え？」」

バスターのリーダーがそう説明すると、まるで信じられないといった感じだった。まあ、いきなりそんな事を言われて信じろという方が無理だろう。

「うーん。カーネイドさん、裏の魔法練習場使ってもいいですか？もしかしたら破壊してしまうかもしれません……」

「了解！ラムアルの頼みとあらば構わないよ。修理費半分負担してくれりゃね」「ありがとうございます！ここに居る皆さん、今から裏の魔法練習場でフランちゃんを討伐してきた証拠となる物をお見せ致しますので来て下さい！」

もしかしたら冒険団バスターのリーダー、ラムアルは私の力を皆に見せれば信じてもらえるだろうと踏んだのだろう。なので私はラムアルについていき、その作戦に乗ることにした。

「よし、ここなら最悪練習場が吹き飛ぶぐらいで済むだろう。じゃあフランちゃん、お願いできる？」

「良いけど、何を見せたら良いの？」

「それじゃあ、あのドラゴンの爪攻撃を受け止めた炎剣を本気でお願い」

「分かった……『禁忌レーヴァテイン』！」

グランドドラゴン戦と同じレベルの魔力をつぎ込んで作った炎剣を思いっきり振り下ろすと、地面に接触した瞬間に炎が上がって爆発し、小さいクレーターが出来上がった。

「……うん。これなら納得だな。ドラゴンを討伐したのも信用できる」

「確かに、角も2つありますし。となるとSランク冒険者並みかそれ以上の力があるでしょうね。でなきゃこの破壊力の魔法剣を生成出来ないでしょうし」

皆の反応は良く、これで大半の人が納得してくれたみたいだ。

「おいフランちゃん！他に高威力の魔法はあるか？」

「まだあるよ！」

「じゃあ頼む」

「分かった……『禁弾スターボウブレイク』」

これも同じく、先ほどの戦いの際に使った時と同じ魔力をつぎ込んで上空に放ち、雨のように降らせる。

魔法石のような形をした弾幕は目の前にあった鉄製の鎧を貫通して地面に突き刺

さる。

「鉄の鎧がこうもあっさりとは貫かれるなんてな」

「何という攻撃力の魔法なんだ……」

「まだあるけど見る？」

「いや、もう良い。ドラゴン討伐で疲れてるだろうし……あ、もしかしてこんなこと頼んで迷惑だったか？」

「大丈夫だよ。迷惑だとは思ってないし。だけどさ、疲れてるだろうと思ってたなら頼まないですよ……」

「確かにそうだね。ごめん」

力の一部を見せることによって、皆にグランドドラゴンを討伐したのは私だと認めてもらったことが出来た。

その後ギルドの中に戻ると、カーネイドと呼ばれた女の人が話しかけてきた。

「君がフランか。私はカーネイド。シャームの町のギルドでギルドマスターをやっている者だ」

「あ、うん。一応自己紹介すると、私はフランドール・スカーレット。呼び方はフ

ランでお願い」

「分かった。それでだな、今私がフランに声をかけたのはランクアップを知らせるためだ」

話を聞くと、Eランクである私がAランクのグランドドラゴンを2頭討伐すると言う快挙を成し遂げた功績を認めてDランクに上げる事にしたと言う。ちなみに、ミアも回復魔法による強力なサポート等が認められてDランクに上げる事が決まったらしい。

「フランちゃん、Dランクおめでとう！ 凄い戦いぶりだったね！」

「そう言うミアこそ、ランクアップおめでとう！ あの回復魔法を上手く使って戦況を優位にしていたし」

そんな風に互いを労っていると、ラムアルが再び声をかけてきた。

「フランちゃん、ミアちゃん。今回は本当にお疲れ様。突然で悪いんだけど、もしよければ僕たちと一緒に疲れ癒しを兼ねてシャーム観光しない？ グランドドラゴン討伐に付き合ってもらったお礼に思ったんだけどどうかな？」

「え、いいの？」

「もちろん！」

「ありがとう。じゃあよろしくお願いね！」

こうしてラムアルに町の観光に誘われた私たちは、疲れを癒すのも兼ねてついでにいく事に決めた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、観光を楽しむ

今話は都合により、少し短めとなります。

「よし。さてまずは、どこ行こうか」

「ラムアル、あなたまだ決めてなかったのですか？」

「まあね。だってその場の思い付きで言っただけでどこ行こうか決めてなかったし。エノス、どこ行くか考えてくれない？」

「うーん……」

観光に誘われ、ラムアル一行についていくことになった私たち2人だったが、行く場所を決めていなかったらしく、かれこれ30分程その辺をうろうろするだけでどこにも寄ったりしていなかった。

まあ、私とミアにとっては初めて来る町なので、今日1日の予定がただの散歩になっても別に良いのだけれど。

そんな事を思っていると、エノスと呼ばれた女性剣士が何か思い付いたらしく、ラムアルに話しかける。

「じゃあ、私たちがよく行く大衆食堂に行きませんか？ あそこの料理は美味しいから、是非フランちゃんとミアちゃんにも是非食べてもらいたいですし」

「なるほど、確かにそうだ！ それで行こう。2人共、大丈夫？ 嫌なら言ってね」
「嫌じゃないよ！」

「わたしも同じく」

冒険団バスターの人たちが、これ程までに推してくる『大衆食堂』の料理がどれだけ美味しいものなのか、気になるので了承した。そもそも、ラムアル一行についていった時点で命の危機がある所以外なら、断るつもりは全くないけど。

そうして商店街にあると言う大衆食堂に皆で向かうことになった。途中私が使うスペルカードやミアが使うオリジナル回復魔法について話しながら歩いていると、目の前にシャーム大衆食堂と書かれている看板が立てられた建物が見えたので入店する。

「いらっしやいませ、冒険団バスターの皆様。そちらの方は、紅魔の少女フラン様

に蒼銀の天使ミア様ですね」

「あ、はい。もしかして私たちの噂を？」

「ええ。それでお2人の、特にフラン様の噂は凄いものですね。グランドドラゴンを2頭を1人で討ち取るなんて。ミア様だって、詠唱破棄でホイホイ上級回復魔法を連発してバスターの方々をサポートしたみたいですし」

いつの間にかドラゴン討伐をした事が町中に拡散されていたらしく、店に入った瞬間に店員さんから二つ名付きで呼ばれた。

この町に来る前助けた冒険者たちから付けられた二つ名もしっかり伝わっていたみたいだ。

「すっかりこの町じゃ有名人だね、フランちゃん」

「そうみたいだね！でも、ミアだって一緒だよ」

「凄いですねフランちゃん、ミアちゃん。それだけ町の人に印象に残ってるってことです。あ、そうだ店員さん、いつもの料理を全員分お願いします」

「かしこまりました」

エノスからの注文を聞いた店員さんは調理場の方に向かっていった。それから30

分程待っていると、何かの肉のステーキとサラダが出てきた。これは何なのか聞いてみると、イノシシのような魔物『グレイトボア』肉のステーキに『ピター』と呼ばれる野菜を苦味を抜く処理をして、秘伝のドレッシングをかけた物らしい。

「フランちゃん美味しいね、これ」

「うん。確かに美味しいよね！」

「気に入ってもらえたみたいで良かったです」

流石この店によく行き、美味しいと薦めてきたバスターの人たちがいつも食べる料理で、とても美味しい。

余りにも気に入ったものだから、思わず同じものをもう1つ頼んで食べてしまう位だった。

それらを完食して店を出た後、次はどこに行くのかと聞いたらシャーメイ図書館と言う所に行くらしい。あらゆる種類の本が所に

狭しと並べられていて、魔導書もそこそこ揃えられている場所の為、一般人や魔導師が良く使う図書館らしい。

建物自体が数百年前の、書物等の資料を駆使しながらほぼ再現する事に成功した

歴史ある物で、観光目的の冒険者等の人が来ることがそこそ居る場所でも在ることのこと。

当然、行ったことのない場所だったのでどんな所なのか楽しみにしながらその図書館を目的地にする。

「ここがシャーマイ図書館、結構大きいね。それに、凄い古びた感じがしてて歴史を感じる」

「フランちゃん、あんまり驚かないね」

「まあ、これより大きな図書館を見たことがあるから」

到着して中に入ると、紅魔館にあるパチュリーの図書館を小さくしたような感じだった。

とは言ってもかなり広く、何万冊レベルで本がありそうだ。

「魔導書コーナーは……あった」

現在、私の攻撃手段はスペルカードと身体能力を生かした物理攻撃だけである。今はまだこれだけでも何とか対処出来ているものの、今後それだけでは対処できないような事態や敵が現れる可能性だってある。その為、この世界の攻撃や防御系の

魔法をシャームの町に居る間に、最低でも1つや2つ位覚える為にここの魔導書コーナーで学ぶ事に決めた。

1 時間程魔導書を読んだ後、カーテンド王国の歴史や神話・美味しい料理店が書かれた本等を読み漁った結果、図書館を出る頃には外は真っ暗であった。

「ごめんねラムアル、他にも連れて行きたい所があっただろうに……」

「全然大丈夫だから気にしないでね。そもそもフランちゃんとミアちゃんを楽しませてリラックサさせる為に誘ったからね。楽しんでもらえたのなら良かったよ」

夜に観光出来る所はこの町にはないそうなので、今日はこれまでと言う事になった。明日も一緒に回るのかと聞いたら、どうやら明日にはシャームの町を依頼で出ていくから無理だと言われた。まあ、そう言うことなら仕方ないだろう。

軽く挨拶を済ませた後ラムアル一行と別れて宿に戻った私たちは、浄化魔法で身体を綺麗にした後すぐにベッドに寝転がり、眠りについた。

そうして翌日の朝目を覚ますと、早速支度をしてギルドに向かった。緊急的なグランドドラゴン討伐でランクアップをしてDランクになったのは良いが、まだ普通の依頼に関しては経験がほぼ無い。このままでは冒険者として経験を積めず、良

くないと思った私は今日から2〜3日程は依頼を連続で受けようと計画した。

ミアも賛成してくれたので早速ギルドに向かい、到着した。

依頼を受けようと受付の方に向かおうとした時、そこでなにやら小さな騒ぎが起きていた事に気づいた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、少年に弾幕を教える

今回の話には弾幕についての独自解釈が存在します。

※アンケートの締め切りは9月12日の予定です。

「どうかお願い出来ませんか？」

「うーん……ちょっと無理ですね。その依頼内容だと、受けてもらうには最低でも金貨3枚は必要になりますね。銀貨9枚だと受けてくれる人が出てくる確率が極めて低くなりますので、こちらとしてはやはり金貨3枚からしか……」

「そこを何とかお願いします!!」

話が聞こえる位置まで行って聞いてみると、魔法使いの格好をした推定10代前半の男の子が何か依頼をしているのを、受付の人が断っている所だった。依頼を受けるのに受付が空かないと困るので、話しかけてみることにした。

「ねえ、どうしたの？」

「だからそれ……あ、フランさん。実はですね、あの男の子に銀貨9枚で依頼をしてきたのを断っているのですが、なかなか引き下がってくれなくて……」

受付の人に話を聞いてみたところ、そこに居る男の子は1週間誰か魔法を教えしてくれる人を探しているとのこと。それ自体は問題ないらしいが、提示してきた報酬が期間と内容の割に少な過ぎて受けてくれる人が居ないので無理だと言ったものの、食い下がってきて困っていたらしい。

「じゃあ君に質問するけど、その教えてほしい魔法って何でも良いの？ オリジナルでも？」

「え……あ、はい。むしろオリジナルならありがたいと思ってます。今度俺の通う学園で魔法の大会があるんですけど、専属の先生が急用が出来て帰ってしまい、困っていた時に冒険者ギルドに依頼しようと思ったのですが、俺の家貧乏なんで、これが出せるお金の限界なんです」

なるほど。弾幕はこの世界ではオリジナル扱いだし、依頼を探していた私たち2人にとっても好都合な依頼だ。お金にも比較的余裕があるし、初めてだけどこれも

良い経験になるかもと思ったから受けてみようかなと思った。それをミアに相談してみると……

「良いんじゃない？ わたしが居れば怪我したとしても直ぐに治せるから訓練にはもってこいだと思う」

賛成してくれたので男の子の方に向き直り、こう言う。

「良いよ！ その依頼、私たちが受けるから！」

「本当ですか？ ありがとうございます！」

「と言う訳で受付のお姉さん、私たちが受けるから手続きよろしくね！」

「分かりました」

「あ、そうだ。依頼を同時に2つ以上って受けるのは駄目なの？」

「1つ目の依頼に影響が出ない程度の依頼なら問題ないですよ」

「分かった。ありがとう！」

学園に通う男の子に魔法を教える依頼を2人で受けることになった。教えるとなると、互いに名前を知らないのは問題なので自己紹介する。

「じゃあまずは私から。名前はフランドール・スカーレット、フランって呼んでね」

「えっと……わたしはミア。王国に認められた回復魔導師やってるの。練習中の回復は任せてね」

「最後に俺ですな。ジェノと言います！火と風属性魔法は中級、光と闇属性は初級までですが使えます。他は全く使えません」

一通り自己紹介を終えると、早速ギルド裏の魔法練習場を使わせてもらい、教える事になる弾幕を見せる。運良く誰も居なかったのでおおっぴらに出来るのでよかった。

「じゃあこれから教える魔法について実演してみるから見てて」

まずは通常弾幕を一通り見せ、次に一部のスペルカードを見せた。いきなり全力でやるのはあれかなあとも思ったので威力は控えめにしておいた。

案の定見たことない魔法だったらしく、食い入るようにして弾幕を見ていた。

「なるほど。これがフランさんの使うオリジナル魔法『弾幕』ですか。威力もさることながら、美しいですね」

「まあ、人に見せることも考えてるし」

そうして実演は一旦おしまいにして、今度は実際に説明しながらの練習に入る。

上手く説明出来るのか分からないけど、受けた以上、通常弾幕は扱えるようになってもらうように教えないと駄目だろう。

「ジェノ、試しに1つ弾幕を作ってみよう。自分の魔力を球状にまとめるイメージでやってみて」

「こうかな？」

ジェノが集中し始めると、彼の手元に青く輝く光球が出現したので的に発射してもらうと、上半分が見事に消し飛んだ。とても初めての弾幕とは思えない。

その後も食事と休憩をはさみつつ、弾幕の練習をすること8時間、密度はまばらながら弾幕ごっこがある程度出来そうな位には同時に作って発射する芸当が出来るようになっていた。何度も思うが、ジェノは適応力が高すぎないか？

「じゃあ、外も暗くなってきたからもう終わりにしよう。また明日にここで待ち合わせでよろしくね」

「はい！今日はありがとうございました！」

こうして、今日1日の弾幕練習を終えて宿に戻って眠りにつく。

次の日の朝、起きて朝食をとった後すぐに魔法練習場に行く、既にジェノが自主的に弾幕を練習して待っていた。待たせてしまったことを詫びつつ、昨日の後半と同じ感じで練習に入った。

「ジェノ、たった1日でここまでって凄いよ！ 才能あるんじゃないかな」

「フランちゃん、この人凄いな」

「ありがとうございます。それにしても、この通常弾幕って凄い便利ですよ。威力は確かに低めですけど、それを補っても余りある手数多さには驚きました」

「でも、確かに手数では圧倒的だけど、ある程度強い相手に対しては魔力を込めると威力不足が否めないからね。緊急でグランドドラゴン2頭を相手にした時はほんの僅かダメージを与えた程度だったし」

そう言うと、ジェノは驚いていた。流星に町で私の噂が流れ始めるとは言え、まだ全体に行き渡ってはいないだろうから、私が冗談を言っているように聞こえたのだろう。

「グランドドラゴンってあれですよ。Aランクの……あ、そう言えば確か、現れたグランドドラゴンを1人で2頭相手にしてほぼ無傷で討伐した少女が居たっ

て誰かが言ってたような……それってまさか」

「それ私の事だよ」

「じゃあ俺、今そんな人の魔法を教わっているって事になるんだよな。まともに扱えるようになれば魔法の大会だって行けるかもしれない」

そう言うとジェノは、再び弾幕の練習を始めた。その様子を見てみると、もしかしたら1週間の内にスペルカード会得まで行けるかもしれない。と言うか、行けるだろう。

3時間程休み休み練習していると、疲れたから1時間位休ませてくれと言ってきた。無理をして身体を壊し、魔法の大会に支障が出てしまえば教えている意味がなくなるので了承した。

「お疲れ様ジェノ」

「回復魔法いる？」

「はい、お疲れ様ですフランさん。回復魔法は大丈夫ですよミアさん」

休憩中ベンチに座りながら他愛もない会話をしていると、ジェノを呼ぶ男の人の大きな声が聞こえて来たので、全員でその声が聞こえた方に振り向くと、ジェノと

似たような格好をした推定50代のおじさんが居た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、学園に練習試合を見に行く

活動報告に書いた時間よりも1時間投稿が遅くなりました。すみません。最後の余計な空白が多かったので修正しました。

「ノルヴァ先生、俺に何かご用でしょうか？」

「やっと見つけたぞジェノ。今日はクラス内での練習試合をやるって言ってなかったか？」

「はい。1週間の休み期間中、1日だけクラス内での練習試合をやるとは聞きませんでしたけど、それって今日でしたっけ？明日だったような気が」

「いや、今日だ。で、今までお前何してたんだ？まさかとは思いますが、わざとサボって女の子2人誘って遊んでた……」

「どうやら1週間の休み中に、1日だけクラス内で練習試合をする為に学園に行く日があったらしく、その日にちを明日と間違えていたようだ。」

今、私たち2人は外側、ジェノは真ん中に座って休憩しながら楽しく会話をしていたので、おじさんから見て彼がサボった上に私たちを誘って良い思いをしていたように見えたらしい。

「違いますよ！ 隣に居るフランさんに魔法を教わってて、今は休憩をしていただけです。と言うか、俺がわざとサボるわけじゃないじゃないですか」

「……確かにそうだったな、すまん。それにしても、まさか今噂の彼女に魔法を教わっていたとはな。確か、オリジナルだったか？」

「はい、弾幕って言うみたいです。ある程度なら出来るようになりました」

この場で説教が始まるかと思ったら、普段ジェノが真面目な生徒だったらしく、日にちを間違えていたことは棚に上げてくれたみたいだ。

その後当然学園に行くことになったジェノだったが、どういうわけか私たちも先生に来て欲しいと頼まれた。何でも、現役冒険者からみて魔法のレベルがどんな感じか見て欲しいとのこと。

それに、王国一の回復魔導師が居れば怪我した際も安心と言うことらしい。まあ断ろうとも思わなかったし、ジェノの依頼の延長線と言うことで納得してついてい

くことにした。

20分程歩いていると、『オウラン魔法学園』と書かれた建物が見えてきた。どうやらここがジェノの通う学園のようだ。

門から中に入ると、広大な敷地の庭に30人程度集まっていたのが見えた。その中の1人がこちらに気づいたようで、走って近づいてきた。

「ジェノく。遅いぞ何してたんだ」

「いやあ、恥ずかしながら明日と勘違いしててさ。だからさっきまで現役冒険者の人に魔法を教えてもらってたんだよね」

「なるほどく。で、誰から教えてもらってるんだ？」

「フランドール・スカーレット。後ろにいる金髪で紅い瞳の子なんだけど」

「……マジかよ。グランドドラゴン2頭の攻撃をもともせず、超高威力オリジナル魔法で討伐したっていうあの？」

「そうそう。1回戦ってみたら？」

「死にたくないんでやめとくわ」

会話を交わした後、ジェノは彼と共に皆が集まる場所に向かって行った。

何らかのやり取りが集団内で行われた後、広大な庭に作られた闘技場のような場所です。2人が相対し、互いに魔法を打ち始めた。火の球・氷の槍・雷の弾等が飛び交い、規模は劣るがその様はまるで弾幕ごっこのようだ。

「うーむ。なるほどね」

戦いを見ていると、ジェノの方が素の魔法の打ち合いでは若干不利のようだが、思い出したかのように私が教えた通常弾幕を展開して彼に向けて光弾の嵐を叩き込んだ。威力は低く、密度もまだ不完全であるが弾幕自体では倒すことが出来ないが、見たことないそれに驚いて彼の動きが止まった隙について火の球をぶつけ、勝利することに成功したようだ。

流石に1日である程度通常弾幕を扱えるようになるほどの才能の持ち主だ。早速戦闘に取り入れて勝利をもぎ取るとは。

「ジェノ、今の無詠唱光弾、これがあのフランから教えてもらった弾幕と言う魔法なのか？ 圧倒的な手数と隙の少なさが脅威だな。威力は低めみたいだが」

「まあね。ただ、フランさんにはこれより上の弾幕攻撃『スペルカード』って言う手数も威力も桁が違う必殺技があるんだよね。聞いたんだけど、それでグラウンド

ラゴン2頭を討伐したみたい」

「なるほど」

こうして、2人の練習試合は弾幕によって出来た隙をついたジェノの勝利に終わった。

その後もクラスの人たちによる練習試合をじっくりミアと一緒に観戦していると、何らかの障壁で弾かれた氷魔法9発が見ていた私とミアの方と周囲の生徒たちに飛んで来たので、それを破壊する為に通常弾幕を戦闘仕様で10発放ち、氷魔法を打ち消した。

「ありがとうございます。お陰で助かりました」

「気にしないで。それにしてもこの学園の生徒さんたち、皆凄いね！ 中級魔法使える人が結構多いけど、エリートなのかな？」

いつぞやもらった魔導書を見ながら魔法の打ち合いを見ていた。中級魔法が結構多い割合で飛び交っているの、相当優秀な生徒たちなのだろうと思い、そう質問してみた。

「はい。オウラン魔法学園は王国を守る魔導師や、要人護衛の魔導師に回復魔導師

育成等も行っていきますので、魔法に自信がある王国屈指のエリートが必然的に集ってきますね。まあ、全員がなる訳じゃないですけど」

なるほど。ここに通う人たちは将来国や要人を守る魔導師か回復魔導師になろうとしている人が集まる場所だから、必然的に魔法に秀でている人たちが集まるわけか。そりゃ魔法の打ち合いも必然的に凄いものになるわけだ。

そうになると、集まった生徒たちを教える先生はそれ以上の実力を秘めているのは確かだろう。でなければこの生徒たちに魔法を教えることなど不可能だし。

1時間経って、全員の練習試合が終わった。ジェノはいい線行っていたが、最後に戦った風を極めし者と呼ばれたシルフィオと言う少女に負けてしまった。

ノルヴァ先生に聞いてみたら、彼女の使える魔法は風属性と申し訳程度の水属性しかないが、風魔法自体は上級まで使える上、それを生かした近接戦闘が得意らしい。恐らくEランクの魔物はもちろん、Dランクの魔物位なら余裕を持って討伐出来る力位ならあるだろう。

「ノルヴァ先生、私から見てあの生徒さんたちはかなり優秀だと思うよ。他のクラスの人たちがどのくらい強いのか分からないけど、少なくとも大会でボロ負けする

ことはないと思う」

「ありがとうございます。そう言って頂けてこちらとしても嬉しい限りです」

「授業はこれでおしまい？ ジェノを連れてって練習の続きをやりたいんだけど……」

「いえ、今日は夕方まで色々やることがあるのでまだ終わりではないですね。申し訳ないです」

練習試合が終わったので、ジェノを連れて行って少し食事休憩を取った後に弾幕の練習の続きをしようと思ひ、先生に聞くとまだ授業か何かがあると言われたので、ミアと共に学園を後にする事にした。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

サラ、魔法大会勝利の妨げとなる者を観察する

アンケートに答えて下さった方ありがとうございます。今後他キャラ視点の話
をたまに入れていく方針で行きたいと思います。

新たなアンケートもするのでそちらにも答えて頂ければ助かります。

※タグの削除、追加をしました

「サラ、魔法大会もうすぐだな」

「ああ……うん、そうだねアルゼ」

「で、どうなんだ？ 今年の相手たちのライバル様子は。俺たちルーフィオレ学園は負けそ
うか？」

「えっとね、参加校の殆どははっきり言って雑魚。注意するべきはオウラン魔法学
園とマナミア学園だけだよ。ただ……」

王国内学園対抗の魔法大会まで残り1週間を切ったある日、ボクはアルゼのお願いで毎年恒例のライバル偵察に勤しんでいた。相変わらずうちの学園以外の3強と呼ばれる学園以外は弱く、問題なく勝てそうだった。

ただ、3強の中の1つ、最後のオウラン魔法学園をかかなりの魔力を隠蔽に回すと言う危ない賭けをして偵察に行った時、凄い光景に遭遇した。

「オウラン魔法学園に強力な魔法を使う魔導師の少女がいてね、防壁に弾かれた中級魔法を見たことない無詠唱魔法であっさり相殺してたんだ。あの子は危険すぎる。もしかしたら負けるかもしれないってボクは思った」

「お前がそこまで警戒するとはな。その少女とは一体何者だ？」

「金髪で紅い瞳、妙な帽子に半袖とミニスカート、紅い日傘を差していた子だったよ。名前は——」

聞こえてきた名前を言おうとした時、アルゼが頭を抱え始めた。どうしたのかと聞いてみたら何とあのフラン、もといフランドール・スカーレットと言う少女はここ最近急に出て来て活躍をしている冒険者だと言う。具体的には王都で活躍していた強盗捕縛のアシスト、フォウンやその部下の襲撃を余裕で抑える等だ。

それだけならまだしも、先日とうとう2頭のグランドドラゴンを同時に1人で相手取って勝ってしまったらしい。

「冒険者界限じゃかなり噂になってるらしい。一般にも噂が浸透し始めているらしいぞ。知らなかったのか？」

「だって興味ないもん。まあとにかく、そのフランって子がボクの想像以上に凄い事は分かったよ」

「ああ、それで良い。で、それほど厄介な冒険者がオウラン学園に居た。恐らくこの生徒に魔法を教えにやって来たという事だろうから、そこでサラに頼みがある。彼女がもっと厄介な何かを持っていないか、生徒の誰かに魔法を伝授しているか偵察してきてくれ」

「ええ……もう疲れたからやりたくないんだけど。てか、アルゼが行けば良いじゃん。今までずっとボクがやってきたんだし」

正直、隠蔽に魔力を使ったせいでクタクタだ。今から宿によってご飯を食べた後に風呂に入って寝たい。

と言うかお前が行けよとも思ったが、美味しいものを好きだけやると言う餌に

釣られてしまったボクは、結局偵察に行くことになった。

「あ、そもそも居場所を探してからじゃないと話にならないじゃん。冒険者だからギルドにでも居てくれたら良いけど、居なかったら……はあ、面倒臭いなあ〜」

そう愚痴をこぼしつつ、取り敢えずギルドに向かう。頼むからいてくれえー！と心の中で叫びつつ入ると……

（よし、居たあ！）

運が良かった。フランともう1人の少女、腕輪を見ると王国一の回復魔導師に送ると彫ってあった。よく考えたらあの時も居ただけど、フランのインパクトが強すぎて忘れていた。

さて、見つけたは良いものこのまま話しかけて云々などとするのは愚か者のする事だ。幸いにも側に空いている席があったのでそこに座り、飲み物を飲みながら2人の会話を盗み聞きする。

「暇だねフランちゃん」

「うん。確かジェノの授業が終わるのって夕方だけ？ それまでやることないし、魔法の練習でもしようかな。でもそうするとミアが暇だよね……」

「わたしは少しなら暇になっても良いよ。弾幕って見るだけでも綺麗で、割りと楽しめるし」

ジェノと言う人物を待つ間、魔法練習場に行って魔法の練習をするようだ。これは彼女の手の内が少し分かるかもしれない。なのでボクはこっそり後をつけていき、怪しまれないように自分も適当に魔法を放つ。

（あ、これ絶対にジェノって天才ウラン学園の人だよ。て事は彼女が魔法を教えているのは確実。どうかその人が魔法大会に出ませんように……）

叶うはずもない事を心の中で願いながら基本の復習をしていた時、突然耳をつんざく音が聞こえた。恐る恐る音がした方に向いてみると、そこには燃え盛る炎剣を地面に叩きつけて、恐ろしい殺気をミアと言う仲間の少女の腕を掴む男に放つ彼女が居た。

状況から察するに無理やり連れ去ろうとしたのがバレ、止められたのだろう。

（物凄い魔力と殺気、これならグランドドラゴンを2頭同時に相手取って討伐したって噂も納得かもしれない）

その後、彼女は殺気で硬直している男から仲間を救い出して安全な場所まで退避

させると、『禁忌カゴメカゴメ』と言う緑色の光弾で対象を囲んでから大きな弾を放ち、それで弾いた緑色の光弾で全方位から攻撃する魔法を発動させた。

（うわあ……半殺しとは容赦ないね。まあ、相手の男には同情しないけどさ。あ、騎士の人でも呼んどのいてあげるかな）

思わぬ所で力の一片を見ることが出来たのは収穫だけど、それでもし彼女が罰せられるようなことがあればなんか嫌だなあと思ったボクは早速町の警備兵の居る建物へ向かい、ギルドの魔法練習場にて誘拐未遂が発生したことを伝えた。

「と、言う訳です。ボクは見ました」

「そうですか。今すぐ向かいましょう！」

「しっかし、そいつもバカだなあ。そんな事すればフランちゃんに逆鱗に触れる、ちよっと考えりゃ分かるだろうに」

「あの2人、仲良さそうでしたしね」

「知らなかったんじゃないですかね？ 見た目10代前半かそれ以下ですから、舐めきっていたとか」

信用してくれて良かった。それにしても、警備兵士たちの彼女に対する信用が凄

い。なぜそんなに信用しているのか凄く気になったので聞いてみると、町に来た時に荷馬車一杯に盗賊たちを詰め込んで引き渡してきて、通商路占拠していたドラゴンを討ち取ってくれたからと言った。

（何か勝てる気がしなくなってきたのは気のせいかな？）

心の中で考えながら警備兵士たちと共にギルドの魔法練習場に向かう。

ボクが彼らを呼んできた後は、周りの人たちの証言もあってトントン拍子に話が進み、誘拐未遂のマヌケは捕まって連れていかれた。彼女はやり過ぎだと注意され、壊れた場所の修復費用の3分の1の負担程度で済んだ。

その後、彼女たちはここでの練習を中止して、ギルドの休憩スペースに用意された椅子に座った。

「フランちゃんありがとう！ わたしを助けてくれて」

「何言ってるの？ ミアは仲間でもあり、友人でもあるんだから当然だよ！」

「ふふっ」

（仲良いね）

そんな事を考えて居ると、彼女の元に2人の男女が合流してきた。服装を見る

に、オウラン学園の生徒だろう。

「あ、フランさん。先生に無理言って早めに切り上げてもらったので今来れました」

「そうなの？ で、ジェノの隣に居る人は君とあの時戦って勝った……」

「シルフィオですフランさん。ジェノ君に聞いて私も教えてもらいたいと思った次第です」

「あ、うん。分かった。でも、2人一気に教えるのは初めてだからちょっとあれだけ大丈夫？」

「問題ないです。ジェノ君にも教えてもらうので」

「え!？」

会話を交わしながらギルドを後にする彼女らをこっさり後をつけていくと、そのまま町の外に行つて少し開けた所で練習を始めた。

弾幕と呼ばれる魔法の戦闘での扱い方、その上位互換のスペルカードと言う攻撃、厄介な魔法だ。

合流したあの2人もかなりのやり手らしい。しかも彼の方は弾幕をある程度使いこなしている。これはボクたちも最高に気を引き締めようと決意した。そして日

が沈みかけた頃、うっかりくしゃみを豪快にしてみました。

「誰かそこに居るの？」

(あ、バレた。これはひとまず引き上げないと不味いね)

そうしてボクはなけなしの魔力で隠蔽魔法を発動させ、何とか逃走する事に成功した。

その後アルゼの待つ宿に行き、これまでの事を全て報告した。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価して下さい方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、擬似弾幕ごっこをする

1日1日練習の話を書いていると何話も同じような感じで続きそうなので、次話で今話から5日間時間を飛ばします。

※オリジナルスペルカードが後半で出ます。独自解釈もあります。

「ふう……疲れた」

「ジェノ君、お疲れ様」

「2人ともお疲れ様！ じゃあ、もう夕方だし戻ろう」

周りの事を考えず、ミアを拐おうとした馬鹿を半殺しにしたせいで魔法練習場が一時的に使えなくなったので、シャームの町を少し出た所で弾幕の練習を再開し、夕方までひたすら弾幕を打ちまくっていた。

「それにしても弾幕って便利な物ですね。あの練習試合でジェノ君が使ってきた時

は驚きました。無詠唱でいきなり光弾を凄い数放ってきたんですから。途中から思わず魔法大会の時まで使うつもりがなかった切り札の『風霊一体』を使ってしまいました」

「あれって切り札なんだね。急に消えて後ろに現れた時はビックリしたよ」

私もシルフィオの風霊一体と言う切り札を見た時はビックリした。途中まで良い感じで押していたのに、それを使われた瞬間攻撃が当たらなくなり、物凄いスピードで逆にジェノが押されてしまったからだ。

「物理ダメージ無効・火属性以外の魔法ダメージ半減・速度増強・風属性吸収する効果がありますけど、強力過ぎるが故に魔力の消費も強烈で、1分位しか持たず、効果が切れると疲労が凄くなるのが欠点ですけどね」

「いや、あのスピード1分耐えるのはキツいから十分だと思うけど」

2人の会話を聞きながらシャームの町に戻り、私とミアが泊まっている宿に流れで一緒に泊まる事になった。道中、急にとある事を思い付いたので

「ねえ、この町の魔道具店ってどこにあるか知ってる？」

「あ、はい。俺たち御用達の魔道具店がありますけど、何か用事ですか？」

「まあね。明日に教える事に必要な物を買に行くから」

そうしてジェノとシルフィオの案内の元、魔道具店に到着した。

「えっと……あった！これでいいや」

15枚の魔方陣が描かれた用途不明の魔法カードを金貨2枚購入し、すぐに魔道具の店を出て、再び宿に向かう。

到着してすぐ、軽く食事と浄化魔法をかけて汚れと臭いを落とし、ベッドに横になった。

そして翌日、前の日と同じ場所に行って弾幕の練習を始めた。ジェノに関しては、持ち前の適応力によって少しずつ様になってきていた。この調子で行けば5日後に控えている魔法大会で使っても問題ないレベルにはなるだろう。シルフィオの方もかなり調子が良さそうだった。

「そうだジェノ、シルフィオ。この辺で1回私と弾幕の打ち合いをしようよ順番で。実践形式でやれば鍛えられると思うんだよね」

「え!?!」

「大丈夫だよ！ 本気でやらないし、いざとなったらミアの超回復魔法で治せるから」

「戦闘じゃ役立たずだけど、回復ならわたしの本領発揮が出来るから安心してジェノさん、シルフィオさん」

「まあ、そう言うことなら……」

若干不安そうだったが、王国一の回復魔導師の称号を持つミアの一言が効いたらしく、擬似弾幕ごっこをやることになった。

「では、まずは私から行きますねフランさん」

そう言うシルフィオは白銀に輝く弾幕を10個程展開し、こちらに向けて発射してきた。

よく見てみると、弾幕の周囲に風を纏わせているようだ。恐らくそれによって与えるダメージと、弾の速度を上げて当てやすくしようと言う考えだろう。

「よっと、ほい！」

ただ、これでも幻想郷では色んな人妖たちと日々弾幕ごっこをやっていた経験がある。それに種族に備わる身体能力が加われば、油断さえしなければ避けるのは容

易だと思った。

「これでどうですか!？」

「っ！」

避けたはずの弾幕が後ろで曲がり、再びこちらに向かって飛来してくるのが分かった。それも避けるが、また同じように曲がって迫ってくる。

このまま避け続けられればギリ貧となり、最終的には負けてしまうかも知れない。

「打ち落とすか、それっ！」

向かってくる弾幕をこちらも弾幕で迎え撃ち、相殺した。

その後、今度は私が威力は手加減して弾幕をシルフィオに放つ。

「凄い密度……風霊一体！」

練習試合の際に見せたあの魔法を発動させた瞬間、シルフィオの身体が僅かに薄くなり、放たれる威圧感が増大する。

放った弾幕は半分避けられ、残りの半分は当てられるもあらぬ方向に弾かれてしまふ。

当然、向こうの攻撃の威力は増大しているので先程よりもはるかに避けづらく

なっているものの、全部避けきるか相殺させた。

1分避け続けて風霊一体の効果が切れ、疲労した所に弾幕の嵐を叩き込んでダウンスせた。

「……フランさん、ありがとうございます」

「お疲れ様。ミア、回復よろしく！」

「分かった」

シルフィオを回復してもらい、擬似弾幕ごっこを終わらせた私は、すぐにジェノとの擬似的弾幕ごっこを始める。

「では行きます！」

ジェノはそう宣言すると、早速弾幕をかなりの数展開して放ってきた。シルフィオよりも速度・密度は優れているが、避けた弾幕が後ろから襲ってくると言った事はなかった。

「全部避けられてる……さすがです！」

回避した後はこちらが先程と同じように威力を手加減した弾幕を放つが、ジェノはそれを紙一重で避けつつ回避不可能なものについては自身の弾幕で相殺した。

が、3分程続けていると疲労もあり、被弾回数が急に増えた。

更に5分程粘っていたジェノも被弾による地味なダメージの蓄積と疲労により、限界が来たように倒れてしまった。

「ミア、たびたびごめんね。ジェノの回復よろしく！」

「うん。分かった」

そうして擬似弾幕ごっこを終わらせた私は、地面に座って休憩している2人の元に向かい、昨日買った魔法カードを渡した。

「これは昨日買った……まさか、フランさん俺たちも遂に」

「そう！今から貴方たちに必殺技『スペルカード』の会得方法を教えるね。まずは頭のなかで技を考えて、しっかり決まったら魔方陣を書いてその真ん中にカードを置いて、最後に自分の魔力を入れれば契約完了、スペルカードが完成するの！やってみて」

私がそう言うと、2人は少し考え込んだ後すぐに魔方陣を書き始め、カードを真ん中に置いて、魔力を入れ始めた。

徐々にカードが発光し始め、そして一瞬眩い閃光が走る。

「……おおお!!」

「これが、スペルカード……」

どうやら上手く行ったようなので、気になって見てみた。

ジェノは『炎槍 イグニスランス』と言う小さい火の槍を雨のように上空の魔方阵から降らせるスペルカードのようだ。完全にマスターすればとんでもない強さになりそうな奴だろう。

シルフィオは『風霊 インテグレイズシルフ』と言う、風の精霊を召喚して風を纏う弾幕を嵐のような激しきで放つスペルカードが出来た。鍛えてマスターすればジェノの奴よりも強くなる可能性を秘めている。

そんな事を考えていた時、向こうの方からゴブリンが近づいて来るのが見えた。2人も気づいたようで、戦闘準備を始めた。

「あ、ちょうど今にも俺たちを襲おうとしているゴブリンが7体も来たから、早速試し撃ちしてみよう。シルフィオさん」

「そうですね」

そうして、2人は早速スペルカードをゴブリンに向けて使用した。結果、哀れ

なゴブリンは攻撃するまもなく消し飛んでしまった。

「よし！ 初めてだったけど、もっと頑張って練習して、魔法大会でも活躍できるように頑張るぞー！」

「そうですね。まだ5日残っているんですから、出来るだけフランさんから吸収して技をより多く得ましょう」

「フランさん、あと5日よろしくお願いします。ミアさんも回復お願いします！」

「もちろん！」

こうして大会が始まるまでの5日間、ひたすら弾幕とスペルカードの練習と擬似弾幕ごっこを繰り返す事となった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

第2章 主人公一行以外の登場人物・魔法解説

第2章の主人公一行以外の登場人物に、出てきた魔法の解説です。前半に人物、後半に魔法の解説と言う感じになっています。

何か間違い等があればご指摘の程を宜しくお願いします。

〈シャームのギルドマスターカーネイド〉

【種族】人間

カーテンド王国のシャームの町にあるギルドマスター。魔法を取り入れた近接武器を使用した戦闘が得意だが、主に拳を使った格闘を好む。本人が誰かに職業を聞かれた時、シ魔導拳闘士シと言う言葉を良く使う。

その実力はギルドマスターらしく優れていて、王都のギルドマスターのレイゼとの手合わせでは勝率が60%と言う感じで、若干彼女の方が勝っている。

へバスター冒険団リーダーラムアル】【種族】人間

Aランク冒険団『バスター』を率いるリーダー。自分の身長程の大剣を軽々と扱い、あらゆる敵を薙ぎ倒す強さを持つが、戦闘では仲間全員で自分以外怪我をせずに生還する事を最優先目標にしている為、本来なら余裕で倒せる魔物でも時間をかけすぎてしまう。

攻撃魔法の才能は壊滅的だが、何故か土属性の防御系魔法だけは上手く扱える。

へバスター冒険団剣士エノス】【種族】獣人(猫系)

Aランク冒険団バスターに所属する猫系獣人の二刀流女性剣士。とあるドワーフの鍛冶屋が彼女の為に作った『細剣 エアロスレイピア』を愛用、風のように舞って敵を切り刻む事から『舞剣』の二つ名が付いている。

リーダーと同様に魔法の才能は壊滅的であるものの身体強化の魔法は一通り使える為、戦闘能力はリーダーと同等かそれ以上であり、相性の関係から手合わせでは彼女の方が強い。

へオウラン学園生徒 ジェノ〈【種族】人間

王国の重要な分野で活躍する魔導師を輩出するオウラン学園の生徒。火と風、光と闇属性の4属性の魔法を扱う素質があり、魔法の大会に出場選手に選ばれる程成績は良好である。

大会の選手に選出されると毎日授業が終わった後に教えてくれる人との練習に励み、その人が来れなくなった時も自費でギルドに依頼を出して練習しようとするなど、非常に真面目な性格の持ち主。

へオウラン学園生徒 シルフィオ〈【種族】人間

ジェノと同じく、王国の重要な分野で活躍する魔導師を輩出するオウラン学園の生徒。扱える属性は風のみであるが、それに限ればあらゆる王国内の魔導師を凌駕する程まで極まっていると学園内では言われている。しかし、実際どうなのかは不明である。

ひたすら極めた果てに開発した『風霊一体』と言う魔法を使った彼女に勝てる相手は、同属性を扱う者には今のところ存在しない。

また、相手の一挙一動を観察してそこから最適な行動を見極める力も高い為、今すぐ冒険者をやっても大丈夫だろうと言われている。

〈オウラン学園教師 ノルヴァ〉【種族】人間

ジェノやシルフィオの通うオウラン学園の教師。エリートが集まる学園の教師だけあってその魔法の腕前はかなりの物であり、魔法に対する耐性もそれなりに高い。

〈ルーフィオレ学園生徒 サラ〉

【種族】人間と雷精のハーフ

魔法大会に参加する、三強と呼ばれているルーフィオレ学園の女子生徒。強い魔導師との戦闘を常に求めている戦闘狂である為か、元からの性格が影響しているのかは分からないが、魔導師ではない他人とある程度の強さをもつ魔導師には敬意を払うものの、弱すぎる相手に対しては敬意を払う素振りすら見せない。

大人の魔導師顔負けの雷属性魔法の使い手で、少しだけであるが相反する土属性

魔法も扱える。

他の人間や亜人の人たちとは違う特殊な環境下で生まれていて本人もそれを理解しているが、気にしてもいないし聞かれない限りは言うつもりもない。

ヘルーフイオレ学園生徒 アルゼン 【種族】 人間

魔法大会に参加する、三強と呼ばれているルーフィオレ学園の男子生徒。同じ学園に通うサラと共にいつも行動していて、お互いに訓練しながら力を高めあっているが、相性の関係もあってかほぼ勝つことは出来ていない。

水属性魔法のかなりの使い手で、同じレベルで水属性魔法も扱えるが、何故か本人は殆んど水属性魔法しか使わない。

【登場魔法】

《他系統魔法》

『風霊一体』

自身を風そのものと言える存在と化させ、物理ダメージ無効・火属性以外の魔法

ダメージ半減・速度増強・風属性吸収の効果を持つ、風属性をひたすら極めた果てにシルフィオが会得したオリジナル魔法。非常に強力ではあるが、効果時間が短く魔力消費がかなり激しい。

【登場オリジナルスペルカード】

『炎槍 イグニスランス』

小さい火の槍を雨のように上空の魔方阵から降らせて相手にダメージを与える、ジェノのスペルカード。これを強化・発展させれば幻想郷の上位陣の本気に食い込める程の物になる可能性が高い。

『風霊 インテグレイズシルフ』

風の精霊を召喚して、風を纏う弾幕を嵐のような激しさで放つシルフィオのスペルカード。これもジェノと同様、強化・発展させれば幻想郷の上位陣の本気と同レベルになる可能性を秘めている。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方に

も感謝です！
励みになります！

第3章 カーテンド王国 ルービエ編

フラン、大会会場の警備に行く

昨日は投稿出来ませんでした。すみません。

今後の投稿時間について、7時～13時の間か17時～21時にしようと思います。それ以外か都合で投稿できそうにない日は活動報告にてお知らせします。

「遂にこの日が来たね！ ジェノ、シルフィオ！」

「はい。この1週間ありがとうございました。俺もシルフィオさんも見違える程に強くなったと思います」

「確かに強力な必殺技を1つ、ジェノ君と私は得ましたし。それに通常弹幕自体もかなり強いですから」

まだ日が昇りきらない朝早い時間、最後の調整を終えたジェノとシルフィオと共

に私たちは依頼達成の報告をする為、ギルドに居た。

あと7時間程すれば、王国中の参加している90校近い学園がひしめき合う3日間の魔法大会が始まる。あれだけ弾幕を扱えるようになった上スperlカードと言う必殺技も得ることが出来たのだから、きっと2人がオウラン学園を勝利に導いてくれるだろう。

「ありがとうございます！」

「うん。頑張って！時間が来たら見に行くから」

そうして、依頼達成の旨を伝える為の紙にジェノのサインをもらって提出、報酬の銀貨9枚をもらってギルドを後にしようとしたら……

「あの、フランさんとミアさん。実は、その大会が開催される闘技場の警備をする警備隊の人員補充依頼があるのですが、もし良ければ受けて頂けませんか？」

ギルドの受付の人が、依頼を受けてくれないかと私たちを呼び止めてきた。警備隊の人が足りないのだろうか、重要な大会なのであれば補欠を用意しておく等、何か対策をしておくべきではないのだろうかと思った。急に体調不良とかの理由で欠員が出た可能性もあるから一概には言えないだろうけど。

仮に依頼を受けたとして、2人が出る試合が観に行けなかったら何か嫌だなあ
と思ったので、疑問に思った事を聞いてみる。

「じゃあ1つ聞きたいんだけど、依頼を受けたとして2人が出る試合だけ見に行
く事は出来ない？」

「うーん……ちょっと待っていて下さい。今ちょうど警備隊の隊長が居るので聞い
てみますね。えっと、その2人の名前と通ってる学園は……」

「ジェノとシルフィオ、オウラン学園に通ってる」

「分かりました」

そう言うのと受付の人は奥に消えていった。少し時間が経って戻ってくると、私た
ちにこう告げる。

「聞いてきました。その2人が出る試合だけなら良いとの事です。オウラン学園
は3強と呼ばれる学園のうちの1つなので、見る回数も少ないからだそうで」

「なるほど、分かりました」

取り敢えず、2人が出る試合だけなら観に行くことが出来るようで良かった。

「それでは受けて頂けると言う事でよろしいですか？」

「まあね」

「ありがとうございます。急ですけど、あと30分程で荷馬車がギルド前に到着するのでそれに乗り込んで隣国との国境の町『ルービエ』まで行きます。距離も結構あるので今から出発しないと時間がギリギリなんですすよね」

そう。国境の町『ルービエ』までは距離がかなりあるから、当日はまだ日が昇りきらないほどの早朝に学園まで迎えに来る送迎用荷馬車に乗って行く必要がある事を、5日間の擬似弾幕ごっこ中にジェノから聞いたので、特に驚くこともなかった。

宿から出る時も支払いには既に済ませてあるので、特に準備をするような事はなかった。ギルドの入口でのんびり日傘を差しながら荷馬車が来るのを待つ。

30分後、普通の奴よりも一回り大きな奴迎えが来たのでミアと共に乗り込むと中には15人、同じ依頼を受けたであろう冒険者たちが乗っていた。

これから一緒に依頼をこなすことになる人たちだ。挨拶くらいはしておかなければと思ったので言葉を出そうとした時、1人が私たちを見てこう言った。

「あ、もうこの依頼楽勝じゃね？」

「え？ どういう……ああ、なるほど」

「紅魔の少女と蒼銀の天使!? 予想外の大戦力来た——！」

彼の言葉を皮切りに、荷馬車の中が大いに盛り上がった。あまり期待されても、たった2人に警備出来る範囲などたかが知れているので困る。

そんな感じのテンションで盛り上がりながら荷馬車に揺られている際に、特時折Dランクの魔物の襲撃があったものの、元々警備の為に無作為に集められた腕の立つ者たちの敵ではなく、まるでお掃除をするかのように排除されていったので私の出番はなかった。

そんなこんなで5時間後、やっと国境の町ルービエに到着した。

冒険者の人に聞いたら、隣国『ノストライト皇国』と巨大な城壁を隔てている町で双方共に仲が良く、商人たちが行き交う町で経済的にも政治的にも重要だのと。と。

「あれが今日大会が開催される巨大闘技場？」

「そうだ。各学園の選手やその親・親戚・友達、大会に興味のあるこの辺りの住民たちとかが沢山来て、確か1万人強だったな。毎年そのくらい来るぞ」

それを聞いた私は驚いた。今の今まで1万人もの人間が集まる場所など行ったことがないからだ。せいぜい経験した集まりと言え、宴会とか人里のお祭り位なものだったし。

「そういえばさ。今年はどこが優勝するんだろうね」

「3強の学園のどれかだろ」

「いや、最近建てられたヴァルシア学園って所も有力候補らしいぞ」

「へへ。そうなんだ」

魔法大会の優勝校予想を皆でしていると、荷馬車が止まった。どうやら巨大闘技場に着いたようだ。

「さて、これから仕事の説明を始めよう。と言ってもやることは簡単、闘技場内外を見回って何かあれば対処するだけだ。強盗や窃盗犯などの犯罪者を見つけたら対処できるようならして、無理ならひとまず俺たち精鋭が居る小さな小屋まで来てくれ。最悪町の警備兵士を呼んでくるからな」

つまり、会場とその周辺をウロウロしていれば良いと言う事らしい。かなり自由度が高い仕事のようだ。

開催まで1時間を切った頃、会場の門が開いたと同時に警備の仕事が始まった。地図を見ながら私とミアはまず入口周辺から闘技場の外側を時計回りに見て回った。

迷子の子供を警備隊長の居る小屋まで連れていったり、人波に巻き込まれて怪我をした人をミアの回復魔法で治して歩いたり、他人や私に絡んでくる迷惑な人を制圧・連行したり、それなりにやることはあった。

そうして大会が始まって30分位経った頃、すれ違った人が言っていたとある言葉に私は驚いた。

「おいおい、オウラン学園の奴らやバイんじゃないか今年。たった1人に3人倒されたぞ」

「残り2人、大丈夫か？」

(早速ピンチみたいだね……)

残り2人と言う事はジェノとシルフィオの事だろう。それにしても、たった1人で3人も倒すとは、相手はどれだけの精鋭なのだろうか。

隊長の待つ小屋に試合を観に行くことを報告した後、闘技場の観客席に向かった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、2人の試合を観戦する

もう1つの作品との掛け持ちの為、1話辺りの文字数をそれと同じくらいにしようと思います。あと、投稿頻度も落ちます。すみません。

『それでは只今より、ヴァルシア学園のフレイドさんとオウラン学園のジェノさんの魔法対戦を始めます！ 両者、対戦準備をして下さい！』

観客席の一番前を運良く確保することに成功した私とミアは、これから始まるうとしてるジェノの対戦を注意深く見守っている。

「なるほどね。あのフレイドって人がオウラン学園の3人を1人で打ち倒したっていう……確かにかなりの魔力を持っているみたいだけど」

「フランちゃん、ジェノさん大丈夫かな？」

「うん。魔力の量的にはジェノの方が多から大丈夫だとは思うけど……」

しかし、今回の相手は3強の内の1校、オウラン学園の人に1人で勝利してい

る強い魔導師だ。一体どんな魔法を使うのだろうか？

『対戦開始!!』

声を拡散させる魔道具を使った為か、司会者の声が会場に響き渡る。それと同時に対戦が始まった。

「まずは俺からだ！ 『マルチフレア』」

先に攻撃したのはジェノだ。複数の火の玉を同時に操って相手にぶつける火属性中級魔法を小手調べとばかりに放つ。

何故か避ける素振りを見せなかった為、全部をまともに受けてしまっていた。

(ん？ あの人……)

素早い動きで何かしたのが見えたが、特に気にも留めなかった。

「そんなもん効くかあ!!」

「嘘だろ……」

あれだけの火の玉を受けたにも関わらず、フレイドには全くと言って良いほど効いていなかった。いや、よく見たらほんの僅かばかりダメージがあるようだが、実質無いようなものだろう。

これには流石のジェノも絶望を隠せないようだ。

「くっ！ 『マルチストーム』『マルチフレア』」

間髪いれず2つ同時に中級魔法を放った。複数の竜巻と火の玉が混ざりあって火炎竜巻に、更にそれらがフレイドに集結していった。巨大な火炎竜巻となった。

これだけ高威力の魔法だ。流石に無傷とは行かないだろうと信じたけれど。

「ふう……やるじゃねえか」

「これでもこの程度か……」

どうやら流石に無傷とは行かなかったようだが、与えたダメージがあまりにも少なすぎる。相手の総魔力量からしてあの程度で済むはずがなかった。

「フランちゃんどうしたの？」

「……あ、ミアごめんね。実は、ジェノの相手のフレイドって奴がなんかおかしいなって思ってたさ」

「そうなの？」

そんな会話をミアとしていると、どうやらジェノが弾幕とスペルカードを使い始めるのが見えた。魔力の放出具合からみて、どうやらフルパワーで一気に決着をつ

けるようだ。

「3強戦まで使わないでおきたかったけど仕方ない！ はああー！」

ジェノが全魔力を使いつくすつもりで放った弾幕は、1発1発が中級魔法クラスの威力があるようで、それを防御するフレイドの身体に少しずつではあるがダメージを与え続けている。

「フランさん、使わせてもらいます！ 『炎槍 イグニスランス』」

ジェノがそう言うと、上空に展開された魔方陣からやたらデカい炎の槍が雨あられのように降り注いできた。全魔力を注いで発動させたから大きさが倍増しているのだろうか。

「あがっ！ くそ……」

先ほどの弾幕の比ではない、例えるなら上級魔法かそれ以上のクラスの威力を誇る炎の槍がフレイドを襲う。完全防御体勢を取っているようだが、それでも威力を殺しきれずにダメージを受け続けている。

そうして30秒程経った頃、フレイドがダメージに耐えきれずに気絶、ジェノも魔力を使い果たして気絶してしまった。

『おっとお！ 両者共に気絶した模様ですね！ この勝負は引き分けのようです。次の試合はヴァルシア学園の方はルナユールさん、オウラン学園の方は最後の1人シルフィオさんです！』

気絶した2人は闘技場スタッフによって運び出され、すぐさま次の試合が始まった。

『戦闘開始!!』

そう司会者の掛け声が聞こえたと同時にシルフィオが動き、弾幕をいきなり相手の腕とポケットに向けて放ったのだ。

「貴女、隠していたものでドーピングしようとしていましたよね？ まあ、もう破壊しておきましたので無駄ですよ」

「……嘘、何で？」

「ジェノは気づいていなかったようでしたけど、フレイドと言いましたっけ？ 彼も貴女の持っていた瓶と同じものの中に入れていた液体を飲んだら物凄い強くなりましたし」

「見られていたと言う訳ね……」

なるほど。て言うか、シルフィオはよく気づいたと思う。

『何と……試合中止です！ 今魔導師の者がそちらに真偽を確認するべく向かっています。と言うか、もし本当にドーピングアイテムを持ち込んでいたとしたら、大会運営は何をしていたんですかね！』

司会者はシルフィオとルナユールの会話を聞き、すぐさま試合を中断させ、真偽を確認する為に魔導師を向かわせた。

その結果、会話通り魔力増強のアイテムが発見され、この試合は無条件でオウラ学園側の勝利となり、その場で相手学園の数年間試合出場停止の処分が下された。何でも、王国内部の偉い人物がヴァルシア学園の不正と大会運営の杜撰なチェックに激昂して処分を要求、それを飲めなければお前たちもまとめて牢獄送りにするぞと言った為だと、守備隊長の伝で聞いた。

こうしてこの試合は、相手方の不正と言う後味の良くない結果でオウラ学園の勝利となった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

報告無しに放置してしまい、申し訳ありませんでした。

フラン、いかにもな輩を制圧する

「取り敢えず、オウラン学園の勝利になって良かった〜」

「うん。あ、そう言えばフランちゃん、次のオウラン学園の試合っていつだっけ？」
「えっと……2時間後らしいよ。まあ3強の学園じゃないみたいだから、多分私たちが見ることはないと思うけどね」

さっきの試合を見終えた私たちは再び、会場警備の仕事に戻っていた。

ジェノが弾幕とスペルカードを使うまで追い詰められた時は、あの2人が通っている学園を追い詰める相手にいきなり初日で出会うとは、どれだけレベルの高い試合なんだと、もっとスペルカード作らせれば良かったかと思っただけだが、何とか引き分けには持ち込めたし、しかも終わってみれば相手のドーピングが明るみに出て、無条件にオウラン学園側の勝利となっていた。

つまり、ドーピングがあつてジェノと互角という事だ。もしなければ、弾幕とスペルカードを使わずともジェノは負けることは……いや、そもそもジェノが出る前の最初の2人辺りで決着がついていただろう。

「じゃあ、3強の学園との戦闘が無い限りはずっと会場警備の仕事かな？」

「そう言う事になる……」

ミアと話しながら会場をウロウロしていると、会場に来た観客らしき人に声をかけられた。

「あんたら、もしかして紅魔の少女様と蒼銀の天使様ではないか？」

「うん、まあ一部の人は私たちをそう呼ぶみたいだけど……」

「そうか……」

そう言うと彼は土下座をして、私たちにお願いを言い始めた。

何でも、友人が明らかにヤバイ集団にランチされているらしい。

「全然警備が通るかかってくれなくて、ようやくあんたらが……」

「説明は良いから、早く案内して！」

「あ、すまない。こっちだ！」

当然お願いなどされなくても、そう言うトラブル等を解決したりするのが私たち2人が今受けている会場警備の仕事であるので、頼み込んだ人に案内を頼んで現場へと向かう。

そうして案内された場所に着くと、かなり酷い状況になっていた。何人か勇敢にも止めようとした人が居たらしいが、全員半殺し以上の怪我を負っていたりしていた。彼の友人も半殺しにされながら防御に全力を注いでいたためか、死んではいなかったようだ。

「アイツらだけならまとめて排除出来たのに！」

奴らの側には怪我をして動けない人が何人もいる。その人たちを無視して弾幕やスペルカード・この世界の魔法を使うのは簡単だが、そんな事をしては全くもって助けにきた意味がない。

(能力使うか……)

考えた結果、ありとあらゆる物を破壊する程度の能力を活用する事を思い付く。もちろんアイツら本人に使えば簡単なんだけど、周囲に臓物を撒き散らしながら爆散すると言う、ある意味今のこの状況より遥かに酷い事になるのは確実なので、慎重にアイツらの持っている武器だけをまとめて破壊する。

そうして出来た隙を突いて、人だかりを飛び越えてアイツらの輪の中心に着地し、怪我人を守るようにして対峙する。

「何だ貴様ぐあ！」

「邪魔をお！」

右手に『禁忌レーヴァテイン』を発動させ、向かってきた奴らを殺さない程度に斬りつける。左手には畳んだ日傘を持ち、相手の攻撃を受け止める。

そんな感じで戦うこと15分程、ヤバイ集団を全員怪我人たちと同様に半殺しにして制圧する事に成功した。

思わず日傘を武器に使ってしまったので、耐久性が高いとは言え流石にポロポロになっているかと思いきや、多少の傷はあるものの、日傘としての機能は失われていないようだ。もはやこれは武器なのではないかと思った。

「フランちゃん、怪我した人を連れてきて！ わたしが治すから！」

「分かった！」

戦いが終わった後すぐに、ミアから怪我した人を連れてきてと言われたので1人ずつ慎重に連れていき、リンチ事件の犯人以外に回復魔法をかけて治療してもらった。

こうして今回は死者を出すことなく乗り切ることが出来たが、いかんせんリンチ

事件があつてから私たちに話が伝わるのが遅すぎたようで、精神にトラウマを植え付けられた人が居た。

「ミア、どうにかならない？」

「うーん……回復魔法は傷は癒せても、精神までは癒せないからね。こればかりはどうしようもないんだよ……」

ミアは悔しそうにその人を見ていた。そうして小さく一言……

「わたしいつかきつと、精神を癒せる回復魔法を開発して見せるよ！ フランちゃん」

「うん、頑張つてね！」

そうして死なない程度に半殺しにしたヤバい集団を縛り上げ、警備隊長の元へと連れていった。その時に隊長がドン引きしていたが、ここまで連れてくるのに同じ方法を使つていて、隊長と同じ反応を何度も見た為特に気にすることもなく、再び会場警備の仕事に向かう。

その後は特に何か起こることもなく、警備の仕事を終えて隊長の所に戻った。すると、隊長とその部下の人たちが物凄い疲れている顔をしていたので気になって聞

いてみた。

「どうしたの隊長さん？」

「ああ、実はな……」

どうやら私たちがヤバイ集団を縛り上げて連れてきてから少し経った後、自分から罪を告白しに来た人たちが急激に増えたらしい。ご丁寧に、証拠まで添えて。

「皆こう言っていたぞ。『紅魔の少女に半殺しにされる前に来ました』とな」

「……まあ、手間が省けて良かったんじゃない？」

こうして大会1日目の警備の仕事は、かなり濃い物となった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価をして下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、魔法大会決勝戦を観戦する(その1)

他の小説が落ち着いてきた為、投稿頻度を上げます。後、決勝戦の話はもう一話あります。

大会2日目、宿泊場所で昼食を取った私とミアは、昨日と同じく警備の仕事をしていた。

「昨日と違って本当平和だねフランちゃん」

「うん。たまに見かけるヤバイ奴らも私と目が合うと逃げてくし、隊長の所に来る被害報告も昨日に比べてほぼ半分以下らしいからね。輩を半殺しにしたのが効いたのかな？」

昨日はそれなりに絡まれたり目の前でトラブルが起きたりもしたが、今日は殆んど絡まれることも、トラブルもなかった。

たまに来る輩は居たが、それらは謎の仮面集団に首根っこ掴まれて連行されて

いった。

「それにあの仮面たちって一体誰なんだろう？ まあ、面倒な輩を連れてってくれるからいい人たちなんだろうけど」

「きつとこの町の自警団的な組織なんじゃないのかな？」

「なるほど」

そうして何事もなく無事に2日目の仕事を終えることが出来た。帰り際に隊長に試合結果を聞いてみた所、オウラン学園は相手を全く寄せ付けずに圧勝したらしい。流石強豪だと思った。

そして大会最終日、私とミアは強豪同士のオウラン学園とルーフィオレ学園の決勝戦を遅れたものの、観戦していた。

「相手が残り2人、こっちも残り2人。やはり強豪だけあって強いねフランちゃん」

「うん。だけど、ジェノは少なくともドーピングした相手に相討ちするくらいには強いし、それに勝った事があるシルフィオも居るからきつと大丈夫だとは思うけどね」

不正した相手ではなく、強いのであれば本当の実力で強い相手であって欲しいと思いつつ、試合が始まるのを待つ。

『えっと……ただ今より、オウラン学園のジェノさんとルーフィオレ学園のアルゼさんの試合を始めます！』

そうして司会者が試合開始の合図を出し、2人が身構える。まず先手を打ってきたのはアルゼの方だ。地面から噴水の様に水を噴き出させて攻撃する魔法『ウォータースプラッシュャー』を発動させ、ジェノに攻撃の隙を与えさせない。

「あの時の戦闘を見させて貰った！お前は火属性魔法が得意らしいが、俺は水属性魔法が得意だ。これでそれは封じた。後は、弾幕と言う少し厄介なオリジナル魔法だな。幸い威力はそこまで高くないみたいだからなんとかなるか」

「はあ……これだから1回戦目で使いたくなくなっただけだな……」

そんな事を言いながら噴き出してくる水を、軽やかなステップで避け続けるジェ

ノ。時折隙を見つけては火属性魔法をアルゼに対して放つも、水属性魔法で打ち消されてしまっていた。

それにより弾幕による圧倒的手数攻撃による戦闘に切り替え、少しでもダメージを稼ぐ方針に転換した。

「くっ……今回のオウラン学園の副将、かなり手強いみたいだ。攻撃がことごとく当たらん！」

「俺のお師匠様のお陰ですよ。彼女のスパルタ式訓練に比べればはっきり言ってそのくらいの弾幕であれば回避は出来ます」

「お師匠様？ それってフランドール・スカーレットの事か？」

「ええ。あそこに居る金髪少女が俺のお師匠様です！」

ジェノは私が見に来ている事に気づいたらしく、こちらを向いて手を振ってきたのでこっちも振り返した。てか、相手はどうやら私がジェノたちに魔法を教えた奴だと知っていたらしい。もしかしたらあの森の中での訓練風景を見られていたのかも知れない。

「……これは出し惜しみしている場合ではないな」

そう言うと相手の魔力が途端に膨れ上がり、身体能力も上昇した。

「これが俺のフルパワーだ！行くぞジェノおー!!」

「っ！速い！」

ジェノも対抗して魔力を開放し、凄絶な中級魔法と弾幕の撃ち合いが始まる。

単体の威力では負けている弾幕を沢山集中させて相殺したり、こっそり何個か背後に忍ばせておいて不意打ちしたり等、相手が強豪であっても引けを取っていないかった。

「喰らえ……『炎槍 イグニスランス』！」

「スペルカードか！ならばこちらは……『マルチウオーター』！」

そうして燃え盛る炎の槍と、複数の水の弾がぶつかり合って辺り一面に蒸気を撒き散らした。

「くっ……これで互角とは、なんて威力のあぁあー!!」

「よし！当たった！」

水蒸気で相手の目が眩んだ一瞬の隙を突き、炎の槍を相手の背後から激突させた。それを確認したジェノはすぐさま魔力を弾幕に注ぎ、一発の威力をかなり上げ

た物を大量に浴びせかけた。その結果、自分の魔力限界ギリギリでなんとか相手を気絶させる事に成功した。

『そこまで！ この戦いの勝者はオウラン学園のジェノさんです！』

「よっしゃあー！ フランさん、俺やりましたよ！」

こうしてこの試合を勝利で飾ることが出来たジェノ。

15分の水分補給等の小休憩を挟んで、闘技場へと進む。

「っ！ 何だこのプレッシャーは!？」

「ジェノくんだけ？ 流石フランに教えて貰っただけのことはあるね！ ボク、今ワクワクしてるんだ！」

そうしてジェノが見たのは、今までの敵とは桁が違うと言っても過言ではないプレッシャーを放つ、紅い髪の少女だった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、魔法大会決勝戦を観戦する（その2）

「何か強そうな女の子が出てきたけど、大丈夫かな……」

「……勝ってくれば嬉しいけどね」

ジェノが次に戦う相手である、ルーフィオレ学園の大将『サラ』から発せられるプレッシャーに私は驚いた。あのドーピングした相手ですらそこまで強烈ではなかったからだ。

アルゼとの戦いで消費した魔力はまだ回復しきっていないように感じた為、正直私は勝つのは厳しいと思った。

だからと言ってジェノの方を応援しないつもりなど全くないし、むしろ大逆転してくれる事を望んでいる。

（ジェノ、頑張れ！）

心の中でそう思っていると、司会者が大きく声を張り上げる。

『それでは、戦闘を開始してください!!』

その合図と同時に2人は構えた。

「さあ、ジェノくん！ お先にどうぞ」

「随分余裕ですね。では、お言葉に甘えて……『マルチフレア』」

複数の火の弾に弾幕も加え、本格的な弾幕ごっこのような密度でサラに襲いかかるが……

「そうそう！ 圧倒的な魔法戦闘、これがしたかったんだ！」

「……マジかよ」

彼女は、面白い物を見つけた小さい子供の様にはしゃぎながら、その弾幕の嵐を全て避けきった。私から見れば、弾幕初見の人が避けられるレベルではなかった。仮に何回か見た事があってもかなり難しい。それを彼女は余裕かどうかは分からないものの、全て避けきってみせたのだ。

ジェノは放心状態になっていたが、私があのような立場だったらきつと同じようになっていただろう。

「凄い……」

「ジェノが万全状態ならまだ良かったけど、一戦やった後だしなあ……」

そう思いながら見ていると、ついにサラが動き出した。

「じゃあ、次はボクがいくね！ 『マルチライトニング』」

「うおっ！」

他のマルチ系の魔法と同様、複数の雷撃を放つ雷属性中級魔法を発動させた彼女。しかし、それはもはや中級魔法とは思えなかった。

「なんて威力だよこれ!? 同じ中級魔法じゃ歯が立たない、ならば……『炎槍 イグニスランス』!」

今出せる全力のイグニスランスを、雷撃を打ち消すべく放つジェノ。どうやら威力はほぼ互角の様で、激突した瞬間に互いがほぼ消滅し、たまたま軌道が逸れた炎槍がサラに被弾した。

「おおお……それがスペルカードなのか！ 凄い、凄いよそれ！」

「……」

まるで堪えていない。いや……ダメージはあるようだけど、どう見ても軽い怪我程度である。

それを見て私は思った。どう考えても万全状態ではないジェノに勝ち目は皆無である。

「万全じゃなくてもこの威力……きつと万全だったらボクも危なかつただろうね」
そう言うサラは、ジェノに向かってとある魔法を放った。

「今度は万全の時に戦おうね! 『グロウライトニング』」

「なっ……あ」

瞬間、地面から猛烈な雷を伴う柱が何本も突き出した。その内の1つに当たってしまったジェノは、そのまま倒れてしまった。

こうして、勝者はルーフィオレ学園のサラとなった。

「あ、ボクは休憩いらないよ! このまま次の人と戦わせて!」

15分間の休憩時間が与えられたものの、彼女は体力に余裕があるらしく、そのまま次の試合に行くことを要望した。

『分かりました。それでは次の試合、オウラン学園の大将シルフィオさんと、ルーフィオレ学園の大将サラさんの試合を始めます!』

そうしてすぐに、シルフィオとサラの試合が始まった。

「それじゃ、シルフィオ行くよ! 『マルチライトニング』」

「これ中級魔法ですよね……『風の舞』」

襲い来る雷撃を、風と一体化したような動きをしているシルフィオは見事に回避し、反撃に風の上級魔法『バラージカノン』を放つ。

「っ！ はあ……はあ……。流石に強豪学園の大将ともなると強いね。上級魔法をこうも易々使いこなせるなんて」

「それはどうも。しかし、これを受けても戦いに支障は無さそうですね。少し残念です」

万全状態のジェノにすら勝てるシルフィオ。その彼女が万全状態であるなら、これほど心強い事はないであろう。

「まだ戦える。けど、君のその風魔法は強い。そう何発も喰らえばいくらボクでも危ないくらいにはね」

「そうですか」

今のところ戦況はほぼ互角、機動力で優れているシルフィオが若干有利と言った所だろう。スペルカードもある為このまま行けば大丈夫だろうが、そうは都合よくいかなかった。

「雷柱出でよ……『グロウライトニング』！」

「ジェノを倒したあれですか。厄介な……」

あの時よりも、更に激しい雷を纏った柱が地面から突き出してくる。出が早い魔法なのですぐに避けないと当たってしまうが、風の舞で機動力が上がっているシルフィオには回避は容易い。しかし、その時サラが隙をついて雷属性上級魔法『ピアシングサンダー』を発動、魔方陣から放たれる青白い雷がシルフィオを襲う。

「げほっげほっ……隙を作ってしまったようですね。反省です」

「これを耐えるの!? 凄いよ! こんな相手に出会うなんてボク、本当に大会に出て来て良かったあゝ」

一瞬何であれ喰らってダメーじそれだけなのかと驚いたが、シルフィオから訓練中に聞いた、彼女は元々風属性以外に雷属性に耐性があると言う事を思い出した私は、落ち着きを取り戻した。

「これはボクも最大級の魔法——」

『風霊一体』!」

シルフィオは最大の切り札を繰り出した。この後の1分で決着をつけるつもりなのだろう。

サラはシルフィオの異変に気付き、すぐさま雷魔法攻撃を仕掛けてくるが……

「弾かれた!? ならば次は……ああー！」

さっき使ったばかりの魔法である『バラージカノン』が、猛スピードで飛んできてサラに豪快にぶつかる。吹き飛んで壁に叩きつけられた彼女に対してシルフィオは更に追撃を下す。

「もうすぐ限界が近い……だからこれで決着です！ 『風霊インテグレイズシルフ』
風の精霊を召喚し、風を纏う弾幕を嵐のような激しきでサラに打ち付ける。更に自身も弾幕をこれでもかと浴びせかける。そうして風霊一体の効果が切れたその時、同時にサラが膝をついて宣言した。

「あーあ、負けちゃった。ボクもう動けないや……でも楽しかった！ ありがとう
シルフィオ、お陰で越えるべき目標が出来たよ」

「……それは嬉しい事です」

そう言うシルフィオも、立って歩くのが限界位には魔力がない。結果的には辛勝と言った所だが、勝ちも勝ちである。

こうしてこの試合の勝者はシルフィオに決まり、その時オウラン学園の優勝が確

定
し
た

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、この世界で初めて同族に出会う

「よし！ ジェノたち優勝、やったあゝ！」

「良かったねフランちゃん！」

大会も無事にオウラン学園の優勝で終わり、それに伴って警備の仕事も終わったので報酬を受け取る為、ギルドに私たちは居た。結果を残せた安心感と、純粋にジェノたちが優勝して嬉しい気持ちで混ざり合い、思わずミアだけでなく近場のおじさんにもハイタッチをしてしまい、戸惑わせてしまった。

「嬢ちゃんら、随分オウラン学園の方を持つじゃないか。知り合いでも居るのか？」

「うん、2人居るよ！ 試合も見に行ったし！」

「フランちゃんの教えたオリジナル魔法が凄く役に立ったみたいだったし」

「へえゝ。そりゃあ嬉しいわな」

そんな会話を冒険者の人たちと交わしながら私は、せっかくルービエの町に来たのだから観光でもしようかと思った。なので彼らと別れて外に出ると、そこには

ジェノにシルフィオ、後ろには30人近くのオウラン学園の生徒たちが居た。

「良かった……まだ居ましたね」

「え!? ビックリしたあゝ。シルフィオにジェノ、どうしたの? 沢山居るけど……」
「優勝出来たお礼を皆でしに来ました。今回の決勝戦の相手のサラって子、弾幕とスペルカードなければ多分厳しい物になっていたのでしようし」

「どうやら、わざわざ観戦しに来たクラス全員で私にお礼を言いに来てくれたらしい。律儀な人たちだ。」

なので私も最大級の賛辞を送った。

「シルフィオにジェノ、そして大会に出た人たちご苦労様! そしてオウラン学園の皆優勝おめでとう!」

「「ありがとうございます!」」

そうしてジェノたち総勢31名の生徒たちは去っていった。

「あんなに喜んでもらえて良かったね。それに、これが実績になって他のこう言う類いの依頼を受ける時に有利になるかもねフランちゃん!」

「確かに。ただ、慣れないことやったせいかなんか疲れたよ。今回はたまたま上手

く行ったけど、次もこう上手く行くか分からないからしょっちゅうあると困るなあ」

「まあ、確かにね」

彼らが去っていった後、いつものような感じでルービエの町を歩きながら会話を
する。隣国が近いせいかな、この国の人たちと違う格好をした色々な種族の人たちを
よく見かける。

カーテンド王国を冒険しつくしたら次は『ノストライト皇国』かなあ。そんな計
画を立てていると、細い路地裏の方から何やら人の言い争う声が聞こえてくる。そ
れだけならまだ良かったけど、なんか殴る音や燃えているような音まで聞こえて来
た。

「ねえフランちゃん、これ不味いんじゃないの?」

「うん。火事なんかになったら大変だし、誰かが殴られてるみたいな音もする。行
こう、ミア!」

取り敢えず放っておいたら不味そうだったので路地裏へと向かう。その時、私の
側を歩いていた人の数人が苦虫を噛み潰したような顔をしてこちらを見ていたが、

そんな事は気にしない。

そうして音のする方向に向かって行って見たものは、複数の人間に殴られてる女の子とそれを守って必死に立ち向かっている男の人が居た。女の子の方は身体から煙が出ていて、男の人は全身傷だらけで、どう考えても明らかに形勢は不利である。

(あの女の子……私と同じだ！)

しかもあの女の子、私と同じ吸血鬼であると直感した。それに身体から燃えてもいないのに煙が出ているが、まるで日光を浴びすぎた時の私と同じ煙の出方をしている事もあって、それは確信に変わる。

「オマエたち、寄ってたかって弱いもの虐めか？ いや、状況から見て殺しか。全く、やる事がまるで人間じゃないな。醜い」

いきなり弾幕を撒き散らす方が楽ではあったが、建物が密集しているこんな場所でそんな事したら大変なことになる。なので、まずは殺気と威圧で相手の動きを止める作戦に出る。かなりの強者や、恐怖に対する耐性がそれほどでなければこれで済むけど……

「っ!? クソツタレ! 紅魔の少女に蒼銀の天使の2人組に見つかるとはな」

「か……身体が動かねえ」

「ええい! こうなりやヤケクソだ!」

大半はこれで制圧が済んだものの、一部が私を殺そうと向かってきた。

「そっちから来てくれるのなら都合が良い……ほらっ!」

「ぐがあ……」

「うぐっ!」

「んああ……」

幸いにも向かってきた敵は大したことはなく、一発腹に拳を叩き込んであげるだけで気絶してくれたので助かった。

そうして捕まえられる人だけ気絶させて縛り上げた。全員捕まえられなかったのが心残りではあるが、仕方ないだろう。

「君、大丈夫……じゃないよね。ミア、行ける?」

「魔浄の状態異常になってるけど大丈夫、行けるよ……『メディカルナス』」

ミアがそう言うと、苦しんでいた女の子の顔が緩んだ。状態異常の解除に成功し

たようだ。

「……あ」

「ヴァーミラ!? 良かった……」

「男の方、貴方もひどい怪我ですね……今すぐ回復を」

「本当に感謝しきれません。有難うございます!!」

そうして男の人の方にもエクスヒールを掛け、全身の傷を癒すことに成功した。女の子の方は流石吸血鬼だけあって、再生能力のお陰で傷も塞ぎかかっていた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、厄介事に首を突っ込む

「一体何があったのでしょうか？ あの様子から見て、ただ事ではなさそうでした
が」

「私たちルービエに来てからまだ日が浅い冒険者だし、ここの事情知らないからも
し良ければ教えてくれないかな？」

「……もし俺に何かあったら、ヴァーミラの事を頼まれてくれるのであれば教えま
す」

なんだか厄介事に首を突っ込んだような気がしたけど乗り掛かった船だし、それ
に同じ吸血鬼として見捨ててさようならと言う気にはならない。

ミアにどうしようかと聞いてみた所、『この国を回る上で重要な情報が手に入り
そうだし、わたしもフランちゃんと同じで見捨ててさようならは出来ない』と言っ
てきたので、男の人の問いに対して肯定の意を表する。

「ありがとうございます！ では早速説明を……」

そうして男の人が話してくれたのは、この国が何故吸血鬼に対してのみ必要以上

に嫌悪感を示しているのかについてだった。

要約すると、ルービエの町から割りと近い場所にある『常闇の森』の最深部の館に住む吸血鬼『ギラムス伯爵』とその一家が散々やらかしてくれたせいだとの事らしい。

「討伐隊も行きましたが、館に到着する前に出てくる魔物がかなり強いらしくて消耗、館に到達してもギラムス伯爵一家のエグい歓迎が……」

「で、討伐が出来ずに今は対吸血鬼用に作られた『ルーバヌ砦』って場所を挟んでにらみ合いと」

「はい。掲示板にそう張り出されていました」

なるほど。道理でこの町でよく聖職者を見かける訳だ。しかし、ギラムス伯爵って言う自分たち一家以外は例え同族でも糞だと言う思想を持つ奴が散々しでかしてくれたせいで、何もしてない吸血鬼まで一緒にくたに見られ、理不尽な暴力に晒されるのは嫌だな。

それに自分だって吸血鬼だし、何かの拍子に種族がバレたらどうなるか分からないよなあ。そんな事を考えていると、ミアが話しかけてくる。

「フランちゃん、この縛って捕まえた人たちはどうするの？」

「取り敢えず、この町の警備隊に引き渡すかな。あ、でもそれまでにちょっとした仕返しを……」

私は奴らを叩き起こした後、警備隊に引き渡すまで道中でいろんな人に今までにヴァーミラにした行いを無理矢理謝罪させまくった。

ついでに他にやらかした事があれば謝れと言って威圧したら本当にあったらしく、悪事がどんどん出るわでるわで驚いた。

この様子に顔をひきつらせる人もいれば、怒りを燃やしている人や、親の敵とばかりに殴りかかってくる人も居たが、こんな奴の為に犯罪者にさせたくないで流石にそれは止めた。

「これは……社会的にこいつ死にましたね」

「まあ、これくらいが妥当でしょ。正直もつと物理的にお仕置きをしたかったけど、色んな意味で不味いから止めておいたんだよね」

「なるほど」

そうして警備隊の元まで行って縛り上げた人たちを引き渡した後、男の人とヴァー

ミラが暮らしていた家へと向かう事15分、ようやくそこに到着した。

「何から何までありますがどうぞいます！」

「まさか家の中にまでこの手の者が居たとは……」

「それにしても、ヴァーミラって強かったんだね」

「魔浄の状態異常の効果の1つに、かかった者の力を半減させるって奴があるからね。あの時抵抗できなかったのはそれに加えて体力が限界だったんだと思う」

ヴァーミラに状態異常をかけ弱らせ、襲いかかって居た人の仲間であろう輩が家の中で待ち伏せていた。そこまでして殺りに来ている執念に呆れていると、回復した彼女が対吸血鬼装備と思われる物で武装している輩をあっという間にねじ伏せていた。

ここまでの實力を持っておきながらただの人間に追い詰められていたとは、魔浄の状態異常は恐ろしい。私もかけられてしまえば多分、ヴァーミラと同じ弱り方をするのだろう。気を付けなければ。

そんな事を考えていると、この騒ぎを聞きつけたのか兵士が数人家の中に入ってきた。

「乱闘騒ぎがあったと言うのはこのようだ」

「嬢ちゃんたち、大丈夫……紅魔の少女が居るなら安心だ」

「全く！いくら吸血鬼が憎いとは言え、何もしていない奴まで殺そうとすると……おい、この伸びている奴が犯人らしいから連れてくぞ」

「了解です。それにしても、こういう類いの事件って本当に無くなりませんよね」
彼らは殴られて伸びている奴を無理矢理叩き起こし、連行していった。

「ありがと……」

「気にしないでよヴァーミラ。同族として当然の事をしたまでだし」

「同族……？もしかして貴女も私と同じ吸血鬼なの？」

「そう。私はフランドール・スカーレット、吸血鬼だよ！正体隠して冒険者やってるんだ」

「そしてわたしがミア。彼女と一緒に冒険者やってる……あ、その男の人、フランチちゃんの正体は秘密でよろしくお願いします」

「もちろん言いませんよ！神に誓って約束します。あ、ちなみに俺の名前はレオネです。服飾屋をやっています」

そうして無事に助ける事が出来た私とミアは、ヴァーミラとレオネの家で一息つくことにした。長い間、色々な話で盛り上がっていると突然この家に兵士がまた駆け込んできた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、ルーバヌ砦に行く

「良かった、あの2人まだ居た！」

駆け込んできた兵士の第一声はそれであった。私たちを指差しながら嬉しそうにしていたのを見て、これはまた厄介事が舞い込んで来そうな気がした。

「えっと……私たちに何かご用でしょうか？」

「はい！ 実は緊急事態が発生しまして、ある一定以上の実力を持つ冒険者に声を掛ける事になったのです」

「そうなの？」

行く先々で緊急事態だの何だのと、そう言うトラブルに巻き込まれている自分の運の無さを心の中で嘆きつつ、兵士の話を聞いた。何でも、常闇の森からルーバヌ砦に向けて魔物の大群が襲来してきているらしい。送迎馬車等の乗り物は他にも依頼した冒険者たちによって全部使われてしまい、歩きになってしまふとの事。

「予想通り、討伐系の依頼だったねフランちゃん」

「うん。これも私が冒険者をやったときから決まっていた運命なのかも知れない

ね。もちろん、ギルドからの依頼であれば受けるよ！兵士さん」

私がそう言うのと、安心しきった顔をしながら報告をするために外へ行こうとしたが、肝心な物を貰い忘れたので呼び止める。

「あ、そうだ兵士さん。そこまでの地図か何か持ってる？」

「ちよつと待ってて下さい……あ、適当にポケットに突っ込んだぐちゃぐちゃな地図ならありますが、こんなので大丈夫ですか？」

「レイフィエル隊長！ 仮にも数々の功績を上げてる彼女たちに失礼では……」

「私は別に、それでも構わないよ！」

そう言ってしわくちゃの地図と、門の通行証をレイフィエルと呼ばれた兵士から受け取り、ギルドを後にした。

「さてと、ルーバヌ砦へ行きますか……飛んで行ければ楽なんだけどなあ。ただ、そんな事すれば色々な要素も相まって吸血鬼だって事がバレかねないし……」

まあ、外を出歩く時は必ず日傘差して出歩いてるから勘のいい人なら気づいてもらうだけで、だからと言って堂々と自分から正体をバラすような真似はしない。

「フランちゃん、その問題が解決すれば2人で飛んでいけるの？」

「うん、そうだけど……何か方法があるの？」

「えっとね、周りの風景に同化して見えなくなる魔法があるよ。クールタイムが長い上に、効果時間が短いから途中から歩く羽目になりそうだけど」

「そんな魔法が……持つてる魔導書には載ってなかったけど、これもミアオリジナルの？」

「いや、師匠直伝の隠蔽魔法だよ」

会話の後、魔法『ライトカモフラージュ』を使用し、私の姿も一緒に同化させて見えなくした後、ミアを抱えて飛び立つ。

いくら超回復体質を持っていたとしても種族的には人間である。飛行中に落としまおうものなら当然待っているのは死なので、細心の注意を払う。

時折ワイバーンを見かけるが、ミアの魔法が効いているのかこちらに気づく様子は見られなかった。

そうして半分と少し進んだ所で……

「フランちゃん！ 後少しで効果が切れるから降りて！」

「分かった。降りるよ」

魔法の効果が切れかかっているとミアに言われたので、私は林の開けた場所にゆっくり降り立つ。少し経ってから切れたので本当にギリギリであったようだ。

「危なかったあゝ。この林は冒険者たちも良く通る場所らしいから、誰もいなかったのは運が良かった！」

「そうだね、フランちゃん」

周りには魔物の気配は多少は感じるものの、グランドドラゴンクラスの危険な存在は無いので歩きでも問題なく行けそうだが、万が一を考えて警戒は怠らないようにしよう。

そうして、たまに襲ってくる狼のような魔物を蹴散らしながら進み、1時間歩いて林を抜けると遠目に砦らしき建物が見えた。地図を見ると、あそこがルーバヌ砦で合っているようだ。門の前に私たち以外にも沢山の冒険者たちが集まっているのを見た所、今回の緊急依頼はかなり不味い状況らしい。

更に歩き、門の前に到着したら彼らに習って兵士に通行証を見せる。

「どうも、こんにちは兵士さん！ 声を掛けられて来たけど、どこに行けば良いの？」

「この門を通ったら案内役の兵士の誘導があるからそれについていけば良いぞ。それにしても、ドラゴン2頭同時に相手して打ち勝ったフランに、王国一の回復魔導師ミア。これ程心強い援軍は居ないな！」

そんな会話を交わしながら門を通過して案内役の兵士の誘導の元、冒険者たちが集まる広い場所へと向かった。

「しかし、あのギラムス伯爵が本気をねえ……」

「吸血鬼の癖に日光が効かず、流水にも比較的強いって出鱈目すぎだろ。ただでさえ厄介な種族だと言うのに……あ、お前見てみるよあれ！」

「ん？ 確か、紅魔の少女と蒼銀の天使って呼ばれてる2人組……あ、これってかなり凄い戦力が参加してくれたって事だよな」

冒険者たちの話を聞くに、私たちはどうやら界限では結構な有名人になっているようだ。

「紅魔の少女フランが攻撃、蒼銀の天使ミアが回復と言う感じで役割分担して依頼をこなしてるらしい。後、他の奴が聞いた話なんだが、ミアは前に他の冒険団に所属しようとしたが、攻撃出来ないからって理由で突っぱねられたらしいぞ。超回復

体質があるにも関わらずな」

「ぶっ！ そんな脳筋冒険団居るのかよ。どう考えてもミアは有能じゃねえか」
彼らから人知れず高い評価をされたミアは、顔を赤くして照れていた。

そんな感じの雰囲気の中待っていると……

「皆様、魔物の大群が近辺まで襲来してきました！ 出撃をお願いします！」
そう知らせがあったので、冒険者の人たちが次々に出撃していった。

「フランちゃん、行こう！」

「うん！」

そうして私たちも防衛戦に参加する為、一緒に出撃していった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、防衛戦に参加する

「うわあ……これは凄い数だね」

「1000体は居ると思うよフランちゃん」

魔物の大群が攻めてきていると言う方向の門の上から見てみたら予想を遥かに超える規模、場を埋め尽くさん限りの魔物がそこには居た。ゴブリンやオーク、それらの上位種が見た限りでは1番数が多そうだ。

更に奥にはまだ私の知らない魔物がかなり沢山いて、そのどれもかなり強そうな感じが伝わってきた。

「嬢ちゃんら、よろしく頼むよ」

「はーい、頑張ります！ミア、捕まって！」

「え？」

いちいち下に降りてから門を通っていくのは時間の無駄であると思ったので、上から飛び降りる。ただ、普通に飛び降りて平気だと怪しさ満点なので、持っていた魔導書に書いてあった風属性魔法を唱えて、衝撃を緩和しているかのように見せる。

「ゲホツゴホツ……ごめんミア。唱える魔法間違えてた」

「まあ、無事に着地できたから良いんじゃない？」

「それもそうだね」

そして門から出た冒険者たちと共に向かってくる魔物を迎え撃った。

先に襲いかかって来たのはゴブリンやオークと言った弱めな魔物だった。しかし、数が桁違いに多い為油断は出来ない。

「手加減は禁物だね……『禁忌レーヴァテイン』！」

グネグネした棒に燃え盛る炎を纏わせ、私の周囲を囲むようにしている魔物たちを円形に尻ぎ払い、真つ二つにした。それと同時に弾幕が拡散、着弾した弱い敵は燃え上がって灰になる。

「フランちゃん、冒険者の人にも当たってるからもう少し手加減してくれたら嬉しいな……」

「嘘!? ご、ごめんなさい！」

「ハハハ、気にすんなフラン嬢！ミア嬢の回復魔法で大したことないからな。それにしてもとんでもない威力の炎剣だ。凄いぞ！」

取り敢えず、ミアのお陰で冒険者に大したダメージが残らずにすんで助かった。やはり彼女と一緒に冒険していて良かったと改めて思う。

その後、面倒ではあるが1体ずつレーヴァテインで斬って燃やしつつ、囲まれている冒険者をスペルカードで援護したりしながら立ち回る。

ただ、これだけ魔物を殺しているにも関わらず一向に数が減っている気配がない。むしろ増えている気がするので、側に居た冒険者に私の考えた事を伝える為に戦いながら声をかけた。

「あの！ 今から初披露の広範囲殲滅魔法を唱えるので、声をかけて退避するように皆に伝えていただけませんか？」

「よし分かった！ 時間が掛かりそうだからちょっと耐えててくれよ」

私が声をかけた冒険者は危険を省みず了承してくれた。もちろん、ミアの自動回復魔法をかけるのを忘れない。

「さて、それまでこの場で耐えるか……っ！」

そんな事をしていたら後ろから何かに斬られた感じがした。振り向くと、鋭い黒爪を持ったかなり大きな狼が私を喰らおうと襲いかかって来たのが見えた。

「油断した……そらっ！」

バックステップで噛み付き攻撃を避け、炎剣で斬りつけるが黒い爪で防御される。どうやらかなり強力な魔物でなおかつ火属性にも強いらしい。

「ミア！ コイツ強いから少し距離を取ってて！」

「分かった。フランちゃん、この魔物Bランクの『エンロウ』って奴だから気をつけて！」

「エンロウね。分かった、ありがとう！」

すると、エンロウと呼ばれた魔物がミアに対して襲いかかって行ったのを見たので、私は本気の手速で前に回り込んで炎剣で黒爪を防いで弾き飛ばす。

「『禁忌カゴメカゴメ』！」

弾き飛んだ所を緑色の弾幕で包围、大玉の弾幕を発射したのをトリガーにして緑色の弾幕もエンロウに殺到し、土煙を上げる。しかし、まだ起き上がるしぶとさを見せたので通常弾幕の嵐を止めに叩き込み、おまけで大玉弾幕を数発放った。その結果、何とか討伐に成功した。

その後はミアの周りに居る魔物を掃討しながら耐えていると……

「おーい！ 周囲から避難させたぞ。やってくれえ！」

「どうもありがとう！」

ちょうど良いタイミングで避難が完了したらしく、冒険者の人に声をかけられたので、そこで私は準備を始めた。魔導書を詠みながらの魔法の為かなり隙が出来るが、練習する機会が無かったので仕方ない。と言うか、色々な理由から不可能と言っても過言ではない。

「えっと……天より我が敵を滅す裁きの星よ来たりて、その威光を見せよ……

『焰星落とし』！」

私がそう唱えてから30秒後、3つの燃え盛る隕石が魔物の大群の居る方に高速で落ちていった。それは地面に落ちると大爆発を起こし、約半分の魔物を消し飛ばす事に成功した。

「っ！ はあ……はあ……凄いや魔法の消費量だった。ぶっつけ本番はやっぱりキツいね」

今の魔法は錬度不足を無理矢理魔力で補ったが為、本来の威力を発揮出来なかった上に、魔力の消費量もかなり多くなってしまった。それでもかなりの破壊力だっ

たのを見ると、魔導書に書いてあった通り、土と火の複合最上級魔法だと言うのが分かる。

「さて、まだ沢山居るから行かな——」

そうして他の魔物を討伐しようとした瞬間、背後からかなり強いプレッシャーを感じたので振り向くと、剣を持ちながら超高速で突進してくる同族が目の前に居た。避けられずにまともに刺され、ルーバヌ砦の壁に叩きつけられてしまった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、ギラムス伯爵一家と戦う

「かはっ……!!」

「何故、我と同族である貴様が人間の味方などする!」

「……さあ? オマエに言った所で理解してもらえないだろうし!」

この際吸血鬼バレを考えてたら死ぬかもしれないので、身体を蝙蝠に変化させて刺された剣から逃れた後、反撃の弾幕を放つも避けられてしまう。

「やはり、蝙蝠変化術も持っていたと言う訳か」

「まあね。私をそこら辺に転がってる雑魚魔物と一緒にしたら痛い目見るかもよ?」

「そんなもの、見てれば解るわ! 『エクスフレア』」

ギラムスは四方に展開した魔方陣から青白い炎を放射して、私を灰にしようと仕掛けてきた。明らかにまともに受ければ不味そうな感じの炎だったので羽を展開、上手いこと空を飛んで避けた。

それを見た彼も空を飛んで迫ってきたので、高速の空中戦が始まった。

『禁忌レーヴァテイン』！』

「ぐおっ！ 下等吸血鬼のくせしてやるではないか。『マルチフレア』『マルチダークネス』」

「これこれ！ やっぱり久しぶりの空中戦、楽しいなあ！」

流石吸血鬼だけあって、中級魔法でも威力や手数が人間のそれよりも強力だった。それでも幻想郷では色んな相手とギリギリの弾幕ごっこを、数えきれないほどしてきた私にとっては油断さえしなれば、回避するのは容易であるレベルであった。そうして、火と闇の弾の嵐を掻い潜って反撃のスペルカードを使い、ギラムスに被弾させることに成功した。

「貴様、魔物共を葬っている時は本気ではなかったと言うのか……？」

「まあ、完全に本気ではなかったかな。冒険者ごと焼きかねなかったからさ」

「道理で貴様から感じる力と行動に違和感があった訳か。まさか我が、これ程苦戦する同族に出会おうとは思ひもしなかった」

案の定、私と同様に高い再生能力を持っているギラムス。消し飛んだ腕がすぐに再生し始めていたのを見ると、それは明らかだった。

「一對一に拘っていると面倒そうだな……お前たち！」

彼が誰かにそう呼び掛けると、待機していたらしい同族の3人が私の前に現れた。

「ギラムス父様が俺たちを呼び出すと言う事は、今回の相手は……」

「ああ。我らが出会った同族の中でもかなり厄介な『狂気』を秘めている奴だ。おまけに飛びつきり強い。油断したら死ぬぞ」

「りょーかい！ 行きましょー」

その掛け声と共に、4人の吸血鬼が私に襲い掛かってきた。全員日光に耐性があるようで、照らされても全く意に介していない為、あまり長引くところらが焼かれて灰になってしまう危険があった。

「くっ！ 4対1とは、流石に交わしきれない……！」

強力な力を持つと言われている吸血鬼の彼らが4人がかりで襲い掛かってくるこの状況、私は流石に劣勢になってきている。

「1人じゃ無理……『禁忌フォーオブアカインド』！」

「なっ、アイツが増えたぞ!？」

「どーすんのさ！ これで数の有利が……」

「分身の1つ1つに本体と同等の魔力を感じる……つまり、あれば分身であって分身ではない。気を付けろ、お前たち！」

「何で分身が本体と同等なんだよ!？」

堪らずスペルカードを発動、私の分身を3人増やし、人数の不利を無理やり打ち消した。ギラムス以外の相手はこれにより動揺してくれているようだったので、ひとまず成功と言えるだろう。

「さて、行くから覚悟しておいて！ 『禁弾 スターボウブレイク』！」

分身に他の吸血鬼の相手を任せておいて、私はギラムスに向かってスペルカードを発動させ、本気で殺しにかかる。人々に迷惑をかけまくってくれたせいで、何もしていない無害な吸血鬼の少女が悪意の被害を被ったばかりか、私とミアの冒険の旅を間接的に妨害されているのが許し難い。

「済まない、下等吸血鬼と言った事は訂正しよう……やはり惜しいな。貴様のような強力な魔法を使える吸血鬼が人間共の味方など……」

「まだそれ言うの？ 懲りないね」

私がレーヴァテインで斬りつけると、それを黒く輝く剣で受け止めたギラムス。鏢迫り合いになったので彼を押し切ろうと力を込めると、向こうも力を込めてきた。

「おおおお!!」

「はあああ!!」

斬った物を燃やし尽そうとする炎剣の魔力と、斬った物の全てを葬り去ろうとする闇剣の魔力の衝突によって波動が発生し、近くに居た飛行できる魔物はその圧力で吹き飛ぶ。

そうして鏢迫り合いが1分近く続いた後、力で押しきって何とか打ち勝つ事に成功したが、その際に起こった爆発に巻き込まれ、私も吹き飛んで地面に叩きつけられる。

その時に分身とギラムスの家族の様子を見てみると、分身たちの方は若干優勢に戦いを進められているようだった。

「決着つかないなら……『禁忌そして誰もいなくなるのか?』」

私の切り札である90秒間絶対無敵の耐久スペルを、この状況を打破してギラムスを倒す為に使おう。

「消えた!? どこまでも訳の解らん魔法を……」

「90秒間頑張ってねギラムス!」

四方八方からランダムに弾幕を彼に向けて放つ。流石にこれだけで倒せるほど甘くはなかったけど、突然現れる攻撃に多少の戸惑いはあったようで、少し回避に余裕がないように見えた。

「よし、次は……来たれ、敵を焼き尽くす炎獄の怒りを『アグヘルフレア』」

攻撃されないこのチャンスに、魔導書を見ながらの火属性攻撃魔法詠唱を行う。まるで怒りをそのまま具現化したような強烈な火柱がギラムスを中心に立ち、彼を焼き尽くそうとする。そのついでに浴びた魔物の中の、何体か居たあの黒い狼等以外は全て灰となって消えた。

そうして90秒経ってスペルの効果が切れた頃には、ギラムス以下他の吸血鬼にも強力な火炎ダメージを与える事に成功した。

「耐えられた……? ならば禁弾……!?!」

何故だか今すぐこの場を離れなければ危険と、急に感じた私は攻撃を中断してその場を離れた瞬間、ギラムスを何本もの強烈な光の矢が貫いた。

下の方を見してみると、強力なオーラを放つ白いローブを着た聖職者が数人、輝く白い弓を構えて立っていた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、聖教会の一派と小競り合いをする

「ちっ！ 気づかれたか……」

「レヤルさん！ ターゲットはあの焼け焦げている吸血鬼だけですよ！ あっちの少女吸血鬼の方は……あ！ よく見たらカーテンド王が——」

「うるせえイラトナ。吸血鬼なんざ少女や少年、爺や婆だろうが一緒だわボケ」
「いや、ですから話を……これだからもう！」

私が下を見ると、白いローブを着た聖職者のレヤルとイラトナと言う男の二人が言い争いをしているのが見えた。仮にもギラムスがほぼ死にかけの状態であるが、ここは戦場の真っ只中なのに呑気に言い争いなんかしてたら……

「雑魚が、俺の力の糧となって死に晒せえ!!」

「ほら言わんこっちゃない……全く！」

案の定、私の分身との戦闘から逃げてたらしい1人の吸血鬼が消費した力の補充の為に、言い争いをしている2人をターゲットにしたのが見えた。幸いギラムスよりも速度がかなり遅い為、余裕を持って分身たちを呼んでから回り込み、即興

の連携技を繰り出した。

「『『四炎剣クアトロローヴァティン』！』』』」

3人の分身と連携し、寸分の狂いも無いタイミングで斬りつけて反撃の隙を与えない。そうしてある程度したところで止めの4人同時攻撃を敢行し、灰すら残らず消滅させて再生不可能とさせた。少し経った後に分身たちも消えたので、かなり時間はギリギリだったようだ。

「……だから言ったでしょうレヤルさん？ 申し訳ないです、ありがとうございますました」

「私の事で喧嘩するのは良いけど、戦いが終わってからにした方が良いよ？ さっきみたいに襲われたら死んじゃうかもしれないし」

「面目ないです……」

その後、この戦場に居る全員の奮戦によって攻め込んできた魔物の約3分の2が消滅して一家の1人がやられて消えた。その為死にかけのGRAMUSに代わり、娘吸血鬼の指令の元彼らは常闇の森深部へと撤退していった。

「さて、この後どうなる事やら……」

これだけ派手に立ち回り、更にギラムスとの会話も皆に丸聞こえな声量でしていたからきつと、吸血鬼だと言う事は知られてしまっただろう。町に戻った所でそもそも入れてもらえるのかな？

そんな事を考えながらもまずはミアの姿を探し、見つけた所で砦へと戻った。

「いやあ、ミアさん本当にありがとうございます。貴女のお陰で犠牲者をかなり抑える事が出来ました。回復魔導師共々お礼を申し上げます」

「わたしだけじゃなく、皆が協力して動いてくれたお陰です。貴重なポーションまで使っていただけだったのも大きいですね。ただ、やはりもっと犠牲者の方を減らしていきたいかった……」

砦へと戻った瞬間、ミアは回復魔導師だと言う人に話しかけられた。会話を聞いていると、負傷者の回復に死力を尽くして大活躍していたようだけど、それでも犠牲者が出てしまった事に心を痛めていた。そんな彼女を見て私は励まそうかとも思ったが、余計に落ち込ませるだけののような気がしたのでそのまま見ているだけにしておいた。

「て言うか、紅魔の少女って吸血鬼だったの？全然知らなかったわ」

「そりゃそうだ。この国……特にルービエの吸血鬼に対するイメージを知ってりゃあな」

「ああ、なるほどね。でも今回、人を助けてくれたのも吸血鬼。これで少しはイメージが良くなるといいけど……」

「申し訳ないがそんな事よりも、俺はなにかと過激な連中が多いホーレイン聖教会がでしゃばって、彼女にちょっかいをかけないか心配で仕方がないぞ。砦にも白いローブの奴が2人居たしな」

「いや、どうせ奴らの事。もう既にかけてると思うわ」

ミアたちの会話を側で聞いていると、他の冒険者のそんな話し声が聞こえてきた。そこから、あの白いローブの聖職者2人は過激な聖教会に所属していると言う事が分かった。

女性冒険者の言う通り、戦闘中にまとめて殺されそうになったのは事実。1人が諫めてくれなければちょっと面倒な事になっていただろうと考えていると……

「貴方、何のつもり？ イラトナって人に言われたこともう忘れたの？」

「あんな腑抜けの言う事などもう忘れたわ」

首筋に何かの紋章が描かれた剣が近づけられたので、咄嗟に蝙蝠変化で距離を取って後ろを見てみた。すると、そこにいたのはあの時のレヤルと言う男だった。周りの人もどうにか諫めようとしてくれてはいるが、収まる気配がないので、これはもう1人のイラトナと言う人が来ないとダメかもしれない。

「今度こそ、死ねえ吸血鬼！」

「ちょっと!? 人が沢山居るのに……もう、仕方ないなあ！」

私が憎いあまり、砦の中で構わず襲ってくるレヤル。レーヴァテインで迎え撃つのは簡単だが、場所が場所なので仕方なく能力を使用して剣を破壊、そのままレヤルを抑え込む。

「良い？ 私は何もされてないのに自分から人殺しはしない。けどね、仲間や自分の命を取ろうとしてくる相手には……」

更に殺気を増大させ、更にレヤルに一言……

「守る為に殺すよ？」

「……」

『自分や仲間、依頼者等を守る為に反撃してその結果殺してしまったとしてもペナ

ルティは無い』このギルドの方針があるが故の行動である。幸いにも、ここには沢山人が集まっているので証拠の面でも問題はない。

「申し訳ありませんが、その馬鹿を解放していただけませんか？こちらで制裁を加えておくのでしょうか……」

そんな事をしていると、後ろから声を掛けられた。振り向いてみると、レヤルを諫めていたイラトナと言う若い男の人だった。

「……うん、分かった。て言うかちゃんと見ておいてよね」

「本当にその通りです。ほら、行きますよレヤルさん！」

そう言うといラトナは彼の腕を掴んで引きずり、時折蹴りながらこの砦を後にして行った。

ここまで読んで頂き感謝です！お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！励みになります！

フラン、吸血鬼に対する根深い不信感を感じる

「おいおい、今の何だよ凄げえな！ アイツの剣がフランドールを斬ろうとした瞬間に崩壊したぞ」

「あの子が手を握った瞬間に突然壊れたねえ」

「それにしても、流石の身のこなしと威圧感だったな。対象が俺じゃなかったのにビビったわ。吸血鬼って本気出せば皆ああなのか？」

白いローブの2人がルーバヌ砦を出ていった後、私は良くも悪くも皆に注目されていた。さっきの立ち回りや発言についてもそうだけど、特に『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』について聞いてくる人が多くて大変だ。

「なあ、あれってどんな魔法なんだ？」

「魔法じゃなくて、私固有の能力だよ！ 『物』ならあんな風に何でも壊せる感じだね」

「なるほど……ヤバイな、それ。頼むから俺たちに使わないでくれよ」

「心配しなくても使わないよ。ミアや私の命を狙おうとしなければね」

「あれ見て狙おうとする奴なんて……居るのか？」

そんな感じで色々な人たちからの質問攻めに対処しつつ、ミアの話が終わるのを待った。30分位経ち、人並みを掻き分けて私の元にやって来たので、早々に話を切り上げてルーバヌ砦を後にしようとした時、ある冒険者パーティーに声を掛けられる。

「フランドール！ 良ければオレたちの馬車に乗っていかないか？ 丁度人数分空いてるからさ」

「貴方たちは……？」

「ん、オレたちか？ 『疾風』ってパーティー名で活動しているんだが、聞いたことあるか？」

「ギルドに居る時に小耳に挟んだ程度には」

そう言えば、ギルド内の受付の人たちが話していたのを聞いたことがあった。パーティー名の通り素早さと風属性魔法に特化した戦闘を得意とし、依頼の達成速度も速い事で有名らしい。

「一応私たちって初対面だし、いきなり誘うってのもどうなのかな？ 何か企んで

たりしない？」

「うっ、それは……最近有名なフランドルとミアの2人と知り合っとけば何かオレたちに得かなあなんて思ったりしただけで、決してやましい意味はないんだ」
「ふ〜ん」

よく見たら、彼のパーティーには女の人と男の人が半々の比率で居る。魔法が仕掛けられている様子もなく、嘘をついているようにも見えない。仮に何かあればミアを連れて飛んで逃げれば問題ないレベルだ。

「随分欲に正直な人……分かった、お世話になるね！」

「お世話になります」

「ありがとうございます……おーいお前ら！ やったぞお〜！」

こうして、かなりテンションの高いリーダー率いるパーティーの人たちと共に、ルービエの町まで馬車で戻る事になった。

「フランドール、ミア！ 着いたぞ〜」

「もう？ フランちゃん、起きて。着いたってよ！」

「ふあああ……もう着いたの？ 馬車にしちゃ早くない？」

ルーバヌ砦を出発してからおよそ6時間、日がほぼ沈みかけている時間帯に私たちを乗せている馬車はルービエに到着したらしく、リーダーの『エア』に声を掛けられる。

そして馬車の外に出ると、魔物の約3分の2を消滅させてギラムス伯爵を死にかけるまで追い込み、一家の1人を討伐と言う全員で頑張った戦果がもう既に伝わっているらしく、町は喜びに包まれていた。

飛行出来る人や種族が伝えに行っただかと思っただけ聞いてみたら伝書鳩のような感じの、空を速く飛べる動物にそれを知らせる為の物を付けて、この町の町長が居る屋敷に向かわせたからだと言う。

「町の皆が喜んで良かったけど……やっぱり」

「うーん。こればかりはね、仕方がないよフランちゃん」

「まあ……フランドールの事もよく伝わってるはずだから、宿に泊まれないとか、

物買えないとかって事は無いとは思うけどな。しかし、この感情に視線を向けられているのは俺じゃないが、コイツは中々心に堪えるなあ」

こちらを見た半分位の人は何だか複雑そうな顔をしていた。中には露骨に不快な感情を示す人や罵るような発言をする人も居たのを見て、この町の吸血鬼に対する根深い不信感は、この程度では完全に消えないと言う現実を私は突き付けられた。

「取り敢えず、ギルドに報酬をもらいに行ったら後に宿に行こう？」

「ん？ ああ、それが良いだろう」

そうしてギルドに行って防衛戦の参加報酬をもらいに行った後、宿に泊まろうと言う結論に達したので、その為に行動していると突然、私の背よりも小さな子供が目の前に飛び出し、抱きついてきてこう言った。

「きゆうけつきのおねーちゃん、わるいきゆうけつきをやっつけてくれてありがとうー!!」

「え!? あ、うん。喜んでもらえて良かった……」

その時私は、抱きついてきた子供が泣いているのを見て何だか不思議な気持ちになった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、エア率いるパーティーと共に行動する

アンケートは10月21日の午前8時頃の締め切りを予定しています。場合によっては期間が伸びる可能性もあります。

「あ！フランさんにミアさん、それにエアさん方まで……貴女方の活躍は町長から聞いております。あの吸血鬼一家を完膚なきまでに叩きのめして撃退、襲撃してきた魔物の約3分の2を討伐して更に犠牲者を想定よりも遥かに少なく抑える等大戦果でしたね！」

「まあ、皆の協力があってこそその戦果だったから。私は全力でギラムスの馬鹿を止めて息子1人を消滅させるので精一杯、犠牲者を抑えるのは私以外の活躍、見たりだとミアの活躍が大きいかなあ」

あの後、私に抱きついてきた子供の母親を探して引き渡してからギルドに行った

私たちは、ギルドから固定報酬と伝えられた戦果による追加報酬を貰った。頑張った甲斐があつて、2週間〜1ヶ月位何もしなくても生活が可能になった。まあ、そんなつもりは全くないけど。

「そう言えば、私が返り討ちにした過激な聖教会のレヤルって人どうなったかなあ。常識あるもう1人のイラトナって人に蹴られながら引き摺られてったけど」

「ぶっ！ゲホッゲホッ……フランドールに喧嘩売ったのってマジかよお」

「貴方、知ってるの？」

「ああ。実はな」

ふと、私がルーバヌ砦で返り討ちにした聖教会の人があの後どうなったか気になったので、何となく独り言みたいな感じで言ってみた所、それを聞いていた男の人が吹き出していたので何か知ってると思つて聞いてみた。

すると、この男の人が聖教会の関係者だと言う事が分かった。何でもほんの30分程前、レヤルはルービエの支部に引きずり込まれながらやって来て、イラトナによって禁じられていた私への攻撃を行った事を支部長の前で吐かされたらしい。それを聞いた支部長は頭を抱えながら、私の報復とカーテンド王からの制裁に戦々

恐々しているとの事。

「支部長さん苦勞してるみたいだね……じゃあこう伝えておいて。別に支部を報復攻撃で滅ぼすつもりなんてないってさ」

「それは本当か!？」

「うん。ただ、そっちが命を狙ってくるならば別だけどね」

「それで十分だ! こうしちやおれん、支部長に伝えなければ!」

そう叫ぶと、聖教会の男の人は吹き出した飲み物で汚した机を綺麗にした後に走ってギルドを出ていった。

「さて、フランドール。オレたちも宿へ行こうか」

「何でいつの間にか一緒に行く事になってるの? まあ、良いけど」

こうして、私たちはエア率いるパーティーの人たちと一緒に宿へ行き、一緒に泊まることになった。

そして次の日の朝、私とミアはいつも通り朝食を取った後にとある目的の為に2人だけでヴァーミラの家に向かっていているはずだったのだけ……

「ねえ。もしかして私たちがルービエに居る間、ずっと一緒についてくるつもりなの？」

「ん？ そのつもりだが何か？」

「……まあ良いや。好きにして」

どう言う訳か、エアが率いる4人パーティーも付いてきていた。ずっと付いてくるつもりなのかと聞いたら、そのつもりだとはっきり私に言ってきた。断っても引き下がらずに面倒臭い事になりそうだったので好きにさせることにして、目的地へと歩みを進める。

「なあフランドール、一体何処に行くつもりなんだ？」

「ヴァーミラって子の所。私と同じ吸血鬼のね」

「ほお。吸血鬼ね……って、大丈夫なのかその子？ この町に居て」

「私が出た時はちょっと危なかったんだよね。ミアが瞬時に状態異常を見極めて回復させなければ多分……」

「魔浄の状態異常にかけて弱らせてから集団で殴りかかるって感じでした。その子を守ってた男の人も大怪我でしたけど、わたしの回復魔法で無事に治りました」

そんな会話をしながら向かっていると、ある時計塔の前で人だかりが出来ていたのを見た。何事かとエアが近くにいたお爺さんに訪ねてみた所、時計塔の上を指差したので見てみるとそこに何故か男の人が居た。

修理の職人さんが訳あって降りれなくなったのか、それともそれ以外の誰かが何らかの理由で上って降りれなくなったのかは分からないけど、このまま放っておくといずれ落っこちてきて死んでしまうだろう。

「なるほど。行けるか？ フランドール……って、言うまでもなかったな」

「任せてよ！」

当然、見捨てると言う選択肢など私の中では存在しない。仮に見捨ててしまったとしたら後悔するだけでなく、吸血鬼へのイメージがただでさえ悪い今から更に悪くなっていく可能性も無いとは言えない。

私だけが被害を受けるのであればまだ良い。さっさとこの町もしくはこの国を出ていくだけで済むからだ。しかし、ルービエには私の知る限りでは吸血鬼ヴァーミラが住んでいる。それに他にも居る可能性がある何事も悪い事をしていない同族の人たちが迷惑被るかもしれないとなると、話は別である。

なので私は、時計塔の上から落ちそうな男の人の元へ飛んで向かって助けることに決めた。

「ねえ貴方、大丈夫？ ほら、掴まって！」

「……あんた、吸血鬼なのに人間を助けてくれたって言うあの？」

「うん！ フランドール・スカーレットって言うの。知ってた？」

「勿論知っているぞ。それとあともう1つ……済まない、感謝する」

そう言って掴まってきた男の人を安全に地面に降ろした私は、エアたちの元へ戻ると再びヴァーミラの家に向けて、とある目的の為に歩みを進める。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、吸血鬼に対する悪い感情の払拭に挑む

アンケートに答えて頂き感謝です！フランとミアのパーティーに新たな仲間を1人加え、その性別は女子に決定しました。

「おはよう……あ、レオネ！ヴァーミラ居る？」

「ん？あ、おはようございます。フランさんにミアさん、ヴァーミラはまだ寝てます。後その……正体がバレちゃいましたけど大丈夫ですか？」

「ああ……それはまあ、命の危機があるかないかで言えば無いから大丈夫だけどね」「やっぱり町の人たちの態度がまるっきり変わったとかででしょうか？」

「うーん……そんな感じかな。出会う人の大体半分位がね」

時計塔から落ちそうな男の人を助けた後、私たちはヴァーミラの住んでいる服飾屋のレオネの家を訪ねた。彼女を外へ連れて行って町の困り事を解決し、吸血鬼に対する悪いイメージの払拭をしようと言う計画を思い付いたからだ。

もちろん、これにはかなり長い時間と根気を要する事になるのは分かっているし、攻撃される可能性が無いとは言えないのも分かっている。ただ、この町で暮らしているヴァーミラや彼女を養っているレオネがこれ以上の悪意に晒されるのは見られないし、私たち2人の冒険に支障を来すと思ったが故の計画である。

当たり前だけど、ヴァーミラが拒否すればその時点で計画は取り止め、もしくは私たちのみでやることとなるだろう。

「そう言えばフランさん、後ろの方々は一体……？」

「あの人たちの事？ えっとね、ルービエに居る間私とミアに付いていきたいって」「そうそう。この2人は最近急に出てきた有名人だし、いずれデカイ功績を立てそうな気がするからさ。今のうちに仲良くなればオレたちにも何か得かと思って」「あはは……なるほどね」

そんな感じで長い時間話をしていると、奥の部屋から寝間着姿のヴァーミラが皆の居るこの部屋に起きてきた。

「レオネ。おはよ……ええ？ フランにミアは分かるけど、後ろの人間と獣人たちは一体誰？ それにいつから家に居たの……」

「アハハ……ごめんねいきなり。えっと、確か30分位前かな？ヴァーミラに用事があったって来たけど、寝てるって言うから待ってたんだ。ちなみに後ろの人たちは、この町に居る間私たちと一緒に行動したいってついてきてるんだよね」

「へえ。で、その用事って一体何？」

ヴァーミラから聞かれたので、来る前に考えていた計画について全てを話す。額うなずきながら真剣に聞いてくれていた彼女の反応を見る限りでは悪くなさそうであったが、果たしてどうだろうか。

そうして彼女は少し考えた後、私の元に近づいて来て手を差し出してきた。つまり、了承してくれたと言う事だろう。

「私の為にレオネが怪我したあの日からずっと、何か出来ないか考えてたんだ。その時に丁度フランたちの誘いを聞いて、確かに何か良い事をして悪いイメージの払拭出来たら良いなって思ったから……」

そう語る彼女の潤んだ琥珀色の瞳には、これ以上レオネに辛い思いはさせないと言ふ決意が宿っているように見えた。

「無理はしないでくれよ、ヴァーミラ。種族が俺と違うとはいえ、娘のような存在

となった君が傷付いて死にかけるなんて所を見るのはもう、あの時で沢山だから」

「分かってるよ、レオネ。無理しない、絶対に！」

部外者である私たちが割って入る事が不可能なやり取りの後、ヴァーミラを連れて町へと繰り出していった。

重たそうな荷物を運んでいて辛そうな人を見かけたら声を掛けて言われた場所まで運び、探し物をしている人を見たら一緒に隅々まで探す。

取っ組み合いの喧嘩をしているのを見かけたら状況をよく見て止めに入り、怪我をした人が居ればミアに回復してもらった。

これら1つ1つは小さい事だけど、何十回何百回と繰り返していけば多少なりとも吸血鬼に対する感情に良い変化が出てくれる事だと思いたい。

「それにしても、エアのパーティーの人たちが大活躍してくれてるよねフランちゃん」

「うん、確かに。私とヴァーミラが良く見えるような立ち回りをしてくれてるお陰か、今の所特に襲われたりとかないもんね」

昨日、ルーバヌ砦の防衛戦から帰って来た時に受けた扱いがまるで嘘のような感

じだった。まあ、昨日と違って吸血鬼に対しての反感を持つ人が単純にこの場に居ないだけなのかもしれないけど。

そんな感じで夜遅くまで、どんな小さな事でも見つけたり頼まれたりすれば主に私とヴァーミラの2人で解決に力を注いだ。吸血鬼と言う種族の特性ゆえか、昼間よりも夜の方が2人だけで解決出来る困り事が増えたような気がしたが、肝心のエアのパーティーやミアが人間である為これ以上の活動は不可能と判断、今日はここら辺で切り上げる事にした。

「皆お疲れ様。私の見る限り、まあまあ感触は良かったんじゃないかなと思ったけど……」

「まあ確かに、オレもそう思った」

「確かにヴァーミラちゃんやエアの思った通り、私もそう思ったわ」

私も皆が思ったのと同様に、感触はまあまあ良かったかなと思っただけ……

（あの時誰かに見られていたような……？）

途中誰かが私たちに向けて……正確にはヴァーミラに悪意のこもった視線を向けられたような気がしたので振り返ったが、誰も居なかった。気のせいだった可能性

が高いけど、万が一の事を考えて皆に一応伝えておき、私自身も警戒心を高めて備えておく事にした。

こうして、初日は大きな出来事が起こることもなく無事に困り事解決を終える事が出来た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、危機を察知して隣国へ

前話から時間が2ヶ月経過しています。

「ヴァーミラ、居る？」

「フラン姉？ そんなに大きな声で呼ばなくても聞こえるから……」

「あ、ごめん」

「それと、昨日まで一緒に居たあのエアって人と彼が率いるパーティーの人たちが居ないけど？」

「なんかね、指名依頼が入っちゃったから行かないといけなくなっただってさ。凄く悲しかったよ」

「ふーん。なるほど」

ヴァーミラやエアの率いるパーティーの人たちと一緒に、吸血鬼に対する悪い感情の払拭を始めてからおよそ1ヶ月、いつも通りに町中の困り事を解決して回る

為に彼女の家を訪れていた。しかし今日からは、運の悪い事にエアたちに指名で依頼が来てしまったが為に私たち3人だけでしなくてはならなくなってしまった。

最初は正直ただ単についてきているだけだと思ったら、私とヴァーミラの動きやすいようにサポートしてくれたり、食事の手配などもしてくれたりした。中でも一番嬉しかったのは、王都で貰った保存魔法のかかった瓶に血までわざわざ補充してくれたりしたことだった。今思い出したけど、エアたちにお礼をしていなかったなあ……今度会ったらお礼しよう。

そんな事を考えながら家を出ようとした時、この2ヶ月の間に助けた人たちが数人入ってきた。何事かと思ったので尋ねてみると、想定していなかった不味い事態に巻き込まれようとしている事が分かった。

「何で、討伐対象がヴァーミラなのさ！ それに、レオネが逮捕されるかもって何かの冗談でしょ？ 私とミアが何故か対象外なのは良かったけど、総合的にみれば最悪の結果じゃん！」

「僕らには解らぬ。ただ、この町の過激派連中が自傷してまでヴァーミラ嬢とレオネ殿の罪をでっち上げたのは事実。直に聖教会のヴァンパイアハンター部隊がここ

に押し寄せて来るだろう」

まさかのヴァーミラが討伐対象と化す衝撃の展開である。しかもご丁寧に、聖教会の吸血鬼討伐専門の部隊まで呼び寄せると言うオマケを付けてきた。

「フラン姉、レオネが、レオネがあ……」

「ヴァーミラ、取り敢えず落ち着いて！ 凄いい冷気が出てるから！」

この2ヶ月の間お互いに仲良くなって分かった事だけど、ヴァーミラは喜びや悲しみ・怒りと言った感情がかなり高ぶると、自分の意思に関係なく内に秘めた冷気の力が解放されてしまう。

あれは何時だったか、店で買い物している時に喜ぶあまり冷気が解放された時には冷や汗ものだった。幸いにも、エアのパーティーに居たエルフの魔導師による咄嗟の結果魔法によって、大した事にならずに済んだけど。

「え？ あ、皆ごめん」

「大丈夫だよ。怪我とか誰もしてないから……それよりも、早く逃げないと」

「でも、レオネが……」

「ヴァーミラ嬢、彼なら大丈夫、もう既に我々の用意した偽装高速馬車にてノスト

ライト皇国へ向かっていきました。直ぐには合流出来ないかもしれませんが……あ、忘れてました。これが地図です」

助けた人のうちの1人の言葉を聞き、ヴァーミラは取り敢えずひと安心したように、燻っていた冷気と魔力も鳴りを潜めた。そうして落ち着いた所で、お金とある程度の手持てる量の荷物を持って外出、隣国『ノストライト皇国』へ向かう事になった。

「ヴァーミラ、ミアと手を繋いで。隠蔽魔法を使って逃げるから」

「分かった。ミア、よろしく」

「うん。じゃあ行くよー！ 『ライトカモフラージュ』」

ミアの魔法で風景と同化して完全に周りから見えなくなった後、ノストライト皇国側の国境の門に向けて移動を始めたが、地図を見ると意外と国境の門まで距離があることが分かった。その為魔法の効果時間も相まって、そこまで飛んで逃げる事にした。

そうしてカーテンド王国側の国境に到着した瞬間、ミアの隠蔽魔法が強制的に解除されてしまい、私たちの姿が丸見えになってしまったようで、門の兵士がこちら

を見ている。

「嘘……解除された!?」

「みたいだね。流石にすんなり通してくれる程警備は甘くないか」

「フラン姉、ミア。取り敢えず下に降りよう。対空魔法で撃ち落とされるかもしれないから」

ヴァーミラの進言もあり、一旦下に降りて門の兵士の元に向かった。

「お前たち、隠蔽魔法まで使って出国しようとするとは……一体何をする気だったんだ？」

「アハハ……ごめんなさい兵士さん。実は訳が……」

国境の門の兵士はヴァーミラを見ても特に反応を示す事もなかったのを見ると、彼女の事がまだ伝わっていない可能性がある。しかし、隠蔽魔法を使っていたせいで怪しまれてしまった為結局事情を話す羽目になってしまった。

「あっ！ そう言えば聖教会の奴らから一方的に通達があったな。『琥珀色の瞳をした吸血鬼を通すな』と」

「……」

これはいよいよ強行突破を覚悟しなければならぬかと思っただ時……

「ただ、我が国の王からも同時に『七色の魔法石を歪な羽に持つ吸血鬼フランドールとその連れは通せ』との最優先命令を受けている。権力があるとは言え、たかが一教会の通達とこの国を束ねる王からの命令、どっちを守るかなんて決まってるだろ？ それにアイツら……まあ良い。とにかく、そう言う訳だから早く通れ」

「兵士さん、ありがとう！」

「お礼なんて要らねえよ、仕事だからな。後ヴァーミラ、隣国でも元気でやってくれよな」

こうして正規の手続きを経て上手いことカーテンド王国から出国し、冒険者登録していないヴァーミラの通行料を払って仮の身分証明書をもらい、ノストライト皇国へと入国することが出来た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方に

も感謝です！
励みになります！

第3章 主人公一行以外の登場人物・魔法解説

第3章の主人公一行以外の登場人物に、出てきた魔法の解説です。前半に人物、後半に魔法の解説と言う感じになっています。

何か間違い等があればご指摘の程を宜しくお願いします。

※他の解説と同じ物がいくつか存在します

へヴァルシア学園生徒 フレイドン 【種族】 人間

カーテンド王国『ルービエ』の町で開催された魔法大会に参加したヴァルシア学園の生徒。

初めての出場決定によるプレッシャーに加えて上からの圧力に屈し、ドーピングアイテムを使用して挑むもジェノと相討ちで終わってしまった。

へヴァルシア学園生徒 ルナユール 【種族】 人間

フレイドと同様、魔法大会に参加したヴァルシア学園の生徒。上からの圧力が酷くて耐えきれず、ドーピングアイテムを使用しようとするも、シルフィオに見破られて未遂に終わる。

性格自体はそこまで堕ちていない為、見破られて内心ホッとしていた。大会後は学園を途中で辞め、反省の意を込めて調合師の学校に入り直して勉強を始めた。

〈常闇の森ギラムス伯爵〉【種族】吸血鬼

ルービエの町周辺で悪名を轟かせていた吸血鬼。カーテンド王国で吸血鬼のイメージがあまり良くないのもこの人物が引き起こした事件が原因だった。

日光に完全な耐性を持ち、流水にも耐性がある上に魔法技術も高かった為今まで誰も倒せていなかった。

しかし最後はフランに勝負を挑むも敗北、息子1人を消滅させられた挙げ句自身も聖教会のレヤルが放った攻撃に瀕死にされてしまった。

ヘルービエ守備隊長 レイフィエル 【種族】人間

ルービエの町を守る為に王国から派遣されてきた守備隊の隊長。どんなに機嫌が悪かろうと、どんなに自身が嫌われていようとも態度を変えずに相手と接する事をポリシーにしている為、町の人からの評判は結構良い方である。

しかし、同時に良く何か物を散らかす性格である為、同期の兵士からは後片付けが面倒だと言う理由からあまり好かれてはいない。

〈ホーレイン聖教会 レヤル〉【種族】人間

何かと過激で有名なホーレイン聖教会に所属する聖職者。例に漏れず彼も『吸血鬼なんぞ老若男女関係なく全部一緒』の思想を持ち、ギラムス伯爵だけではなく何も悪い事はしていないフランをも殺そうとする程。

実力はかなり高く、本気を出せば並の吸血鬼や悪魔・幽霊程度ではお遊びになるかならない位に強い。

〈ホーレイン聖教会 イラトナ〉【種族】人間

何かと過激で有名なホーレイン聖教会に所属する聖職者。だが彼はそれにしては

珍しく、危害を加えてくる吸血鬼には無慈悲ではあるがそうでない者に対しては普通に接する。

暴走しやすいレヤルを止める為のストップパーともなっていて、彼が暴走した時には言葉ではなく、物理的に語る。

実力はレヤルよりも高いが、権力は低い。その為意見が中々通らない事が悩みである。

〈疾風冒険団リーダーエア〉【種族】人間

あらゆる依頼を迅速かつ正確にこなす事で有名な、疾風冒険団はやてのリーダー。

防衛戦では風属性魔法を取り入れた剣術によって幾多の魔物を葬り、その素早さと技術から自身は傷ひとつ負うこともなかった。

自分の率いる冒険団をより良い物にする為に日々尽力していて、その為なら公序良俗に反する事以外であれば何でもやる性格である。フランとミアに近づいたのも、知り合っておけば自分達の得になると思ったからだ。

【登場魔法】

《攻撃系魔法》

『マルチフレア』

複数の火の玉を生成、それを同時に操って対象にぶつける火属性中級魔法。1つの火の玉は威力控えめではあるが、手数は多い為命中しやすい。

『マルチストーム』

複数の小さめの竜巻を発生させ、それを同時に操って対象にぶつける風属性中級魔法。1つ1つの竜巻の威力は控えめだが、手数は多い為命中しやすい。

『ウォータースプラッシュャー』

対象の存在する地面から噴水のように水を噴き出させて攻撃する水属性中級魔法。噴き出す前に地面から水が染み出てくるので分かりやすく、避けやすいが威力は高い。

『マルチウオーター』

複数の水の球を生成、それを同時に操って対象にぶつける水属性中級魔法。1つ1つの水の球は威力控えめではあるが、手数は多い為命中しやすい。

『マルチライトニング』

複数の雷を生成、それを同時に操って対象にぶつける雷属性中級魔法。1つ1つの雷は威力控えめではあるが、手数は多い為命中しやすく、それに加えて麻痺が付与される確率が高い。

『グロウライトニング』

地面から高威力の雷柱を突き出させ、対象に攻撃する雷属性上級魔法。一定範囲にランダムに展開される物と対象を狙って突き出てくる物が存在する為、命中させやすい上に強力な麻痺効果もある。ただ、突き出してくる前に光る為しっかり地面を見ていれば回避が少し楽になる。

『バラージカノン』

魔力で周囲の空気を収束させて球を作り、それを対象に向けて高速で発射する風属性上級魔法。当たった際の非常に高い破壊力と混乱の状態異常を高確率で付与する力を誇り、消費魔力も上級魔法の中では少ないが、手数はかなり少ない上に扱いが難しい。

『ピアシングサンダー』

魔方阵から青白い色をした雷を放ち、対象に攻撃する雷属性上級魔法。高い破壊力に中確率での麻痺付与、それに加えて弱い追尾効果もある。

『エクスフレア』

対象の四方を魔方阵で囲み、そこから超高温の青白い炎を放って中心の対象を焼き尽くす、火属性上級魔法。非常に高い威力を誇り、多少火属性耐性がある程度では防ぐことは出来ない。ただし、展開された魔方阵から出るまでに時間が少し掛かる。

『マルチダークネス』

複数の闇の球を生成、それを同時に操って対象にぶつける闇属性中級魔法。1つの闇の球は威力控えめではあるが、手数は多い為命中させやすい。極低確率で目眩ましの効果がある。

『アグヘルフレア』

対象の下方から強力な火柱を発生させ、それを中心に強力な火の波動が周囲に放たれて広範囲を焼き尽くす、火属性最上級魔法。火柱の内部はエクスフレアよりもさらに高温になっていて、中程度以下の火属性耐性ではダメージ軽減出来ない威力を誇る。

《回復系魔法》

『メディカルナス』

回復系の上級魔法。対象者のあらゆる状態異常(即死以外)を短時間で治すことが出来る。

《他系統魔法》

『風の舞』

身体能力を風の力で強化し、回避力・防御力・素早さをかなり上げる風属性中級魔法。副次的効果として攻撃力も上がる。

『風霊一体』

自身を風そのものと言える存在と化させ、物理ダメージ無効・火属性以外の魔法ダメージ半減・速度増強・風属性吸収の効果を持つ、風属性をひたすら極めた果てにシルフィオが会得したオリジナル魔法。非常に強力ではあるが、効果時間が短く魔力消費がかなり激しい。

【登場オリジナルスペルカード】

『炎槍 イグニスランス』

小さい火の槍を雨のように上空の魔方陣から降らせて相手にダメージを与える、

ジェノのスペルカード。これを強化・発展させれば幻想郷の上位陣の本気に食い込める程の物になる可能性が高い。

『風霊 インテグレイズシルフ』

風の精霊を召喚して、風を纏う弾幕を嵐のような激しさで放つシルフィオのスペルカード。これもジェノと同様、強化・発展させれば幻想郷の上位陣の本気と同レベルになる可能性を秘めている。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

第4章 ノストライト皇国 エリユカル編

フラン、ヴァーミラと契りを交わして姉になる

本日投稿した3話の内の2話は、第1章と第2章の人物や魔法解説となつていきます。

「ふう〜。国境の門を警備してる兵士さんに止められた時は強行突破する事になるかと思つたけど、どういう訳か王様から私と連れは通せって命令が出たお陰で助かったし、本当に運が良かった」

「うん。でも、ヴァーミラがね……」

無事にノストライト皇国側の国境の町『エリユカル』に到着した私たち3人は、見つけた宿に数日間分の宿代を先払いしてひとまず腰を落ち着ける事が出来た。

しかし、私たちと出会う遙か前からヴァーミラと一緒に居たレオネの行方が分か

らず、情報なども無い為無事かどうかが見当がつかないせいで彼女に元気がない。聞けば、自分を娘の様に接してくれた彼を『父親』の様に慕っていたらしい。そりゃ元気が無くなるのも無理はない。

どう声を掛けようか迷ったが内容によっては逆に精神を追い込む方向に進んでしまふ為、ヴァーミラが話を振ってこない限りは取り敢えず何も言わずにいつも通りにしようとの心の中で決めた時、彼女が話し掛けてきた。

「フラン姉お願い、レオネを探すのを一緒に手伝って……もし探し出す事が出来たら、一緒に旅がしたいな」

「分かった。これから一緒に冒険する事になる仲間の頼みくらい聞いてあげないととは思うけど、でもね……」

ヴァーミラなら吸血鬼と言う種族の持つ、身体能力に高い魔法力が備わっているから戦いになっても問題はない。

しかし、レオネは見たところ至って普通の人間だ。弱い魔物との戦闘時だったら守りつつ戦う事は簡単だけど、グランドドラゴンやギラムス伯爵の様な強敵との戦闘ともなれば厳しくなってくる。万が一と言うことも考えられるから正直言うと、

一緒に旅をするのは厳しいかなと思った。

「駄目……かな？」

「いや、ヴァーミラがそう言うなら良いけど、私とミアは冒険者やってるから魔物の討伐依頼とか受けるし、他にも色々危険な事が舞い込んで来るよ？」

「大丈夫！ 私が身を呈して、全力で守るから！」

その時、一瞬だけ冷気の波動が伝わって来た。つまり、今言った事に対して本気だという確固たる意思を持っている証拠である。なので、ヴァーミラのその問いに対して私は良いよと言う返事を返した。

「ありがとう。フラン姉」

「気にしないで。それだけ本気のヴァーミラ見たらね、断る気なんて何処かに消え去ったからさ」

話し合った結果、レオネを無事に見つけた後の事は決まった。しかし、肝心の彼を見つける手立てがノストライト皇国内の町や村、都市を回って地道に探す方法しかないのが現状だ。しかも、その間にこの国を出ていく可能性もあり、そうなれば完全にお手上げである。

「そうと決まれば早速動こうよヴァーミラちゃん……そう言えば冒険者登録ってたっけ？」

「してないよ。ずっとレオネと一緒にルービエで暮らしてたから」

「じゃあまずはそこからだね。フランちゃんが登録出来たからヴァーミラちゃんもきつと大丈夫だよ」

早速私たちと行動する上で必要になる冒険者登録をしに、この町のギルドへと向かった。吸血鬼が冒険者になりたいと入ってきたからなか中に居た人たちが若干ざわつき、ついでに私を見て更に冒険者たちがざわついていた。

私がカーテンド王国の王都で登録した時は特に何も起こらなかったが、よくよく考えたらその時は正体を隠していたからであって、本来ならこの反応が普通なのかもしれない。

そうして若干手続きに難航したものの、ヴァーミラは晴れて冒険者となる事が出来た。

「さて、無事にヴァーミラも冒険者になれた所だし、早速この町からレオネを探し始めよう！」

「分かった」

「……ありがとう！」

今後の冒険する上での目標が『ヴァーミラが父と慕うレオネを探しつつ、ギルドの依頼をこなす』事に決定、早速達成に向けて動き出す。

身体的特徴や彼の職業・名前と言った情報を出しながら通行人に話を聞いてみると、店に入ったたりして店員さんに訪ねたり等他にも色々やったりして努力はしてみた。しかし、たった1日で見つかるわけもなく、日も沈んだ為この日の搜索は終了した。

「まあ、1日で見つかれば苦労はしないよなあ……」

「そうだね。でも目撃情報すらないなんて、最初からこの町には立ち寄らなかった可能性が大きいよフランちゃん」

「うん。でもまだ1日だけだし、もう何日かギルドの依頼を受けながらこの町を探そう」

そうして今日の搜索は終わりだと声を掛けようとヴァーミラの方を向いてみた時、何だか哀しそうな表情をしながら空に浮かぶ月をじっと見つめていたのが見え

て……

「ねえヴァーミラ。もし良かったらさ、私と姉妹の契りを結ばない？ レオネが居なくなつて寂しいように見えるしそれに、『家族』は沢山居た方が楽しいよ？」

私は思わずそう言ったが、その後落ち込んでいるこの状態の彼女に言う言葉だったのだろうかと言う考えが頭をよぎった。しかし、もう言ってしまった物は仕方がないのでひとまず様子を見る。

30秒程の短いようで長い沈黙の後、ヴァーミラが何処からか取り出した2つの木製の魔力を感じる小さなカップの内の1つを私に差し出してきた。一体何をすめるのかと思ったら、彼女が自分で自分の腕を噛んで流れてきた血をカップに溜め始めた。何だかよく分からないが、私もやらなければいけないような感じだったので同じように真似してやった。

半分程溜まった所でヴァーミラがそれを差し出してきたので、私も同じように差し出した。

「私の為に考えてくれてありがとう。じゃあ、改めてよろしくね……フラン姉様！

┌

「うん！」

そうしてヴァーミラがその血を飲んだ為、また同じように真似して飲んだ。その瞬間何らかの『力』が身体中を駆け巡り、昔から本当の姉妹だったような……何故だかそんな気がした。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、パーティー名を決める

「フランちゃん、何処に行くの？」

「エリユカルのギルドだよ。依頼を受けに行こうと思ってさ」

「討伐系の依頼かな？」

「いや、それ以外の系統の依頼を受ける予定だよ。例えば採取とか害虫・害獣駆除とか、町の人たちの身近な困り事の解決とかね」

ヴァーミラと契りを結んで姉妹となった、綺麗な月が出ていた昨日の夜から時間が経って翌日、私たち3人はこの町のギルドに向かっていた。流石の私も毎回討伐系の依頼だとやる気の問題が……と言うか正直言っただけで疲れかけてきている。

このままだと冒険の旅に対するモチベーションにまで影響が出てしまうかもしれない為、たまには息抜きも兼ねて討伐以外の依頼を受けてみようと思ったからだ。「もしかして、私と姉様のイメージを良い方向に持っていかうとしてるの？」

「まあ、そんな感じ。王国の時みたいになら流石に面倒臭いし。だったらそうならない内に依頼を沢山こなして吸血鬼のイメージを良くしようと、それが不

可能なら私とヴァーミラだけでもさ。レオネだって探しやすくなりそうだし」

「なるほど、確かにその通りだね」

とは言っても、ギルドに行った所で都合良く受けたい依頼があるとも限らない。もし何も受けたい依頼がなかったとしたら、今日は町の観光でもしようかな。

そんな事を考えながら歩いていると、目的のギルドの建物が見えてきた。カーテンド王国には居なかった入り口前の警備兵士が居ると言う事は、治安の面でノストライト皇国はカーテンド王国に劣っていると言う事なのか、それとも単に王国の防犯意識が低いだけなのか、もしくは何か事件があった後なのかな……？

「こんにちは！あの、受けて欲しいけど誰も受けたがらなくて困ってる依頼とかない？」

「あ、昨日の吸血鬼さん達ですか。ありますよ。沢山溜まりすぎて処理仕切れなくなってきたそうなんです是非消化して頂けると助かります」

そう言って分厚い依頼書の束が私に手渡された。確かに彼女の言う通り、この量は処理しきれなくなりそうと言うのも納得だ。

「フラン姉様、大半が何処かの雑用とか害虫駆除に留守番とかだし、受けたい依頼

が多いけどどれにするの？」

「う〜ん……て言うか、留守番とか話し相手とかそんなのまで受けてたら処理しきれなくなるのも当たり前だよね」

「フランちゃん、もはやこのギルド便利屋と化している気がするよ、わたし」

「あはは……ですよねえ。うちのギルドマスターの方針で、何でもかんでも受けるって事になってるんですけど、こっちの身にもなってくださいよって話です」

うん。何だか大変そうだとは思ったけど私にはどうすることも出来ないから、心の中で仕事がこれ以上増えないように祈りながら依頼書の束を見る。

話し相手と言ったもの以外で1番多かったのは、排水溝や建物の屋根裏等と言った場所に良く出没するらしいネズミや各種害虫、まれに潜んでいる魔物や犯罪者の排除と言う依頼だった。これならきつと目的達成に1歩近付けるし、場所に行くまでに町並みを見て歩けるからリラックスもある程度は出来ると踏んだので、受ける事にした。

「じゃあこれをお願い」

「分かりました。ありがとうございます！」

そうして特に良く出るらしい場所を記した地図と建物に入る際に見せることになるかもしれないギルドの許可証の2つを貰い、出発した。

しかし、場所が場所なので破壊力のある魔法や技は使えないのは痛い。見つけ次第コツコツ捕まえて排除しなければならぬ為、1つの場所に掛かる時間が多くなってしまふからだ。私が能力を使って見つけ次第その場で排除するのも考えたけど、証拠が残らないから却下した。

「犯罪者が潜んでるって……出来れば出会いたくないね、姉様」

「まあね。でも、出て来ちゃったら仕方ないけど」

「とにかく、1番面倒な場所に……あ、居た！」

ミアが指を差した先に、排除対象のネズミが数匹何かに集っているのを見た為早速捕まえようと動こうとした時、ヴァーミラに止められた。

「私がやるよ。見てて」

そう言うと、ヴァーミラはあのネズミたちをじっと見つめてから……

『凍って』

そう喋った瞬間、あのネズミたちがバツタリ倒れて動かなくなったのを私とミア

が目撃した。良く見てみると、まるで彫刻のように綺麗な形をしたまま凍りついていた。

「どう？ これなら比較的楽に排除出来るでしょ？」

「ヴァーミラ、こんな能力を持ってたの!?! 凄いじゃん！」

そこからはヴァーミラの独壇場で、ネズミや各種害虫を見つけ次第能力で対象だけ凍るように仕向けるのをひたすら繰り返した結果、半日も経たない内に1ヶ所を完全に潰す事に成功したけど、能力の使いすぎで彼女が動けなくなってしまった。その為今日はここまでにして、背負って帰る事にした。

「ごめんね。今日は私、殆んど役に立たなかったね」

「わたしに至ってはただ見てただけっていう」

「姉様もミアも、気にしないで。皆にそれぞれ役割があって、今回はそれが私の役目だっただけ……」

そんな会話をしていると、今日ネズミや各種害虫の排除をした建物のオーナーさんが話し掛けてきた。

「お疲れ様でした。わざわざこんな事に冒険者様方の手を煩わせたのは申し訳ない

です。それに、来てくださった貴女方の内2人が吸血鬼だとは、驚きました」

「やっぱり？ まあ、でも役に立ったみたいで良かった。ヴァーミラのお陰で早く済んだし」

「なるほど、本当にありがとうございます。えっと……何て言う冒険団名でしたっけ？」

「あっ……」

そう言えば、冒険団名なんて考えてなかった事に今更気づいた。さてどうしようかと、少し考えて咄嗟に思い付いた名前を言った。

『『紅珀こうはくの月』だよ！ 咄嗟に今考えたんだけどね……』

「あ、そうだったんですね」

こうして、今日の依頼では何事もなく普通に終わることが出来た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方に

も感謝です！
励みになります！

フラン、波風を立てる

「え？ 1番厄介なああの場所の駆除がもう終了したのですか!？」

「うん。ヴァーミラの能力のお陰で楽に排除出来たからね。お陰で動けなくなるレベルで疲れさせちゃったけど」

ここでミアと私が持っていた袋の中身を見せると、受付の人は思わず『うへえ……気持ち悪い……こんな人居たとは』と言いながら顔をひきつらせていた。見せたのは失敗だったかな？

取り敢えず証拠として持ってきたコレをどうすれば良いのが聞いてみたら、ひとまず渡してくれと言われたので渡した。

「ご苦労様でした。それにしても良く平気で居られますよね。羨ましいです」

「平気……ではないです。フランちゃんに生活系魔法で汚れを落として消臭して貰ってもなんか不快感がありますから」

「サウディオラの事ですよ。私も覚えようかな……あ、今後も暇な時は残りの場所をよろしくお願いします」

そう言って、受付の人は害虫等が入った袋を持ってこの場を後にしたのを見届けた私たちも宿に戻り、ヴァーミラが動けないこともあったのですぐに眠りについた。

翌日、ヴァーミラの魔力も回復したので再び地図に記されている場所に行つてネズミや各種害虫の排除へと向かった。

昨日のように彼女の能力頼りだとまた魔力切れで動けなくなるので、私も少し大変ではあるけど魔導書を見ながら、相手に麻痺の状態異常を与える『チェーンパラライズ』を唱えて排除した。効かない虫が居なかったのは良かった。

そうした事に加え、昨日のあの場所のような厄介かつ量の多い所ではなかった為、記された5箇所の内4箇所を同じ位の時間で済ませる事に成功した。

「ふう〜。ずっと麻痺魔法ばかり唱えてたらなんか疲れた〜」

「確かに。でも、後1箇所ですべて終わるから頑張ろうね！ フラン姉様」

互いに励まし合い、残りの1箇所のネズミや各種害虫の排除へと向かおうとした時、腰の辺りの服を引っ張られたのを感じた。何だろうと思つて振り向いてみると、そこには目に涙を浮かべていた1人の男の子が居て、しかも怪我をしている。

もう何らかのトラブルに片足を突っ込んだ予感がしたものの、無視してさようならと言う訳にもいかないので、ミアの回復魔法で怪我を治してから話を聞いてみた。すると彼は一言『僕の友達を助けて』と、そう言ってきた。詳しく説明を求めたものの、泣いてしまっていて話が出来る状態ではなかった為、その場所まで案内してくれるように頼んだ。

そうして彼の案内の元、その場所に向かったら……

「あつ……これは不味い状況だけど、相手が相手だから魔法を使うわけにもいかな
いよね」

3人の男子と2人の身なりの良さそうな女子たちが、男の子の友達らしき1人の女の子を取り囲んで今にも殴る蹴ると言った暴力が起こりそうな場面を目撃した。女の子は防衛魔法を唱え、来るべき暴力に備えていた。

「姉様、どうするの？」

「もちろん助けるよ。まあ、見てて……あと、この男の子をアイツらの目の見えな
い所にお願ひ」

そう言うと、ゆっくりその集団に向けて近づいていった。当然、彼ら彼女らは気

付いて私に言葉を投げ掛けてくる。

「何あんた？」

「えっと……そんな事よりその女の子、解放するから退いて」

「は？ あんたには関係ない——」

これは駄目だ。普通に話してたんじゃ退いてくれそうにない。なので仕方なく私は身体を霧にしてその場から消え、集団のリーダーらしき女子の背後に回り、吸血の態勢を取りながら耳元で一言囁ささいた。

「もう一度言うよ？ 今すぐあの女の子を解放して」

そんな感じで私は、威圧しながら命令をした。それでも駄目なら致し方ないので麻痺魔法を使うしかない。

「ひい！ ああ……」

「何コイツ、今のプレッシャーで体が動かない……」

「き、吸血鬼だ……父さんが絶対に喧嘩を売るなっていったあの吸血鬼だ……逃げなきゃ！」

そうして女の子を寄ってたかって集団で怒鳴ったり脅したりしていた彼ら彼女ら

は、そのまま女の子を置いて逃げ去っていった。

「ちよっと子供相手にやり過ぎたかなあ……まあ良いや。貴女、大丈夫だった？」
「うん。それで、どうして助けてくれたの？ あの人たち、ここら辺を治める貴族の子供達なんだよ？」

「……え、そうなの？ 全然知らなかったなあ」

それを聞いた私は、面倒な方向に持って行ってしまった事実には頭を抱える。

この女の子を助けた事自体に後悔はない。しかし、相手が貴族の子供と知っていたのならば、ミアの魔法で隠れてから彼女を連れて安全な場所に送り届けると言った、多少目立つものの波風を立てない方法も取れた。

だけど、それを知らなかったが為に私は堂々と近づき、吸血鬼としての能力を遺憾なく発揮して威圧すると言う、これ以上無い位波風を立てる方法を取ってしまった。しかも、周りに人が沢山居る場所でやってしまったと言うオマケ付きだ。

（知らなかったとはいえ、面倒な方に自分から持っていく事になるとは……まあ、過ぎた事を考えても仕方ないね）

そう頭の中で考えたけど、過ぎた事をいくら考えても後の祭りなので気持ちを切

り替え、女の子の方を向く。

「そう言えば、貴女の友達って人があっちの方に居るから行ってあげて」

「え!? つまり吸血鬼のお姉ちゃんは……」

「うん。その子に助けて欲しいって頼まれたから来たんだよ。居なかったら多分貴女には気づかなかったと思う」

「……」

私がそう言うと、その女の子はヴァーミラたちの隠れている方に走って向かっていった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、謎の宝石を見つける

その後、私たちは無事に助けた女の子と男の子を会わせてからそれぞれの家まで送り届け、それから最後のネズミや各種害虫排除へ向かっていた。

「姉様、流石だね。凄い吸血鬼らしさが出てたよ」

「そうかなあ、あはは……」

「そう言えばフランちゃん、あの女の子を取り囲んでた子供たち貴族だったんだよね」

「うん。正直、あれは知らなかったとは言えやっちゃったなあ……って思った」

「まあ、やった事自体は良い事だしそれに、もし何かあっても仕方ないんじゃない？ だからあんまり気にしない方がよいよ、姉様」

私が威圧した子供たちが貴族だったと言う事実を2人に伝えると、多少驚きがあったもののそれ以外は特に何もなかった。ヴァーミラに至っては『敵』が来たら全員氷漬けにして迎え撃つ気満々だったので、それは止めてくれと嗜める。

そんな会話をしていると、最後の排除場所へと到着したので早速作業を始める。

もう既に日が沈みかけている為、ミアの為にも出来れば早く事を済ませておきたい。

「さして。もう夕方だし、早く済ませちゃおう！」

「そうだね姉様……あ、早速居た」

こうして完全に日が沈んで月が出て来始めた時間帯に5箇所目が完了し、これで地図に記された箇所のネズミや各種害虫の排除が終わったのでギルドに戻ろうと歩いていたその時、足で何か硬い物を蹴飛ばした感触と、それが地面を転がって壁に当たる音が聞こえた。

気になったので音が聞こえた場所に向かうと、そこには淡い紫色の光を放つ謎の手の平サイズの宝石があったので、拾おうと私が触れた瞬間に光が一段と強くなった。

「ビックリした。何なんだろう、これ？」

「分からない。けど私やフラン姉様が触れば光が強くなって、ミアが触っても何も変わらない所を見ると、吸血鬼の力に反応してるのかな？ とにかく、特殊な宝石の落とし物だろうからギルドに持っていきよう」

そうして依頼達成の報告と共に、謎の手の平サイズの宝石も渡す事に決めた私

ちは改めてギルドへと戻っていった。

「あ、皆さんお疲れ様……ん？ その宝石はどこで拾ったのですか？」

「今日の依頼の時に拾ったんだ。不思議な宝石だったし、誰かの落とし物だと思っただからついでもって持ってきたの」

「なるほど……こんな重要な物を落としていくなんて、きっとその人は今頃血眼になって探し回っているでしょうね」

「そんなに貴重な宝石だったの？ これ」

話を聞いていると、この淡く輝く宝石は『暗竜石』と言うらしい。闇属性を操るAランクの『ダークネスドラゴン』を討伐した際ごく稀に落ちている事があり、闇の力に反応するとそれを吸収・放出して紫色に輝く宝石との事。主に武器に強力な闇属性を付与するのに使用されるが、扱いがかなり難しいらしい。

「とにかく、拾ってくれて感謝です。もし犯罪者等に拾われて武器に使われたりしようものなら状況にもよりますが、かなり大変なことになっていたでしょう」

「で、その宝石落とし主が見つからなければどうなるの？」

「何ヵ月経っても見つからない場合はギルドが認めた商人に売却します」

なるほど。まあそれだけ貴重な宝石であるなら、何ヵ月も見つからないなんて事はないだろうね。

そんな事を思いつつ、もう1つの目的である5箇所のネズミや各種害虫排除の報酬を受け取り、ギルドを後にした。

ヴァーミラやミアと会話しながら、綺麗な夜空を見ながら歩いて宿に戻っている途中、物凄く焦っているような顔をした3人組がギルドの方に息を切らしながら走って向かって行くのが見えた。随分必死そうだったので何があるのか気にはなっていたけど、わざわざ見に行く程の事でもないだろうと判断した私はそのまま皆と宿へ向かい、手早く夕食を取った後すぐに眠りについた。

そして次の日の明け方、いつも通り寝ていたら急に大きな音が響き、ビックリして私たちは飛び起きた。辺りを見回して何事かと思っていると、この部屋にギルドの職員が来ていた事に気づいた。何故ここが分かったのだろうか？

しかし、せっかくの心地よい睡眠の邪魔をされてすこぶる気分が悪い。どうやって文句を言ってやろうかと思った時、先にヴァーミラがその職員さんに対して怒っ

ていた。こっちにまで冷気がひしひしと伝わってきている上に、黒い長髪が彼女を取り巻く冷風になびいているのを見て、相当怒っているのが良く分かる。

「私の眠りを邪魔するなんて君さあ、一体何のつもり？ ねえ」

「すみません、間違えて目覚まし魔法の音量を最大にしてしまいました。実は、ギルドマスターから貴女方を呼ぶようにと仰せつかっております……」

「もっと時間ずらせなかったの？ 今まだ明け方なのに？ と言うかそもそも……」
その後、普段のヴァーミラからは想像もつかない程怒りを露にしながら、さりとて怒鳴ったり叫んだりせず、ただひたすら静かに文句を言い続けている。このまま放っておくと延々と続きそうな気がする上、部屋の気温がどんどん下がりを続けている。部屋が止めに入り、何とか落ち着かせる事に成功した。

そして、そのギルドの職員さんに私たちが呼ばれた理由を訪ねると、外を歩きながら説明してくれると言うので私たちもついていくことになった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、貴族と一触即発

「それで、私たちが朝早くにわざわざ起こされてまで連れていかれる理由って何？」

「あ、はい。実はですね、昨日貴女方が届けて下さったあの宝石、持ち主が皇国のとある貴族様でして。暗竜石が見つかった事に大層喜んでおられたようですが……性格に難がありましたですね、仕方なくお礼をしてやるから連れてこいと」

「……はあ」

「そう言う事でしたか」

「……」

なるほど。この国の貴族って言う事は相当偉い人だから、そんな人に命令されれば逆らう事は出来ない。朝早くに起こしてまで連れていく理由にはなっているけども、正直言って迷惑な話である。随分偉そうな人たちっばいし。

しかもヴァーミラに至っては、小声でそのまだ見ぬ貴族の人間に対して眠りを邪魔された上に、酷く偉そうなその態度に対して怒って文句を言い続けていた。端か

ら見たら、まるで呪術士が呪術を発動させようとしている風にしか見えない。

「取り敢えず、出会った瞬間に能力とか人に対して使うのは止めてね。命が狙われた等の理由があるのならば、話は別だけど」

「……フラン姉様がそう言うなら、分かった」

段々感じる冷気が強くなってきた気がしたので、声をかけてヴァーミラを落ち着かせる。しかし、相変わらぬ機嫌が悪いようで、彼女の言葉には若干の怒気が含まれていた。まあ、寝ている時の幸せそうな所を見るとそうなるのも理解できる。

そんなやり取りをしていると、ギルドの前をやたらと豪華な馬車が止まっていたのを発見した。どうやらあれに乗って、貴族が居ると言う屋敷に行くらしい。

「随分上から目線の貴族の人みたいだけど、そういう意味ではカーテンド王国の貴族って良かったよね」

「まあね……」

「……」

明け方、ギルドの職員さんに皇国の貴族の所に行くと言われてから、面倒事に片足だけでなく全身を突っ込んだ気がして正直だるい。何せ、あの時私が吸血鬼の力

を遺憾なく發揮して威圧した子供が貴族であったと言う事実、もしかすると今から行く貴族の子供かも知れない可能性がある為だ。

ここで断りたかった気もするが、そうした所で余計な面倒事が舞い込んで来そうだったのでその選択肢は潰えた。つまり、あの時私があんな行動をした時点で詰んでいたと言う事なのだろう。

(もうなるようになれ！ 戦う事になっても仕方ない！)

心の中でやけくそになりながら完全に詰んだ時の為の最終手段として、カーテンド王国への逆戻りも考えながら用意された馬車に乗って館へと向かった。

人が歩くよりも少し速いくらいの速度でのんびり動くこと20〜30分、馬車から外を見てみると目の前に紅魔館よりも一回り小さく、色も違うもののそれ以外は結構似ている館が現れた。どうやらここが目的の場所であるようだ。

そうして館に到着すると、メイドさんらしき格好をした女の人に、豪勢な食事が並ぶ部屋へと案内された。席と席の間が狭い為、万が一食事に触れてしまわないように出来れば羽をしまってくれないかと言われたので、私とヴァーミラは羽をしま
いこんだ。

「なるほど。其奴らが例の……ほれ、このワシがわざわざ手間をかけてまで面倒なお礼をしてやると言うんだ。さっさと座れ」

案の定ギルドの職員さんの言った通り、性格に難がある貴族だった。自分から私たち3人を招いておきながら、面倒だと抜かす。だったら呼ばなければ良いのにとはいつつ席につくが、料理にもあの人間の性格が滲み出ていた。

私たち以外の出席者の料理は高級品を使ったであろう、豪華で美味しそうな料理であるのに対して、こちらはよく分からない食べ物や物を乱雑に盛り付けた何かであった。流石に食べれない物や腐っていたりした物は無いみたいだけど、見ただけで普通の店の料理よりも圧倒的に何もかも劣っているのが分かった。一体何の為に呼んだのか理解に苦しむが、もしかして嫌がらせだろうか？

「何だ？ せっかく出してやったと言うのに、食べれんと言うのか？」

「……」

その言葉を聞いた瞬間、何を思ったかヴァーミラが出された物を一口食べ、たった一言『不味い』と正直に大きな声で宣言する。

「姉様やミア、それに私の睡眠を邪魔してまで朝早い時に呼び出しておきながら

散々侮辱してくれた挙げ句、食材を冒瀆しているような不味い料理を出すとは、このふざけた真似を……！」

今まで頑張って理性で抑えていた怒りがその限界を突破し、それが態度と冷気に現れ始めていた。止めようかと思っていたが、当の私も気分がすこぶる悪い為、殺しにまで発展しない限りは止めない事に決めた。ミアも理解を示してくれている。

『皆凍ってしまえ』

そう言うと、高級茶葉で淹れられた紅茶がもの一瞬で全て凍りつき、全て無駄になってしまった。これには流石の貴族の面々も驚きを隠せないようだった。

「なっ……貴様、何をした!？」

「何って、ただ単に『水』に凍るように命じただけ。簡単な事」

「凍るように命じただと……魔法を使った気配などなかったはずなのに何故これ程の現象が起こせる？」

「ああ、それともう喋らないでくれる？もし、喋ったら次は君の中の『水』を凍らせてあげるから」

「っ！」

ヴァーミラから発せられる冷気がかなり強くなり、発言も遠回しに次は殺すと
 言っているようなものになり始めた。このまま放っておくとこの場が地獄絵図にな
 りそうな感じだったので、流石の私も止めに入ろうと立ち上がったその時、この部
 屋にお婆さんが突然強烈な魔力を発しながら入ってきた。

「だから言ったでしょうがぁー!!」

「ひ、ひい！許してく——」

入るなりそう叫ぶと、貴族のお爺さんの方に遠慮なく何らかの波動を放って吹き
 飛ばし、壁にめり込ませた。余りの衝撃が大きい光景を目にしたヴァーミラは怒り
 が急に収まったようで、溢れる冷気も鳴りを潜める。食事会に出席していた一同も
 同様に驚いていた。

「お主らも何故止めぬ？わしが忠告しておいた筈だぞ。『2つのルビー・サファ
 イア・琥珀を持つ者には喧嘩を売るな』と」

「……すみませんでした」

こうして、やたら強そうなお婆さんの登場により、この場にひとまずの平穩が訪
 れた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、精霊の親子に出会う

「申し訳ないねえ、吸血鬼の嬢ちゃんたち。この爺さんは全然わしの言う事を聞いてくれなくて、どうか殺さないで下さると嬉しいわ」

「あはは……しないよ、そんな事」

「私もお婆ちゃんが登場してあのお爺ちゃんを壁にめり込ませてたからか、怒る気も失せたし」

「あの、わたしは吸血鬼じゃなくて人間です……」

あの後、お婆さんの威圧のこもった指示によって全ての料理が作り直され、改めて食事会が開かれていた。もちろん私たちの料理もさっきの食材を冒流したようなものではなく、ちゃんとした物に変えられた。

「そう言えば、壁にめり込んだお爺さんは大丈夫なの？ 人間なのに」

「あらあら、さっきまで無礼を働いていたあの人の心配なんて優しいのねえ。心配しなくても、やたらと頑丈だから大丈夫よ。後、さっきの酷い料理は罰として無理矢理口に押し込んで食べさせたから、食材も無駄になってないわ」

なるほど。あの料理を罰として無理矢理食べさせたと……まあ、それは自業自得なのでこの件に関しては同情はしない。と言うか、する気も起きない。

「くくっ……あははは！ お婆ちゃんやるじゃない！ 私の眠りを妨げた報いとしては最高の罰ね」

「まあそうなの？ 申し訳ない事をしたわねえ」

「謝らなくても良い。お婆ちゃんは悪くないから」

私とお婆さんの会話の中に出てきたお爺さんに対する罰の内容を聞いたヴァーミラは、今日一番の笑顔を見せて大笑いしていた。余程愉快だったらしい。ちなみに、他の参加者たちは凄く気まずそうに食事を黙々と食べ続けていたが、お婆さんの取り成しによって気分が戻ったようで、何だかんだ賑やかな会となった。

そうして食事会も終わって帰ろうとした時、お婆さんから呼び止められた。

「そう言えば自己紹介してなかったわねえ。わしはラスワ・ルーケルク。さっきの爺さんの妻で、占い師をやってる者よ」

「へえ。じゃあ私も……名前はフランドール・スカーレット、吸血鬼だよ！」

「……私はヴァーミラ・スカーレット。フラン姉様とは姉妹関係ね」

「わたしはミア。フランちゃんたちと一緒に冒険的やっています」

こうして、軽めの自己紹介を済ませた私たちは屋敷を後にした。ちなみに、ヴァーミラが何故か自己紹介の際に戸惑ったのが気になって聞いてみたら、私と同じ姓名乗っても良いのか一瞬迷ったかららしい。姉妹なのだから、そんなの気にしなくても良いのに……

そんな会話をしながら取り敢えず私たちはギルドへと向かっていた。あの職員さんに無事に戻れましたと報告をする為と、たまには気晴らしに採取依頼でも受けようと思ったからである。

最終的には解決したものの、あのやり取りで疲れたので休憩もかねてのんびり買い物しながら1時間歩いてギルドに着いた私たちは、あの時の職員さんに声を掛けた。貴族たちとは少し険悪なムードになったものの、何とか無事に戻れた事を報告した。

「本当に良かったです。それで、本日はどう言った用件で？」

「えっと……採取系の依頼を受けに来ただけど、何かないかな？」

「採取系ですか。そうですね……」

そう言うのと、依頼書の束の中を探し始めた職員さん。1分程経った時、いくつかの依頼書を見つけて渡してくれた。

「これですね。どれも採取系の依頼ですけど、その割には難易度が高い奴が多いですけど、大丈夫ですか？」

「うーん。じゃあこれでお願ひ。2人はどう？」

「良いんじゃない？」

「良いと思うよフランちゃん」

そうして選んだ採取系の依頼は『光癒草』^{こうゆそう}の採取依頼である。怪我の治療に使う中級回復ポーションを作る為に必要な主要素材の1つであるが、生えている場所がそこそこ危ない場所である為Eランク以上の冒険者にしか受ける事が出来ないらしい。

まあ、危ないと言っても初心者基準との事なので、私たちなら油断しなければ問題ないレベルの採取系依頼だと思う。

「承りました。期限は1週間となっていますので、それほど急がずとも大丈夫な感じになっています。最低でも6本まとめた束が3束、それ以上取ってきた場合

はある程度までなら報酬に上乘せられますので頑張ってください」

そうして光癒草の凶鑑の写しを貰い、それが採取出来る山の途中にある小さな村まで馬車で移動する事になった。今まで緊急だなんだとか言って討伐系の依頼ばかりであったが、今回は随分久しぶりののんびり採取依頼だ。たまには休憩がてらこう言うのも良いと思う。

そんな事を考えながら馬車に揺られる事数時間、目的地手前の小さな村に到着したらしく馬車が止まった。

「まるで幻想郷に帰って来たみたい……」

「幻想郷……何それ？」

「私の住んでいた場所の事だよ。外の世界とは結界で隔離されてるからね、帰りにくても迎えが来るまで帰れないんだよね」

物凄く今更感が半端なかったが、この機会を逃すと永遠に話さない事になりそうだったので全部話す。

「何だか凄い所出身だったんだね。知らなかったよ、そんな場所があるなんて。それにここに居るのも偶然召喚って形で来ただけで、迎えが来るまでこの世界を見て

回る為に冒険者に……」

「結界で隔離って……私たちが想像もつかない程の凄い魔境なのかな？ でも姉様の故郷、行けるなら行ってみたいな」

「何か今まで話さなくてごめんね」

「いや、気にしてないよ。だってわたしたち一言もフランちゃんに聞いてなかったし」

「右に同じく。後、それなら早く迎えが来ると良いね、フラン姉様」

そんなやり取りをしながら村長さんに軽く挨拶をした後、凶鑑を片手に山へと入っていった。そこで思ったのは、周りを見渡す度に幻想郷に良く似ている自然豊かな山だなぁと言う事だ。見た事がない動物や虫、植物等が存在するもののそれを除けば幻想郷そのものだった。

「しかもこの山、妖精さんまで居るんだね。余程居心地が良いのかなぁ？」

「そうだと思うよ。ここに居るのはこの環境からして『自然の妖精』、自然が豊かかつ水が綺麗な場所でなければ居ないからね」

「なるほど」

ミアとこの山について話しながら探していた時、ヴァーミラに声を掛けられる。

「ごめん姉様話の途中に割り込むけど、1束分の光癒草見つけて来た……」

「もうそんなに見つけたの？ 凄いね！」

どうやらいつの間にか1束分の光癒草を見つけてきてくれたらしい。私がそれをヴァーミラ受け取って魔法のバッグに入れようとした時、突然ミアが何かに吹き飛ばされて大木に叩き付けられた光景が見えた。

「あぐっ……」

余りにも唐突な出来事に、私とヴァーミラは対応する事が出来なかった。それはミアも同様のようで、構えを取る暇もなく吹き飛ばされたせいで、決して軽くない怪我をしてしまった。しかし、そこは人間なのに吸血鬼もビックリの自然治癒能力を持つ彼女であった。みるみる傷が塞がっていき、10分も経つ頃には殆んど治りきっていた。

「お父さん！ 大変なの、私のせいで人間が怪我を……」

「本当か!? 全くお前って奴は……それでその人間はどこに居るんだ？」

「ほら、あそこに……え!? 嘘、もう治ってる」

ミアの怪我もほぼ完治し、本人も続けられるから行こうとの意思を示した為、再び草探しをしようとした時目の前に突然2人の人間ではない存在が現れた。

「貴方たちは一体誰？」

「えっと……私がネイツ、こっちが父のシュゼ。この山に住む精霊よ」

どうやらこの2人は精霊らしい。詳しく話を聞いてみるとミアを怪我させたのはネイツの方らしく、不味いと思った彼女は治癒魔法の心得がある父シュゼを連れてきたとの事。

「なるほど、でもわたしで良かった。生命神の加護があるお陰ですぐに怪我が回復する体質があるから」

「……それでも、ごめんなさい」

「本当にうちの娘がすみませんでした。それで、貴女方はこの山に一体何の為に？」

シュゼからそう聞かれた私は、ここに光癒草の採取に来た事を伝えた。すると、お詫びも兼ねて良く生えている場所に案内してくれると言うので、ありがたくついていくことにした。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、久しぶりの休息

「凄い……光癒草こうゆそうがこんなに生えてる」

「姉様、ここにある草を取るだけで依頼達成出来そうだよ」

「確かに。でも、全部取ったとしてもすぐには帰らないであの村で1泊する予定。最近トラブル続きだし、たまにはこう言う所で休息を取りたいからね」

あの後、自然の精霊の親子に光癒草の群生地案内してもらった私たちは、のんびり自然を楽しみながら採取に励んでいた。生えているのが全て良い物だったら尚楽なんだけど、そうは都合良くいかない。折れてる草だってあるし、枯れてたり何故か花の部分だけ無い草とかもある為、良く見て選ばないといけないからだ。

まあ、たまには採取に時間を取られるのも悪くない。そう思いながら休憩を度々挟んで黙々と作業を続け、夕方になる頃には最低限の量の倍である6束を採ることが出来た。魔物も運が良いのか殆んど出ず、出たとしても精々ゴブリンやオーク等私とヴァーミラの敵ではない魔物たちであった。

しかし、初心者が採取しに来る場所としては危険度が高い。周りにも民家などは

あの村にしかなく、回復魔導師や調合師と言った怪我等の治療が出来る人が2人しか居ない事も相まって、Eランク以上の冒険者しか受けられないようにしてるのだろう。

「今日はありがとうネイツ、シュゼ！ お陰で今日だけで依頼を達成出来たよ」

「ありがとうございます」

「精霊さん、ありがとうございます……」

「いえいえ。こちらこそ怪我の件を許して頂けてありがとうございます」

こうして採取を終えた私たちは精霊の2人と別れて山を下り、村へと向かった。到着した後は村の人に聞いて分かった唯一の宿の所に行って、泊まれるかどうか聞く。すると、泊まれるとの事だったので今日は泊まり、明日の昼過ぎ辺りにエリユカルの町に戻ると言う流れに決まった。

「採取も採取で地味に疲れるよね。討伐系の依頼とかよりはのんびり出来る分マシだけ」

「まあ、色々身体を動かしてるからね。と言うか、フランちゃんが休憩少ないんだよ。いくら種族的に体力あるとは言え、もう少し休まない」と

「うん。分かった」

古き良き雰囲気のある宿の部屋から村の景色を見つ、3人で会話をしながらゆったり過ごす。もう既に依頼を達成出来る量は集まっているから、後はギルドに戻って採取した物全てを渡すだけとなっているので、あと2〜3日は居ようと思えばこの村に居る事は出来る。

これもカーテンド王国でたまたま貰った魔法のバッグと、光癒草自体の切った後の腐りにくく枯れにくい特性のお陰だ。

「じゃあ、明日はこの村でのんびり過ごそうかな。そう言う形になるけど大丈夫？」

「私は構わないよ姉様。じゃあ宿に入る前に決めたあれば無しって事だよね」
「わたしも、取った草とかが大丈夫なら良いと思う」

2人もそう言うってくれた。その為、明日はこの村に滞在して景色のまんものやはあさふふや現地の料理を食べ歩いて過ごすことに決まった。そう言えば、ほんの少し前に明日の昼過ぎ辺りに戻ろうと決めただけだったけど、まあ良いか。

今度こそ本当に明日の予定が決まったし、食事も身体や服の汚れ落とし等も済ん

でやることがなくなつたので、そのまま眠りについた。

そうして翌日の朝、いつも通りに起きた私たちは宿から一旦出た後、村の内部をのんびり歩いてきた。最初に来た時は採取の依頼もあつてあまり良く見れていなかったのも、時間が沢山ある今が計画通りに景色を堪能するいい機会となつた。

「何かやたらと村の人たちの視線を感じるね、フランちゃん」

「宿の人に聞いたけど、ここに観光目的で来る冒険者の人とか殆んど居ないらしいよ。それに加えて私とヴァーミラは吸血鬼だし、余計珍しいんじゃないのかな？」

「確かに姉様の言う通りかも。それに格好もこの村の人たちと随分違うし、目立つのは必然って事だね」

まあ多少気にはなるけど、カーテンド王国で感じたあの時の負の感情が込められているような感じではないし、攻撃された訳でもない。それらの点からそんなに深く考えなくても良いやと思つたのでそのまま村歩きを続けていると、私たちの視界に大きな水の入った桶を持ってどこかに向かっているお爺さんが入る。

どう見ても重くて辛いと分かる顔をしているので声を掛け、私たちが代わりに目

的の場所に運んであげる事を伝える。

「済まんの、共同の冷凍魔法倉庫まで運んでくれるか？」

「冷凍魔法倉庫？ お爺さん、もしかして氷が欲しいの？」

「ああ、そうじゃ」

「ふ〜ん……ヴァーミラ、お願い」

「分かった……『凍って』」

何に使うのかは知らないけど氷が欲しいらしいので、ヴァーミラに頼んで桶の水を全て氷に変えたら、大袈裟な位感謝してくれた。

ついでに細かく砕いてもらえると嬉しいと言ってきたので、桶の水をまずはそのお爺さんの家まで運んでいつも作業をする場所まで持っていき、上手いこと桶から出した後に力を加減して氷を叩いて砕いた。

「えっと、こんなものかな？」

「少し大きい感じもするが、良い感じに砕いてくれて助かったぞ。それにしても、素手で砕くとは……流石吸血鬼、凄い力じゃの」

「良い感じ？ それは良かった！」

「どうやら、お爺さんのほぼ望み通りの大きさに砕く事が出来たようだ。これでやる事は済んだので、お爺さんの家を後にして再び村歩きを再開した。」

その道中畑仕事をしている人や店番をしている人等、出会う人の殆んどから挨拶をされたのでその度に挨拶し返す。今まで来た町ではこんな事はなかったので、私が見えもつかないほど外から来た人が珍しいのだろう。多分だけど。

そんな感じで村の事情を考えつつ、ヴァーミラやミアと会話しながら歩いていくと、突然前の建物の扉がバラバラになって壊れてしまったのを見た。それは、奇しくも私が能力を使って物を壊した時と良く似た……いや、同じだと言っても差し支えない壊れ方だった。

「え!? 私能力使っていないよ……ね?」

「姉様、大丈夫? どうしたの?」

「あ、実はね……」

今日の前で起こった不思議な現象に、自分が能力を無意識に使ってしまったのではないかと、思わず大きな声で驚きを表してしまふ。当然、突然大きな声を出した私に隣で一緒に歩いている2人が一体どうしたのかと聞いてきた。なので、自分

の能力の事を詳しく説明をしながら、併せて理由を説明する。

「強すぎない？もしそれを魔物とかに使ったら一撃で爆殺出来たり？」

「多分ね。まあ実際に魔物がどうなるか分からないし、強い魔力持ちには抵抗されないとも限らない。それにヴァーミラの能力と同様のデメリットがあるから、使いすぎると動けなくなると思うから、何にでもホイホイ使う訳じゃないよ。最終手段、かな」

そんな感じで会話をしていると、壊れた扉だったものが少しずつ修復されていき、2〜3分もすると完全に元通りになると言う更なる不思議な現象を目撃した。

「……どうなってるの？」

「理解出来ないよ、わたしには」

「私が知らない魔法の効果かもしれないね」

そう3人で話し合っているとその修復された扉が開き、中から男の人が何人か話ながら出てきたのを見た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、皇国の魔法研究者と遭遇する

「よし、実験は成功したぜ！ 形状記憶魔法、上手く行ったみたいだ」

「これで次の魔法研究会の大賞は僕たちで決まりですね！ 普及したらきっと、皆喜ぶだろうなあ」

「いや、まだ効果時間も短すぎる上に消費魔力も大きすぎる。その魔法は一般人向けなのだろう？ どう考えても魔導師しか使えなようなこの状況だと大賞は無理だろう」

「じゃあどうしろと？ 研究会まで残り1ヶ月を切ってるんだぜ？」

「どうやら、中から出て来たのはノストライト皇国の研究者らしい。さっきの破壊された扉が自動で組上がって修復されたのも、彼らが開発した『形状記憶魔法』と言う魔法によって引き起こされた現象だったらしい。こんな小さな村に拠点を構えているのは、実験がしやすいからかな？」

「うーん……ここはやはり当初の予定のリジエネ系の回復魔法改良にした方が」

「おい、あの時の失敗を忘れたのか？ ひでえもんだったな、あれは」

「確か効果……」

「あーあーあ!! それ以上言わないでくれ! 頼む」

「はいはい分かりましたよ。それよりうるさいから少し黙っておけ。さっきから3人の……いや、2人の吸血鬼と1人の回復魔導師らしき女の子に注目されてるぞ」

「「え? 吸血鬼……ぶっ!」」

そう3人の内の1人が言うのと、もう2人の研究者がほぼ同時にこちらを向いて私たち、正確には私とヴァーミラを見て吹き出していた。流石に全部のやり取りを見ていたのは良くなかったかも知れない。

そんな事を考えていると、研究者たちが近づいてきて話し掛けてきた。

「さっきから俺たちを見ていたが、何か用事でもあるのか?」

「いや、そう言う訳じゃないんだけどね。ほら、さっき扉が壊されたのに自動で直ったでしょ? あれが不思議で見てたら、貴方たちが出て来て……」

「ああ、その時の形状記憶魔法をか。まだ未完成なんだけど……ここじゃなんだから、家で話さないか? 君たちの予定がなければなんだが」

研究者たちからそう提案された。今日に関して言えばのんびりしているだけな

ので、特に予定はない。何かを企んでいると言う訳ではないみたいだし良いかなと思っただので、その誘いに乗ることにした。

扉を開けて中に入ると、見た事のない魔法道具が所狭しと並べられた、いかにも何らかの魔法の研究をしている雰囲気が出ている部屋だった。こんな狭い場所で座る場所があるのかと思ったら、もう1つの広い奥の部屋に案内された。

「ねえ、妙な感じがしない？ この部屋」

「ん？ ああ、それは遮魔の結界が張られてるからだろう。攻撃魔法の試し撃ちをする為にも使っているからな、この部屋」

入った瞬間に何とも言えないような感じがしたが、それはこの部屋に遮魔の結界が張られているかららしい。確かに、室内で攻撃魔法の試し撃ちをするにはそれくらいに備えが必要だろう。

そんな事を考えながら椅子に座り、出された紅茶を飲みながら魔法談義に花を咲かせた中でも、私が持っていたこの魔導書を見た時の彼ら3人の反応は凄かった。曰く、何年も前に引退したとある有名魔導師の書いた物で、かなり部数が少ない書だとの事。

そう語る研究者たちの話を聞いて、何故あの時これをくれた人はそんなにも貴重な魔導書を簡単に手放したのだろうと自分なりに理由を考えてみた。しかし、それだけ考えても最終的には『興味がない』と言う理由に行き着いてしまうので、これについては考えるのを止めた。

「そう言えば、最初はリジエ系の回復魔法を開発しようとしてたんだよね、貴方たちって」

「そこまで聞いてたのか。まあ、そうだけど……」

「実は言うミアはね、独学で1つそう言う類いの魔法を開発してるよ」

「……へ？」

「もし良かったら参考の為にわたしの魔法、見ます？」

ここに来る前、研究者たちがそんな話をしていたのを思い出したので思い付きで言ってみた所、驚きのあまり固まって動かなくなってしまった。それを見たミアが参考がてら、自分で開発・実用化させた回復魔法『ホーリーヴェール・リジエネ』を研究者の1人に試し掛けした。

「これが、ミアの開発したリジエ系回復魔法か……凄いな。全てを癒してくれそ

うな命の奔流を感じるぞ」

「何だか光の衣を纏った神様みたいになっていますね。そう言えば、この魔法の持続時間はどの位なのですか？」

「わたしが使えば1時間は持ちますよ」

「何それ凄い……」

その後、流れで研究者たち3人に条件付きでこの魔法を教える事となった。ミアが発動のコツを簡潔に教え、それを研究者たちが実行する。しかし、これは回復魔法のエキスパートである彼女ですら今現在発動させるのが5回が限度となる位魔力消費が激しい。案の定、1回もしくは2回発動させようとしただけでへたり込んでいた。

「っ！これは魔力の消費が激しいし練習するにも厳しいが、それだけ強力な魔法なのであろう」

「まあね。と言うかそもそもその話、回復魔法のエキスパートが独自開発した回復魔法を専門外の僕たちが本来の効力で発動させるのは無理じゃないの？」

「いや、意地でも発動させて見せるさ！」

そうは言ったものの結局彼らの中の1人が、本来の効力は厳しいと言う事で20分の1程度の劣化版ホーリーヴェール・リジエネを発動させる事が出来るようになるまで研究所兼自宅にてひたすら教える。その間手が空いた人から私やヴァーミラはその対価として、気になっていた形状記憶魔法『シエルメリオル』を教えて貰い、未完成な上に劣化版ではあるが、発動させるレベルにまで達した時にはもう既に日が暮れていた。

なのでお互いに良い取引が出来た所で、研究者たちと別れて私たちは宿へと戻る事に決めた。

宿に戻った後は出された夕食をのんびりしながら食べ、魔法で身体を綺麗にしてから眠った。

そうして次の日の朝、出された朝食を取った後直ぐに馬車に乗り込み、エリュカルに戻る。その後はギルドに立ち寄り、取った光癒草こうゆそうを全て渡して報酬を貰った。

「フランちゃんおめでとう。これでようやくCランクだね！」

「うん。これからも頑張って——」

採取依頼を達成したタイミングでランクアップし、これからも頑張って行こうと

気合いを入れようとしたその時、兵士が2人と見覚えがある子供が1人、ギルドの中に丁度良いタイミングで入ってきた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、皇国兵士とやり合う

「兵士さま、アイツです！ あの吸血鬼が……！」

「ふむ、あやつがトーラ様を？」

「はい。確か3日前に私のお友達とただ楽しく遊んでいただけなのに、突然現れてその力で殺そうと……うう」

良く見たら、あの時1人の女の子を恫喝していた集団のリーダー格の1人だった。ギルドに入ってくるなり私を指差してとんでもない事を言い始める。当然、それを聞いた周囲の人たちの視線は大半が私を向いた。

彼女の発言から大方、あの時の恨みを晴らしにでも来たのだろうと予想がつく。全く、あれが嫌だったらあんなことしなければ良いのにと呆れていると、付き人らしき兵士の2人が私に近付いて来た。ご丁寧に銀の鎧に銀の剣と槍を装備していることから、その子供の言う事を信じて私を捕縛ないし殺す為に相当準備をしたのだろうと推測出来る。

「と、言う訳だ。吸血鬼、殺されたくなければ大人しく捕まってもらおうか」

「その前に1つ聞くけど、私の言い分は聞いてくれないの？」

「人を殺りかけた奴の話の話を聞いてくれると思っただか？ 貴様は随分おめでたい頭をしている様だな」

「あ、そう」

これは駄目だ。あの2人の兵士はトーラとか言う子供と言う事を無条件で信じ込んでいる。流石貴族の子供と言うべきか、物凄い権力だ。

「じゃあ良いや、もう。言っておくけど、身に覚えのない罪で大人しく捕まる程私は馬鹿じゃないから」

「そうか……」

そうして、関係のない人が沢山居るギルドの中にも関わらず剣を構える兵士2人。なるほど、何においても貴族であるトーラが優先、周りがどうなるうが知ったことではないと言う訳か。

戦闘となるのは確実だけど、銀の剣や槍による攻撃に当たりさえしなければ特段危険な相手と言う訳でもないのが、相手から感じる魔力より読み取れる。

「ならば、ここで死んでもらおうか」

こうしてギルド内部にて戦闘が始まってしまった。このままでは受付ごと戦いなかで消し飛んでしまうので攻撃を避けつつ後退し、敷地内にある魔法練習場まで誘い込む作戦を実行する。その際に苦戦しているかのようには演出し、彼らを油断させるのも忘れない。誘い込んでからが本番なのだから。

「こいつ、そんなに強くなさそうですね！ たかが兵士たる俺たちの攻撃を避けるのが精一杯みたいですから」

「ああ、このまま畳み掛けるぞ」

そうして上手く魔法練習場に誘い込めたので、ここから反撃を開始した。

『禁忌レーヴァテイン』！

「なっ！」

まずは火力控えめのレーヴァテインを剣持ちの兵士に手加減して振り下ろし、油断しきっている彼らの意表を突く。

1人は上手く避けられたが、もう1人の避けられなかった方の兵士は銀の剣で防御を選択した。

「ぐっ……ううおおー!!」

「ほらほら、もっと力入れないと駄目だよ！ 強くないんでしょ、私ってさあ！」
私のレーヴァテインを兵士が防いでいる間に、魔力で浮遊させた魔導書を見ながら、もう1人の兵士に魔法を発動させる。

「こっちの兵士さんにはこれね！ 『魔導^{マジカルアロー}の矢』」

「なんだと……剣と魔法を同時に扱える魔導師だったのか!? くそっ！」

展開した魔方陣から、私の純粋な魔力のみで構成された矢を複数同時に発射し、相手を射抜く魔法を発動させた。と言っても、今回はあくまでも手加減しているの
で、貫通力は低下している。

「吸血鬼の攻撃に対する耐性がある鎧の上からダメージを与えてくるだと……? しかも何本かの矢は俺を追尾してきた、何て奴だ……」

そうは言うものの、まだまだ平気そうだ。どうやら彼らの着ている鎧には吸血鬼の攻撃に対する耐性があるらしく、当たっても予想以下のダメージしかないようだった。まあ、手加減している上でのダメージならこれ位が妥当かな。

その後はレーヴァテインでもう1人の兵士を押さえるのを止めて鏢迫り合いから解放した後、直ぐに薙ぎ払って吹き飛ばして更に弾幕で追撃する。

「おい、こいつ強いじゃないか……一介の兵士の俺たちじゃあ歯が立たないぞ！」

「慌てるな、もうすぐ隊長がやって来るからそれまで何とか耐えるんだ！」

「隊長ね……貴方たち、私の事を強くないとか言っておきながらこんなものなの？」

「

「くっ！言わせておけば……」

相手の攻撃を避けつつ、魔導の矢をたびたび発動させて相手の体力を少しずつ奪っていく。そんな事を繰り返す事5分、とうとう体力の限界が来た兵士の2人がその場に膝をつき、息を上げた。

「で、どうするの？まだやる？」

「……」

「殺すのなら殺せ、吸血鬼！」

「いや、そうするつもりはないよ。それよりも、皆が居る所でやってもいないし、証拠もないくせに人殺ししかけた奴呼ばわりして、私の印象が少なからず悪くなったよね？このままだと冒険しにくくなるかもしれないからさ、それについて何か一言もらえる？ねえ」

多少威圧感を出し、私の名誉を回復させる事を兵士2人に要求すると、完全に黙りこんでしまった。これは完全に威圧が裏目に出たか、あのトーラとか言う子供の家にとんでもない権力があるから逆らえないのどちらかだと思っていると……

「あくあ。だから言ったのに……穏便に捕まえろと。この様子だと、なめてかかったは良いものの余裕でポコポコにされた感じかな」

遠くの方から複数の兵士さんを連れた、恐らく隊長だと思われる女の人がやって来た。流石隊長さんとだけあって、ここに居る兵士の皆よりも遥かに強いと言う雰囲気を感じる。

「隊長！ 申し訳ないです」

「同じく、申し訳ありませんでした」

「まあ、過ぎた事は仕方ないね。とにかく、リフレットウールミラー真映鏡を無理言って借りてきたから、これで真実が明らかになると思うよ」

「え……あらゆる嘘偽りを見破り、真実を明らかにする貴重な魔道具を一体どこで借りて……」

「コネだよ、コネ」

「何で隊長がそんなに凄いコネを持っているんですか!？」

彼らの話を聞く限りどうやら、今から真映鏡と言うとても貴重な魔道具を使って真実を明らかにしようとしているらしい。

「じゃあ吸血鬼さん、今から質問するから答えてね〜」

「うん、分かった」

そう言うと隊長さんは私を鏡に映しながらいくつかの質問をしてきたので、それに全て正直に答えた。次に兵士を連れてきたトーラを呼んで、鏡に映しながら質問をして答えさせた。その際、彼女の顔が若干ひきつっていたのが見えた。

そうして全ての質問を終えた隊長が鏡に対してこう問い掛けた。

「吸血鬼フランドールを、人殺しの罪に問う事は可能か？」

すると、特殊な波動が辺りに伝わった後に鏡から透き通るような女の人の声が聞こえてきて……

『吸血鬼フランドールの言う事に嘘偽りは一切存在しません。ですが、人間のトーラの言う事の殆んどに嘘偽りが存在します。つまり、フランドールに人殺しの罪を問うことはどう解釈しようが不可能です』

その瞬間、真実を明らかにする魔道具によって私の言い分が全部認められ、無実が証明される事となった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、魔法祭に向けて練習を始める

小説の後半、都合により時間がちよくちよく飛びます。

「フラン姉様、大丈夫だったの？」

「うん、まあね。リフレクトウォールミラー真映鏡リフレクトウォールミラーって魔道具のお陰で見事に無実が証明されたし。それに、まさかあれに貴族の権力が効かないほどの力があるなんて思いもしなかったよ。だって、貴族の子供の言ってた事を全部戯れ言で片付けてたもん」

あの後、トーラの狂言が真実を映す魔道具によって発覚した為その場で無罪放免された私は、何とか努力した事によって名誉へのダメージも最小限に抑えることが出来た。

それにミアによると少しの間、私と兵士さんが室内で戦った影響で備品のいくつかが壊れたりはしたものの、ギルドの建物自体へのダメージは本日中に修復可能なレベルであったらしい。怪我人も奇跡的に出なかったとの事。

「そう言えば、壊れちゃった備品の弁償って誰がするの？ 私かな？」

「うーん……そうなるかもしれないね」

「だよね。全く、こうなったのもトーラが言いがかりつけてくるからだよもう！」
採取依頼を終えて帰って来たちようど良いタイミングでのトラブルに、若干苛立ちながらギルドの休憩スペースでミアと話していると、1人のエルフが私たちの元に近付いてきた。誰なのかと聞いてみた所どうやらエリユカルのギルドマスターらしい。

「フランドールさん。それですすね、備品の賠償の件なのですが……様々な事情を考慮し、それに加えて隊長さんとの話し合いをした結果今回は貴女ではなく、こうなった元凶のトーラさんの家に請求することになりました」

「あ、本当に？ でも大丈夫なのそんな事して。私が言うのもなんだけど、相手は貴族なんだよ？」

「はい、大丈夫です。この国での真映鏡の影響力は皇帝の側近クラスに匹敵するの
で。まあ、それでも貴族が牢に入れられる事は何故かないみたいですけど」

と言う事は、この鏡の判定結果を覆すには最低でも皇帝の側近クラスの権力が必

要と言う訳か。そりゃあそこらの貴族だと太刀打ち出来ないな。

そんな事を考えていると、エルフのギルドマスターが再び声を掛けてきた。

「ただ、それでも稀に納得しない貴族の方もいらっしゃる様で、秘密裏に襲撃者を雇ったりする事もあるみたいです。けど、その際はこの国の皇帝から公式に『襲撃者の殺害』とその雇い主が判明した場合にのみと言う制限付きですが、『言い値での賠償請求』が認められています」

「うわぁ……面倒な。どうか来ないで欲しいね」

なるほど。公式に許可されているなら多少は楽だけど、それでも来ないに越したことはない。どうかトーラの所の貴族がその稀に入らない事を祈るのみだ。

そんな事を考えながらエルフのギルドマスターも含めた4人で会話をしていた時、ギルド内に貼り紙を何枚か張っていく魔導師らしき格好をした人を目撃した。一体何だろうと思った私はその貼られた紙の方まで行って見た。

「えっと……エリユカル魔法祭？」

そこに書かれていたのは、3週間後に開催されると言うエリユカル魔法祭についてだった。町外れにある使われなくなったコロシウムを改装、色々な事に使える

ようにした円形多目的会館で開催されると書いてあった。

魔法を使った物であれば何をしても良いらしく、魔法自慢をするもよし、魔法を取り入れた試合形式で戦うもよし、新開発の魔法を披露するのも良いらしい。

祭りと言うだけあって優劣を決めるのではなく、各々の欲求を満たして魔導師たちや観客たちが純粹に楽しむ為だけに開催されるらしいが、この祭から皇国の魔導師協会や守備隊、果ては他国やギルドからの誘いが来る事がある為、各種大会並みに気合いを入れてくる人も多いらしい。

「ねえ、ヴァーミラ。この祭凄く面白そうだから参加したいんだけど、良いかな？もし良ければ貴女と一緒に弾幕ごっこを披露しようかなって」

「姉様に参加するって言うなら。後、弾幕ごっこって何？」

「えっとね……」

ヴァーミラにそう聞かれたので弾幕ごっこについて詳しく説明し、私が魔法祭に参加してやりたい事も平行して説明する。

「なるほどね。私と試合形式で戦って楽しみつつ、故郷に戻った時に遅れを取ることはないようにしたいと。良いとは思うけど、当日ならともかく練習している間、

ミアが暇をもて余さない？」

「あっ……」

失念していた。言われてみればその通りだ。

改めて貼り紙を見てみると、魔法祭が始まるまで3週間と書いてある。私たちは練習で暇の大半を潰す事が出来るが、ミアはその間見ている事しか出来ない。じゃあ1人で自由に行動してもらおうとお金を渡して行きたい場所へ行かせるにも、色々な不安要素がある中戦闘能力の無い彼女に何かあれば対処出来ない為、危険だ。そう考えると、やはり魔法祭への参加は諦めるべきかなと思いはじめていると、ミアが口を開く。

「フランちゃん、参加したいんでしょ？ その間わたしは回復魔法の開発でもしてるから大丈夫……」

そう言っていた途中で少しの間沈黙した後、再び話し始める。

「強いて言うなら、この町を出たら『ミロミス』って名前の村に寄ってもらえると嬉しいかな。師匠の故郷だから、もしかしたら会えるかもしれないし」

「もちろん、そんな事ならお安いご用だよ！ 私もミアの師匠、どんな人か気にな

るし」

話し合いの結果、魔法祭当日までの3週間暇にさせる代わりに次の目的地がミアの師匠の故郷、ミロミス村と言う事になった。当然、3週間までなら彼女が居たいと言えば居る事になる。

こうして早速魔法練習場に行き、ヴァーミラと共に弾幕ごっこの練習が始まった。まずは通常弾幕の出し方を教え、上手く扱えるようになるまでひたすら発射させた。カーテンド王国でジェノに教えた経験が多少なりとも活きたのか、それとも魔力の高い種族ゆえなのか、とにかく理由は分からないが、たった7時間半程である程度出せるようになるという飲み込みの早さを見せてくれた。

そして3日目にもなると、通常弾幕に関して言えばもう戦闘でも余裕で使える位のレベルに達した。なので、次はスペルカードを作ってそれを使った擬似的な弾幕ごっこを始める。吸血鬼の身体能力と、ヴァーミラ自身の生きてきた中での経験が相当濃かったのだろう。弾幕ごっこが初めてにも関わらず、地上でも空中でもまるで経験者のような動きをしていた。

「ヴァーミラって、今まででこれと似たような戦闘経験をしたことがあったりした

の？」

「80〜100年位前だったかな。吸血鬼狩りヴァンパイアハンターがうじやうじや居た時代に、嫌と言う程浴びせられる攻撃の嵐を避けて反撃して生き延びて来た時の経験と似てる気がする」

なるほど、いつでも吸血鬼狩りから攻撃されるような激動の時代を生きた経験があるんだったら納得だ。

更に9日目ともなれば、もうある程度の弾幕ごっこにも耐えうるレベルにまでヴァーミラの腕が上達した。彼女がいつの間にか作っていた、蒼く輝く長弓から紅い稲妻を纏わせた蒼い矢を放つ技をレーヴァティンで受けた時、その威力には驚いた。なんて名前の技なのか聞いたら、まだ決めてなかったらしい。後で考えておいてあげようかな。

その後の日はひたすら弾幕ごっこと休憩を繰り返し、必死に腕を磨く事に全力を注いだ。

そして練習を始めてから3週間、遂に魔法祭当日となった。

「よし。遂に本番だね、ヴァーミラ！ まあ、大会じゃないから気楽に行こう」

「まあね。お祭りだし」

こうして、良い感じに仕上がった状態で魔法祭に向かう事となった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、氷炎の中で舞う

後半、別の人物視点からの話になっています。

「ここが多目的円形会館……これなら本格的な空中戦が楽しめそうだね」

「確か、魔法やその他の攻撃が会場外に飛び出すのを防ぐ為に結界が張られてるんだよね。確かにフラン姉様の言う通り、町中で空中戦を楽しむにはもってこい……」

ギルドの魔法練習場から出発してから30分、魔法祭が開かれる会場に到着した。3週間掛けて良い感じに仕上がった弾幕ごっこを、大勢の観客の前で披露する事になるのだと思うと何だか緊張するけど、それ以上に楽しみとワクワクの方が上回っている。それだけではなく他の人の魔法を見たり、周辺の店が出張屋台を出したりするらしく、その料理も楽しめたりもするとの事なのでかなり飽きにくいように考えられているのも、この魔法祭の良い所だと思う。

「えっと……確か魔法を披露する人の受付はあそこだったね姉様」

「うん。あ、そう言えばミアはどうするの？ 観客席で見てる？」

「いや、わたしも出るよ。ちょうど開発中の回復魔法が良い感じな所まで来たから。とは言え、まだまだ完成とは言い難いんだけど」

「なるほど。でも、新開発中の魔法を披露しても大丈夫なの？ 色々問題が起きそうだけど」

「大丈夫だよフランちゃん。色々な出来事を想定して手を打ってあるから」

「どうやら、ミアも新開発中の回復魔法が様になって良い感じの所まで来たらしく、その披露をしたいらしい。完成してからのの方が安心な気もするけど、本人が良いなら良いのかな？」

そんな事を考えながら、3人で受け付けを済ませた。私とヴァーミラは試合形式での魔法対決の為、1番最後の出場となるらしい。何でも、試合形式で申し込んできた人は最後の方に回される決まりがあり、しかも今日は私とヴァーミラだけだからとの事。多分、盛り上がる試合形式の魔法対決は最後まで取っておこうと言う、運営の考えなのだろう。ちなみにミアは私たちの1つ前である。

「なるほどね。じゃあ随分時間がありそうだから、他の人の発表を見ながら屋台の

食べ歩きでもする？」

「まあ、そうなるよね。当然、わたしはそれでいいよ」

「右に同じく」

出番が来るまでかなりの時間暇をもて余す事になる為、それまでどうするかも話し合った結果、無難に他の人の発表を見てから屋台の料理の食べ歩きをする方向に話はまとまった。

と言う事でまずは観客席に移動し、他の人の発表がされているのを見る。流石、魔導師協会や守備隊にギルドから誘いが来ることもあるイベントだけあり、楽しむための魔法祭とは言え腕の立つ魔導師だらけである。中級魔法が飛び交うのは当たり前、上級魔法を扱える人ですらそれなりに居る。

「ねえ、これって本当にただの楽しむ為のお祭りなんだよね？ 結構レベル高くない？ 姉様」

「それほど誘いが来て欲しいんでしょ、多分ね。まあでも、皆楽しそうな表情してるからプレッシャーにはなってるなさそう」

「なるほど」

そんな話をしながら中盤辺りまで皆の披露する魔法を見た所で、ちょうど30分の休憩時間に入った。なので、そのタイミングで観客席を立って屋台の立つ場所へと向かう。

観客の人たちも私たちと同じ考えで来ているらしく、屋台エリアは多種多様な種族の人でごった返していた。当然、そんな場所で羽を展開していたら邪魔なことこの上ない為、収納する。

「これ、休憩時間内に観客席に戻れるのかなあ」

「フランちゃん、ほぼ全部の屋台に1時間待ちって札が立ってるよ。何か2時間待ちって所も」

「うわあ……流石に2時間は待てないね。私たちの出番が近いから」

「じゃあ適当に1時間待ちの所に並んどこう。どれも知らない食べ物だらけだから……」

そうして適当な屋台の列に並び、魔法談義に花を咲かせながら待つこと1時間以上、ようやく料理を得る事が出来た。想像以上に待ち時間が長く、待たないで食べられる料理を出す屋台に並ぶのは諦め、出場する人たちの待機場所に向かった。

「え、次はミアの番!? もしかして出番が繰り上げられたのかな? 危ない危ない」
「屋台から戻ってきたらいきなり出番が近いって……まあ、頑張るよ」

少し待つと、ミアが呼ばれてスタッフさんに誘導されて待機場所から出ていった。どんな回復魔法を開発しているのか見たかったけど、ここからはまともに見えない上に私たちの出番が次である為、観客席から見ることにも不可能だった。

待つこと15分、待機場所にフラフラになりながらミアが現れてきた。話を聞くと、新開発中の回復魔法は消費魔力の調整がまだ出来ていないらしく、使った瞬間に高確率でこうなるらしい。

「お疲れ様、ミア」

「……うん。フランちゃんもヴァーミラちゃんも次だよ。頑張ってね」

「もちろん!」

こうして、遂に私とヴァーミラの出番がやって来た為、空中戦に備えて羽を展開してから会場へと向かっていった。

「ピリアームさん、良いんですか？ ギルドマスターの仕事放り出しても」

「問題ありません。最優先事項は全て終わらせてきましたからね。そんな事よりも、次で最後の発表ですよ。何でも、今回の魔法祭で唯一試合形式の披露になるみたいですから、楽しみですね！」

「あはは……好きですもんね、そう言う派手な魔法が披露されるのが」

エリユカルのギルドマスターの助手を勤めている僕は今、彼女に半ば強制的に魔法祭に連れていかれていた。まあ、毎年の事なんでもう慣れたけど。

それに、試合形式の披露と言うのは毎年行われる魔法祭の中でも珍しい為、正直僕も気にはなっている。今回に限って言えばピリアームさんに感謝しないと。

「え〜。それでは本年の魔法祭最終発表となります、金髪で紅い瞳の吸血鬼フランドール、黒髪で琥珀色の瞳のヴァーミラ、彼女たち姉妹による試合形式での魔法戦闘です〜」

心の中で次の発表の事を考えていると、司会の人がそう言った。それにしても、吸血鬼の姉妹が出るとはこれまた非常に珍しい……と言うか初めてじゃないか？

そう考えていると、司会の人と言う吸血鬼姉妹が登場した。瞬間、会場は大いに

盛り上がった。余程派手な魔法を披露してくれそうだから、皆期待しているのだろう。

すると、早速彼女達2人は空中に飛び上がって魔法の披露を開始した。初っぴなから中級魔法の撃ち合いとは、流石吸血鬼と言った所か。

「やっぱり避けるよね！じゃあ本番、行くよー！」

金髪の方の吸血鬼フランドルがそう言った瞬間、彼女の周囲に綺麗な色をした無数の光弾が現れ、それが嵐のように黒髪の吸血鬼ヴァーミラに襲いかかる。と言うか、中級魔法の撃ち合いはウォーミングアップだったと言う事に驚いた。仮に並の実力者が彼女達と戦えば、お遊びだったとしても負けるだろう。

そう考えながら見ていると、ヴァーミラがああ光弾の嵐を見事に飛びながら回避しているのを見た。あれを避けるとか化け物かな？

「姉様、今度はこちらから行くよ！『天水降りし水星』」

「早速来たね！『禁忌レーヴァテイン』！」

次はヴァーミラの反撃だ。彼女がそう唱えると、上空の結界ギリギリに展開された魔方陣から猛烈な冷気を放つ氷の弾が落下し、フランドルに襲いかかる。結果

越しに伝わってくる冷気を放つ魔法とか、僕が食らえば冗談抜きで死ぬだろう。しかし、そこは吸血鬼。かなりの高温の炎を纏う剣を使い、迎え撃つか避けるかして全て捌ききった。

「ならば『禁弾 スターボウブレイク』、これならどう!？」

今度はフランドールが、自身の羽に付いている綺麗な石を象ったカラフルな光弾を打ち上げてから降らせる。それに込められた魔力・速度・手数は先程の物を大きく上回っている。流石に避けきれなかったのか、何発か被弾したようだ。

その後も氷属性魔法と火属性魔法に加え、光弾が飛び交う迫力のある魔法戦闘が繰り広げられる。それを見る限り、フランドールの方が優勢のようだ。

「ああ、やはり姉様は強いなあ。じゃあ、これで最後のスペルカード……『神滅ミストルテイン』」

どうやらこれが最後の魔法のようだ。蒼く輝く長弓を生成、そこから紅い稲妻を纏った蒼い矢をつがえて、そして放つ。これには上級魔法を扱えるピリアームさんもびっくりしている。

対するフランドールも、持っていた炎剣の炎を増大させて迎え撃つ。

そうして両者一步も引かない接戦が続いた後、不意に蒼い矢が爆発を起こして辺り一体が蒸気に包まれ、何も見えなくなる。

「っ！ 姉様が……いない!?!」

「後ろだよ!」

蒸気が消えた後、背後に現れたフランドールが光の弾を叩き込んで吹き飛ばし、飛ばされたヴァーミラは地面に勢いよく叩きつけられた。今ので彼女の体力が尽きてしまったらしく、フランドールに対して降参の意を表し、これにて試合形式の披露は終了した。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、ミアの師匠の故郷へと出発する

アンケートは11月7日(木)の正午まで受け付けていますので、よろしければ回答の方をお願いします。

※場合によっては時間が多少延びる可能性があります

魔法祭での戦闘の後、魔力を急に多く使った事による疲れを癒す為に宿へと戻る……筈だったのだけど、ひっきりなしに魔導師や何やってるのかよく分からない人に話し掛けられていた。会場からは出られたものの、休憩場所まで追い掛けられでは困るので色々な所を逃げ回り、未だに宿に到着すら出来ていなかった。

「あゝ。私たち、好きで冒険者やってるからそう言うのは受け付けてないんだよね」
「そうそう。他を当たって」

私たちに声を掛けて来る人の目的の大半は、何しているか不明な魔導師組織への勧誘だ。確かに、あの戦いで目立っていたのは分かるけど、どうして怪しい雰囲気

を醸し出している人しか来ないのか。それだったら誰も来ずにいてくれた方が、こんな面倒な対応をしなくて良かったのに。

そう考えていると、私たちが疲れていて油断した一瞬の隙を突かれたのか、魔力を帯びた金属の腕輪をいつの間にか付けられていた。

「何だろう、これ？」

「姉様、これ付けられてから力が出しにくくなった……」

周りを見渡してみると、ゲスい笑顔を見せながらこちらへ近づいてくる剣士2人に魔導師が3人が居た。

「貴方たち、私に何か用事？ 疲れてるから手短にお願い」

「へへ、じゃあ1つだけ。俺達と一緒に来てもらおう。それだけだ」

「ふうん。断らせてもらうよ」

「まあ、お前らの意思など関係ない。無理矢理にでも連れていくからな」

「その封魔の腕輪を付けられている上に、魔法祭での戦闘で魔力を消耗している貴女たちに勝ち目は——」

余りにも隙だらけだったので私は能力を使って自分とヴァーミラの腕輪を破壊

し、ある魔法を唱えるべく魔導書を開く。

「「へ!?」」

「面倒だから、一気に行くよ! 『チェーンパラライズ』!」

こんな場所で弾幕や破壊力のある魔法を放つ訳にはいかない。なので、比較的安
全な当たった対象から複数に連鎖する麻痺魔法を唱える。

下手に放てば仲間や関係のない人にも連鎖して当たってしまう為、細心の注意を
払って発動させる。そうして出た鎖状の光が5人に連鎖、見事に麻痺の状態異常
を与えて全員の動きを完全に止める事に成功した。

「お掃除完了と……さてどうしようか、この人たち」

「姉様、放置しとこ? 誰かが見つけてくれるでしょ、きつと」

「うん、そうだね。あ、でもその前に一応……」

これだけではまた寝込みを襲われるとかしてしまいかもしれない。なので、多少
手荒でも全力で威圧してもう2度と来ないようにさせようと、地面に倒れて動け
ない彼らの内の1人の元に歩いて至近距離まで顔を近づけ、獲物を見つけたかの
ような雰囲気醸し出しながら一言だけ言う。

「次来たら、どうなるか分からないよ？もしかしたら貴方たちに『本気』を出す事になるかもしれないから覚悟しておいてね……フフッ」

「ひっ……ああ……」

「分かった、分かったから殺すのは止めてくれ！」

魔法祭でのヴァーミラとの戦いを見ていたからなのか私のこの発言は効果覿面だったみたいで、襲い掛かって来た集団の大半は動けないながらも必死に謝りながら逃げようとしていた。まあ、これでひとまずは大丈夫かな。

こうして、動けない魔導師と剣士の集団に脅しを掛けてまた来ないように確約させた私は、彼らを放置したままミアとヴァーミラを連れてこの場を後にした。

「これでやっと宿に行つて休めるよ……はあ」

「お疲れ、姉様。次は私にもやらせて」

「良いけど、やっぱりこう言うのは無い方が良いよ。面倒だし」

そんな会話をしながら宿へと向かい、この宿自慢の大浴場でこの世界に来てから初めての入浴をする。今まで汚れは全て魔法で綺麗にしていたのだけど、今回の様に戦闘等で疲れきった身体を癒すには入浴がちょうど良いからだ。

「ああ〜やっぱいいいね、これ。傷を癒すのは自然治癒か回復魔法で良いけど、酷い疲れを癒す手段としては入浴してからの睡眠に勝る物はないよ」

「そうだよねフランちゃん……あ、ヴァーミラちゃんこんな所で寝ちゃダメだよ！」

「……」

大浴場の心地よい暖かさに寝てしまったヴァーミラを上手い事起こし、上がった後はその余韻が残っている間にベッドに寝転がり、そのまま眠りについた。

そして翌日の早朝、目を覚ました私たちはミロミスへの行き方を聞く為、ギルドへ向かったら何だか若干騒がしい。またトラブルだったらいい加減嫌だなど思っている、こちらに気付いたエルフのギルドマスターが話し掛けてきた。

「あ、フランドールさん。貴女率いるパーティーの方々なら大丈夫だと思っんです
が、一応注意喚起を。実はですね……」

彼女曰く、この町に魔法祭に参加していた魔導師を狙い、無理矢理組織の一員にする『マジスト』と呼ばれる違法な組織が現れたらしい。

「しかし幸いな事に、この町に現れた組織のメンバーは計画を実行する前に裏路地で全員、何故か麻痺して倒れていたのが被害者はまだ居ない様で……後、その内の1人は発狂していたらしいです。何があったんでしょうね」

「……あはは」

「ああ……心当たりありすぎる」

「フランちゃん、それって昨日の……」

ミアの言う通り、昨日私が麻痺させて放置した人たちだろう。昨日出会った時から怪しい集団だと思っていたけど、まさか違法な集団だったとは。これは面倒な人たちに目をつけられてしまった、またトラブルなのかと心の中で思っていると、その様子を見たギルドマスターが質問してきた。

「どうしました？もしかして、麻痺させて放置したのって……」

「うん。私」

「では、1人が発狂していたのも？」

「多分、それも私が原因だと思う」

「……まあとにかく、そのお陰で計画は阻止出来たのですからお手柄でした」

そんな感じで若干引きぎみのギルドマスターとの会話中、危うく言いそびれそうになった本来の目的であるミロミスへの行き方を彼女に聞いた。すると、ギルドの2つ隣にある白い屋根の建物の中に居る人に、馬車と騎手を貸してくれるように頼めば行けるらしい。

「あ、でもフランドールさん達は地図渡して飛んだ方が早いかと」

「確かに私とヴァーミラでミアと手を繋いで飛んで行った方が早いけど、世界を冒険して回るのが楽しみだから馬車で行くことにするよ」

「そうですか。もう早速行かれます？ あ、一応地図は渡しておきますね」

「ありがとう！ そう言えば、貴女の名前を聞いてなかったような気がするんだけど、何て言うの？」

「えっとですね、ピリアームと言います」

「分かった。ピリアーム、改めて言うね。ありがとう！」

こうしてピリアームにお礼を言ってギルドを出た後、言われた場所に向かってそこに居た人から馬車と運転手を借り、ミアの師匠の故郷の村『ミロミス』に向けて出発した。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

第4章 主人公一行以外の人物・魔法解説

第4章の主人公一行以外の登場人物に、出てきた魔法の解説です。前半に人物、後半に魔法の解説と言う感じになっています。

何か間違い等があればご指摘の程を宜しくお願いします。

※今回は短めの解説となっています

《古い師ラスワ・ルーケルク》【種族】人間

ノストライト皇国貴族の『ノースティリア家』の妻で、的中率99%を誇る占い師。魔導師でもある。

貴族らしい考えを持っているがそれ以上に占いの結果を優先し、自身に近い人（夫や屋敷のメイド等）にも優先させようとするが、夫には何故か信じてもらえない。その為、いつも魔法で物理的な制裁を下している。

《山の精霊ネイツ》【種族】精霊

皇国のとある山に住んでいる精霊の女の子。かなり活発な為、ちよくちよくトラブルを起こしては父親を悩ませている。

実力はとある山の精霊の中でもかなり高く、1年程前には山を切り開こうとした業者の魔法防御を貫通させ、強力な睡眠・麻痺・毒・幻覚の状態異常を与える支援魔法で撃退し、断念させる程。

《山の精霊 シュゼ》【種族】精霊

皇国のとある山に住んでいる精霊の男性で、ネイツの父親。ちよくちよくトラブルを起こしているネイツにいつも悩んでいる。

実力はとある山の精霊の中でもトップクラスで、山を荒らす存在や魔物を強力な土属性魔法と水属性魔法で撃退する程。ネイツと同様、簡単な魔法防御なら余裕で貫通させる事が出来る。

《皇国貴族の子供 トーラ》【種族】人間

皇国のある貴族の子供。性格は人間の悪い所を煮詰めたような感じである。

いつも悪い仲間とつるんでいて、気の弱い子供を見つければ集団で弱い者虐め、大人を見つければ貴族の特権と子供ならではの策略を使って社会的に抹殺するのを楽しんでいたが、フランに出会ってからはどんどん転落していくことになった。

《エリユカルのギルドマスターピリアーム》【種族】エルフ

エリユカルの町のギルドマスターで、エルフの女性。非常に穏やかな性格で、戦闘を好まない。

ただ、種族を問わず他の人の魔法を見たりするのは大好きである為、近辺で魔法の大会や祭りが開かれる事を知れば仕事を無視して観戦しにいく困った一面も持つ。

【登場魔法】

《攻撃系魔法》

マジカルアロー
『魔導の矢』

純粋な魔力で作られた矢を展開した魔方陣から発射し、対象を攻撃する魔法。かなり自由が効く魔法であり、発動者の技量によっては追尾機能付与・各属性や状態異常の付与・破壊力の増大等の効果をつけたりする事が出来る為、級で分けられていない。

《防御系魔法》

『遮魔の結界』

魔法自体であればどんなに威力が高くてもほぼ防ぐ事が出来る防御系上級魔法。だが、魔力消費量がぶっ飛んでいる為戦闘用に使う魔導師は居ず、もっぱら専用の訓練所等に使われている。

《生活系魔法》

『シエルメモリオル』

皇国の研究者が開発した形状記憶魔法。この魔法を掛けた物はどんなに破壊したとしても、掛けた時の形に修復される。ただし、生物には使う事は出来ない上に効

果時間が短い為、掛けるのを忘れると地獄を見る事がある。

《支援系魔法》

『チェーンパラライズ』

特殊な光を放ち、当たった相手に超高確率で麻痺の状態異常を付与する中級魔法。近くに居る相手にも連鎖して当たる性質がある。

【登場オリジナルスペルカード】

『天水降りし氷星』

上空に展開された魔方陣から綺麗な輝きを放つ氷の弾を雨のように降らせ、攻撃するヴァーミラの使用するスペルカード。中には追尾効果のある弾や、不規則な軌道の弾もある為、回避は結構難しい。

『神滅ミストルテイン』

蒼く輝く長弓を生成し、それに紅い稲妻を纏わせた蒼く輝く矢をつがえて放つ、ヴァーミラの使用するスペルカード。フランのレーヴァテインとほぼ同等の威力

を誇る。氷結の状態異常付与に光属性の敵に対する非常に強力な特効効果も存在する。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

第5章 ノストライト皇国 ミロミス編

フラン、妖精の飛び交う村に着く

「それで、君達は一体何をしにミロミスの村へ行くんだい？そこ出身の僕が言うのもあれだが、はっきり言って娯楽は何も無いぞ？強いて言うなら近辺にある『妖精の森』フェアリーフォレストで採れる素材目当てに商人や冒険者が集まった事によって出来た宿泊施設が少しある位かな」

「ミアの師匠がミロミス出身らしくて、そこに行きたがっていたから一緒に来てるんだよね」

ミロミスへと向かう道中、目的地が同じ冒険者や商人・村人の4人を、運転手の意向もあって私たち3人の借りた馬車に流れで乗せていく事になった。その中の1人、ミロミス出身の商人アルシエラに興味を持たれて話し掛けられたのを切っ掛けに会話していた。正確に言えば、彼が興味を持ったのは私の羽に付いている魔法

石に対してだけだ。

「1つだけでも貰えないか？ もちろん、それと同等の価値を持つ秘宝は用意してある。君の物にする事を約束しよう」

「これと同等の？ まあ、取ってもしばらく経てば復活するし、対価を用意してくれるなら良いけど。で、その秘宝って何？」

「申し訳ないが、ここじゃ関係ない人が居るから話せない。村に着いたらこっそりと君に説明して渡すつもりだ。その時に羽の『紅い』魔法石を渡して貰えば良い」
そんな事を荷馬車の荷台で話して楽しんでいると、車輪が石か何かに乗り上げたらしく、かなり上下に揺れた。立っていた上に踏ん張っていなかった私は、バランスを崩して顔から転んでしまった。

「痛った！ 油断してた……あっ!？」

打った所も痛かったけど、そんな事より私やヴァーミラにとっては死活問題となる事態が発生していた。何と、血の入った保存魔法が掛けられたガラス瓶が見るも無惨に砕け散っていたのだ。幸いにも、昨日の食事時に2人で飲んでいた為、あと3日〜5日程度であれば吸血本能にも何とか耐えられる。けど、それ以上経て

ばどうなるか分かった物ではない。まあ最悪、私だけでもミアから直に吸血させてもらおう事になりそうだけど……その際に手加減が上手くいかず、まかり間違って殺してしまったらと思うと怖い。

しかもガラス瓶の血が全部服に染み付き、見た目はとんでもない怪我をした重傷者のような姿になってしまい、私が吸血鬼だと言う事を忘れた同乗者が過剰な心配をする羽目になる。

それに、私やヴァーミラにとっては良い匂いだけでも人間にとってはキツい血の臭いも拡散してしまい、気分の悪くなる人が少し出て来てしまう事態に陥る。臭いと汚れ自体は私が生活魔法のサウディオラを使えばどうとでもなるが、ミアの回復魔法に精神まで癒す物は無い為、それに関してはどうしようもない。

「魔導書に保存魔法の項目は……」

持っている魔導書を隅から隅まで探すも、あの瓶に掛けられていた特殊な保存魔法に匹敵する物は無かった。

「うーん……」

これからどうしようかと、魔導書とにらめっこしながら考えているとミアに声を

掛けられた。どうやら私が気付かない間に目的地のミロミスに到着していたようだった。

「フランちゃん、さっきからずっと声掛けてたのに魔導書とにらめっこしてて気づいてくれなかったんだよ」

「あ、そうなの？ ごめんね」

馬車から降り、周りの景色を見渡す。前に採取依頼をした時に寄った村と似たような雰囲気、そこよりも幻想郷の近い感じののどかな村だ。

村にしてはかなり広くて町に匹敵する位だけど、パツと見建物の数も人の数も少ない。しかし、その分だけ自然豊かな上にたびたび妖精たちが、楽しそうな笑い声を発しながら周囲を飛び回っているのを見ると、さながら妖精達の住む森の一部に居るような感じだ。

ただ、悲しい事に出会う彼ら彼女らの大半が私やヴァーミラを見るなり、速攻で逃げたり隠れる等の回避行動を取る。吸血鬼だからかな？ 心当たりと言えればそれくらいだけだ。

一方でミアには妖精たちがこれでもかと言うほど集まってきた。当の本人は

何故妖精たちがこれ程寄ってくるのか理解出来ないみたいだけど、何だか楽しそうだ。

「フラン姉様、ミアって何であんなに妖精たちに寄ってこられるんだろう？ 他の人間にはそんなに寄ってこないのに」

「生命神の加護を持っていらっしゃるらしいし、それがあからじゃないの？」

2人で話をしつつ考えながら、村の人に師匠が居るかどうか聞いて回っているミアの後をついていく。もちろん、ヴァーミラが父と慕うレオネの聞き込みも忘れずに行く。

そんな感じで村中に聞いて回る事1時間半、ミアの師匠はこの村にたまたま帰ってきている事が分かったが、今は妖精の森で遭難してしまった子供の捜索隊に回復魔導師として参加している為、現在は村に居ないと言う事が分かった。さてどうしようかと思っていると、村の人の好意によって私たち3人はその村人の家に来るまで居させてもらい、滞在するなら泊めてもらうことも確約してくれた。

「本当に良いの？ お金とか払わないと……」

「良いから良いから、早く入りなさい。久しぶりの客人だし、それに吸血鬼の嬢

ちゃん2人と妖精に好かれている嬢ちゃんは冒険者だろう？だからそうだね……
今まで見てきた、経験してきた事を話してもらえるかな？私はね、そう言う話を
聞いたりするのが好きなんだ」

「な〜んだ。そんな事ならお安いご用だよ！」

どうやら私たちを泊めてくれた村の人は、冒険者から話を聞くのが大好きな人らしい。宿泊費代わりに今までの冒険の話をしてくれと言うので、互いの自己紹介も兼ねて話せる事は全て話す。

他の冒険者よりもトラブルに巻き込まれる回数が多かった為、ネタに困る事なく話を続ける事が今の所は出来ている。

「何故かトラブルに巻き込まれやすい体質のせいであ、色々楽しくも疲れる冒険になってるんだよね」

「成る程。ドラゴン討伐、隣国で吸血鬼と魔物の大軍とやり合い、エリユカルでは貴族に難癖つけられて兵士と戦闘……フランドールがトラブルに巻き込まれやすい体質と自称するだけの事はある。それにしても、そんな凄いパーティーに居て疲れないか？」

ミア」

「疲れはします。でも、わたしはそれでもこのパーティーに入れて良かったと思つてます！」

私たちにとっては至って普通の冒険の話であるけど、村の人『カレット』にとってはこれで楽しんでもらえているらしいので良かった。

「済まない。欲張ってしまうようで悪いけど、話の途中で出て来た『弾幕』と『スperlカード』とやらが分からない。どんな魔法や技なのか、気になるから見せてくれないか？」

「見たいの？ 良いけど、危ないからなあ……」

「それなら心配しなくても、この村には皆が使えるかなり広い空き地がある。手加減程度であればそこで足りるはずだ」

私が冒険の話をしている途中でカレットが、弾幕にスペルカードを見たいと言ってきた。それ自体は別に良いのだけど、場所がなくて危ないと言ったら広い空き地があるからそこで頼むとお願いされた。そう言う事なら大丈夫だろうと思つて了承し、早速彼女の言う広場へと向かっていた時、道端に人が倒れているのを発見した。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、魔境と化した妖精の森へと足を踏み入れる

今まで投稿した小説の一部に登場するフランのスペルカード『禁忌レーヴァテイン』の表現の変更を行いました。これによる物語の変更は一切ありません。

「貴方、大丈夫!? ミア、回復お願い!」

「分かった……『エクスヒール』! 状態異常は衰弱、ならこれも……『メディカルナス』!」

見るからに危険そうな状態であったので、早急にミアに回復魔法を使ってもらい、倒れている男の人を助ける。様子を見る限り顔色も良くなり、魔力の減少も止まったようなので回復は間に合った事は明白だ。

「……うう」

「気付いた? いきなりで悪いんだけど、何があったか教えてくれる?」

「あんたらは一体……っ! 吸血鬼!」

倒れていて起きたら、いきなり吸血鬼の私が至近距離に現れたと言うこの状況が悪かったのだろう。反射的に飛び退き、男の人はこちらをじっくり見据えて戦闘態勢を整える。

「あゝ……何かごめんね。取って食べたりはしないから、安心してくれる？」

「……確かによく考えたら、もしあんたが俺を取って食うつもりだったら今頃死んでるしな。済まない」

こうして上手く誤解を解く事が出来たので、改めて何があったかを聞いた。彼は「どうやら、妖精フェアリーフォレストの森に迷い込んだ子供を探しに行く捜索隊に参加していたらしい。で、その森の深部に存在する巨大な聖樹のある空間に到着した時に目的の子供は見つかったらしいのだが……」

「妖精のお姫様もろとも悪質な冒険者集団に人質に取られて、何も出来ずに衰弱魔法『ウィークエンド』を掛けられて壊滅、散り散りに逃げ去っていったと」

「そうだ。その際に回復魔導師のヒリマさんともはぐれてしまい、衰弱を治癒出来ずに今に至ると言う訳だ」

話を聞いて私は、とある疑問が頭に浮かんだ。お姫様が居るなら王様か女王様、

それを守護する兵士妖精や類する存在が居るはずなのに、何故そんなにもあっさり突破されてしまったのかと。それに、聖樹と言うからには何らかの防御がありそんなものだけど、そう言うのも無かったのだろうかと思っただけで聞いてみた。

すると、彼は私のその問いに対して『そんな物は無かった』と答えた。それに王様や女王様も、兵士妖精も何もかも存在する気配すら無かったらしい。

「フランちゃん、ヴァーミラちゃん！早く妖精の森に行こう！あの人の言っていたヒリマって人が、わたしの師匠なの！自分と違って攻撃魔法も強かった師匠が居てこの被害、きつと不味いことでも起きたんだろなあ……」

「『そうなの？』」

男の人が私たちに事情を説明している時、ミアが突然声をあげてそう言った。彼女曰く、と言う回復魔導師が師匠らしい。なるほど……それなら尚更放っておく訳にはいかないのです、妖精の森深部に向かう事にした。ミアに回復魔法を教えて、自身はそれに加えて高い攻撃力の魔法を扱える師匠のヒリマが居てさえ、こんなにも大きな損害を与えられてしまった捜索隊。これは早く行かなければ不味いと思っ

「よし、任せて！ 私たちがその子供と妖精のお姫様だけ？ その2人を助けに行って来るから！」

「本当か!? 助かる！ 妖精の森の入り口には看板が立っているから、そこから入ってくれ！」

こうして子供と妖精のお姫様救出を引き受けた私は、それと同時にミアの師匠も探すべく妖精の森へと向かっていった。男の人の指差した方向にひたすら歩くこと約20分、言われた通りに看板が立っている妖精の森の入り口に到達した。

そして入り口を通過した瞬間、何かがおかしいと直感で私は感じた。見回してみると森の見た目だけは至って普通ではあるが、流れる魔力に『邪な気配』が混じっていたり、妖精の森であるにも関わらず1人たりとも彼ら彼女らが見当たらない等の異変が起きているのがハッキリと分かる。

「これがただの冒険者集団に起こせる現象には思えないんだよなあ。絶対に何かヤバイ存在が居るよね、これ」

「確かに私も姉様と同じで、そう思うよ。邪な気配を感じるし」

「師匠、大丈夫かな……」

3人で会話をしながら先へ進んでいると、こちらを包围する様にして茂みの中
からかなり大きな狼が7匹出現、私たちの首を刈ろうと襲い掛かってきた。

「っ！ ヴァーミラ！」

「分かった……『凍れ』」

こちらに接近して襲ってきた奴は持っていた棒で力任せに叩きのめし、少し距離
のある奴には通常弾幕を何発か叩き込む。ミアに近づいていった奴はヴァーミラの
能力と氷属性魔法で氷漬けにしてもらい、5分程で全て討伐しきる事が出来た。

討伐した魔物の素材集めをしておきたい所ではあるが、生憎そんな事をしてい
る暇はないので仕方なく放置して先を進む。

奥に進むにつれて魔物の襲撃頻度と強さが上がり、更に運悪くリトルグラウンド
ラゴンまで現れた。探索隊の人たちがどれだけの強さか分からないけど、まだ深部
に到達していないのにBランクの魔物が稀にとは言え現れるのだから、深部に居
る冒険者たちは最低でもBランクレベルの強さはあるだろう。

更に奥へ進むと、感じる邪な気配がだんだんと強くなってきているのを感じる。
しかも、倒れて消滅寸前の妖精や精霊と言った存在を見かけるようになった。恐ら

く逃げ遅れたのだろう。

「ミア、回復魔法をお願い」

「任せて……『エクスヒール』！また衰弱ね。なら、『メディカルナス』」

消滅寸前の妖精や精霊を見かけ次第ミアの回復魔法で助け、その隙を狙って襲ってくる魔物は私やヴァーミラが能力込みで討伐して守る。その際に周囲が血まみれの、見た人の大半が地獄と表現しそうな光景が広がるが、そう言う事を考えている場合ではない。早く行かなければ、妖精のお姫様や迷った子供がどうなるか分かったものではないからだ。

「ミア、魔力はまだ大丈夫？」

「まだまだ行けるよ。ただ、奥に進むにつれて妖精たちに掛けられてる状態異常の術式が複雑化してるから、あまり続くと厳しいかな」

なるほど。深部に到達する前にミアの魔力が尽きてしまえば、妖精のお姫様や子供に万が一の事態が発生していた時に回復魔法が使えなくなる。確かにそれは困るけど、最悪妖精たちを見捨てると言う選択肢を取らなくてはならなくなるのも何だか……

とにかく私たちに今出来るのは、先に進んで妖精のお姫様や子供を救出し、この魔境と化した妖精の森から脱出する事だけ。出来れば悪質冒険者を半殺しにしてギルドに引き渡しにもしたいけど、人質が居るからそれは二の次だ。

そんな事を考えつつ襲い来る魔物を駆逐しながらひたすら進む。そうしてどのくらい時間が過ぎたか分からないけど、ようやく深部の巨大な聖樹のある空間が見えてきた。

「やっとか……ああもう、邪魔！」

もう何度目か分からない狼の襲撃を手持ちの棒で雑に殴って叩き飛ばし、やっと目的地へと到達した時に見たのは、冒険者集団10人と邪な気配を放つ怪しげな黒衣を纏った人物が1人、人質の妖精のお姫様と子供に何かを強要している光景であった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方に

も感謝です！
励みになります！

フラン、狂気を纏いし闇と化す

アンケートの回答ありがとうございます。その結果から今後とも今まで通り、無理ない範囲で吸血鬼要素を入れていく方針で行きたいと思います。

「誰ですかあ、貴女は？もしかして妖精のお姫様とガキを取り返しに来たのでしょうかあ？」

「人間ではないな……なっ！コイツら、吸血鬼か！」

早く助けなければと思つて正面から堂々と突撃したは良いものの、よく考えればこれは悪い手段だったような気がしてきた。しかし、もう既に行動に移してしまつていた為、今更止めると言う選択肢はないので素早く自身を霧にし、人質の2人の側で身体を再構成させた後に、縛っていた腕輪を能力で粉微塵にして解放した。

「しまった！くそおー！」

「名乗つてる暇はないの。さっさと2人を返してもらおうよ」

2人を解放した瞬間に襲い掛かってくる冒険者の攻撃を避け、無防備になった腕を持っていた棒で力任せに叩き、へし折った。人質の命が掛かっている為、最悪殺してしまう事も視野に入れていた。

「ヴァーミラ、この2人を守りつつ逃げるよ！」

「分かった。でもフラン姉様、このまま逃げるだけじゃきつと追っかけて来るよ。だから逃げつつ、出来るだけ無力化していこう！」

この場で戦い、コイツらを全員まとめて無力化するのも良いかと思っただけ、流石に誰かを守りつつの殲滅戦は厳しい物がある。なのでここは、襲ってきた奴だけを最低でも戦闘能力を喪失させる事を考え、村に後退していく事にしたけど……。「残念ですが、逃がしませんよ。それにしても何故吸血鬼が人間と妖精の味方をするのですかね？ 私には理解しかねます

が……」

先手を打たれ、邪な気配を放つ存在に回り込まれてしまった。こんなことならさっさと助けた2人を連れて逃げ帰ってれば良かったと思っただけ、今更そんな事を考えた所で後の祭りである。

「別に、悪魔の貴方なんかには理解されなくて良いし。そんな事より、ここを通してくれない？」

「それは無理な相談ですわね、契約なので。どうしても通りたければこの私を無力化するか殺すかしてからに下さい。あ、後ろの冒険者も居ましたね。貴女方では厳しいと思うので、降参をおすすめしますよ」

案の定、通すわけ無いとキツパリ言われた。まあそうなるのは予想出来たので、特に驚きもなく戦闘態勢を整える。

「ほう……戦いを選びますか。そんな変な形をした棒切れで一体何が——」

「『禁忌レーヴァテイン』！」

悪魔が何か言っていて隙だらけだったのでそれを突き、遠慮なくレーヴァテインを叩き込む。しかし、流石に邪な気配を放つ悪魔だけあり、今の攻撃を何とか致命傷となる箇所にあたらないように回避された。

ただ、致命傷にはならずとも、悪魔の右肩から下がごっそり消えてなくなる程の強烈なダメージを与える事が出来た。

「あがっ……いきなり腕を切り落とされるとは、油断しました。ですが、もう貴女

は終わりです」

「何を言ってる——」

「へっ！俺達の事を忘れてもらっちゃあ困るぜえ〜！」

その時背後から男の人の声がしたので振り向いてみると、うっかり距離を離してしまった妖精のお姫様に、襲い掛かっていた冒険者を見た。邪な気配を放つ目の前の悪魔に気をとられ、悪質冒険者にまで気を回せていなかった事が仇となった結果だ。慌てて魔導書を読み漁り、敵だけを傷つける都合の良い魔法がないか探すも、こういう時に限ってなかなか見当たらない。

（仕方ない、多少怪我をさせてしまってもスペルカードで一網打尽に……あ！）
慌てていた時に、『禁忌フォーオブアカインド』の存在を思い出した。

そして、これを使って分身に守らせればかなり楽になると言う事も。

「何で忘れてたんだ、私！『禁忌フォーオブ……』」

思い出したスペルカードを宣言しようとした時、今まさに妖精のお姫様に鎖を巻き付けようとした冒険者の背後から蒼く輝く剣が突き刺さり、そこからのもの10秒程度で剣が胸に刺さった氷の彫刻へと変貌していったのを見た。

この攻撃はヴァーミラによるものだろうと思って辺りを見回してみると、子供を抱えつつ、ミアを魔法による攻撃から守っていたのを見た。その際に氷の剣を飛ばす攻撃を繰り出していたので恐らく、流れ弾が偶然当たったのだろう。

彼女により期せずして出来たこの隙に私はスペルカードを宣言して分身を作り、上手く妖精のお姫様を囲うようにして展開する事に成功した。これで守りは分身に任せて敵の殲滅に専念しようとした時、視界にミアが冒険者に蹴りを入れられそうになる光景が入る。不味いと思い、妖精を守らせていた距離が近い分身を向かわせたが間に合わず、思い切り腹部に蹴りを入れられて吹き飛ばされる。

そうして大木に叩き付けられる寸前、私の分身がクッション代わりになった事によって何とか衝突による衝撃を激減させる事が出来た。ただ、あの蹴りによる身体への負担が大きかったのか、彼女の治癒能力をもってしても立ち上がる事が出来ずにいた。

「コイツに耐えるとは、回復魔導師のくせして防御力はあるようだ。しかし、これで終わりだ死ねえ！」

自身に回復魔法を使えないほど苦しみ、内臓を痛めたのか血を吐く重傷を負った

ミアに対して、止めを刺す為^{ため}に追い討ちを掛けようとする冒険者。それを見た私はある感情に支配され、至近距離に居る分身よりも早く動き、間に割り込む。

そして蹴りを見舞おうとした冒険者の足を掴んで持ち上げた後、勢いを入れて地面に力任せに叩きつける。更にそのまま右手にレーヴァテインを発動させ、コイツを惨たらしく葬り去ろうとして……

「……っ！」

すんでのところで半分支配権を取り戻し、掴んでいたコイツを放り投げる。狂気に一時的にでも完全に支配された事なんて、一体何年ぶりだろうか。正直、今でも壊したくて壊したくて仕方がない。

「ぐふっ……動け……ねえっ！ちきしょう！」

「……」

致命傷とまではいかなかったようだけど、少なくともどこか骨が折れた事だけは確かだ。そんなアイツの元に私は狂気に導かれながら歩いてゆっくり接近していった。

「ねえ、もう終わり？」

「終わりだと……思ったか？」

コイツがそう言うのと、他の冒険者が邪魔者である私やミアを殺そうと群がってきた。しかし、いくら群がってきた所でやる事は変わらない。仲間でもあり、種族が違えど家族のような存在でもあるミアを守り、その彼女を害する奴らを消し去るだけだ。

まずは、先に魔法で攻撃してきた奴に向けて同じ魔法を倍以上の威力にして放って打ち消し、更に火炎による追撃を加えて火だるまにする。

次にその隙についてミアに襲い掛かろうとした奴が居たので、霧化して背後を取ってから棒を思い切り振り下ろして殴りつけた後掴んで投げ飛ばし、弾幕を叩き込んで蜂の巣にした。

怯えている冒険者も居たが、だからと言って見逃す気にはならなかったので、迫りくる魔法を避けつつ接近してからすぐに棒で薙ぎ払って吹き飛ばし、それ以上の速度で回り込んでから更に棒を振り下ろして叩きつけて制圧した。

「奴は化け物だ……俺たちじゃ、勝てない。頼みの綱の悪魔も奴の妹との凄絶な戦鬪の末に氷の彫刻にされちまうし……」

「取り敢えず逃げるあああー!!」

「逃がさないよ？」

あれだけ悪い事をしておきながら形成が不利と見るや否や、仲間を無視して逃げ帰ろうとする奴らが居たので、ソイツの足を全力の『マジカルアロー魔導の矢』で射抜き、撤退を阻止した。

その後はもう既に作業と言っても差し支えない感じで淡々とミアや妖精のお姫様、子供を狙う奴らを順に潰して行く。こうして30分程あった戦闘は、私が最後の冒険者を弾幕でポロポロにしたのを最後に、完全に終了した。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、後処理に奔走する

「はぁ……くっ！」

分身込みとは言え数的不利な戦いだったけど、こちらの勝利で戦いを終結させる事が出来て、なおかつ妖精のお姫様に迷い込んだ子供を死なせず守りきるのに成功した点については良い。文句なしの結果だ。

しかし、妖精の森深部の聖樹の一部とその周辺の木々が焼けて炭化していたり氷の彫刻になってたりと、洒落にならない被害を受けていた。そして、妖精たちを消滅寸前まで追い込み、2人を誘拐してこの空間に立て籠る悪質冒険者から皆を守る為とは言え、3人……いや、5人壊してしまっていた。出来るだけ壊さないようにしたつもりだったけど、やっぱり無理だったようだ。

「姉様……大丈夫？」

「正直言って、アイツら見てると破壊衝動がキツイからあまり大丈夫じゃない……かな。それよりも、ミアはどうなってるの？」

「大丈夫。妖精のお姫様が治癒術を使ってくれたお陰で持ち直したから……」

「そっか。良かったあ〜」

肝心のミアの様子をヴァーミラに聞いた所、妖精のお姫様が治癒術を使ってくれたお陰で、自分自身に回復魔法を掛けることが可能になり、何とか持ち直す事が出来たらしい。だけど、その影響で魔力が枯渇しかけてしまったらしく、まだ歩くのは厳しそうだとその事。

ただ、あの攻撃でミアが死なずに済んだのは良かった。もしも死んでいたら、悲しみと怒りの感情が増大し過ぎて狂気に完全支配され、この冒険者を単純作業のごとく皆殺しにした挙げ句、暴走して昔みたい大変な事になっていたことだろう。今も十分大変な状況ではあるけど、守る為に殺したのとただ単に狂気の赴くまま理由もなく殺すのでは訳が違々と、私は思いたい。

「ヴァーミラ、ごめん。あの冒険者たちへの対処をお願い。今アイツらを見ると私、散々弄んだ挙げ句に壊してしまいそうだから。それと、村ギルドの人を呼んでくるね……」

「……分かった」

そうして私はこの状況を村ギルドの職員……いや、ギルドマスターに伝える為、

1人で妖精の森を出ることを決意した。この空間、冒険者集団から離れて少しでも破壊衝動を抑える為だ。今は理性で何とか踏ん張っている状況だし、アイツらの発言の如何によってはその場で理性が完全に消し飛び、暴走してしまう位には衝動に駆られている。

「姉様……気を付けてね」

「うん、勿論だよ！」

こうして来た道を急いで戻り、ミロミスへ向かう。聖樹の空間に向かっている時にはわんさか居た魔物たちも、今は殆んど居ない。精々Cランク〜Eランクの魔物が立ち塞がって襲い掛かってくる位だった。

「ああもう！ 避けてるのに襲って来ないでよ鬱陶しいなあ！」

右に行っても左に行っても襲ってきて鬱陶しい事この上ないので、避けたりするのをやめて出会い頭の先制攻撃で討伐か消滅させる方針に切り替えた。そして今まさに私の近くまで接近し、襲いかかろうとしていた魔物を発見したので思い切り棒で殴りつけて吹き飛ばし、地面から突き出ている岩に叩きつけて討伐した。

その後も似たような感じで襲い来る魔物を、単純作業のように排除しながら妖精

の森を進み、長い時間をかけてようやく村に戻る事が出来た。

「うおおっ!! ど、どうしたんだその格好は、血だらけじゃないか!？」

「ん……ああ、ごめん。綺麗にしておくれ」

そうして村を歩いてギルドに向かっている途中、私を見た村人が素っ頓狂な叫び声を上げたのでビックリした。彼曰く、私の全身のあらゆる部分が血で汚れている上に、瞳にハイライトがない状態で歩いている姿に恐怖を感じたらしい。よく見たら、遠巻きに怯えながらこちらを見る人や妖精たちが居た。

吸血鬼にとって人間の血は、食料と同義だ。吸血鬼以外の種族にとっては鉄臭く、凝視するのも嫌な位であるようだけど……私にとっては甘い香りと味のする美味い物としか思えない。今回の人間や妖精たちの反応は、そんな種族の違いが引き起こした認識の違いによるものだ。

そうなると、どう考えてもこの血まみれの服で歩いている私は明らかに『ヤバイ奴』だろう。瞳にハイライトが無い状態だったと言うのもそれに拍車をかけている。なので、素早く生活魔法『サウディオラ』を自分に発動させ、汚れている服を綺麗にしてヤバイ奴から脱却した。

「これで大丈夫かな？」

「ああ、勿論だ」

こうして村人とのやり取りの後、改めてギルドへ向かう。中に入ると、今まで行った事のある町のギルドよりもスペースは小さく、職員さんの数も少なかった。しかし、中に居る冒険者たちの数は他の町のギルドに居た冒険者たちの数に匹敵している感じだ。

「このギルドマスターさん、居る？」

「居ますよ。と言うか、ギルドマスターは私なのですが……何かご用ですかフランさん？」

「うん。それでさ、貴女今やる事ない？ 暇だったりする？」

「暇……ですね、はい。案件も無いですし」

「じゃあ、私と一緒に来て！」

「良いけど一体何……ちょっと、何で抱え……!?」

そうしてギルドに入った時、1番近くに居る職員さんらしき人に話しかけると、その人が偶然ギルドマスターだった事が分かった。更に聞いてみた所、仕事もなく

て暇らしい。これはラッキーだと思ったので、思わず彼女を抱えて森の入り口まで飛行していった。

「ああもう、ビックリしたわ……妖精の森？」

「うん。実はね……」

私はここで彼女をここへ連れてきた理由を事細かに、包み隠さず覚えている限りの事全てを話す。案の定、仲間を守る為に冒険者を壊したと言った瞬間に顔が曇るが、まずは現場を見てみない事には話が出来ないと言う事で、当初の予定通り聖樹のある空間へと向かう。

「……1つ聞きますけど、食べてないですよ？人を」

「食べてはないよ。壊しはしたけどね。久しぶりだったよ、あんなことしたのは」
「……」

道中、脈略もなくギルドマスターの彼女からそう聞かれた。人を食べる事はおろか、吸血行為すらしていない。なので私はそう答えた。

その後は何も会話は無く、たまに襲いかかってくる魔物を淡々と討伐しながら聖樹のある空間へと歩みを進める。

そうして長い時間をかけようやく深部の聖樹のある空間へと到着する事が出来た。辺りを見てみると、ヴァーミラが淡々と冒険者たちへの対処を行い、大分回復したミアが妖精のお姫様と子供の視界を遮りながらそれを見ていた所を見た。

「これは強烈な……これだけを見ると、本来なら非常に厳しい罰が下される所でしょうが、フランさんの話が事実であるのなら話はかなり変わって来ると思いますが、色々調べたりやったりすることがありますので、そうですね……1週間〜3週間程ここに滞在して頂くことにはなりますが、宜しいでしょうか？」

「うん……あ、真映リフレクトウールミラー鏡使えば1発で分かると思うんだけど」

「それは無理ですね。あれは借りるのにとんでもない額のお金が必要になるのに加え、もう既に先客が居るみたいで……」

なるほど。まあとにかく、それが使えない状況だと言う事は分かった。なので私たちは彼女の言う通り、ミロミスの村に最大で3週間滞在する事になった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

ギルド本部での会議、紛糾する

今話はフラン視点の話とは違って地の文が三人称となっている上、全編ギルド本部の会議回になっています。

「ええい！ どうして僕がギルド本部長に就任してからこうも厄介事が前本部長の時の3倍も舞い込んで来るんだ！ 違法魔導師組織のマジスト共が動き出すわ、悪質冒険者が増え過ぎたせいで皇国から怒られるわ、他にも色々あって散々だちくしょう！」

「本当だよね。何でか知らないけど、アクトが就任してから急に増えたし。実は厄の神なんじゃ……？」

「厄の神ってリリィ、君ねえ……まあ、強ち否定は出来ないのが辛い所だけど」
ノストライト皇国の皇都『シェイニーク』に存在するギルド本部。そこで今後の方針や何らかの重大な厄介事が起きた時等の対策を協議する会議が開かれていたの

だが、そこでここ最近就任した本部長のアクトが荒れに荒れていた。何故なら、彼がギルド本部長に就任してから急に厄介事の数が3倍以上に増えたからだ。

その為、各国の首都から集まったギルドマスターの中には彼の事を厄の神・ギルドの面汚し等と言って呼ぶ人が多いものの、舞い込んで来たどの厄介事も早急に解決してしまう為、誰も彼を辞めさせようとは思っても実行には移さない。

「荒れるのは後にしてくれ、会議が進まない。で、どうするんだ本部長。マジストの魔導師誘拐事件についての対策を出し合うんじゃないのか？ ギルドの冒険者も被害を受けているんだよな」

「あ、そうだったね。済まない、レイゼ。それでその件についてなんだけども……現状、各国の警備隊とギルドが合同で警戒に当たるしかないんだ。何せ、彼らは拠点構えていないからね」

「ああ……確かにな」

「じゃあ、それについてはアクトの言った案で良いかな？」

会議の議長でもあるアクトが荒れていては話が進まないと、カーテンド王国のレイゼが諫めて何とか落ち着かせ、話を進める。しかし、マジストは表立った拠点を

持たない組織なので対策が厳しいのが現状である。その為、これについてはひとまず各国の警備隊とギルドで警備の強化等の対策をしよう事で話がまとまった。「あ、そうそう。何カ月前に新しく冒険者登録した吸血鬼の女の子いましたよね？ えっと名前は確か……」

「フランドール・スカーレットの事か？ シュロン殿」

「ええそうよ、イエーメリアさん。それにしても、最初聞いた時は驚きましたわ。何せ、吸血鬼が冒険者登録するなんて初めての事でしたもの」

「ワシも、シュロン殿と同じじゃ」

そうして次に『クア王国』のシュロンが話題に上げたのは、数ヶ月前に冒険者となったフランドール・スカーレットについてだった。吸血鬼が冒険者登録をしたのはギルドにとって初の事態であった為、基本年に1度のこの会議でも話される事となる。

「あやつは今どこで何をしているのかのお。人間にむやみやたらに危害を加えていなければ良いが」

「イエーメリアさん、フランの奴に限ってそりゃないと思うぞ。まあ、仲間や本人

に危害を加えたら分かんが」

「レイゼお主、やたらとその吸血鬼の肩を持っているが一体どうしたんじゃ？もしかして本人と会った事でもあるのかの？」

「その通りだ。一緒にワイバーン食ったりしながら話もした事あるからな。だからそう思ったんだ」

「ふむ、なるほどな」

女の子とは言え吸血鬼。それ故に、人に対して危害を加えないか心配でたまらない様子の、『ネーマノシエン共和国』のイエーメリア。その際の発言に対して、レイゼがすかさずそんな事はないだろうと反論した。会議に出席している各国のギルドマスターの中で、フランが冒険者になってから唯一本人と出会って話をして食事までした事がある彼だからこそ、そう言えた。

「それにですよ、彼女は今現在ではCランクですけど、FとDランクの時にカーテンド王国で数々の功績を残しています。その中でもシャームの町で出された緊急依頼で、現れたグランドドラゴン2頭をたった1人で討伐したのと、ルービエ近郊で猛威を振るっていた吸血鬼ギラムス伯爵とその一家をこれまた1人で戦って撃

退したのは、彼女が吸血鬼であったとしても凄い事ですわ」

「確かに。もう何回もその時の資料を見ているが、改めて聞くと凄いつて感じるぞ」
そうして話は、フランの立てた功績の事について移った。カーテンド王国のルービエの町のギルドマスターからの報告等が書かれた資料を見ながら、レイゼがそう言い始めた。

「確かに、討伐依頼での活躍だけでもBランク冒険者レベルだからなあ。それに、他の依頼も結構受けるから総合的に考えてAランク辺りが妥当だと僕自身は思うね。何かしらのトラブルを起こしたって話も効かないし。まあ、決まりがあるからいきなりホイホイ上げたりはしないけどさ」

「じゃあ決まりが無ければすぐにでも上げてたの？ アクト君」

「多分、上げてたんじゃないかな」

それにアクトが同意し、話を進める。彼は今すぐにでもBランクかAランク辺りに上げたいと思っているが、自分が主導して決めたランク上げについての決まりがある為、その気持ちを抑えた。

その後は会議前に粗方決まっていた今後の方針を再確認しつつ、フランについて

の話が続く。と、その時アクトの座っている席の後ろにある扉が開き、入ってきた男が彼に丸められた羊皮紙を手渡した。

「えっと……ぶっ!? 嘘お……」

「ちよつとアクト君、汚いなあもう！ 一体どうしたの？」

渡された羊皮紙に書かれていた内容を見たアクトは、飲んでいたお茶を盛大に吹き出して項垂れる。吹き出されたお茶は側に居たリリーの顔や資料に全て掛かり、思わず彼女は机を叩いて怒鳴る。

しかし、アクトに見せられた羊皮紙の内容を見て怒りは一瞬で何処かに消え去り、叫ぶ。

「ミロミスのギルドに、フランドール・スカーレットが冒険者殺しを自供しに来たあ!?!」

「「え、ええ!?!」」

リリーのその叫びを聞いて他国のギルドマスターたちは驚くと同時に、彼女が叫んだ羊皮紙の内容にも再び驚く。

「遂に殺りおったか……こりやまた後始末が大変そうじゃな」

「これ以上、今すぐにも聖教会と協力してフランドールを殺すべきでしょう！」
「……」

ここに集まった人達の3分の1は羊皮紙の内容の一部を聞き、今すぐにもフランを殺すべきだとの過激な主張をする。しかし、そこへ待ったをかけたのはギルド本部長のアクトだった。

「……待って下さい。この報告にはまだ続きが」

そうして彼は、羊皮紙に書かれていた事を一字一句正確に読み上げた。フランに殺された冒険者は子供と妖精のお姫様を誘拐して売り飛ばそうとしていた超悪質な冒険者だと言う事、彼女の仲間の回復魔導師を傷つけた事によって怒りを買ったが故の出来事であると言う事、妹である吸血鬼ヴァーミラ・スカーレットも1人守る為の戦いにおいて流れ弾で1人殺していた事等も全てだ。

「良かった、ただ単に殺した訳じゃなかったのか……」

「しかし、その際にフランドールは『人間を殺した』ではなく、『人間を壊した』と表現したと。いやはや、何とも恐ろしい限りじゃな。人を物扱いしているとは……」
「ええ、それについては僕も同意見です。しかし、事情が事情なので単純に冒険者

資格剥奪と決定するわけにはいかないのが現状で……その悪質な冒険者たちはマジストと繋がっていたらしいとの情報もあり……」

アクトの最後の一言を聞いた各国のギルドマスターは、再び驚き叫ぶ。その後は会議場は混沌を極め、やっぱり資格剥奪した後に依頼を出して殺せと過激な主張をする者、ちゃんと色々精査してから裁判するべきだと主張する者、思考を放棄して黙る者等が出てくる。しかし、殴り合いや魔法の撃ち合いにはギリギリならなかった。

「なあ、真映リフレットウールミラー鏡は借りれないのか？ フランをここに呼びつけ、それを使って質問に答えてもらおうのが1番良いと思うんだが」

「……それだあ！」

混沌としている中、この話し合いに参加せずに黙っていたレイゼがそう言った。すると荒れに荒れていた会議場が静まり、全員がその提案に賛成した。

「で、今フランドールは何処に居るのかの？」

「ミロミスの町に滞在してもらっているらしいですよ」

「よし！ 今すぐ使者をそこに送るのだアクト殿！」

「言われなくたってそうしてますよ」

こうして、満場一致でフランが皇国の皇都にあるギルド本部に呼ばれる事となった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

それと、第3章と第4章の登場人物や魔法をまとめ、最新話と同時に投稿する為に明日、長引けば明後日の投稿もお休みします。

勿論、明日中に完成した場合はその時点で投稿します。

フラン、ミアの師匠に出会う

解説が完成したのでまとめて投稿しました。そのついでに、今までに投稿した話で見つけたおかしな部分の修正も行いました。

ミロミスのギルドマスターからこの町に居てくれと頼まれた時からちようど2週間経ったとある日、ここに滞在していた過程で仲良くなった、今は村に居る妖精たちと聖樹周辺の修復がてら色々な意味で疲れた精神を癒し、楽しく遊ぶ為に妖精の森深部へと私たちは向かっていた。

「さてと、あともう少しで聖樹も修復が終わるね。まあ、大半は私の外れた攻撃のせいなんだよね、ごめんエリエス」

「姉様と同じく、私からも謝るね。ごめん」

「あの冒険者から助けてくれただけだから、フランとヴァーミラは気にしなくても良いぞー。女王様もそう言ってたし。それより、修復頑張ろーね！」

その中でも1番早く……と言うか最初から打ち解けてくれたのは、助けた妖精のお姫様の『エリエス』だった。あの時以降も変わらず、幾多の妖精たちが私やヴァーミラを恐れて逃げる等の行動を取る中、何故か彼女だけはそんな事関係ないとばかりに積極的に話し掛けたり、何処ぞの水精みたいにイタズラを仕掛けてきたりしてきた。そのお陰か、徐々に妖精たちも私やヴァーミラを危険な吸血鬼だと思わなくなってくれたのか、打ち解けてきてくれたのでありがたかった。

そんな彼女のイタズラの中でも、妖精の女王様にダメ元で説明したら奇跡的に貰えた妖精族直伝の保存魔法が掛けられた、前まで持ってた壊れた奴よりも少し小さな瓶4つに入れていた飲む為の血がいつの間にか別の何かにすり替えられた時は驚いた。食事時にさて飲むうかと瓶の蓋を開けた時の匂いが違う事に気付かなければ飲んでいただろう。

「そうだね、エリエス。でさ、この瓶の中身をいつ取り替えたの？ そろそろ教えてくれたって良いじゃん」

「あれねー。まあ、もう良いかな……フランが女王様と話してる時さ、瓶を何故か机の上に置いたでしょ？ あの時にこっそり超激辛果実の汁とね、入れ替えたん

だー。飲んでくれてたら面白かったのに、すぐ気づいちゃうんだもん」

「そりゃあさ、匂いが明らかに血とは違うじゃん。あんなに強烈な刺激臭がしたら誰だって疑うでしょ」

「むう……匂いかぁー」

私がそう言うと、エリエスは唸りながら匂いをどうにかする対策を考え始めた。自分でイタズラのネタを提供してしまった事に今更気づくも、もう遅かった。今度は彼女の前で瓶を置かないように気を付けよう。

そんな事を考えながら妖精の森の中を歩いていると、遠くから人間の女の人がゆっくり歩いてくるのが見えた。良く見ると、着ている服はボロボロな上に魔力も死にかけてはないが、かなり弱っている事がよく分かる位には少なかった。

「もしかして、遭難者なのかな？ 取り敢えず話し——」

「お師匠様ぁー!!」

「ん!？」

明らかに冒険者には見えない装いをしていた為、私は何らかの理由で遭難した商人等の戦いに向かない人物だと判断、取り敢えず話しかけてみようと思ったその

時、ミアが突然その人物に駆け寄り、飛び付いた。

「っ！ ちょっと何……ミア!? どうしてここに?」

『紅珀の月』って吸血鬼姉妹のパーティーのメンバーになって、一緒に行動してるんです!」

「……吸血鬼!？」

「ほら! わたしの後ろに居る大きな黒い羽と、木の枝に綺麗な魔法石がぶら下がったような羽が生えた女の子が居ますよね! あの2人です!」

「ええ。しかし、あの金髪の子の方は実に不思議な羽を持っているようね。あんな吸血鬼見たことないわ」

飛び付いて言った時のミアが見せた反応を見るに、あの女の人はどうやらお師匠さんらしい。私が狂気の赴くままに冒険者共を半分壊したあの時から少なくとも2週間、魔物も居る中で生き延びて来たことになる。

私が思うに、人間にとっては若干過酷な環境となっているこの森でそれだけ長く居たのは凄い。きつと、自分の回復魔法やサバイバル知識とかで色々乗り切ってきたのだろう。そんな事を考えていると、ミアがその女の子の人を連れてこちらに向

かっってきた。

「そう、貴女がミアと一緒にパーティーを組んでくれている吸血鬼の子なのね。私はヒリマ、回復魔導師よ」

「うん！ 初めまして、ミアの師匠のヒリマ！ 私はフランドール・スカーレットで、こつちが妹のヴァーミラ・スカーレット。よろしくね！」

「はい、よろしく。それとありがとうね、ミアをパーティーメンバーにしてくれて」「ううん、気にしないで。お陰様で私たちの友達が出来たから！」

その後もミアについて色々な話を師匠のヒリマにしている途中、不意に彼女が話を切り上げる。

「そう言えばまだ向こうに3人、念の為に持ってきたポジションで何とか耐えてる怪我人が居るから一緒に村までお願い出来る？ 私は昨日までの魔物への対処に、瀕死の怪我人の治療やら自分の回復やらでこの様だし……」

「了解、任せて！」

「姉様がそう言うから私もやるよ……」

「まあ、怪我人ほっとく訳にはいかないからねー」

彼女が指差した方向を見てみると確かに3人、木にもたれかかって休んでいるのが見えた。彼らもヒリマと同程度かそれ以上に魔力が少ないが、死にそうな人間は1人も居ない。これなら村に行って休ませるまで耐えてもらおう事が出来るだろう。そう考えながら彼らの元に近づくと、最初はまるでこの世の終わりが間近に迫っているかのような怯え方をしていたが、ヒリマの説明と私が冒険者をやっている事などを説明すると、納得はしてくれた。まあ、完全に怯えを取り除くのは無理だったけど仕方ないか。

その後は散発的な魔物の襲撃を魔導の矢で^{マジカルアロー}適当に往なしながら村へと向かう。つくづく思うけど、この魔法はかなり自由が効いてすごく便利だなあ。

そんな事を繰り返しながら進んでいると、日が沈んだ頃ようやく村へと到着する事が出来た。

「じゃあ、私達は村の人達に生存報告しに行ってくるから一旦お別れよ、ミア。お休みなさい」

「はい！ お休みなさい！」

こうしてヒリマたち一行と別れた後、妖精たちと一緒に泊まっている民家へ行っ

て夕食を取った後、いつもの通り魔法で身体を綺麗にしてから眠りについた。

そして翌日、目を覚ました私たちは昨日出来なかった聖樹の修復とそのついでに泊まり込みで遊ぶ為、また妖精の森へと向かおうと民家を出た瞬間、目の前に村の雰囲気に明らかに合っていない豪華な荷馬車があるのを見た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

第5章 主人公一行以外の登場人物・魔法解説

〈話聞きの好きなお婆さんカレット〉【種族】人間

ミロミスの村にフラン達が立ち寄った際に泊まった民家の主。冒険者から冒険の話や沢山要求する代わりに、自身の家に冒険者が泊まりたければ泊めてくれる程話を聞いたりするのが大好きなお婆さん。

〈回復魔導師 ヒリマ〉【種族】ハーフエルフ

非常に高度な回復魔法を使う魔導師で、ミアの師匠。あらゆる回復魔法を自由自在に操り、それを他人に教えるのは得意だが、つつい熱が入りすぎてしまう癖がある為、ミア以外の弟子からはあまり好かれてはいない。攻撃魔法もある程度扱える。

〈ギルド本部長 アクト〉【種族】人間

この世界に展開するギルドを統括する本部長。何故か彼が本部長に就任してから

厄介事が舞い込んで来る頻度が増え、その為『厄の神』『ギルドの面汚し』等と呼ばれる事もある。

しかし、舞い込んで来る厄介事を全て上手いこと解決させる手腕がある事から、誰も彼を降ろそうとはしない。

へギルド本部副本部長 リリィン 【種族】 ハーフドワーフ

ギルド本部長を補佐する役割を持つ副本部長で、アクトとは幼なじみの関係。彼と同時期に副本部長に就任した。

人間とドワーフの両方の血を持つハーフで、両種族の良い特徴を受け継ぎ、持ち前の仕事には真面目と言う性格も相まってかなり有能な副本部長として君臨している。

へクア王国王都ギルドマスター シュロン

【種族】 人間

クア王国と言う国の王都のギルドマスターをしている60代後半の男性。魔法

の才能は皆無だがその分剣術や体術、身体能力がかなり高い。見た目は普通のお爺ちゃんな為、初見の相手からはナメられる事もしばしば。

〈ネーマノシエン共和国首都ギルドマスター イエーメリア〉【種族】人間

ネーマノシエン共和国と言う国の首都でギルドマスターをしている女性。自身に宿る膨大な魔力を生かした高威力広範囲の攻撃魔法が得意だが、それ以外の魔法は苦手。近接戦闘に至っては才能は皆無である。

〈妖精のお姫様 エリエス〉【種族】妖精

ミロミスの村に良く訪れる、妖精の森に住む妖精のお姫様。誰にでも友達に接するかのような態度を取る為、種族問わずに友達は意外と多い。

妖精族は回復魔法とは違う『治癒術』と言う回復系術技を扱う。彼女だけはそれを住み処の森にいる限り、無限に使うことが可能。

【登場魔法】

《攻撃系魔法》

『マジカルアロー
魔導の矢』

純粹な魔力で作られた矢を展開した魔方陣から発射し、対象を攻撃する魔法。かなり自由が効く魔法であり、発動者の技量によっては追尾機能付与・各属性や状態異常の付与・破壊力の増大等の効果をつけたりする事が出来る為、級で分けられていない。

《補助系魔法》

『ウィークエンド』

掛けた対象の体力をじわじわ削る衰弱の状態異常を与える無属性魔法。解除しなければ死んでしまう事があるほど効果自体は凶悪であるが、術式自体は単純である為解除は比較的容易な上に体力や魔力があれば効果が切れるまで耐える事が可能。

《生活系魔法》

『サウディオラ』

あらゆる汚れや異臭を消し去る。汚れや異臭の度合いや掛ける範囲によって魔力消費量に変化する。あくまで魔法の為、魔法を受け付けられない人や物に対しては効果がない。主に冒険者や商人がこの魔法を重宝している。

《回復系魔法》

『メデイカルナス』

回復系の上級魔法。対象者のあらゆる状態異常（即死以外）を短時間で治すことが出来る。

『エクスヒール』

回復系の上級魔法。対象者のあらゆる怪我を短時間で治すことが出来る。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

第6章 ノストライト皇国 シェイニーグ編

フラン、ギルド本部に呼ばれる

「フランドール・スカーレット……吸血鬼ですね？ お迎えに上がりました」

「お迎え？」

「はい。このギルドマスターから聞いてはいませんか？ 実はですね……」

豪華な荷馬車から降りてきた人が言うには、私が悪質冒険者共を狂気の赴くままに壊したあの時にギルドマスターに話して見せた事が本部に伝わり、それが真実なのかどうか真 リフレトゥールミラー 映 鏡で確かめる為に私を呼ぶ事になったとの事。

そうなった事についてはミロミスのギルドマスターからは何も聞いていないけど、ギルド本部でそう決まったと言うのなら行くしかない。ここで断ってお尋ね者になっても困るし。

「分かった。行くよ」

「ああ、良かったです。妹様方もご一緒に」

そうして、停まっていた荷馬車に3人で乗り込む。エリエスたちも乗りたがっていたが、女王様たちに止められて若干膨れっ面をしながらも指示に従っていた。「フランにヴァーミラ、そしてミア！ いつかまた遊びに来てよねー！ 何年でも待つてやるからー！」

「うん！ またいつか、きつとここに来るから！」

「妖精さんたち、さようならー！」

「じゃあまたねー！」

こうして、私たち3人は無駄に豪華な荷馬車に乗ってギルド本部に向かう事になった。その道中、荷馬車の運転手さんが色々な話をしてくれた。

何でも今から向かうギルド本部があるのは、ノストライト皇国の最大の都市で皇都の『シェイニーク』と言うらしい。治安は他国の王都や皇都・首都と比較しても良い方で、夜中に1人で子供や女性が出歩いても比較的安全との事。皇国としてはオススメはしていないらしいけど。

それに魔法技術も高く、カーテンド王国やノストライト皇国、クーア王国にネー

マノシェン共和国他10カ国があり、世界のほぼ中心に位置する『ラウフィート大陸』国家群の中では上位に位置する程だと言う。

運転手さんがそれ程言うのなら、きっと人が沢山居て楽しい場所なんだろうなと期待を抱く。まあ、その前にギルド本部での聴取が待っている上に、その結果次第では楽しい冒険どころではなくなるのが痛い。上手く乗り切らないとなあ。

そんな事を揺られながら考えていると、突然荷馬車が急停止した。勢いでつんのめるも、何とかこらえて血の入った瓶を守りきる事が出来た。

「何があったの!?!」

「分からないよ……」

「取り敢えず外を見てみようよ、フランちゃん」

ミアにそう勧められたので、荷馬車から外を覗いてみた。すると、道を塞ぐようにして如何にも盗賊もしくは強盗と分かるような格好をした男の人たちが居た。僅かだけ女の人も居たりした。

「運転手さん、あの邪魔な人たちは?」

「この辺を根城にしている有名な盗賊団です。申し訳ない、こんな目立つ荷馬車で

こんな所を通る判断をしてしまい……」

「まあ、気にしないですよ。それより、盗賊団なら排除しても良いんだよね？」

「あ、はい。と言うか、是非お願いします。恥ずかしながらわたくし、戦闘能力が全くないのです」

そう荷馬車の運転手さんから頼まれたので、荷台から降りた私は道を塞いでいて邪魔な事この上ない彼らの元に向かう。

「と言う訳で、貴方たちと遊んでる暇はないからさっさと済ませるね！ 『チェー
ンパラライズ』」

「『え……あああー！』」

連鎖する麻痺の光を放つ魔法でまずは目の前の5人を麻痺させて戦闘不能に、次は茂みの中に隠れていた3人に向けて魔導書の項目の欄に例として載っていた『マジカルアロー魔導の矢・スタン気絶』を放ち気絶させる。

そうして、麻痺して動けない盗賊を適当に茂みの方に放り投げてから荷馬車に戻ると、ヴァーミラの足元で盗賊が2人うづくまって気絶していた。聞くと、ミアを人質にしようと襲いかかって来たから殴って気絶させたらしい。

「ありがとう、ヴァーミラ」

「どういたしまして」

お礼を言った後、ヴァーミラが気絶させた盗賊も茂みの方に放り投げ、全ての盗賊を戦闘不能にしてから再び荷馬車に乗り込み、出発した。

「ありがとうございます。まるで邪魔な虫を払うかのようにあっさりと排除したその魔法の腕前、流石です」

「褒めてくれるの？ ありがとうございます！」

運転手さんとの会話をしながら外の景色を見ると、遠目にかなり大きくて建物に綺麗な明かりが灯る町が見えてきた。どうやらあれがノストライト皇国の皇都シェイニークらしい。

ここまで来れば、後は皇都の入り口で警備兵士のチェックを受けるだけだから、何かない限りは大丈夫だと思うけど、何しろこの世界に来てからどう言う訳なのか、かなりの確率で妙なトラブルに巻き込まれてるからなあ……現にミロミスでは今までで1番厄介な出来事に巻き込まれたし。

そんな事を考えていると、私たちを乗せた荷馬車は皇都の入り口に到着していた。

そこで止まって待っていると、運転手さんの元に警備の兵士さんが近づいていってなにやら話をしだした。

「あゝ。ギルド本部の荷馬車ね。一体何を運んでんだ？」

「吸血鬼ですけど」

「へ？ 今なんと？」

「だから、吸血鬼の女の子2人と人間の女の子1人です。冒険者なんで安心して下さい」

「吸血鬼って聞いて安心して来る奴が居るかあ！」

「まあ落ち着け。取り敢えず中を見るぞ」

兵士の1人がそう言って数秒、荷馬車の扉が開いて目が合った。

「マジで居たわ……にしても、どんな化け物かと思っただけ可愛——」

「死にたくなきゃ黙っとけこの変態！」

「ええ……そんなに危ねえ発言だったか今の」

「可愛いって言うだけならまだギリギリ許せなくも無いが、どうせお前の事だからもっとヤバい事言おうと考えてたんだろ？ 例えば……」

「あー！ それ以上は止めてえ……」

突然扉を開けた兵士の2人が私たちを見るなり、仕事を放り出して変な言い争いをおっ始めた。あまりの出来事にどう対処すれば良いのか迷っていると、ヴァーミラが超手加減した弾幕を2人に放って当てた後、無言で笑顔を見せながらじつと彼らを見つめていた。顔は笑っているが、少し冷気が出ている所を見ると心の中では全く笑っていないのが良く分かる。

ヴァーミラの無言の冷気込みの威圧を感じ取った兵士の2人は、今までの騒がしいのが嘘のように静まり、それから一切余計な事は喋らなくなった。

そうして手続きが終了、ギルドカードと運転手さんのお陰で特になにもなくシェイニークに入る事が出来た後、町の風景を見ながら考え事していると、どこかの教会みたい大きな建物の庭に少し入った所で荷馬車は止まった。

「着きました。ここがノストライト皇国ギルド本部です。少し待ってれば案内人が来る筈です」

運転手さんがそう言うので待っていると、建物の中から3人の魔導師が出て来て私たち3人の腕に見覚えのある腕輪を両腕につけられた。力が結構出しづらく

なるものの、能力は問題なく使えそうだったので特に慌てる事はない。

「申し訳ない。上からの命令なのだ」

「そうなの？ まあ良いや、仕方ないしね」

そんな会話を交わしながら魔導師たちの案内の元、私たちは巨大な扉の先にある広い会議場へと足を踏み入れた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、会議場にて強烈な印象を残す

「ふむ、あやつがフランドール・スカーレットか。見た目は可憐な少女じゃが……
凄い威圧感を放っているの」

「隣に居るのは確か、吸血鬼ヴァーミラ・スカーレットでしたよね。妹の方からも
かなりの威圧を感じます」

「だけど、封魔の腕輪を2個つけているから得意の魔法や身体能力は大幅に制限
されている。万が一暴れられても問題ないだろう」

会議場へと足を踏み入れると、100人程だろうか。かなり沢山の人間以外にも
エルフ、ドワーフに獣人等の多種多様な種族の人たちがそこには居た。全員それぞ
れの国の都から来たギルドマスターなのかな。

と言うか能力は問題なく使えるから、腕輪を破壊して彼らの言う問題のあるレベ
ルで暴れようと思えば暴れられる。能力をあまり使っていないからバレていないの
かもしれないけど、ここまで嚴重な警備を敷くのであれば何らかの手段を講じて、
私の能力を調べ上げてそれを封じるなり無効化する方法を考えるなりするべきだっ

たと思うんだけど……そのお陰で焦りはそれほど感じないから良かったとも思うべきかな。

それ以外にも空いているスペースに重武装をした兵士さんや魔導師の人、見覚えのある白いローブを着た聖職者さんが所狭しと待機していた。私やヴァーミラが暴れて皆を壊すとも思っているらしいが、それにしただって凄手数だ。

「来た様ですね。フランドールさんにヴァーミラさん、そしてミアさん。さあ、そこに座って下さい」

私たちにそう言ってきた男の人が指した場所は、周りを全員に囲まれたいわゆる『ど真ん中』だった。私たちの一挙一動をあらゆる角度から沢山の人が見ているし、怪しい動きをすれば全員で即制圧されるだろう。まあ、基本的には私は何もしないけど。

そうして言われた通り鏡のある席に座ると、周りからの視線が凄かった。ど真ん中にこの席はあるので、全方位から見られているのは当たり前だけど、一部恐怖や恨み等の負の感情がこもった視線を感じるから、いつ襲われても対処出来るように気が抜けなかった。

「さて、君たちが呼ばれた理由は分かりますか？」

「うん、知ってる。私が冒険者を壊した事について聞く為でしょ？ 真映鏡リフレクトウールミラーって奴を使えば一発で分かるんだから、早くやれば良いんじゃないの？」

私が他の人とは違う椅子に座っている男の人の問いに対してそう応えようと、会場に居る人たちがどよめく。

「聞いたか今の？ ギルマスさん達が言った通りあの吸血鬼、人間を人間扱いしてねえぞ」

「あれ？ でも仲間の人間傷つけられて激昂したとも言っていたギルドマスターも居たけど……？」

「どうせ自分の大切な物を壊されそうになったからだろ。結局は人間を物扱いしてただけだ」

何かさつきよりも敵意を向ける視線が増えた気がする。だとしてもこちらに攻撃をしてこない限りは何もしないと決めているので、こちらからは何もしない。と言うか、冒険者達を壊した事について私から聞く為に呼んだのに、それをそっちのけで別の議論が始まったけど……良いのかな？

「フラン姉様、これ長く続きそうだよ？」

「うん。それまで暇だし、魔導書でも読んでようかな」

そうしてこの本来の目的から逸れた議論が終わるまで、魔導書を読んでいる事にした。時折ミアやヴァーミラと魔法の話をしながらかまっていると、ようやく違う椅子の男の人がこの状況を沈めるべく動き出した。

「皆さん、その議論は本題が終わってからにしてください！」

この一言によってやかましい位の喧騒が静まり、全員の視線が再び私たちへと向く。それを確認した私も魔導書を読むのを止めた。

「申し訳ないです、フランドールさん。それでは早速質問を……」

こうして、本来の目的である私への質問が始まった。大半はミロミスのギルドマスターに話した事の聞き返しだったので、改めて同じ事を話した。ただ、まさか『悪質冒険者を殺した時にどんな気分だったか』などと聞かれる事は想定していなかったもので、少し考え込み……

「うーん……あの時は完全に狂気に支配されないように耐えてたからなあ。あ、でもその時『ミアを傷つけたオマエらなんか皆壊れてしまえ』とは思ってたかな。

で、実際に5人壊しちゃった訳だけど」

「なるほど。随分仲間思いなんですわね、フランドールさん。ある意味安心しました」

「あ、そう？ なら良かったけど」

「フランチちゃん……ありがとう」

「気にしないで。ミアは私の仲間だしそれに、種族は違えど家族でもあるんだから！」

空いているスペースに居る人間たちから感じる視線は相変わらずだけど、議場のギルドマスターの方からは概ね好感触を得ることは出来ているようで、少し表情が柔らかくなったのが分かった。

その後はヴァーミラやミアにも質問が始まり、2人がそれに正直に答える。最

後に議長役のギルドマスターが私の目の前リフレトゥールミラーにある真映鏡鏡に問い掛けた。結果はほぼ白、若干記憶違いな部分があるものの、私の言った事は信用に値すると出た。

「ふむ……鏡もそう言っている事だし、フランは嘘をついていないと言うことだろう」

「そうだね。でも、5人殺しはやりすぎなんじゃない？」

「そうかも知れぬ。じゃが、だからと言ってすぐに冒険者資格剥奪と結論づけるのは早いぞ」

真映鏡によって私の言った事が真実であると認められた後、私が冒険者を続けられるか否か、どれだけのペナルティを与えるか与えないかの話し合いが始まった。すると、状況が状況だから仕方ないので嚴重注意辺りで済ませようとする派、資格剥奪はする必要は無いが何かしらのそこそこ重いペナルティを与えようとする派の真っ二つに割れた。

取り敢えず話が終わるまで暇だから、魔導書を読んで待つ事にした。そうして30分後……

「フランドールさん、今回は状況が状況だったので冒険者資格剥奪は無しとなりますが、流石に5人も殺るのはやり過ぎだとの意見もありますので……『1ヶ月後にある商団護衛依頼へのパーティー全員での強制参加+報酬の3分の1減額』のペナルティを与える事になりました」

「ふん。想像よりも軽かったね」

「まあ、フランドールさん自身の今までの功績や状況を加味すればそれくらいには

なるでしょうし、パーティーとしても良い評判をちらほら耳にしたものですから」
そうして議長役のギルドマスターから私たちへと下された罰は、1ヶ月後の商
団護衛依頼に強制参加するのと、それによって得た報酬の3分の1を減額される
と言うものだった。色々な理由があるとは言え、やらかした事に比べれば易しいも
のであった。

「これで終わりなの？」

「あ、はい。1ヶ月後にまたここに来て下さい。それまでは自由です」

どうやら話を聞くのはこれで終わりらしいので、3人でこの会議場を後にしよ
うとした時、再び呼び止められる。

「あ、すみません。その封魔の腕輪を外しますので……」

「大丈夫だよ。自分でやるから」

「「え？ 自分で——」」

どうやら、中に入る時に付けられたこの腕輪を外してくれるらしい。まあ、それ
は当たり前か。

ただ、そこで私はギルドの人たちに反抗する意思はない事を示そうと何故か突然

思いつき、自分とヴァーミラとミアの腕輪に対して『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』を使用する事に決めた。

『皆壊れちゃえ!』

そうして拳に腕輪の『目』を移動させた後に握りしめ、跡形もなく粉微塵に砕き散らせた。

「……」

「ね？ 自分で出来るって言ったでしょ？」

「あはは……」

「なるほど。道理でこの子がこれだけの人数に囲まれても、封魔の腕輪をつけられても全く焦らなかつたのは、こんな厄介な能力を隠し持っていたからだだったと……」

「私から1つ質問なだけどさく。その能力、人間にも使えるの？」

「うん。使おうと思えばね」

「なるほど……これで分かつた。君がここの人たちに反抗する意思が最初から全くなかつた事がね。あ、引き止めちゃってごめんね」

こうしたやり取りの後、会議場を出てギルド本部を後にした。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン一行、皇都で目立つ

「やっと終わったあ〜。さて、宿探そうかな」

「お疲れ、姉様。資格剥奪されなくて良かった」

「うん。でも、剥奪されたらされたで冒険自体は止めるつもりはなかったけどね」
ギルド本部での話が終わってそこを後にした私たちは、シェイニーグに滞在する為に泊まる宿を探しながら皇都内を見て回っていた。

カーテンド王国の王都も夜中は結構明るく人も多かったけど、ここは恐らくそれ以上の明るさを誇り、人も多い。路地裏とかに入れば暗いから人間が1人で歩くには危険かもしれないが、それ以外の場所では沢山の人の目がある上に警備兵士さんが巡回しているから、何かあればすぐに警戒態勢が敷かれてやらかした人の逃げ場はなくなるだろう……なんて思ってたら早速盗みを働いて連れてかれる男の人を見た。

「フフツ……まさかここでも『盗んだ？ 違う、死ぬまで借りてくだけだ』なんて魔理沙みたいに堂々と泥棒する人を見るなんてね。しかも速攻で店主に捕まってる

し、弱いなあ」

「姉様、その魔理沙って人故郷の知り合い？」

「うん。私が初めて見た人間で、友達なんだ。さっき連れてかれた男の人みたいに館の魔導書とかを堂々と盗んで逃げてくのを何度か見ててさ。しかも、弾幕ごっこ凄く強いんだよね。私も昔負けたし」

「何その人間……改めて思うけど、幻想郷ってどんな魔境なの……？」

「確かに。わたしも逆にどんな所か気になってきたよ」

連れてかれた男の人に対して私は少し笑いながら2人と会話しつつ町を歩き、それらしき建物を見かければ泊まれるかどうか聞くのを繰り返す。しかし、どこも明日のイベントの為に来ている宿泊客で一杯らしく、全て断られてしまった。私たちが皇都に来るタイミングが悪すぎたようだ。

「まさか、どこにも泊まれないなんて思いもしなかったよ。それにしても、皆が口を揃えて言う皇国トップクラスのイケメン魔導剣士『クドセーム』って誰？ 全く知らないんだけど」

「私たちの前に居た冒険者の人も知らなかったみたいだよ、フランちゃん」

「まあ、そんな事は取り敢えず置いて宿探そうよ姉様、ミア」

ひとまずどう言う人なのか全く知らない魔導剣士の事は置いて、宿探しを再開した。そして、1時間位歩いた時見つけて入った宿が偶然空いていた為、そこに泊まることにした。多少古さと狭さが目立つけど、中は綺麗でスタッフさんの感じもいい感じで、案内された部屋も3人で泊まる事は出来るくらいにはスペースはあった。

「そう言えば、何気に1つのベッドに私とヴァーミラにミアの3人で寝るのって初めてじゃない？」

「確かに。あ、でもそうなると羽が邪魔だね姉様」

「うん。まあ、それは引っ込めて寝れば良いだけの話だし」

そんな事を話ながらベッドに3人で横になり、そのまま眠りについた。

そして次の日の朝、いつも通り起きた私とミアは未だに夢の中に居るヴァーミラを上手く起こし、朝食を取るために宿を出た。昨日とは比べ物にならない程人が多く、かなりの盛り上がりを見せていた。

なので、歩きで行こうとすると羽と日傘が邪魔になる事は確かだ。羽の方は収めれば大丈夫なんだけど、今日の太陽が照りつける良い天気の中、吸血鬼の私とヴァーミラが行動するには日傘は必須のアイテムだ。これを使わないと言う選択肢はない。

「凄いなこの人の数……邪魔になるから日傘差せなそうだし、どうしようかなあ」
「空を飛んでいけば良いと思うよフランちゃん。何人か鳥系の獣人さんとか、箒に乗った魔導師の人とか居たしそれに、わたしは抱えて貰えば大丈夫だしさ」

さてどうしようかと考えていると、ミアが自分を抱えて飛べば良いんじゃないかと言ってきた。確かにそれなら人混みを気にせず差せるけど、右手に日傘を持って左腕でミアを抱えると言う不安定な体勢になる。何かがあり、日傘はともかくとしてミアを落とすと言う、あってはならない出来事を起こしてしまう危険が出てくるだろう。

「う〜ん。確かにそれなら日傘を差せるけど、もし落としたりしたら危険だよ？」

「やっぱり、それだと厳しい？」

「万が一を考えると、厳しいかな」

ミアと私で話し合いをしていると、ヴァーミラが話に加わってきてこう言ってきた。

「フラン姉様。じゃあ、私が何とかするから一緒にあそこの広場に来て！」

「良いけど、何をやるの？」

「まあ見ててよ」

そう言うと、ヴァーミラは水色にほんのり輝く魔方陣を作った後に手をかざし、言葉を紡ぐ。

『水よ、大きな籠となれ』

彼女がそう言うと、魔方陣上空に小さな水球が多数出現した。それらは空中を水色の尾を引きながら舞い、少しずつ人が入る位の大きさの籠を形作り始めて1分、それは完成した。

気づけば周りには種族を問わず、そこそこ沢山の人が集まっていた。水で籠を作ったあれを何かのイベントとでも思ったのだろう、『こんなイベントあったっけ？』『もっとやってくれ』『他には何かあるか？』と言った声がちらほら聞こえてきた。

その声はヴァーミラにも良く聞こえていたようで、作った水の籠を持って下に降りてきて皆にイベントじゃない事を伝える。

「ごめん。これ、イベントじゃない」

「そうなのか、なら仕方ねーな。と言うか、嬢ちゃん吸血鬼だろ？ 何で水をあんなにも自由に操れるんだ？」

「生まれた時からこうだから、理由を聞かれても困る……」

「成る程な。しかし……ん？ つーか良く見たら、紅魔の少女に、蒼銀の天使の2人居るじゃねーかよ！」

「「え？ お前今更気づいたん？」」

「うるせえ！ さっきのあれに見とれてたんだよ！」

すると、このやり取りが気になったのか更にヴァーミラの元に人が集まりだした。その過程で私とミアの方にも何人かの冒険者が来始め、ちょっとしたイベントと化した。

「なあ、頼むよ。またあれみたいなのやってくれないか？」

「吸血鬼のお姉ちゃん、やって！ ダメ？」

「正直ウチも見たい……」

「……分かったから、ちよっと離れて待ってて」

私とミアが冒険者たちの方に対応しつつヴァーミラの方を見ていると、どうやら大衆の頼み込みに根負けしたらしい。再び水色の魔方陣を今度は地面に作り、そこに手を翳して一言紡ぐ。

『水よ、小さき鳥となれ』

そう言葉が発された瞬間、魔方陣上空に無数のかなり小さな水球が現れ、集まり始めた。1分経って最終的に6羽の水色に輝く小鳥が完成すると、周りの人が感心したようにそれを見つめる。

「吸血鬼のお姉ちゃん！ その鳥さんって触れたりする？」

「うん、触れるよ」

「じゃあお願い！」

一時の沈黙の後、1人の子供がヴァーミラに水の小鳥を触りたいとお願いをしたので、彼女はそれを了承して子供の肩と頭に6羽を止まらせた。そこで私とミア、観客の人たちは言葉を失った。何故ならその小鳥が子供の一挙一動に反応し、

本・当・に・生・き・て・い・る・か・の・よ・う・な・動・き・を・見・せ・始・め・た・か・ら・だ。

「……凄すぎない、あれ」

「フランちゃん、あの水の小鳥本当に生きてるみたいだよ！」

すると、こんな超絶技巧を見せられた観客の1人が言った言葉から、言い争いが始まってしまふ。

「なあ。今から魔導剣士のイベント変更を主催者に申し上げないか？ こっち見た方がよっぽど——」

「はああ!? 確かにあれは凄いわ！ でもねえ、あの方とは比べ物にならないよ！」

「そうだ！ クドセームの魔法と剣術に比べりゃあ雑魚みたいなもんだろ」

「あんなキザな男のどこが良いのよ！ 剣術はともかく、魔法だったら絶対に……」

最初はただ朝食を取ろうとしただけなのに、ヴァーミラに水の籠を作って貰った時からあれよあれよと人が集まり、いつしか本場にイベントと化してしまった。

この事実には彼女に対して申し訳なく感じ、これが終わったら自由に行きたい場所につき合おうと思っていると、突然この喧騒の中でも響く大きな楽器の音が聞こえ、水の小鳥たちと魔方陣が消え去ってしまった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、魔導剣士のイベントに参加する

「ちっ！ どうやらクドセームの野郎のイベントが始まるみてえだな。しゃあねえ、退くか」

「小鳥さんがあ……」

「クドセーム様あー!!」

ここに居る人たちの反応を見るに、今聞こえた楽器の音はクドセームと言う魔導剣士のイベントが始まるのを知らせる物らしい。確かに、遠くにそれらしき人物がぼんやりと見えている。

「君、水の小鳥さんならまた後で作ってあげるから。イベント終わるまで我慢して待ってて。あと、服が濡らしちゃってごめん……『水よ、空くうに散れ』」

「わあ……凄い！ 服が一瞬で乾いた！」

水の小鳥が突然消滅してただの水になってしまい、露骨に落ち込む子供にヴァーミラは、イベントが終わった後にまた作る事を約束し、濡らした服を能力で乾かしていた。それを聞いた子供は一瞬で笑顔になり、イベントが終わるまで我慢して水

の小鳥との触れ合いを楽しみに待っていると、そう宣言していた。

「早く終わらないかなあ。どうでもいいイベント」

しかし、あまりにも水の小鳥との触れ合いにハマったのか、クドセームを見る為に集まってきた人の前でこのイベントをどうでも良いと、場の空気を読まず無邪気に言ってしまう。当然、その場に居た半分弱の人は子供に不快感を露にする。それだけでなく、ヴァーミラに対しても少なからず睨むなどして敵意を向ける人まで出てきてしまっていた。

それを見たヴァーミラは能力を使用し、1羽だけ水の小鳥を作って子供に止まらせ、触れ合わせる事で何とかこの場を収める事に成功した。

「お姉ちゃん、ありがとう！」

「ううん、気にしないで。それよりも、イベント始まるみたいだから大人しくしててね」

「はーい!!」

そうして、遂にイベントが始まった。少しずつ魔導剣士らしき男の人が近づいてくるにつれ、観客の半分強が耳障りな声をあげながら盛り上がる。ただ、対照的に

僅かながらではあるものの、冷ややかにそれを見つめる人や『この野郎、癩に障るから帰れ』と言った発言をする人も居た。今回のイベントの主役は好き嫌いが別れる人物なのだろうか。

「えーっと、今日は僕なんかの為に集まってくれてありがとう！」

「「待ってたよおー!!」」

「ふふっ。いつも通りだね君達は。所で聞きたい事があるんだけど、さっきまで僕よりも場を随分盛り上げていた少女が居ると聞いたんだけど、それは誰なんだい？」

「クドセーム様、それはコイツらです！」

彼がそう言うのと、そばにいたクドセームのファンらしき男の人たちが、ヴァーミラと何故か私とミアの手を掴んで持ち上げた。いや、私とミアは別に何も盛り上げてないんだけどと、抗議しても聞き入れて貰えなかった。

「ほう……吸血鬼なのか。僕に劣るとは言え、なかなかの美しさではないか。同種族の中ではトップクラスだろうな。それに、人間の方はかなり凄い。釣り合いそうだな」

「っ！」

今のコイツの発言を聞き、筆舌に尽くしがたい何かを私は感じた。それがどう言った物なのかは分からないけど、とにかくアイツがミアに対して良からぬ感情を抱いているのは確かだと思った。

「ちよつとあなた！クドセーム様に釣り合う花嫁として認められたんだから、さっさと行きなさい！」

「良いよねえ、あんたみたいなガキが認められ——」

「え？何言ってるんですか？あんなの花嫁なんてわたし、嫌ですけど」

♪花嫁♪と言うのはよく分からないけど、ミアがあんなのとまで言って嫌がってるという事は……まあ、そう言う事なんだなと思った。

そんなミアの発言を聞いた観客は一瞬静まり返った後、声を荒げる。

「……はあ!?あの方と一生を——」

「だから、嫌です。重要な事なんでもう一度言いますけど、わたしにはフランちゃんとヴァーミラちゃんと言う仲間であり、家族でもある存在が居るんです。それに……」

そう言うと、ミアは息を大きく吸い込み……

「第一、初対面でいきなり花嫁になってとかあり得ないし、そうでなくても手順があるでしょう！ フランちゃんとかヴァーミラちゃんが居るから怖くないけど、1人だったらどれだけ怖いか……考えて下さい！」

そう叫んだ。あのミアがこれ程までにクドセームを拒否するとは、余程アイツの♡花嫁♡発言が怖かったと言う事だろう。

そして、ミアに恐怖を抱かせたアイツは私たちにとっても♡敵♡。いくら人気の魔導剣士とは言え、敵認定したからには奴の一举一動を警戒しなければ。自衛手段を持っている私やヴァーミラならともかく、攻撃魔法や武術等の自衛手段を持っていないミアの方に何かされたら堪らないからだ。

「……驚いたなあ。まさか、僕の特性をものともせず誘いを断る女性が居るとはね。まあ、それなら仕方ないや」

理由はよく分からないけど、ミアが大声を出してまで拒絶したのが効いたのか、割りとおっさり引き下がってくれたクドセーム。これでひとまずミアの安全は確保

された、そう安心していると……

「じゃあ、その金髪の子。ちょっとこっちへ来て」

また誰かをターゲットにし始めたようで、今度は金髪の子を呼びつけている。ぱつと見る限りでもかなり沢山の金髪の子や女性が居るけど、一体誰に対して花嫁~~の~~発言をするつもりなんだろうか。事と次第によってはその人を守る為に動こう
と思ひ、準備をしていると……

「あゝ。ちよつと分かりにくかったかな。綺麗な魔法石の羽を持つ、吸血鬼の子だ
——」

「誰かと思ったら私なの!？」

まさか、私を指名して来るとは思っていなかったので思わず大声を出してしまい、注目が集まる。しかし、これは幸運だと思った。何故なら、私であれば種族特有の状態異常に対する耐性が高く、何かしらの魔法等で惑わされる確率が低い上に、攻撃されても即座に抵抗が可能であるからだ。

とは言えわざわざ私を指名してきたのだから、何かしらの対策があるのは確実だと判断出来るので、油断して警戒を怠らないように気をつけて広場の中心に行こう。

「あくはいはい。指名されたから来たけど、何か用？ ♪花嫁♪とか言う訳の分からない奴ならお断りだけど。後、ミアにも同様ね」

「今すぐ僕と、魔法や剣術の強さと美しさを競おうではないか。それで君が勝てば、僕はもう金輪際ミアとか言う子には近づかないでおこう。だが、僕が勝てば♪花嫁♪に貰う。これでどうだ？ 君があの子の親のようなものなのだろう？」

「いやちよつと、何でそう言う訳の分からない考えに至るのか貴方の思考が理解不能なんだけど。と言うか、私の話を聞いている？ ねえ？」

一体何を言われるのかと思ったら、私と魔法や剣術の強さと美しさを競ってアイツが勝ったらミアを花嫁にくれと言う、身勝手な提案だった。しかも、こちらが勝った時の報酬がない。賭け事としても成立すらしていない、身勝手な物だった。

「で、どうする？」

「良いよ、やってやろうじゃない！ 突然変な事言っただけミアを苦しめたオマエを完膚なきまで——」

そう言って奴の提案に乗り、速攻でスペルカードで勝負を決めてやろうとした時、この場に私のよく見知った人物が乱入してきた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、新人冒険者をイビりから助ける

「あ、久し振りだねレイゼ！ そう言えば、ギルド本部で私を庇ってくれたよね。ありがとう！」

「覚えててくれたのか。それにしても、フランは相変わらず厄介事に巻き込まれてんな」

「あはは……確かに、行く先々でほぼ確実にと言って良いほど巻き込まれてるんだよね。何でだろうなあ」

クドセームと私の間に乱入してきたのは、カーテンド王国王都のギルドマスターのレイゼだった。休憩の為に近くの店で朝食を取っていた所、偶然ヴァーミラの水の小鳥を目撃してその時からずっと見ていたらしい。で、そのままこのイベントも見ていたとの事。

「ギルドマスターが何の用事？ これはれっきとした強さと美しさを競う決闘なんだ、邪魔しないでくれないか！」

「いや、あんなの見せられたら邪魔しない訳にはいかないだろ。それに、お前程度

の雑魚がフランに挑んで勝てると思わんな。♪弾幕♪と言う、強さと美しさを兼ね備えた魔法があるからな」

「なっ……失礼ではないのか！いくらギルドマスターとは言えそんな無礼は！」
「初対面の14歳の女の子に求婚する、皇国の法にガッツリ触れてるヤバイ奴に言われたくねえな。あとと言っちゃ悪いが、俺でもお前に勝てるぞ？」

突然の他国のギルドマスターの登場に、さしものクドセームを見に来た人たちも怒る気力すら湧かず、ただただ2人のやり取りを見つめていた。その間もレイゼがひたすら煽り続け、クドセームが反応して顔を赤くして怒ると言った感じのやり取りが続く。

しかし、流石のクドセームも他国のギルドマスターに殴りかかったり魔法を放ったりするのは不味いと思っっているらしく、一線は越えていない。てか、そう言う常識はあるのに女の子が嫌がる事はしない常識はないのかと、私は心の中で呆れていた。

すると、クドセームが皇国の法に触れている♪と言う言葉にビックリしたのか、大慌てで反論する。

「14歳!? だけど、皇国では記憶だと14歳はギリギリセーフだから問題ないはずだ！」

「……いや、お前はエライ勘違いをしているぞ。14歳から結婚可能なのは俺の国と、この大陸だと後はクーア王国だけだ。ちなみに皇国は16歳からな」

「だけど、最後のレイゼによる止めの一言で完全に魂が抜けたような感じになり、以降先ほどまでのテンション高めの感じに戻る事はなかった。観客の人たちも、特に彼のファンであった人は完全に顔が死んでいた。」

その後、どこからか現れた皇国の兵士さんたちが項垂れているクドセームに封魔の腕輪を2つつけて連行していったのを、私たちは最後に見届けた。

「姉様、何かお疲れ」

「うん。朝起きてすぐにこれはキツイ……」

「よし、じゃあ俺が皆に奢ってやるから飯に行くぞ」

「本当に？ ありがとう！ わたしも疲れたから、早く朝ごはん食べに行こ——」

「吸血鬼のお姉ちゃん！ さっきの続きやって！」

話の途中で、朝食をレイゼが奢ってくれと言ってきた。それを聞いた私たちは

大いに喜んで、早速朝食を取りに行こうとすると、水の小鳥と戯れていた子供が近寄ってきてヴァーミラに続きをせがむ。

「分かった。だけど、これから朝ごはん食べに行くから少しだけだよ」

「うん！」

そうして頼みを聞き入れてから15分間、ヴァーミラは生み出した水の小鳥による数々の芸を披露してどうにか子供を満足させる事が出来た。周りの人も拍手を送ってくれていた為か、彼女も心なしか嬉しそうだ。

「えっと……皇都には1ヶ月居るし、その間にも何回かやるよ。今日はひとまずこれでおしまい……」

「そうなの？ まあ、無理ない範囲で頼むわね」

その後、イベント会場を後にした私たちはレイゼに連れられて近くの店に入り、ようやく朝食にありつくことが出来た。

「なるほど……君がフランの妹のヴァーミラか。俺はカーテンド王国の王都ギルドマスター、レイゼだ」

「そう。私がフラン姉様の妹、ヴァーミラ・スカーレット。よろしく……」

「にしても、吸血鬼が2人揃ったパーティーも珍しいと言うか始めてだが、水であんなにも自由に操れる吸血鬼なんて初めて見たぞ」

朝食を食べている時、ヴァーミラがレイゼと互いに自己紹介を初めにしてから、カーテンド王国を出てからの冒険についてを覚えている限り話したりしつつ楽しんだ。そして全員が食事を終えた後、私たち3人はレイゼに挨拶をしてから別れた。

「朝食取ってお腹一杯になったけど、次はどこに行くのフランちゃん？」

「うーん。ギルドかな」

「依頼を受けるつもりなの？」

「まあね、暇だしさ。もしかして、どこか行きたい所でもあるの？」

「いや、ただどこに行くのかなあって気になって聞いただけだよ」

レイゼと別れた後、町をのんびり歩いていた時にミアにそう聞かれた。この後特にやる事を決めていなかったし、ギルドで依頼を受けようかと思っていた事を伝えた。

「姉様、依頼と言っても1ヶ月以内で済む奴にしないと、商団護衛依頼に影響したら大変……」

「分かってるよ」

そんな会話をしながら皇都のギルド本部に入ると、目の前で男の人1人に女の
人2人の冒険者集団が、冒険者3人の集団に何やらちよっかいをかけられていた。
良く聞いてみると、ちよっかいをかけられている方の冒険者集団は新人で、どうや
ら新人冒険者に対してなにかと難癖をつけて楽しむような厄介者に、運悪く捕まっ
てしまったようだ。

「これが新人イビりって奴……」

「そう言えば私も冒険者になった時、ああいう奴にちよっかい出されたっけ」

「そうなのフランちゃん？」

「うん。だから前の自分を見るみたいだし、助けるよ」

何だかあの時の自分を見てみたいで放っておけない。なので、新人にちよっか
いを出してる方の背後に霧化して回り込む。

「はい、そこまでね！」

「何だよ……へ!？」

「ヤバイ、逃げるぞお前ら！」

「何でこんな所にいい!!」

相手の方はどうやら私の事を知っていたらしく、こちらの姿を確認した瞬間脱兎の如くギルド本部から逃げていった。こうなるのが怖ければやらなければいいのに。そう心の中で考えていると、さっきの冒険者が近寄って来て頭を下げてきた。

自分が好きで助けただけ、正義感があった等の素晴らしい理由ではないのでお礼は特に要らないと、私はそう彼らに伝える。

「いえ！それでも助かったんで、有り難うございました」

「にしても、あの厳つい男が情けない姿を見せて逃げ出すってどれだけヤバい奴なんだ？この子」

「あ、良く見たら向こうにも吸血鬼の子が居ますよ。回復魔導師も」

しかし、それでもお礼を言ってくれた。これ以上拒否したら逆に彼らの気持ちに失礼かと思っただので、それを受け入れた。

「それで、貴方たちは一体何の依頼を受けるつもり？」

「あ、えつとですね……私達新人なので、採取の依頼を受けました」

依頼書を見せて貰うと、確かに採取依頼をだった。内容は『光癒草^{こうゆそう}3束・魔力草^{まりよくそう}』

1束・天霽石3個』を取ってくるものだった。

種類が結構ある上、どれも採取出来るポイントがバラバラだ。移動距離もかなりあり、その間に魔物の襲撃があるかもしれない。制限期間にかなりの余裕があるものの、新人冒険者にはキツいかもしれない。

「あのさ、もしよかったら護衛は引き受けるよ」

「本当ですか！ 何から何までありがとうございます！ 採取と弱い奴は僕たちがやるので手出しはしなくても大丈夫です」

「もちろんそのつもりだよ。それと、ただ気が向いたただけだからそんなに大げさに騒がなくても……」

その後、ギルドの人にも護衛依頼を受けたと言う形で許可をもらい、新人冒険者の護衛として同行する事となった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方にも感謝です！ 励みになります！

フラン、採取依頼の護衛をする

「今日3人で冒険者登録したの？ と言う事はこの依頼が初めてってことだよな。正直言うとき、無茶じゃないかな。もう少し慣れてからのの方が良かったと思うよ」

「な？ だから言ったらろう、この依頼は無茶だって。あの吸血鬼のフランが率いる『紅珀の月』が好意で護衛として同行してくれる話になったから良かったものの……」

その後、3人と私たちは軽く自己紹介をしながら、まずはここから一番近い山にある天^{あまのしずくいし}霰石の採掘に向かう事にした。洞窟の天井から染み出てくる薄い水色の液体が時間と共に固まったものらしく、採取難易度は飛べない彼らにとってかなり高い。

私が飛んで採掘しても良いけど、それをやると契約違反になってしまい、依頼失敗となってしまう上に3人から怒られてしまうだろう。なので、採掘・採取に關しては私たちは見ているだけとなる。

そんな事を考えているとヴァーミラが3人の内の1人、弓使いのニーアにつ

いて話しかけてきた。

「姉様、あのニアって男の人さ、弓の扱いが上手いよね。天井の天霽石をほぼ砕かずに上手く当てて採取してるし」

「うん。あれを普通の人がやろうとすると石を完全に砕くか、そもそも命中しないのが関の山だろうね」

弓の威力自体は普通の人放った感じではあったけど、技術力はかなり高い。順当に色々な経験を積んでいけば、きっと相当な名手になるだろう。

そんな事を考えながら見ていると、どうやら規定の数を得る事が出来たらしい。なのでもう用のないこの洞窟から足早に去っていき、次の魔力草まりよくそう1束を採る為の平原へと足を進める。

「ねえ、ニアって弓の扱いが凄い上手いけど、それってやっぱりお師匠さんとかから教わったの？」

「あ、はい。冒険者になりたいって言ったら、その日から何故か弓の技術だけを半年位仕込まれました。なんですけど、魔法とかは自分で何とかしろって言われてるんですよね……」

「なるほど」

そうして平原へと到着した後は、またさっきと同じようにニーアたち3人が採取をし、私たちが彼らの対処出来ない魔物等が出てこないか見張り、仮に出て来たらそれを討伐すると言う流れになった。

当然だけど、さっきの洞窟よりも見晴らしがいいからこっちも気づきやすいけど、魔物等の敵からも気づかれやすい。平原で見晴らしが良いからと言って油断は禁物である。

なんて、そんな事を思いながらニーア一行に付いて行ってた時、遠くに何かがちらに向けてかなりの速度で走ってきているのが見えた。

「あれは……オーガだね」

「え!? 大丈夫なんですか? 確かCランクの魔物ですけど」

「大丈夫だからまあ、見ててよ。ヴァーミラ、『神滅ミストルテイン』見せてあげて」

「分かった」

その何かの正体はオーガ。Cランクの魔物の中ではトップクラスの凶悪さを誇

り、魔法は使わないものの高い身体能力と防御力を持つ厄介な奴だ。私たち2人であれば調子に乗って遊んでいてもダメージは負いこそすれ、瀕死になるまで追い込まれたりほしくないだろう。

しかし、生命神の加護を持ち、回復のスペシャリストとは言え戦闘能力を持たないミアや、新人冒険者3人はそうはいかない。遠くに居る内に何とか消さないと、接近されてしまつては隙を突かれる等して瀕死あるいは死亡と言う最悪な出来事が起こる確率が、僅かではあるとは言え存在するからだ。

本来なら私かヴァーミラのどちらかがそこまで飛んで行って殲滅するのだけど、離れている隙に万が一1人では対処出来ない何かが起こつて、ミアやニアたち3人の身に危機が降りかかるような事があつてはいけない。なので、超遠距離にも居る敵に届くヴァーミラのスペルカードを使って貫うように頼んだ。

「さて、危機は排除しないと……『神滅 ミストルテイン』！」

そうして蒼く輝く弓から放たれた、1本の紅い稲妻を纏う矢は大きな音を立てながらオーガの群れに高速で飛翔、射線上に居た全員は灰すら残らずに消滅した。左右に逸れて残っているオーガについては、ある程度こちらに近づいて来てから

私が『禁弾 スターボウブレイク』、ヴァーミラが『天氷降りし氷星』で完全に排除する事に成功した。

「ええ……」

「あの、護衛して貰ってる立場で言うのもなんですけどこれ、最初のヤバイ攻撃って必要ありました？ 次の光弾と氷塊の攻撃で全部済んだような……」

「あ、確かに」

ニアにそう言われて、確かにスターボウブレイクと降りし氷星だけで済んだかもしれないと思った。と言うか、極論私とヴァーミラの能力を使えば地面を抉らず、静かに解決したかもしれない。まあ、やった後に議論した所で後の祭りなので、もう考えることは止めよう。

その後は何事もなく、ニアたちが3時間程かけて魔力草まりよくそうを1束集めるまで護衛をしながら、周りの景色や雰囲気を楽しみつつ魔導書を読む。そろそろ一冊これだけを読んでいたら流石に飽きてきたし、また別の何か面白そうな魔導書とか物語が書かれた本でも探そうかな。

そんな事を考えながら、最後は光癒草こうゆそうの群生地がある小さな林へと向かう。道中

ゴブリンが僅かに出現するも、ニアの卓越した弓の技術力によって頭を撃ち抜かれて討伐された。

「いやあ、やはり私達のリーダーだな。1発で仕留めるとは」

「ええ。惚れ惚れする技術力です」

「あはは……マールカルの剣術にエリーの魔法に比べればなんて事ないさ」

その光景を見ていたニアの仲間2人は、その卓越した弓の技術力をお世辞でもなんでもなく、純粋な尊敬から発言していた。私たちも同じような気持ちで、割りとあっさりオーガを雑魚扱い出来るレベルまで成長出来そうな気がする。

そうして林に到着した後はまた同じように、採取が終わるまで魔物が出てこないか警戒しながら待つ。今度は2時間もしない内に規定の数の光癒草こうゆそうが集まり、これで全ての素材を集める事が出来た。

「あの、今回はありがとうございます！お陰様でたった1日と言う短い期間で集める事が出来ました」

「私からもお礼をさせてくれ。ありがとう」

「ありがとうございます。安全に採取が出来ました」

「気にしなくて良いよ。それよりも、早く皇都に戻ろう」
こうして、無事にニアたちが採取を終えるまで、私たちは護衛をこなし切る事が出来た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

紅魔館一行、八雲紫と共に異世界へ乗り込む

今話は地の文が三人称かつ字数が4000字を超えている上、ほぼ全編紅魔館一行十八雲紫の視点の話になっています。

フランが異世界に召喚されてから数ヶ月経ったとある日の紅魔館、そこにレミア・スカレットを訪ねる人物が居た。

「あら、あんたが起きてちゃんと門番やってるなんて珍しいじゃない」

「珍しいって……まあ、否定は出来ないのが辛いですけど。ところで霊夢さん。何かご用で？」

「ええ、元氣のないレミアの為に外にね。それで美鈴、フランはまだ見つからないの？」

「……残念ながら。紫さん曰く、『確実に幻想郷には居ない、外の世界の確率が極めて高い』らしいですのぞ」

博麗神社の巫女で、外界と幻想郷を隔てる結界の管理者、博麗霊夢だ。フランが居なくなつてから数ヶ月、元気がないレミリアの下に度々訪れては、少しでも元氣を出して貰う為と身体のなまりを防ぐ為に外へ連れに来ていた。

「そう。レミリア、相変わらず部屋に閉じ籠つてる感じかしら？」

「はい。お嬢様は昼夜問わず、外出する頻度が妹様が居なくなる前に比べて極端に減っています。たまに咲夜さんと人里辺りに行つたりしますが、まるで氣力が無い感じで……」

「思つたよりもかなり状況は芳しくない感じね。紫、早く見つけてくれると良いけど」

「確かに……あ、今すぐ呼んできますけど、中で待つてます？」

「いや、門の前で良いわ。それと、どうしても出て来たくないって言つたりしたら無理させないぞ」

そうして、紅魔館の門番、紅美鈴はレミリアを呼びに館の中へと姿を消していっ

だが、いつもなら5分〜10分位で日傘を差して出てくる筈の彼女が全く出てくる気配が無い。ただ、霊夢は待たされる事を最初から解っている上で来ている為、特に何も考えずにのんびりお茶を飲みながら待つ。

すると、それから1時間近く経った頃にレミリアが日傘を差して出て来た。やっと来たかと思いい、彼女の顔を見た霊夢は一瞬言葉に詰まってしまった。

何故なら、誇張でも何でもなく実際に感じる魔力が普段のレミリアの半分以下である上、生気が無いような顔をしていたからだ。霊夢はそれを見て、お遊びで弾幕ごっこをしても勝ててしまいそうな位、彼女に元気が無い事を知ることになる。

「霊夢、お待たせ……」

「……あんだ、本当に生気が無いような顔してるけど大丈夫なの？ 無理してない？」

「大丈夫よ。気力が無いだけで、体調は良いから」

「そう。じゃあ行くわよ」

何はともあれレミリアが外に出て来てくれた事で、精神はまだ大丈夫だと言う事が分かった。それだけでもほっと一安心した霊夢は、早速人里へ向かおうと動き出

す。

「そう言えば、あんたが手に持つてる人形って確か、フランがお姉様になって作ってくれた奴だっけ？」

「ええ、そうよ。これがあるからフランが居なくなってもまだ大丈夫だし……しかも、前まで部屋に適当に放置してたのよねこれ。そう考えると悪い事をしたわ」

「ああ、だから度々アリスとフランが一緒に居る所を見かけた訳ね」

人里へ向かう途中、レミリアが大事そうに腕に抱えている自身を象った人形を発見した霊夢は、それを話のネタにして会話が無い時間を出来るだけ作らないようにする。

その人形は所々作る時に間違えてやり直した形跡が見られる等、人里の和風人形職人やアリスの作る物に比べればかなり見劣りしている。しかし、フランが慣れない事をしてまで自分の為に心を込めて作ってくれたと言う事実がある為、レミリアにとっては渡された人形の見た目の良さなどどうでも良いのだ。

「しかし、外の世界に居たとしてこんなにも見つからないものなのかしらね。あの紫が必死に全力で能力を使ってるのに——」

靈夢がそう言葉を発した時、突然目の前の空間が裂けて逆さまに女の人が出てきた。

「あゝ。お楽しみみの所悪いけどレミリア、良いお知らせがあるわ」

「良いお知らせ……まさか！」

「ええ、貴女の妹ゞフランドール・スカーレットゞの居る世界が分かったわよ。ただ、居る場所までは分かってないけど」

妖怪の賢者ゞ八雲紫ゞである。どうやらフランの居る世界がようやく判明したらしく、それを伝えるに2人の前に現れた様だ。

「居る世界？ 外の世界じゃなかったの、紫？」

「そうよ靈夢。外の世界とはまるで違う、魔法等が存在していて多種多様な種族の居る世界ね。いわゆるゞ異世界ゞって奴よ」

「成る程ね……それで、正確な居場所まではまだ掴めてない？」

「ええ。何せ、初めて見た世界な上に広さが半端じゃないもの。正確な場所まで探すとなると、一体どれだけかかる事やら」

紫による報告を聞いていたレミリアは、途端に今までの元気の無さが嘘の様に元

気になり、霊夢と紫を放置して紅魔館へと全速力で飛んで戻っていった。

「あらあら、随分嬉しかったようね」

「そりゃそうでしょ。あの2人、昔の仲が悪かった時の反動で今じゃこっちが引く位に仲が良くなってるもの。現にあの時のぶちギレ具合、紫もヤバいって思ってたでしょ？」

「まあ、そうね。でも、話も聞かずにいきなり全力スペルカードは酷くない？」

「まあ、それは……」

それはあんたの普段の行動のせいでしょうがと、心の中で思っている事を口に出そうと思った霊夢だったが、面倒になりそうだったのでやめた。

そうして、置いてかれた霊夢と紫の2人は少しばかり会話をした後神社へ戻ろうとしたその時、紅魔館方面からレミリアがパチュリー・咲夜・美鈴を連れてこちらに飛んで来るのが見えた。

「咲夜さん、いきなり投げナイフは酷いですよ〜」

「あら、それは貴女がいつもの昼寝をしていたのが悪いのではなくて？ ちなみに、私が起こさなかったらお嬢様のグングニルが飛んで来てたでしょうね」

「ちょっと！洒落になりませんよ、それ。でも、急に元気になって本当良かったですよ」

相変わらず、美鈴と咲夜はいつものやり取りをしている。そんな2人を呆れた様な目で見ていたパチュリーは、紫を見るとこう質問した。

「そんな事よりも、フランが何処に居るか大体の目星がついたって本当なの、紫？」
「勿論よ。でなければ、ここに居ないもの」

「成る程ね。それでレミィ、本当に異世界に乗り込んで探し回る気？ まだ目星がついた程度だって……」

「当たり前じゃない。ただ待っているだけなんて、とてもじゃないけど耐えられないわ」

「まあ、私はお嬢様がそう言うならお付き合致します」

「私も、咲夜さんと同じ意見です」

「えっと……いつの間にかそう言う話になってるわけ？ でも、まあ良いわよ」

何だか勝手にそう言う話になってる事に若干困惑ぎみの紫であったが、純粋に搜索の戦力が増える事に関しては歓迎するべきだと判断したようで、話を承諾し

た。その後、ある程度の準備を整えてから用意された、幻想郷と異世界を繋ぐ特殊なスキマに霊夢を除く全員で入っていった。

ノストライト皇国の田舎にあるシメトニエス。この国の主力農産品の芋類の約10%を生産する、重要な町の一角にてマジストの一員が密かに会合を開いていた。「さて、ここに集まって貰ったのには訳がある。お前ら、エリユカルに魔導師を拐いに行った2人を覚えてるか?」

「ええ、まあ」

「アイツらでしょ? 厄介な奴に喧嘩売ってうちの組織に損害を与えた」

「ああ。実はな、ソイツ等がとうとう特大級のヤバイ奴に喧嘩売って返り討ちにされた挙げ句、皇国に取っ捕まって……約1ヶ月後、この近辺を通る商団を襲撃する計画がバレちゃった」

「「……ふっざけるなあ!!」」

「どうやら、彼らの仲間が特大級の致命的なミスをしでかしてしまい、肝である計画がバレた事についての対策を話し合っている様だった。」

「で、一体誰に喧嘩を売ったんでしょっか？」

「5ヶ月前だったか、突然冒険者界限に現れてはとんでもない印象を残している、人間に比較的友好的な吸血鬼が率いるパーティーだ。最近妹の吸血鬼も加わって3人に増えてるらしいぞ」

「まさか……：よりもよって吸血鬼、それもあの紅魔の少女に喧嘩を売るとか馬鹿もここまで来ましたか」

「そりゃあ、返り討ちにされるわな。殺られなかっただけ、有り難く思わんと」
リーダーの男がそう言った瞬間、組織のメンバーの内の約3分の2の顔が一瞬で死んだ。そして、捕まった2人に対しての評価は最低まで急降下した。

「と言う訳だ。今後の計画を大幅に変更して、まずは——」

こうなっては計画を当初の予定通りには出来ない為、大幅な変更を余儀なくされてしまった。なので、今現在リーダーが思い付いている案を言おうとした瞬間、いきなり天井の空間が大きく裂け、そこから5人の女性や少女達が降りてきた……

と言うよりは落下してきた。

「ちよつと紫！ もう少しマシな場所にスキマを開きなさいよ！」

「ごめんなさい。スキマを開く時に間違えたわ」

「お嬢様、確かにその通りですが今はそんな事よりも周りを見て下さい。歓迎されてますよ」

「咲夜さん、これは歓迎されると言うよりはどう考えても敵対されていますよね」
「ええ、分かっていますよ。ただ、私達が能力込みで油断なく戦えば勝てない相手では無いと思ったので、そう表現したまでです」

その正体は、この世界にフランを探しにやって来た紅魔館の面々と、八雲紫だった。スキマを開く場所を間違え、運悪くマジストの支部会合の真ん中に落下してきたのだ。本来であれば、こんな状況に放り出されたら固まりそうなものだが、今回来たのは幻想郷でも上位に位置する実力者である。慌てる事なく、この状況を分析している。

そしてレミリアに至っては、周りが敵対心を抱いているのを感じているのにも関わらず、フランを知っているかどうかをリーダーの男に聞く程である。

「何だ貴様ら！ 何故ここに入ってこれた！」

「あら、丁度良い所に人間……ちょっと良いかしら？」

「……お前は、まさかフランドール・スカーレット……いや、似ているが、違うな」
「いいえ、私はレミリア・スカーレット。貴方の言う、フランドール・スカーレットの姉よ」

「姉!? 妹が居るのは知っていたが、まさか姉まで居るとは……」

フランに妹が居るといふのを聞いたレミリアは、一体どういう事なのか首を傾げるも、それは彼女に会った時に聞けば良いやとひとまず頭の片隅に置いておき、その発言をした男に居場所の質問をした。

それに男が普通に答えて上手く収まるかと思いきや、そこで特大級の爆弾をマジストのメンバーが投下してしまう。

「さっきから聞いてりゃ舐めやがって……良いか良く聞け！ 吸血鬼だか何だか知らねえが、マジストに喧嘩売った奴は誰であろうとぶっ殺してやるからな。特に貴様の妹は許さん、散々痛めつけてくれる！」

「……」

まさかのフラン殺しの宣言である。当然、妹が心配で心配で仕方なかったレミリアがそんな事を聞けば動き出さない筈がなかった。

天井を突き破った後、上空から問答無用で本気の『神槍 スピア・ザ・グングニル』を出し、下に本気で投げ込む。紫とパチュリーが全力で防御結界を自分達と周囲に張った為、紅魔館組と周囲は無傷で耐え凌いだものの、マジスト組はリーダー格のメンバーを残して全滅してしまった。

「全く、いきなり騒ぎを起こさないでほしいわね！ ほら、早くスキマに入りなさい！」

この騒ぎを聞き付けた町の兵士が集まって来るのを見つけた紫は、レミリアを含む紅魔館一行をスキマに押し込んでから、本来出る筈だった場所へと再びスキマを繋げる。

「ごめんなさい。迂闊だったわ」

「まあ、過ぎた事は仕方ないですよ。それよりも、早く妹様を探しに行きましょう」
こうして、リーダーの男から聞いた事を元にレミリア達は、異世界にてフランを探し始めた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

※明日は都合により、投稿をお休みします。

フラン、皇都観光をする

後書きにお知らせがあるので、そこまで見て頂ければ助かります。

護衛の依頼と、採取の依頼を互いに終わらせた私たちとニアたちはギルドへと戻ってそれぞれ報酬を貰って別れた後、のんびり町中を歩いていった。

「さて、これからどうしようかな？ ギルドの依頼ばかり受けてても飽きちゃうし」

「姉様じゃあさ、ここは定番の皇都観光しない？」

「うーん。まあそうなるよね……よし、それにしよう！ ミアはそれでも良い？」

「わたしはそれでも良いよ！」

皇都シェイニングに来てから、レイゼ探し以外でまだやっていない事で思い付くのは皇都内の観光位だ。一口に観光と言っても美味しい物を食べたり、服を買ったり、何かお祭りがあれば参加したり等、1ヶ月後に控える商団護衛依頼まで楽し

みはまだまだ沢山ある。

だから、次やるなら皇都観光かな。心の中でそんな事を考えていると、考えている事と同じ提案をヴァーミラがしてきた。それを丁度良いと思ったので私はその提案を了承し、ミアにも聞いてみたら彼女も提案を了承してくれた。なので、次の予定は服飾店を中心にレイゼを探しつつシェイニーグの観光をする事に決めて

早速、目の前にある大きなお店に入る。

「いらっしやい……あの時の水操の吸血鬼様と、紅魔の少女様に蒼銀の天使様方ではないですか」

「水操の吸血鬼様ってもしかして、ヴァーミラの事？ いつの間にそんな二つ名が……」

「勝手ながら、私が考えさせて頂きました。それにしても昨日の水の小鳥達を、まるで本当に生きているかの様に飛行させたりする技術には驚きましたよ。あんな芸当、魔法を非常に得意とするハイエルフですらそう簡単に出来る物ではないでしょうし」

入るやいなや私たちを見た店員さんが、昨日考えたと言う二つ名でヴァーミラを

そう呼んだ。確かに、『見える範囲に存在する水とその状態変化を自由自在に操る能力』を持つ彼女にはピッタリな物だと私は思った。

ヴァーミラ本人もそう呼ばれる事に不快感を感じてはいない為、彼女の二つ名は自動的にそう決まった。これで私たち3人全員、誰かからつけられた二つ名を得た。

「あ、そう言えばここってどんなお店？ 目立ってたから入ったんだけど、看板見ずに来たから分からないの」

「ここですか？ 貴族や冒険者、各種祭りの主催者が一時的に仲間として雇ったり、警備兵士として雇われる傭兵を斡旋する場所です。あと、奴隷も扱っています」

「奴隷……ね」

どうやらここは、各所の警備や冒険者の護衛等をする為の傭兵に普段の生活をメインにしつつ、護衛の仕事もこなす為の奴隷を扱っている店らしい。

≪奴隷を扱っている≫と言うこの一言にヴァーミラは思う所があるらしく、若干の冷気を出しつつ警戒し始める。私も奴隷と言うものがどんな扱いをされるのか、少しではあるが知っている。なので皇都にある店であるとは言えもしかしたら私たち

全員、特にミアの身が危ないと判断した。その為彼女を庇うようにして店から足早に立ち去ろうとすると、店主の男の人が口を開く。

「ああ、成る程……大丈夫です。普通の人を拐ってる訳ではなく、皇国で比較的重い罪を犯した人物に、束縛の刻印で奴隷にしている感じなので。当然ですが、それ以外の人間や亜人種の人達を拐って奴隷にしているのがバレようものなら、良くて牢獄に種族ごとの平均寿命の半分、大抵は無期限の束縛か死刑になります」

「そうなの？ じゃあここは、拐われた人は居ないんだね？」

私がそう問いかけると、店主の男の人は更にこう続ける。

「当然です。私共もこんな警備が嚴重な所でやらかして死にたくないですしそれに、昔居た違法鬼畜商人の様に罪なき人々を苦しめる趣味は持ち合わせておりませんのでね。まあ、犯罪者とは言え奴隷を扱っている時点で似たような物かもしれないが」

私は別に対象が重い犯罪者であるのであれば、それ位なら問題ないと思う。強いて心配事を上げるとするならば、犯罪者を縛り付ける束縛の刻印がしっかり効いてくれるのか、人を人形おもちゃにして遊んで壊すような、まるで狂気を意思で抑えられな

かった昔の私のような思考回路を持つ誰かが買ってしまった位だ。

そんな事を頭の片隅で考えつつ警戒を解いて店主の男の人と会話をしていた時、この店の中に入って来た1人の男の子を見た。服装からして今まで見かけた事のある貴族とは違う、何処かの裕福な家の子供だろう。

「おじさん！ また来たよー」

「シェール君……またお城から勝手に抜け出して来たんですか。いくらここが国の中で1番安全な皇都とは言え、危険ですよ」

「良いじゃん別に。だってさあ、将来皇帝になる為の作法の練習やらなんやらばかりでつまらないんだもん！」

「君が良くても、下手したら私共の首が飛びかねないですし。と言うか、何で私の店へ良く来たがるんですか」

これはまた大物が来たものだ、私は思った。皇帝になる為の作法の練習と言っていたからあの子供は確か皇太子って言う人なんだろうけど、お付きの兵士と言った存在が見当たらない。まあ、城から抜け出して来たのだから当たり前か。

「おじさんは、僕を普通の子供として扱ってくれるから！ 他の皆は僕を見ると

すっごく気を使ってくれるけど、それが何か嫌なの！」

「あはは……」

「でさ、おじさん。そこに居る人達は誰なの？ 羽が生えてるお姉ちゃんも居るけど」

「あの人達はですね、 \sphericalangle 紅珀の月 \sphericalangle って言う吸血鬼の2人に回復魔導師1人で構成される冒険者パーティーで、金髪の子がフランドール、黒髪の子がヴァーミラ、銀髪の子がミアって言うんですよ」

「吸血鬼なの……へえー」

会話の中、店主の男の人が私たちの事を男の子にそう紹介すると、凄く驚いたような顔をした。だけどすぐに、怖じ気づく事なく目を輝かせてこっちに近づいて来た。

どうやら私の羽とそれに付いている魔法石に興味があるらしく、触ったり叩いたりしながら遊び始めた。無理に退かして痛い思いをさせれば面倒な事になりそうだったので、気の済むまでやらせておこうと決めた。

「ねえねえ！ 何でお姉ちゃんの羽ってこうなってるの？ こんな羽で飛べたりす

るの？ 後はさ……」

「生まれた時からこうだから、理由は分からないの。あ、勿論これでもちゃんと飛べたりするから大丈夫だよ」

凄く飛んで欲しそうな目をしている気がしたので、彼の望み通りに飛んであげる事にした。この店は見た目以上に広い為上下左右にある程度なら飛ぶ事が出来、色々な軌道を取れたりした。

1分位飛んであげると満足したらしく、今度は何か魔法とかで面白い事をやってトリクエストしてきた。生憎、ヴァーミラのように水の小鳥レベルの誰もが満足する技を持っていないから披露する事は出来ない。なので、ここから先はヴァーミラにお願いをする事にした。

「じゃあ、シェール君。私は水で動物を作る事が出来るんだけど、何を出して欲しい？」

「えっとね、猫さん！」

「猫ね……それ！」

ヴァーミラが出したのは水の小鳥ではなく、水の猫だった。流石に鳴き声までは

無理みたいだけど、大きさや動きそのものは生きている本物の猫と言って差し支えないものであったし、おまけに姿形もかなり似ている。水の小鳥もそうだけど、私にはどうやってこんなにも似せる事が出来ているのかが全く理解が出来なかった。「うわあ……凄いや！猫さんだあ！」

シエルと呼ばれる男の子もご満悦のようだ。私も思わず一緒に水の猫と触れ合おうとしたが、ヴァーミラの魔力がふんだんに込められた水に触れれば、耐性の無い私がどうなるか分かったものではないので止めておいた。

そうして、私よりも僅かに小さな男の子が動物と触れ合って楽しんでいると言うほのぼのとした光景を見ながら店主の人と話していると、不意にシエルが水の猫をそっと地面に置いた。もう満足したのかなと思っていると……

「ミラお姉ちゃんありがとう！」

「え、ちょっとシエル君!？」

突然駆け出して満面の笑みを浮かべ、お礼を言いながらヴァーミラに飛び付いたのだ。よくもまあ、初対面のしかも吸血鬼に対して自分から近づくなんて、危機を感じたりはしないのかな？

そんな事を考えながら目の前の光景を見ると、この店に兵士さんが数人走って入ってきたのをこの場に居た全員で見た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

それと急なのですが、明日からしばらく投稿をお休みします。理由は次章でこの小説が終わる予定で、そこまで書き溜めてから一気に投稿をしようと思ったからです。

※定期的に活動報告で進捗状況をお知らせします。

フラン、皇帝の子に翻弄される

本日は、一気に最終話まで十各章の解説の合計12話を投稿します。

「っ！ 吸血鬼、シエール様から離れやがれえ！」

「店主の方まで人質に取られています。迂闊に突撃すれば殺されるでしょうが、早くしないと吸血されてしまいます……」

その兵士たちはこの場に入って来るなり、ヴァーミラに対してそう言いつつ剣や杖を構える。

状況も見ずに殺されるとか吸血されてしまうとかな言わないで欲しいと私は一瞬思ったけど、良く見てみたらそう思うのは仕方ないかもしれない。何故なら、飛び付いたシエールの首筋に運悪くヴァーミラの顔があった上に体勢までが吸血鬼の吸血する光景に非常に似ていたからだ。

当然、そんなつもりなど微塵もない彼女はゆっくりとシエールを下ろして、兵士

たちにこちら側から敵対の意思が全く無いことをアピールする。しかし、さっきの光景が余程彼らに取って強烈だったのか、未だに警戒を解くことは無かった。まあ、この国の皇帝の息子が吸血鬼に殺されそうになったと思っただけからしようがないか。

「よし、今だ！ 『闇を照す聖なる光』を詠唱せよ」

「「はっ！」」

すると、ここに来た魔導師全員が何やら力を合わせて魔法を唱え始めた。この店の店主の方にシェールが行き、攻撃が彼に当たらない事を確認したが故の行動だろうけど、どう考えても店内で放って良いような魔法には見えない。

私が出ていってもこの状況を変えられる所か悪化するのとは明白なので、さてどうしようかと悩む。すると、店主の男の人の側に居たシェールが兵士たちとヴァーミラの間に両手を広げ、立ちほだかる。

「兵士さん！ 僕はミラお姉ちゃんに悪い事はされてないから、今すぐ止めて！ 後、まだお城に戻るつもりはないよ！」

シェールがそう言うと、兵士や魔導師の人たちは魔法の詠唱を止めた。流石皇帝

の息子、子供と言えど凄い権力だ。

「それなら良かったですが……お城から勝手に抜け出して来るのはいけませんね。早く戻って下さい」

「嫌だね！ あんなのやるより、ミラお姉ちゃん達と一緒にいる方が楽しいから……そんなに戻れって言うならさ、水の猫さん出してよ」

「ええ……そんなの無理です」

「ふん。ならいいや、ミラお姉ちゃん達行こ！」

シエールがそう言い、ヴァーミラの腕を掴むとそのまま走り出して店の外に出ていってしまった。私とミアは啞然としている兵士さんや魔導師さんたちに一礼した後、出ていった2人を追いかけて店の外に出ていった。

すると、人の往来の邪魔にならない一角で水の小鳥や猫と遊んでいたシエールに、何人か知らない子供が集まって仲良さそうに話をしていたので見かけた。その周りの親らしき大人たちが遠巻きに心配そうに見ていたので、知らない子供たちが無邪気に話しかけてもしたのだろう。

「フランお姉ちゃんにミアお姉ちゃん、待ってたよ！ ねえねえ、ミラお姉ちゃ

んって凄いんだよ！ 沢山の小鳥さんに猫さん、しかもそれのお陰で友達まで出来ちゃったんだ〜」

「そうなんだ。良かったね！」

「やっぱり、お城に居るとお友達が出来なかったりするのでしょうか？」

「うん」

ミアがそう聞くとシェールは頷いた。彼によるとやはりお城の中では作法の練習等で自由がほぼ無く、娯楽が全くと言って良いほど楽しめない上に友達も全くと言って良い程出来ないらしい。それで度々お城から抜け出して楽しむついでに友達も作る為にあっちこっちと出歩いているとの事。

でも、いくら皇帝の息子とは言え1人で出歩いたら悪意ある者に危害を加えられる可能性が、全く無いとは言い切れないと思った私はその事を聞いてみた。すると、シェールは理解しているらしく誇らしげにこう言った。

「確かにそうかもしれないけど、全く無策と言う訳じゃないんだよ。防御魔法に迷彩魔法、逃げる為の術はお父さんにこれでもかと叩き込まれたから」

「なるほど。でもやっぱり危ないんじゃない……」

「じゃあさ、お姉ちゃん達が僕を守ってよ！」

「「え」」

そう来たかと、私は思った。これが普通の子供であれば何かと理由をつけて断る事も可能だったけど、相手は皇帝の息子であるシエール。断って泣かせようものなら、周りに騒がれてしまって何が起こるか分かったものではない。

「でもねシエール。私たちは約1ヶ月後にここを依頼の為に出ていくから、ずっとは無理なんだよ」

「そうなんだ……じゃあ、ここに居る間だけでも良いから僕と遊んでよ！」

「うん……分かった。でも、私たちが他にやりたいこともあったりするから、無理な日もあるけどいい？」

「うん！」

「よし、じゃあ契約は成立だね！ちなみに今日は予定ないから遊べるよ」

こうして、皇都に滞在している間の大半がシエールの遊び相手兼護衛と言う予定で埋まる事となった。

「じゃあ、僕の大好きな料理を出すお店に行こう！量が多くてすっごく美味しい

んだ〜」

「そうなの？ お城の料理より？」

「ううん、お城のコックさんの作る料理も美味しいよ。でも、量が少ないし毎日似たようなの出されるから飽きちゃったんだよね」

「飽きちゃったって……まあ、毎日同じ味に少ない量じゃそうなるのも当たり前だよ、フランちゃん」

「うん。確かに、お気に入りの物でもなければそうなるかな」

早速、シェールがとある料理を出す店に行きたいと言ってきた。毎日食べている、高いであろう食材を使った料理よりもお気に入りに入りみたいだからきつと、感激するほど美味しいのだろう。

そんな事を考えていると、唐突にシェールの歳が気になった。身長が私より僅かだけ小さく、見た目だけならどれだけ盛っても10歳以下にしか見えない。まあ、この世界では実年齢が当てにならない長命の種族が存在したりするのでもしかしたら私のような見た目でも500年近く生きてたりするかもしれない。

頭の片隅で考えながら聞いてみたら、本当に見た目通りの7歳と言う年齢だっ

た。お城で訓練している賜物なのか、感じる魔力も歳にしてはかなり高い方だし、彼の一举一動も基本はその辺に居る子供だけど、時折貴族を彷彿とさせる立ち振舞いを見せる事がある。流石、皇帝の息子だなあと思った。

そして店に到着しても店の人たちは特に驚きを見せる事もなかったが、私たちが一緒に居るのを見つけると非常に驚き、辺りが一瞬静まった。けど、シエールが『お姉ちゃん達が僕と遊んでくれてるんだ』と無邪気に笑いながら言うのと、『また冒険者を捕まえて遊んでいるのか、ハハハ！』と言った賑やかな感じに戻った。どうやら、これはいつもの事らしい。

「シエール！いつものㄹ飛竜肉入りの野菜炒めㄹかい？」

「うん。このお姉ちゃん達にもお願いね、おじさん！」

「あいよ！ただ、在庫が少ねえからおかわりは無しな」

そうしてシエールがいつもこの店に来て食べるらしい飛竜肉入り野菜炒めと言う料理を頼んでから1時間程待つ。すると、目当ての料理が出てきたけど……野菜炒めの筈なのに明らかにお肉の量がおかしい。これではまるでㄹ野菜入り飛竜肉炒めㄹである。まあ、量が多くて美味しいのでそんなのはどうでも良い事だけだ。

「ん〜！ やっぱり美味しいなあ〜」

「て言うかシェール君、凄い食べるね」

「やっぱり？ 初めて会う人に良く言われるんだよね〜。て言う事はやっぱりそう言う事なのかな……」

明らかに大盛りになっているお肉を小さな男の子が、あり得ない速さで平らげていくその様はまるで白玉楼の主、確か₃幽々子₃って名前の亡霊さんみたいだった。そうして私を含めた全員が出された料理を全て食べ終わり、店を出て次は何処に遊びに行くのか考えていると、脇道から現れた咲夜のような格好をしたメイドさんが現れ、シェールを見つけると声をかけてきた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、自身をレミリア達が探しに来ている事を知る

「シェール様！ こんな所に……」

「あ、レクノヤ！ もしかして、僕を探しに来たの？」

「勿論です。相変わらず突然居なくなってしまわれて、わたくしを含む皆で心配していましたよ。まあ皇帝陛下、貴方のお父様は怒っていらっしやいましたけども」

「だろぅね……」

シェールが親しげに話している様子を見るに、あのレクノヤと呼ばれていたメイドさんは彼の専属なのだろう。

彼女曰く、どうやら居なくなつたシェールを探すように言われ、シェイニーグの街をウロウロしながら探し回っていたらしい。ようやく本人の無事を確認出来た事で安心したのか、スカートが汚れるのも気にせず座り込んだ。

「とにかく、これで安心ですけど……そちらの彼女達は一体？」

「僕が頼んだら遊んでくれた、吸血鬼のお姉ちゃん達だよ！」

シェールが私たちの事をそう紹介すると、一瞬敵意のこもった視線をこちらに向

けてきたが、すぐに元の穏やかな雰囲気のメイドさんに戻った。

「吸血鬼……ですか。まあ見た感じ、いきなり襲いかかってくるような輩では無いみたいですけど、シェール様。もし仮に襲われてたら大変でしたよ？ もう少し危機感と言うものを持って下さい。後、突然居なくなれるとわたくし含む皆様が心配なされますから、止めて頂くかせめて一言残してもらえると嬉しいです」

「ごめんなさい……」

「まあ、でもあの作法の教え方では退屈な上に厳しいですから。逃げ出したくなるのも理解は出来ますけどね」

怒鳴る訳でも、ネチネチ文句を詠唱のように言い続ける訳でもなく、諭すように優しく注意をするメイドのレクノヤ。その様はまるで、母親と小さな息子のやり取りそのものであった。

そんな彼女の注意に耳を傾け、素直に謝るシェール。ほのぼのとした光景を見ながら頭の片隅で考えていると、私たちの方にレクノヤが近づいてきた。

「どうもこんにちは、わたくしはメイドのレクノヤと申します。シェール様の我が儘にお付き合い頂いた方に先ほどはあの様な視線を送ってしまい、申し訳ないです」

「全然気にはしてないから大丈夫。それと後、私の名前はフランドール・スカレットって言うの！ こっちの黒髪の子は妹のヴァーミラ・スカレット、銀髪の子はミアって言うんだ！」

「そうですか、よろしくお願い致します。では、行きますよ。大丈夫、一緒に謝ってあげますから」

そう言いながら、メイドのレクノヤとシェールは去って行ったのを私たちは見届けた。思わぬ人物の登場により今日の予定にポツカリ穴が空いたのでさてどうしようかと考えた。

結果、こう言う時は取り敢えず暇潰しにでもギルドに行こうかと思った為、目的地へと歩みを進めていく。そうして10分経った頃にギルドへと着いたので、建物に足を踏み入れて辺りを見回していると、不意に他の冒険者達の噂話が聞こえてきた。普通ならそれは別に気にならないけど、今日は何故だか凄く気になったので聞き耳を立てる。

「お前、1ヵ月後の商団護衛依頼に参加するんだって？ 金に目が眩んだのか知らんが、実力が伴ってねえから止めておけ。何でもマジストの奴らが襲撃仕掛けて来

るらしいからな」

「それはギルドの人に聞いたから知ってる。だけど、自分が参加を決めた理由がちゃんとあるんだよ」

「ほう。聞かせてくれ」

「どうやら、私たちも参加する事になっている商団護衛依頼にマジストの襲撃があると言う噂があるらしい。そう言えば、エリユカルでマジストに襲撃されたっけ。返り討ちにしたけど、その時はただのヤバイ奴らだって思ってたなあ。」

「そんな事を思っていると、話している2人の内の1人が理由とやらを話し出した。」

「ちょっと前に届いた最新の知らせだから君も知らないだろうけど、聞いて驚くと思う」

「勿体ぶらずに早く言えよ」

「はいはい。じゃあ理由を言うね……商団護衛依頼の襲撃を担当する支部が、5人の女性に物理的に壊滅させられたからだよ。しかも1人は吸血鬼で、今冒険者界隈で結構有名なフランドールの姉だと——」

「え!? お姉様!?」

あまりにも予想外すぎる一言に思わず私は叫ぶ。何故ならそれを聞いて思い付くのは、大切な私の姉であるレミリア・スカレットただ1人だけだからだ。と言う事はもしかしたら、お姉様と八雲紫に加えて咲夜・パチュリー・美鈴辺りが来ているかもしれない。

「私を探しに来てくれたんだ……!」

涙が出る位凄く嬉しいし、何も予定さえなければ今すぐにも探しに行きたいけど、厄介な事に商団護衛依頼とか言う枷がある。それを居る場所が分からない状態で放り出すのはリスクがありすぎるし、ここは何とか堪えて護衛依頼が終わるまで耐えるしかない。

「こんな時に依頼さえ、依頼さえなければ! お姉様たちを探せたのに……!」

「うおっ! 本人が居たのか……様子を見るに、きつとしばらく会えていないんだろうなあ」

「そうなんだろうね」

叫んでしまった事により、周囲の冒険者を含む人たちが私の事について考える話

に一部なったりしたのに気づいたが、そんな事はどうでも良い。私にとっては冒険者に叫んだ恥を晒したと言う事実よりも、レミリアお姉様たちが私を探しに来てくれたと言う事実の方が余程重要なものだから。

「フランちゃん良かったね！ あ、と言う事はもしかしてお別れとか？」

「そんな事はないよ。ヴァーミラだってミアだって、私の大切な仲間であり、家族だから、幻想郷に帰ったって一緒だよ！ あ、でも帰ったら多分ここにはもう戻れないと思うんだよね。だから、もし2人がこっちに居たいと言えればお別れする事になると思うの」

私がそう言うと、2人は見つめあって考え込む。そして少しの沈黙の後、最初にヴァーミラが口を開く。

「レイゼさえ見つかったら、私は姉様に何処にでもついてくよ」

「わたしは、お師匠様に1度お別れの挨拶が出来たら嬉しいかな……」

2人の言っている事を聞く限り、その憂うれいが無くなってなおかつ八雲紫に許可を貰うことが出来さえすれば、一緒に幻想郷へと帰れる訳だ。

「ありがとう……！」

まだ3人で幻想郷に帰れるのが確定した訳でもないのに、凄く嬉しくて仕方がなかった。思わず涙まで出て来てしまい、周囲の注目を更に集める事になるだろう。だけど、嬉し泣きを我慢する事は出来なかった。

こうしてひたすら落ち着くまで泣き続けた後、何故か急に眠気が襲ってきた。耐えようとしたけど、抗う事は出来ずにそのまま眠りについた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、皇城へ行く

「……起きて！ フランちゃん」

「姉様、いい夢でも見てたの？ 凄い幸せそうな顔をしてたよ？」

「
ギルドの休憩スペースで眠ってからどれくらい経ったか分からない時、身体をヴァーミラとミアに揺すられて起こされた。レイゼを含む私たち4人に紅魔館の皆でほのぼのと過ごすあの夢、凄く心が暖まった。」

今はまだ現実ではないけれど、いつかこの世界でお姉様たちと会った時に現実になるのだろう。問題は八雲紫が許してくれるのかと言う事だけだ。

「……ごめん、寝てみたい。まあ、確かに幸せな夢ではあったよ」

「やっぱり？ どんな夢だったのか後で聞かせて。それと、姉様が寝ている間になんか私達に用があるって人が居たんだけど、幸せそうな顔をして寝てる姉様を起こしてまで無理に連れてこうとしたから思わず、あんな風に……ごめん」

「私の為に、でしょ？ だから怒ったりはしないよ」

そんな事を考えていると、ヴァーミラが向こうを指差しながらそう声を掛けて来たので何だと思つて見てみると、氷の牢獄に閉じ込められた皇国の兵士が居た。私の為にやってくれたのは嬉しいけど、何だか面倒な事になりそうだと思いつつ牢獄に近づき、中に居る兵士に問いかける。

「ヴァーミラから聞いたけど、私を無理矢理連れてこうとしたんだって？ そうまですて何をしたかったの？」

「……」

「ああ、そう言う事……えい！」

いくら問い掛けても震えるばかりで反応がないので、もしかしたら私が知らず知らずの内に威圧していたのかと思つたけど、それはすぐに分かった。外側にこれ程の冷気を放つほど強力であるのなら、内側は更に凍てつく冷気で満たされている筈。ただの人間には辛い寒さになっている事だろう。

なので、私の能力で氷の牢獄を破壊して彼らを解放させ、更に念の為にミアに回復魔法を掛けて貰い体力を回復させた。

「改めて聞くけど、私を無理矢理起こしてまで連れていこうとする程の用事って一

体なに？もしかして、シェール絡みで？」

そうして改めて話を聞くと、どうやら私とヴァーミラとミアの3人を呼ぶように、皇帝陛下から指令が下ったらしい。皇帝直々に呼ばれる心当たりはシェール絡みの何かしかないので一応聞いてみたら案の定、そうであった。しかも、怒っていると言うおまけ付きらしい。

しかし、怪我をさせたり精神にダメージを与えたりする行為はしていない。私の羽やヴァーミラの作るミミの水の動物ミミのお陰でかなり満足してくれてたから、呼ばれる心当たりはあっても怒られる筋合いなど無いはずなんだけどなあ。

「分かった。そう言う事なら行くしかないよね。逆らっても面倒なだけだしさ」

「それは良かったです。もし断られてたら戦闘してでも連れて来いと言われたので……吸血鬼と一介の兵士たる我らでは、最初から死にいく様なものですし。現に貴女の妹に完封されてしまいましたから」

「それに優秀な回復魔導師も居るし、3人で連携されたら正直勝てる奴と行ったら、上位聖職者位かな？」

まあ、ああだこうだ言っても仕方ない。今この場を穏便に済ませるには私たち

が大人しくついて行く事が必要なのは明白、お姉様たちと会うまでに面倒なトラブルを抱えたくない私にとって、選択肢はあつて無いようなものだ。と言う事で私たちはその兵士さんについていき、皇城へと行く事になった。

そうして兵士さんの案内で皇城へと入り、比較的装飾が控え目の廊下をゆっくり歩きながら大きな鉄扉のある部屋に入ると思いきや通り過ぎ、少し歩いた先にあつた赤い木の扉の部屋前で止まった。

「失礼致します、陛下」

「連れてきたか、入りたまえ」

赤い木の扉を兵士さんがゆっくり開けると、そこに居たのは皇帝陛下らしき人にシエールとレクノヤ、その他兵士さん等かなり多くの人が居た。

確かに兵士さんが言っていた通り、皇帝陛下らしき人の顔を見てもとても怒っているのがよく分かる。

「貴様らがシエールの言っていた吸血鬼か。全く余計な事をしてくれた物だ。お陰で『水の動物さん達と遊んでる方が楽しい』と作法の練習に余計身が入らなくなつたではないか、どうしてくれる」

「……」

どうしてくれると言われても、それはそっちの問題であってこっちがどうこう出来る問題ではないような気がするんだけど……と言うか水の動物を作ったのはヴァーミラであって、私やミアではないから何とも言えない。

その後も私たちが黙って聞いているのを良い事に、色々言いたい放題言っているけど、まだ命を狙われた訳ではないので攻撃はしない。

「と言う訳だ。今後シェールが貴様らの所に来て、水の動物を要求しても追い返せ。これは皇帝直々の命令であるから、逆らえば即刻牢獄行きだぞ。後、追い返すその時に多少なら傷つけても構わぬ」

「……貴方、正気なの？」

「勿論、正気だ」

予想の斜め上を遥かに行く発言に、思わず素で聞き返したヴァーミラ。私も同じ事を考えていた。まさか、息子を傷つけても良いから追い返せと言われるとは思ってもいなかったからだ。少しシェールの方をチラッと見てみると、何だか泣きそうな目をしていた。

なので、この状況を打破する為の言葉を言おうと考えていると、先にメイドのレクノヤが勇気を出し、恐れをはね除けて発言し始める。

「僭越ながら皇帝陛下、流石にその発言は余計な反発を招くだけかと思われるのでお止めになられた方がよろしいかと。後、この際ですので申し上げておきますが、作法の練習が厳しすぎます。これでは嫌になるのも当たり前ではありませんか？ 一月の間に休日を入れる位の事はしなければモチベーションの維持はおろか、体調の維持すら難しくなります！」

「……メイドごときが抜かしおる！」

察してはいたが、やはり怒り始めた皇帝。周りの兵士に命じ、すぐさま切り捨てよと指示を出した。それを見たシエールが『レクノヤを殺すなら、僕も一緒に殺してよ！』と、大泣きしながらレクノヤの前に立ち塞がって守ろうとする等、この場は混沌と化していった。

「ちっ、剣を下ろせ！」

流石に自分の息子までを斬らせる事はなかったようで、皇帝は兵士に剣を下ろすように命じた。その後もレクノヤと皇帝の言い争いにヴァーミラが加わり、それが

長い間続いた結果最終的には皇帝が折れて、条件付きではあるもののシェールに休日が貰える事になったみたいだ。

「何か良い感じに解決したみたいだね、フランちゃん」

「うん。シェールも正式にお休みもらえたみたいだし、これでこっそり脱走したりしなくても良くなったよね」

この場の空気と化していた私とミアはそんな会話を交わしながら、あの話を聞いていた。すると、皇帝が自らこちらへ近づいてきて私の前に来たので、一体何を言われるのかと思って身構えたけど……

「聞けばお前たち、1ヶ月しか居ないらしいではないか」

「まあ、依頼があるから……」

「では、その1ヶ月の間にある休日はシェールの事をよろしく頼む。これは皇帝である我の命である！」

「あ、はい」

まさかの休日、シェールと一緒に遊んだりしてくれと言う命令であった。これであれば断る理由はないし、断った所で勝手にこっちに来そうだったので承諾した。

「吸血鬼のお姉ちゃん！ほら、早く行こうよ！」
こうして元気を取り戻したシエールに連れられ、シェイニークの町で遊び歩く事になった。

ここまで読んで頂き感謝です！お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！励みになります！

フラン、依頼の為に皇都を発つ

前の話から1ヶ月の時間経過があります。

ノストライト皇国の皇帝から直々に息子の休日の遊び相手に命じられてから今日で1ヶ月、最後の町歩きをしていた。

「吸血鬼のお姉ちゃん達とも今日で最後、何だか寂しいなあ。猫さんとも鳥さんとも今日のお昼でお別れなんだよね……そう言えば、お姉ちゃん達にお願いしてばかりでごめんね。僕だけ楽しんじゃって」

「そんな事は無いよ。私たちも結構楽しめたし。ありがとう、シェール」

確かにほぼシェールの行きたい所ばかりではあったけど、何だかんだ言って結構私たちの好みの物や食べ物が多く、食事面では最高と言っても過言ではなかった。皇都には1ヶ月前来たのが初めてな上に予備知識等も仕入れなかった為、見る物全てが新鮮に映る。だから、何処に連れていかれたとしても楽しめたし、他の面で

も私たち3人はかなり満足している。

強いて不満点を挙げるとするならば、ここに来た理由がギルド本部への聞き取りの為だと言う事と、滞在期間を自分では決められる状況に無いと言う事位かな。

「冒険者って大変なんだね。いくつもの町を行き来したり、長い間依頼で拘束されたり、時には怪我したり……死んじゃったりね。お父さんから聞いたよ、ミラお姉ちゃん」

「まあ、確かに色々大変だね。魔物とか盗賊とか、私の場合は吸血鬼狩りと言った存在と生死を分けた戦いをしたりね。けどシエール君、それ以上に『冒険』は楽しい物だよ。知らない場所に初めて来た時のワクワク感とか、美味しい食べ物を食べた時の幸せな感覚とかね。他にも色々経験した事があるけど……」

そんな事を考えていると、シエールが不意にそんな事を口に出した。私たちが長期の依頼に行くと言うのを聞いて、皇帝から聞いたらしい話を思い出したのだろう。それに対して彼の問いに同意しつつ、冒険の楽しさをヴァーミラは説いていた。

数百年単位でこの世界で生きてきた吸血鬼であるからこそ言える事もあったけど、まあ『国の滅亡』のような特大の出来事に遭遇するのは吸血鬼と同じく数百〜数

千年単位で生きる長命の種族はともかくとして、人間が経験する事は極めて稀だろう。

「そうなんだね！ 良いなあ……僕も皇子じゃなければ色んな所を回れたのに」

「まあ、確かにそうだけだね。でも、皇子で得た事と違ってあるでしょ？」

「うーん……お姉ちゃん達と会えた事かな」

「ふふっ。嬉しい事言ってくれるね、シェール君」

良い感じの雰囲気ですすヴァーミラに、水の猫や小鳥と戯れつつ笑顔を見せながら会話しているシェールの2人。その様子を私とミアは、少し離れた所から聞いていた。

それが終わると、最後にシェールお気に入りのお店に入って、一緒に多種多様の料理を食べる事になった。ただ、今日の昼に別れるだけあってここ1ヶ月の間で最も静かな昼食になってしまったけど。

そうして昼食を取り終わった後は3人でギルド本部へと向かい、入り口付近で待っていたレクノヤにシェールを引き渡した。

「吸血鬼のフラン様にヴァーミラ様、そしてミア様。色々ありがとうございます。お陰でシェール様に休日を与える事が出来、更に我が儘に付き合っ頂けて感謝です。昨日も聞きましたが、依頼が終われば故郷に帰るからもう会えないと言うのが非常に残念に思います」

「うん。私の出身地がかなり特殊な場所だから、仕方無いんだよね」

「僕も会えないのは寂しいけど、仕方ないや。せめて僕の事を頭の片隅にでも気にかけておいてくれれば良いよ」

「シェール君……」

実際いつ帰れるのかは分からないけど、紫とレミアお姉様たちがこの世界に居ると分かった以上、ここに再び来れる確率は低そうだ。なので、依頼が終わればすぐに帰るからもう会えないと、そう言っておいた方が良さだろうとの判断故だ。

こうしてシェールとレクノヤの2人に別れの挨拶をした後、ギルド本部の建物内部へと私たちは入っていった。

「お、来たようですね。集合時間に少し遅れています、まあいいでしょう。取り敢えずここで待ってて頂けますか？ どうやら商団の到着が遅れているようなので」

「はい！」

良く考えてみたら、お昼時に集合なのにのんびり昼食なんか取ってたら時間に遅れるに決まっているけど、今更考えても仕方ない。それに、商団の到着が遅れているらしいから実質的にはギリギリセーフ……かな？

そんな事を考えつつ、のんびり2人と話をしたり魔導書を読んだりしながら暇潰しをしていると、こちらに近づいてくる足音が聞こえてきた。一体誰だと思って見てみると、そこに居たのは魔理沙の帽子と同じ形と似た色合いの帽子を被っている魔導師だった。私の読んでいる魔導書に興味があるようで、さっきからずっとそれを見つめ続けていた。

「おお、まさかこんな所でこの魔導書を持つ者をお目にかかる事が出来るとは！しかも吸血鬼と来るとは驚きました。まあ確かに、高い魔力を持つかの種族が持つには最適なのでしょうけども！」

「えっと……貴方は誰？」

「これはこれは誠に失礼しました。僕は魔法の王と言う冒険団のメンバーです」

「あ、そうなの？　なんか魔導師ばかりが居そうな冒険団だね」

「はい。実際団長含め、魔導師が殆んどを占めています」

声を掛けてきたのは、 \times 魔法の王 \times と言う名前の冒険団に所属するマーカルと言う人だった。私の持っている珍しい魔導師にとっても興味を惹かれ、思わず見つめ続けていたとの事。

「それを持っていると言う事は貴女も魔導師なのでしょう？」

「うーん。まあ、魔導師って言っても良いのかな？　魔法だけじゃなくて剣を使った格闘戦も結構するし……」

「何と！　魔法のみならず、格闘戦までこなすとは流石ですね。うちもメンバー全員ある程度の近接戦闘が出来るまでになりたいものです」

魔導師書を持っていた事から私も魔導師だと思われていたようで、次から次へと魔法についての話が彼の口から飛び出している。具体的には何の属性魔法を使うのか、どの級まで使えるのか等だ。実際、魔導師書を見ながらではあるけど最上級魔法を1回使った事があると伝えると、大層驚いていた。

「成る程、まさか『焰星落とし』を使えるとは驚きました。パーティーを組んでい

なかつたらスカウトしていた所です」

「そうなの？」

「ええ、そりゃあもう！ 最上級魔法を使えるなんて逸材、なかなか見つかりなんてしませんからね」

そんな感じで会話を交わしていると、ギルド本部の職員が耳が張り裂けそうな大声でこう呼び掛けてきた。

「あ、すみません。魔道具の音量調整間違えました……商団護衛依頼に参加される冒険者の皆様方、対象が到着致しましたので外へお願いします」

どうやら、遅れていた護衛対象の商団がやっとここに到着したようだ。それを聞いた私たちは立ち上がり、ギルド本部の外へ向かった。

「凄いね、これはまた規模の大きな商団だ……」

「余程重要な物を運ぶみたい。冒険者の数もかなり多いよねフランちゃん」

「うん。まあ、頑張ろうね」

こうして、依頼に参加する冒険者たち全員の準備が整った後、商団が目的地へと向けて動き出した。その際、レクノヤとシェールがこちらに向けて手を振っている

のが見えたので、少し空を飛んで向こうから見えやすくしつつ、向こうの姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

第6章 主人公一行以外の登場人物・魔法解説

〈魔導剣士クドセーム〉【種族】人間

魔法と剣術をバランス良く扱える『魔導剣士』を名乗る男性。容姿端麗でファンサービスも良く、男女問わずにアイドル的人気を誇るが、気に入った女性であれば誰であろうとも過程を無視して求婚してしまう非常に困った一面を持つ。

その為彼に対して不快を通り越し、憎悪を抱く男女も少なくない。最終的には皇国兵士に連行されていった。

〈新人冒険者弓使い ニーア〉【種族】鳥人（梟系）のクォーター

冒険者登録したての新人弓使いで、人間と梟系の鳥人のクォーター。人の特徴を非常に強く受け継いでいて、鳥人要素は高い視力と夜目だけである。

自身の特徴十師匠からの指導もあり、弓の腕前がその辺の兵士程度ならハンデありの勝負を仕掛けても勝ってしまうレベルである。ちなみに、自分が純粹な人ではない事を仲間には一切話してはいない。

〈新人冒険者 剣士 マールカル〉【種族】人間

ニアやエリーと共に、冒険者登録したての新人女性剣士。

父が非常に腕の立つ剣士であり、それに憧れを抱いた彼女も後を追うように剣士になった。

そんな父に指導をして貰ったが故に、剣の腕は皇国隊長クラスにも引けを取らない程まで上がっている。

〈新人冒険者 魔導師 エリー〉【種族】人間

マールカルやニアと共に、冒険者登録したての新人魔導師。

生まれながらにしての天才かつ魔法大好きな努力家で、独学で魔法を習得した上に独自の攻撃魔法まで開発してしまう程。

ただ、彼女の開発する魔法は全て威力も魔力消費量も桁違いである為、当の本人ですら普段は使うことはない。

〈紅魔館の主 レミリア・スカレット〉【種族】吸血鬼

幻想郷にある『紅魔館』の主で、『フランドール・スカレット』の姉。

昔は、フランが能力を制御出来ていない事や狂気を危険視し、同時に彼女をあら

ゆる意味で守る為に地下室に閉じ込めて隔離していたのだが分かって貰えず、それ故に仲が非常に悪かった。

しかし、時が経つにつれて理解してくれたのか仲が徐々に良くなっていき、今では初めて見る人が引くレベルにまで互いに仲が良い。

〈博麗神社の巫女 博麗霊夢〉【種族】人間

幻想郷と外界を隔てる結界の管理者で、博麗神社の巫女。幻想郷で起こる異変解決の専門家でもある。

異変を起こした者が例え神であろうとも臆せず向かって行ってねじ伏せる強さを持つ為、力の無い妖怪等からは恐れられ、力のある者も敬意を払う。

〈紅魔館のメイド長 十六夜咲夜〉【種族】人間

紅魔館で働くメイド達をまとめるメイド長。館の管理を任されている。

『時間を操る程度の能力』を持ち、それをフルに活用して非常に広い館の管理をこなしている。また、能力の応用で空間の広さを弄る事も可能であり、見た目よりも

館が広いのはその為である。

〈紅魔館の門番 紅美鈴〉【種族】妖怪

紅魔館を侵入者から守る為に門番をしている妖怪。

これといった弱点はない上、『気を操る程度の能力』を駆使した体術が得意である。なので、スペルカードルールに則らない真っ向勝負を仮にするなら、相当の手練れでない限りは接近戦はしない方が良い。

門番の仕事をしている際立ったまま寝る事があり、良く咲夜にナイフを投げられている。

〈紅魔館の魔法使い パチュリー・ノーレッジ〉【種族】魔法使い

紅魔館の地下にある巨大図書館に居候している魔法使いで、レミリアとは互いに愛称で呼び合う仲である。

種族としての魔法使いである為睡眠や食事を必要とせず、それにより出来た膨大な時を魔法に費やしている。なので、魔法に関しては彼女の右に出る者は居ないと

まで紅魔館の皆に言われている。

最近では、たまたま見つけた異世界の魔導書に書かれている魔法をを全て会得しようとして躍起になっている。

〈妖怪の賢者 八雲紫〉【種族】妖怪

現在の幻想郷を創った賢者の1人と言われている古参の妖怪。

あらゆる場所に気まぐれで現れ、いつの間にか居なくなっていると言う神出鬼没ぶりを發揮している為、彼女の現在地を掴む事は不可能と言っても過言ではない。考えが読めず、胡散臭さがある為信用があまり無い。その為か他人から避けられる事が多く、まともに相手にしてくれないのは霊夢位。

〈皇国皇帝の息子 シェール〉【種族】人間

ノストライト皇国の皇帝の息子で、好奇心旺盛な7歳。

厳しい父である皇帝から次期皇帝になる為の作法をみっちり叩き込まれているが、それが嫌で度々兵士達の目を欺いて町に危険を省みず行く事が多い。

本人は普通の子供の様に接して欲しい気持ちがあるが、皇帝の息子故にそれは叶

わず悲しい思いをしている。その為、町に出た際は大抵自分がやらかした時に怒ってくれた、とある店の店主の元に入り浸る。

〈皇帝の息子のメイド レクノヤ〉【種族】人間

皇帝の息子『シエール』の専属メイド。

最初は皇帝からの無言の圧力もあり事務的にシエールと接していたが、慣れて来てからは子供好きの本来の性格が出始め、良く遊んだり時には叱る等、積極的に関わる様になる。

シエールの身辺警護の仕事も兼ねていて、Cランク冒険者5人と1人で余裕を持って渡り合うレベルの実力を備えている。

【登場魔法】

《攻撃系魔法》

『闇を照す聖なる光』
ホーラシヤイネス

吸血鬼・悪魔・幽霊等と言った魔に属する存在や、闇属性に強い耐性のある存在

に対して非常に強い特効を持つが、それ以外には殆んど無害な光を広範囲に照射する、光属性中級魔法。複数人で協力して放つ事により、より効力が高まる。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

最終章 護衛依頼編

フラン、盗賊団を撃破する

「そう言えばさ、目的地を教えて貰ってないような気がするんだけど」

「あ、確かに。聞けば良かったね、姉様」

「うん。まあでも、皆一緒だし迷う事は無いから別に良い——」

「エンディアですよ、フランさん」

レクノヤとシエールの2人の姿が見えなくなるまで手を振った後、地上に降りてからそんな会話を私たちはしていた。よく考えたら、この依頼をされてから目的地を向こうから聞かされていない上にそれを私たちは疑問にも思わなかったから、こっちから聞いたたりもしなかった。

まあ、皆一緒だしどうせ私たちだけで行動出来ないから良いやと思っていると、前に居たマーカルが親切に町の名前を教えてくれた。彼によると、この商団の最終

目的地はエンディアと言う名前らしい。

「あ、もしかして余計でしたか？」

「ううん、教えてくれてありがとう」

親切に教えてくれたマーカルにお礼を言いつつ、歩みを進める。巨大な荷馬車に荷物をこれでもかと言うほど詰め込んでいる為か、団体の移動速度が非常に遅い。車輪が何処かにはまって動けなくなったり、重量に耐えきれずに荷馬車が壊れるような事があればそれだけでかなりの時間を取られる事になるだろうけどまあ、有名所の商団らしいから対策取ってあるだろうし、大丈夫かな？

「あ、それとフランさん。道中、休憩兼商売で2〜3日ミロミスって村に寄るらしいですよ。商団の人が言っていました」

「そうなの？ ミア、もしそこにお師匠様が居れば挨拶出来るね！」

「うん。でもあれからかなり経ってるし、居ない可能性の方が高いよきつと」

そんな事を考えていると、マーカルがまた気を利かせて商団が次に寄る場所をミロミスの村だと教えてくれた。計らずも、妖精のお姫様ヱリエスとの再会の約束を果たせる事になったのは運が良かったと思っただが、休憩中にも護衛する冒険者が

必要らしいとの話を誰かから聞いたのを思い出した。その抽選に当たってしまったら最悪、2〜3日の大半を商団の荷馬車近辺で過ごす事となるだろう。

そうなれば、エリエスとの再会やミアの師匠を探す事はおろか、村でのんびり休憩を取る事すら難しくなってしまうだろう。せめてここだけでも出来れば抽選に当たらないでくれる事を願いたい。

ミアもそう思っているようで、時折祈るような仕草を見せる。

「どうか、ミロミスに居る時だけでもお願い……」

「最悪、ミアの護衛にヴァーミラをつけて商団の方は私1人だけでって言うのは……駄目か」

「多分駄目だと思うよ、姉様」

そう3人で話し合いをしているとマーカルが再び会話に参加してきて、私たちの希望を打ち砕く事実を突きつけてきた。

「僕もそう思います。何故なら抽選は全員参加のくじ引きで完全にランダム、その結果が全てです。しかし、この護衛依頼に参加している中でも上位に位置すると噂の貴女方々紅珀の月々と僕の所属する魔法の王々、それに疾風の人たちはもしか

すると固定参加枠に入れられるかもしれないらしいみたいですから」

固定参加枠、つまり有無を言わず護衛にされてしまうかもしれないと言う事だ。ここへ来て、私の懸念が現実のものになるうとしてしている事に頭を抱えた。まあ、まだ今の時点では~~シ~~かもしれない~~シ~~と言うだけで~~シ~~そうだと~~シ~~決まった訳ではないから、何とも言えないけど。

「まさか、固定参加枠なんてものがあるなんて全く知らなかったよ。もしかして私たち、ギルドの人がそう言う話をしていたのを聞き逃したのかなあ」

「かもしれないね、フランちゃん。今から固定参加枠に入らない事を祈るばかりだよ」

そんな話をミアとしてみると、商団の伝令さんが前の方から駆け寄ってきて私を含む冒険者たちに声を掛け始めた。どうやら運悪く前方からとある盗賊団集団が接近してきているらしく、このままではかち合って戦闘になるかもしれないとの事。

しかも、こちら側の護衛冒険者たちは73人なのに対して相手方は見た感じ100人を軽く超えるらしい。軽い小競り合いレベルである。

「100人以上……こりやまた面倒な。居場所が分かってるならここで待ち構えて

る必要ってなくない？」

「姉様、確かにそうだね。その盗賊団の居る場所まで飛んで行って、先制弾幕攻撃で撃滅しよう」

ヴァーミラとの話し合いの結果、わざわざ味方の居るここで待ち構えて無駄に犠牲者を増やすよりは私たち2人で盗賊団の撃滅、最低でも大半を撃破して撤退させる方が良くと判断したが、不安要素は多少ある。なので、その伝令さんに100人を超えるらしい盗賊団について色々聞いた結果、このまま放っておけば不味いの確証を得た。

「と言う訳で、今から2人で盗賊団とやらを撃滅しに行ってくるからミアの事をよろしくねマークル」

「あ、はい。分かりました」

そうして私とヴァーミラは飛び上がり、伝令さんが指し示した方向に向かい、彼らの居る場所の上空に辿り着く。念の為に蝙蝠を複数飛ばして盗賊団の会話を盗み聞きした所、想像以上の下衆な発言のオンパレードに気分が悪くなった。ヴァーミラにも伝えた所、私と同じように気分が悪くなったようだった。

「……姉様、一応聞くけどどうする？」

「通常弾幕にしてあげようかと思っただけど止めた。下手すれば皆の命が危ないし、出来るだけ死なない程度にスペルカード使うよ……『禁弾スターボウブレイク』！」

私の羽についている魔法石のような形をした、色とりどりの弾幕を空から雨あられのように降り注がせる。偵察蝙蝠を通して聞こえる声から、かなり混乱している事がよく分かる。当然、私に向けて反撃の弓矢や魔法等による攻撃が飛んで来るが、弾幕ごっこで慣れていたので難なく回避する。

そうしている内に遥か上空の魔方阵から綺麗な氷の弾が、不規則な軌道を描きながら下に居る下衆い強盗団に着弾していく。ヴァーミラが『天水降りし氷星』を使ったようだった。障壁を張ったりしてこれを防ぐ魔導師が居たものの、かなりの被害を与える事に成功した。

しかし、ここでどうとう偵察蝙蝠の存在が敵の勘の良い者にバレてしまい、消滅させられてしまった。そこで私はヴァーミラを呼び寄せ、2人で一緒に近距離戦闘を仕掛ける事に決めた。1人でも良かったけど万が一の可能性も無いとは言え

ない状況、2人で行く方が安全である。

「私がこれで接近戦を仕掛けるから、ヴァーミラは中距離からミストルティンでサポートをお願い！」

「任せて、姉様」

そうして、私の位置から1番近い位置に居た相手に持っていた棒で襲い掛かる。受け止められるが、種族の特徴を生かしたゴリ押しで剣ごとへし折って殴り付ける。隙を突いてきた強盗に対してはヴァーミラの輝く矢で射て止め、追撃で私が棒で薙ぎ払う。

「ちきしょう！ 吸血鬼に襲われるとか冗談キツいわ！」

「ヤベエ、団長が蒼い矢にやられた！ お前ら早く逃げろ、このままじゃ全員奴らの餌にされちまう！」

「でも商団を襲う計画——」

「吸血鬼に襲われた時点でもう破綻してんだよ！ 良いから早く、反撃しつつ逃げろぞ！」

7 割程無力化した時点で強盗団が撤退を始めた。しかし、また潜伏されて不意

討ちされまくるのも面倒臭いので追撃は止めない。その後も弾幕や魔法、ヴァーミラは能力も駆使して強盗団を駆逐し続け、最終的にはほぼ全滅まで追い込む事に成功した。

「ふう〜。大戦果かな？」

「そうだね姉様。じゃあ、早く戻ろう」

こうして、商団を襲って下衆な事をしようとしていた強盗団を撃破、商団の人たちを守る事が出来た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、エリエス達と再会する

人物の名前を間違えていたので、修正しました。

強盗団のほぼ全てを撃破して団長を捕まえた後、私たちはそれを伝える為に伝令さんを探していた。

「良い所で邪魔しやがって！ お陰で計画が台無しになった上に貴様らの糧にするだど!? ふざけるな、この——」

「煩いなあ。大人しくしてないと本当に食べるよ？ 良いの？」

「……」

途中、捕まえた団長が余りにもやかましい叫び声を上げながら暴れだした。面倒なことこの上無いので、獲物を見るような目で見つつ、耳元で囁くようにしてちよっとだけ脅してあげると途端に大人しくなった。

「やっと黙ったね……さて、伝令さんは何処かな？」

「姉様、あそこに居るよ」

「本当だ。おーい！強盗団撃滅してきて、団長の人間を捕まえてきたよー！」

空中から下を見ながら探す事数分、ようやく強盗団襲来の知らせをしに来てくれた伝令さんを発見したので、声を出して呼びかけてから眼前に降り立ち、捕まえた団長らしき人を投げる。

「早っ！しかも投げ方雑……あ、ご苦労様でした。とんでもない戦闘でしたね。ここからでも結構良い感じに見えてました」

「そう？まあ確かに、良い感じに見えるね。それで、私たち2人が撃破した強盗団はどうするの？放置？」

「えっと……どうしましょうかね。ちょっと待ってて下さい、ギルド関係者に問い合わせてきます」

伝令さんが、そういう類いの問題解決の為に派遣されてきたらしいギルド本部の関係者が乗る荷馬車に向かい、私とヴァーミラが撃破して現場に放置したままの強盗団をどうするかを聞きに行った。そうして5分程経つと、伝令さんが戻ってきた。

「えっとですね、皇国とギルド本部の方針でそう言う襲いかかって来た強盗団等は返り討ちにした後、このまま放置で構わないし、対処してもどちらでも構わないでいいです」

「へえ。何でかな？」

彼曰くギルド本部と皇国の方針で、シェイニーグエリユカルの間では強盗団の状況に関わらず放置しても構わないとの事。自分でやっておいてなんだけど、あの人数を野晒しにしておくのもなんか違和感がある。一応麻痺魔法を掛けておいたけど、もし逃げ出したりしてまた他の一般人に襲いかかったり等すれば大変だ。こんな心配事を感じるなら、いっそのこと殲滅させておけば良かったかな？

まあそれは一旦頭の片隅に置いておき、どうしてそう言う方針を取っているのか気になった私は、更に伝令さんに聞いてみた。

「何でも、今回は運良く来なかったですが、ワイバーン等の魔物もそこそこ出現するらしいので、放置していてもその内綺麗さっぱり居なくなると言うからだとか。ちなみに、今回はミロミスのギルドと冒険者たちに高額報酬を支払って後始末をお願いするらしいです」

「成る程ね。それで、私が捕まえてきた団長は？」

「そのまま捕縛して引き渡すみたいですよ」

なるほど。要するに、ここには人を喰らう魔物がうようよとまではいかないけど出ることがあるから、強盗団は放置していても構わないらしい。色々心配要素はあるけど、まあ対策位はしてるでしょ。

そんな事を考えていると、どうやら今回は自然に居なくならせるのではなく、現場の判断でミロミスのギルドやそこに居た冒険者たちに後始末を報酬ありで依頼する方針を取るらしいと聞いた。放置していても構わない筈なのに、わざわざ処理しに行くと言う事はやはり方針に問題が……

まあ、まだそうと決まった訳じゃないし、仮にそうだったとしても一介の吸血鬼がどれだけ騒ごうが変わる事はないだろう。

そう考えつつ、私とヴァーミラが強盗団を撃破したエリアを通り抜け、ちょくちょくある魔物の襲撃をいなしてゆっくり進み、道中抽選会を行ったりしてミロミスに到着した頃にはもう既に日は沈んで夜になった。

「ふう〜。やっと着いたね、姉様」

「うん。そう言えば、ミロミスに居る間の護衛の固定参加枠には私たちは選ばれなかったみたいだよ。それに、くじ引きによる抽選で私たちは滞在最終日だけって事になったらしいしまあ、上々じゃない?」

「確かに、そうだねフランちゃん!」

流石に都合良く村を満喫出来るとまではいかなかったけど、2日間自由に使える時間を得る事が出来たのは大きい。自身の運の良さに感謝しつつ、私たちは初めてここに来た時に泊まった民家に3日間泊めて貰えるか交渉しに向かった。もう寝ている時間であれば諦めたけど、魔導ランプ[※]と言う道具の明かりが外に漏れているから、まだ寝てはいないようだ。

「こんばんは。カレット、また来たよ……あ、エリエスも居るじゃん!」

「おお、フランドール達か。久しぶりだな、元気にしていたか?」

「うん。エリエスも久しぶり」

「おー! あの時の約束、守ってくれたんだね! フラン達、元気にしてるみたいで安心したぞー。それで、今日はどうしてここに寄ったの? ただ会いに来ただけじゃなさそうだけど」

「そうなんだよね。実は……」

家の中に入って歓迎された後にここに来た理由を話し、泊めて貰えるかどうか聞いた。すると、そんな事なら構わないと言ってくれたので言葉に甘え、ありがたく滞在期間中は泊めて貰う事になった。

「それにしても、冒険者資格剥奪とか討伐対象とかの厳しい罰にならなくて本当に良かった。フランドールのやった事だけ見れば不味いが、経緯まで見て仕方ないと判断が下ったのだろう」

「うん。カレットのほぼ言う通りの事をギルド本部での会議で言われたの」

「なるほど。まあ、何はともあれ護衛依頼への強制参加程度で済んで良かったと思う。さあ、この話題は終わりにして夕飯食べるぞ。作りすぎたから是非フランドール達も食べてってくれ」

カレットの一声で、大量に作りすぎたらしい夕食を楽しく話しながら5人で食べる。ついでにここに来るまでの起こった出来事を話したら、案の定おじさんは食い入るようにして私の話を聞いていた。相変わらず、冒険者の冒険話が好きな人だなあ。

そうして会話が弾んでいた時に外が暗いにも関わらず、エリエスが外で遊ぼうとせがんできた。私的には夜でも全く問題はないけど、彼女の的にはどうなんだろうかと気になったので聞いてみたら、全く問題ないと言い切った。この妖精は夜目が効く特性でもあるんだろう。

それからエリエスと共に月の輝く夜空を飛び回ったり等をしながら遊び、彼女が満足するまで付き合った後は全員で何故か用意されてた紅茶を飲みながらのんびり過ごし、眠りについた。

そして次の日の朝、いつも通り起きた私たちはミアのお師匠様のヒリマを探すべく、村の中にある彼女の家へと向かった。カートラによるとここ最近はミロミスに居る事が多く、今日から1週間は確実に家に居るらしい。

「フランちゃん！ 本当にわたし、運が良いよね！」

「うん。エリエスとも再会出来たし、3日の滞在期間の内2日を自由に使える事になったし、確かにそうだね」

ミアは運良くヒリマに会えると分かってからずっとテンションが高く、歩く私と

ヴァーミラは早く早くとずっと急かされている。

「ヴァーミラちゃん、フランちゃん！早く行こうよ！」

「分かったから落ち着いて、ミア」

こうして、興奮しているミアを落ち着かせつつヒリマに会いに、私たちは向かった。

ここまで読んで頂き感謝です！お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！励みになります！

フラン、ミロミスを発つ

また人物の名前を間違えていたので、修正しました。

「お師匠様、居ますかー！ お師匠様ー……」

「ミア、そんなに叫ばなくても聞こえてるわ」

「……あ、ごめんなさい」

ヒリマの家に到着するやいなや、周りに良く響き過ぎる位の声量で何度も何度も「お師匠様」と連呼するミア。その声に反応してやって来たヒリマに少しの間気がつかず、彼女が声をかけてようやく気づく。

「あら、皆揃ってまたミロミスに来たの？ 何か用事？」

「うん。実は……」

そうして、ヒリマにもカートラと同様の説明をした後、ミアが会いたいと言った為来た事を伝えた。すると、彼女は嬉しそうな笑顔を見せ、ミアの頭を優しく撫で

ながら話し始める。

「これまで数多くの弟子を育てて来たけど、ここまでミアの様に慕ってくれた子は居なかったわ。優しく教えようとしても、どうやっても過度に厳しくなってしまう悪い癖を含めて全て受け入れてくれた心が広くて強い貴女は、きつと私なんか超える回復魔導師に近い内になるでしょうね。ありがとう、そしてごめんなさい」

「ううん。確かに厳しかったけど、わたしの為に色々やってくれたのを知ってたから。だから、謝らなくても良いですよお師匠様」

この様子を見る限り、ヒリマとミアはとても良い師弟関係を築けて居たように見える……いや、これは師弟などではなくもはや親子と言っても過言ではない。やはり、この場所に来た事は正解だったと心から私はそう感じた。

そうして2人が良い雰囲気のまま会話を始めてから10分待っていると、ようやく会話が終わったらしくミアがこちらに戻ってきた。表情を見ると、かなり満足している事が見てすぐに分かる位の笑顔だった。

「ミア、もう話は良いの？ まだ時間は沢山あるけど」

「うん、今はもう大丈夫。お師匠様はこれから森に薬草を取りに出かけるって言っ

てたし」

「そうなの？ 分かった、じゃあヴァーミラ行くよ」

「分かった、姉様」

最後にヒリマに皆で挨拶してから家を出てからは、エリエスの住む妖精の森へ行ってのんびりくつろいだり、そこに居る妖精たちと弾幕遊びをしたりした。

その中でもやはり、ヴァーミラの能力によって作られた水の生き物たちは好評だった。しかも、小鳥・猫に加えて今回は子犬・蝙蝠・蛇の3種類が追加されている。彼女は一体、全部で何種類の生き物を作る事が出来るのだろうか。

そうして休憩も食事も忘れる程夢中で楽しんでいれば当然、時間などあつという間に過ぎて行き、気づいた時にはもう既に日が暮れ始めていた。

帰りはのんびり森を歩きながら帰ろうと計画していたけど、それでは真夜中になってしまいう上に吸血鬼の私とヴァーミラは良いけど、ミアに取っては暗すぎて楽しめる所か身の危険まで感じる事になるだろう。

「さて、仕方ないけど飛んで戻るからミア、私に掴まって」

「分かったよフランちゃん」

と言う事で、まだ日が完全に沈む前に飛んで帰る事に私たちは決め、ミアを抱えて村に戻った。そこで今まで食べていかなかった昼食と夕食の分、私とヴァーミラは店に行って出された料理をヒリマやカートラを含む周りにドン引きされながらも大量に食べ、泊まっている民家へと向かった。

お腹いっぱいになった私たちにまるで、魔法か何かを掛けられたかのような猛烈な眠気が襲いかかり、抗う事も出来ずにその場で眠りについた。

そしてミロミス滞在3日目の朝、滞在最後の日となった。お昼過ぎまでの護衛の仕事を終え、次の目的地のシルコーへと向かう準備をしていた。すると、ヒリマやカレット、エリエスに妖精たちが見送りに来てくれた。

「もう行っちゃうのかー。しかも、もう会えないかもしれないって悲しいよ……」
「まあ、フランドールの故郷が相当面倒な場所にある上、迎えがこの世界の何処かに来ているとあれば、もう会えなくなると言うのも仕方の無い事だ。誰だって故郷に帰れれば帰りたいだろうさ」

「ミア、フランの故郷に行っても元気で居てね。それ以外に私は求めないから」

昨日の夜、もう会えなくなるかもしれないと言った時は驚かれたが、それほど気にしてくれたと言うのが嬉しかった。可能であるならば、数ヶ月に1回程度でも会う機会が作れたら良いなど私は思った。

そうして商団がルコーの町に向けて動き出したので、見えなくなるまで私たちも見送りに来た皆に手を振りながらミロミスを出発した。

「これでお師匠様とも最後かあ。実感わかないけど」

「ミア、大丈夫？ 無理してるなら私についてこなくても良いよ」

「ううん、大丈夫。お師匠様にフランちゃんとヴァーミラちゃんと一緒に上手くやってくって宣言したし、それに2人の事が好きだから」

道中、そんな嬉しい一言をミアから貰った。こんな事を表立って言ってくれたのは、レミリアお姉様や紅魔館の皆以外だとミアが初めてだった。

「嬉しい事言ってくれるじゃない、ミア」

「そう？ なら良かった」

「言っておくけど、私も姉様の事好きだからね！」

訂正、ミアが初めてでヴァーミラが2人目だ。

そんな良い感じの雰囲気では話をしていると、ルコーの町での護衛のくじ抽選が始まっていたのに気づいた。これをやらないと自動的に対象になってしまうから急いで向かい、くじを引いた。結果は3日の滞在期間中はずっと自由に時間が使える事に決まった。

「フランちゃん、くじ運良いよね。わたしが引いたら多分3日間護衛って結果を引きだすと思う」

「本当、自分でもそう思うよ。トラブルに良く巻き込まれてる分、こっちに運が向いてるのかなあ？」

そんな会話をしつつ、他の冒険者たちとも楽しく話ながら歩き続ける事7時間、日が暮れてきた。どうやら今日はここでキャンプをするとの事なので準備を皆と共に手伝い、終われば夕食を一緒に取る。それから特にやる事はなかったし、もう夜だったので皆と一緒に眠りにつく事にした。

翌日、日が昇りきらない早朝に起こされた私たちは、寝ていたテントを片付ける。それを終えたらまだ片付け途中の人を手伝ったりして、少しでも早く出発出来るように努力した。

そして全員の片付けが終わった後、忘れ物等が無いか確認してから出発した。早朝だけあって、昇る太陽がすごく綺麗だった。他にも色々な景色を見ながらミアやヴァーミラとの会話を楽しみつつ歩き、太陽が真上に来る頃にルコーの町に到着した。

「ここがルコーの町か。結構多くの人が居るんだね」

「うん。ここも賑やかで楽しそうだし、くじ引きで3日——」

その時ヴァーミラが不意に立ち止まり、まるで1人だけ時間が止まったかのようになつた。良く見てみると、ある一点を見つめている事が分かったので、その視線の先を見てみると……そこには、宝飾品を売っていたレオネが居た。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方も感謝です！ 励みになります！

フラン、親子を感じる

今話では時間経過が殆んどありません。あれやこれやと文章を詰め込んだ結果、こうなりました。

※酷い人物の名前違いを発見した為、修正しました

「あ……レオネえ……レオネええー!!」

「待ってヴァーミラ！ 危ないって！」

私と出会う前何年も一緒に居て、カーテンド王国で別れてからも度々彼の事を口に出しては涙を浮かべる程慕っていたヴァーミラが、本人を目の前にすればどうなるか。答えは簡単、抑えていた感情を爆発させてレイゼに飛び付くと言う物だ。

案の定私が止めるよりも早く、今までで1番強烈な冷気を無自覚で放ちながらレオネの元へとヴァーミラは駆け寄る。それを見ていた周りの人たちは、走る氷塊と化した彼女に驚きつつも避けた為、怪我人は居ないようだった。

急いでやらかす前に止めなければ不味いと思ったので、ミアを抱えて飛んで追いかけた。しかし、追い付いた頃にはヴァーミラはレオネに思い切り抱きつき、泣きながら再会を喜んでいた所であった。

「ヴァーミラ!? ちょっと……宝石がめり込んでも!! 痛いし、それに冷たいから離れて!」

「うう……ごめんね。でも私レオネに会えたの、嬉しかったんだよ?」

「ああ、それはお前を見れば良く分かる。と言うか、俺も凄い嬉しいぞ」

「本当?」

「当たり前じゃないか。自分の~~娘~~との再会を喜ばない奴がどこに居るってんだ?」

「えへへ……良かったあ!」

ヴァーミラの冷気撒き散らしによる周りへの被害も運良く皆無、強いて被害を言うならレオネが多少の怪我を負ったのと、彼女に驚いてアイスのようなお菓子を子供が落としてしまった位か。取り敢えずその子供に対して私が代わりに謝って、手持ちに金貨数枚しかなかった為金貨1枚を渡した後、2人の元に向かう。

「あ、フランさんにミアさん！お久しぶりですね」

「うん。久しぶり、レイゼ」

「久しぶりです、レイゼさん。ここに居たんですね」

「ええまあ、あれから色々ありましたね……流れで自作の宝飾品を売っていたのですよ。本当は服を作る方が良かったんですけど、運悪くあの時に大半の材料を置いてきてしまいましたね」

なるほどね。と言うか、良く考えたらヴァーミラに結構力を入れられて抱きつかれたのにちょっとした怪我で済む凄い防御力にビックリした。不思議に思って聞いてみたら、ここ最近覚えてたのの防御魔法を必死に展開したかららしい。

お陰で何個もの宝石がめり込む程度の怪我で済んだとホッとしていたレオネだけど、それって私たちならともかく、普通の人間のレオネにとって $\ddot{\sim}$ 程度 $\ddot{\sim}$ と呼べるのだろうか？

「まあ、それはともかくミア、レオネの治療お願いね」

「分かったよフランちゃん。レオネさん、痛いけど我慢してね」

そう言うミアはめり込んだ宝石を力ずくで抜き、回復魔法を掛けると言う作業

を繰り返して完全に治療を終わらせた。血などで汚れた手は浄化魔法で綺麗にし、汚れた宝石はレオネの意向で廃棄処分する事になった。

「ふう……助かりましたよ、ありがとうございます。それで、どうしてこの町に？」
「えっとね……」

そして、レオネにもミロミスの方にエリエスとカレットに説明したのと同じ説明をした。

「なるほど……色々あったんですね。俺、冒険者ギルドには立ち寄らないので殆んど知りませんでした」

「まあ、別に誰かに知られたいからやった訳じゃないし、気にしないで。それより、ヴァーミラが言いたい事あるみたいだから聞いてあげて」

「あ、はい……どうした？ 怒らないから言っても良いぞ。聞けるかどうかは別だがな」

すると、ヴァーミラは冷気を無自覚で放ちながらレイゼに向かって、何故か恥ずかしがりながらこう言った。

「もう一生離れたくないから、父様！ お願い、私の側に居てよお……」

「それってつまり、俺がフランさん達のパーティーにとって事だよな？」

「戦闘出来なくても良いから、私が命をかけて守りきるから……お願い……一緒に来てよ父様あ」

最後の方は泣きながら一緒に居て欲しいと、守る為なら命すら惜しまないと必死に頼み込むヴァーミラ。呼び方まで父様と変わっていた。それを見たレオネは、少し考えた後に私の方を見てきたので、一緒に同行しても良いか聞きたいと判断し、大丈夫と一言だけレオネに送った。

「分かったよ……他ならぬ娘の頼みだ。フランさんにも許可を貰ったし、俺も一緒に行く事に決めたぞ」

それを聞いた瞬間、冷気を放出しながら満面の笑みを浮かべ、上空を飛び回ると言う行動に出始めた。更に興奮したのか、放出される冷気がどんどん強くなっていった最終的には、彼女を中心に100m範囲で魔方陣が展開されてその空域の気温が急激に下がり、雪が降り、氷の鳥が優雅に空を舞った。彼女なりの最高級の喜びの表現方法なのだろうか。

当然、周りの人々は急な気温低下に衝撃を隠せない。このままでは物凄く目立つ

上に実害まで出始めるのは确实だったので、レイゼが必死に止めるように説得し始めた。それを聞いたヴァーミラは速攻で魔方陣を解き、下に降りてきた。

「えっと……皆様、ご迷惑をかけて大変申し訳ありませんでした！」

「迷惑かけてたの？ ごめんなさい……」

レオネの一声で興奮が完全に収まったヴァーミラは、彼と共に周りの人々に冷気で迷惑をかけた事を謝った。幸いにも、怒鳴ってくるレベルで怒っている人は居なかったようで、次は気をつけてと一言言われる程度で済んだ。

「ねえ父様、何だか疲れちゃった……」

「なら背負うか？」

「うん……」

レオネがヴァーミラを背負い、この状況では町歩きは厳しそうだと判断した私とミアは、彼と共に宿へと向かう事にした。

そうして背負われて歩いている内に、幸せを体現したかのような顔をしながら夢の世界へと入っていったヴァーミラ。その様子を見ると、本当に父娘であると言われても遜色がない。

「どんな夢を見てるのかな」

「分からないけど、とにかく物凄く嬉しいって事だけは伝わるよねフランちゃん」
「うん、確かに。それに、レオネも心なしか嬉しそうだし」

「そりゃあもう、俺も嬉しいですよ。ヴァーミラが父様なんて呼んでくれたの、今日が初めてですから」

そう会話を3人で交わして時折休憩を挟みつつ宿を探す事30分、ようやく宿を見つける事が出来たので入り、金貨で支払って泊まれる事になった。

案内された部屋でヴァーミラが目覚めるまで、魔導書を読んだり軽いお菓子を買いに外へ出たり等をして時間を潰していた。そうして待ち、彼女が目を覚ましたのは日がもうほぼ真上に来ている時であった。

「んああ……おはようフラン姉様、レオネ父様、ミア。ありがとう……私は今、すごく幸せだよ。だって、本当の家族になれた気がするから」

「そっか。ヴァーミラにとって私たちは家族って思ってくれてるんだね」

「わたしも入れてくれたの？」

「当たり前でしょ。ミアだけ仲間外れとかあり得ないし」

目を覚ましたヴァーミラは開口一番、ここに居る皆に対して感謝の言葉を述べた。余程レイゼが加わった事が嬉しかったのだろう、夢の中でも皆でワイワイ騒いで楽しんでいたらしい。

「さて、ヴァーミラも起きた事だし……皆でのんびり町の散策旅に行こうか。他にやる事も無いしな」

すると、レオネが皆で一緒に町の散策をしようとして提案してきた。私たちとしてはそれで一向に構わないし何より、ヴァーミラが物凄く行きたくっている。なので、今から町の散策に皆で向かう事にした。

そうして宿を出た後道なりに進み、とあるアクセサリー店の前を通った時、凄く聞き覚えのある声の主が誰かと言いつ争っているのを聞いた。それと同時に私は考えるよりも先に身体が動き、店の中に入る。案の定、そこに居たのは咲夜であった。どう見ても間違いない、何回見ようとその事実は変わる事がなかった。

ここまで読んで頂き感謝です！ お気に入り登録や星評価、感想を下さった方に

も感謝です！
励みになります！

フラン、幻想郷へ皆と共に帰る

最終話の為、いつもよりも文字数がかなり多くなっています。それと、数日単位で時間が飛ぶ部分があります。

「ですから、貴方の家のメイドにはならないと何度も……いい加減何処かに行ってくださいませんか？ お嬢様を待たせる訳にはいかないのです」

「何故断る？ 金はあるし、美味しいものだって……お前の言うお嬢様がどんな奴かは知らんが、これでも破格の条件を出してやっつてると言うんだぞ？ もしかして、オレの容姿が穢らわしいとか言うんじゃないだろうなあ？」

「そう言う問題では……」

どうやら、あのやたらキラキラした格好の裕福そうな男の人にメイドになれとつこく勧誘されているみたいだ。後ろには見た目だけは強そうな人が居るけどまあ、咲夜なら問題ないかな。

そうして見ていると、どんどん怒りのボルテージが上がっていつている男の人が冒険者らしき人に指示を出し、咲夜に賭け事をしようと言ってきた。向こうが勝てば問答無用でメイドに、向こうが負ければ諦めると言った感じだ。

「はあ……お嬢様からは面倒事は起こすなと言われていたのですが、仕方ありません。一瞬で終わらせてあげましょう」

「ふっ！こいつは腕利きの用——」

その瞬間、咲夜が消えたかと思えば冒険者らしき人の背後に回り込み、足払いをかけて仰向けに転ばせてから馬乗りになり、首筋にナイフを当てた。やられた方は何が起こったのか分からないような顔をしながら呆然としていた。

「と言う訳でこの勝負、私の勝ちですね。まあ、負けてもなるつもりはありませんでしたけど……これで諦めてくれますよね？」

咲夜がそう意味深な笑みを浮かべながら言うのと、男の人は情けない声をあげながら逃げていった。と言うか、咲夜ならあの程度の相手であれば能力使わなくても、ナイフを使った体術だけでも苦勞せずに勝てたと思うけど……お姉様からの指示が影響してるのかな？

そんな事を考えていると、男の人に突き飛ばされて起き上がろうとした咲夜と私の目が合った。まるで時が止まったかのように一瞬固まり……

「い、妹様!? ご無事で何よりです!」

「久しぶり、咲夜! えへへ……」

「あ、ちょっと待って下さい。今、美鈴も呼んできますね」

どうやら、一緒に美鈴も来ているみたいだ。お姉様は来てなかったみたいだけど、咲夜と美鈴がこの町に来てるから近い内に会えるかな。

ヴァーミラもレイゼと再会した時周りを巻き込む勢いで凄く喜んでいたけど、良く考えたら私もお姉様と会ったらそうなるかもしれない。何故なら、まだ咲夜だけしか見ていないのに泣きそうだったからだ。

そんな考え事をしてしていると、咲夜が美鈴を連れて私の所にやって来た。

「妹様……元氣そうで何よりです。えっと、後ろの方々は一体?」

「美鈴、久しぶり! えっとね……」

思わず泣きそうになるのを堪えながら、美鈴と咲夜にヴァーミラたちの事を全て事細かに説明して、ついでに今までの冒険の話もして、この世界でかなり楽しめた

事を伝えた。

「成る程。妹様の『妹』と言うのはそう言う事でしたか」

「でも咲夜さん、この子から発せられる気がとても義理の妹とは思えないほど、お嬢様や妹様とそっくりなんですよ。これはもう、血の繋がった姉妹と言っても過言ではないかと」

「確かに。恐らくこれは儀式とやらの成せる技なのでしょうね、きつと」

その後は当然の流れでパチュリーやお姉様、八雲紫の待つ宿へと皆で一緒に向かう事になった。今の内にお姉様に何か言う事でも考えておこうとしたけど、嬉しさが高まりすぎて何も思いつかなかった。

そうこうしている内にお姉様たちが居ると言う宿に到着した。咲夜の案内で部屋まで行き、扉を開けると……

「あれ？ パチュリー様、お嬢様はどこへ行かれたかご存知ですか？」

「ええ。レミィなら、気分転換に散歩してくるってさっき……フラン!？」

「やっぱり驚かれましたか」

「そりゃあね、目の前に探していた人物がいきなり現れたら誰だって驚くわよ」

パチュリーしか居なかった。曰く、お姉様は気分転換の散歩に出掛けてしまったらしい。八雲紫はいつも通り、いつの間にかいなくなってたとの事。まあ、呼べばスキマからすぐに出てくるらしいから特に気にしなくても良さそうかな。

「これでレミイが戻ってきたらきつと、狂喜乱舞するでしょうね。それと……お帰りフラン。まあ、まだ紅魔館じゃなくて異世界だけだね」

「うん！ ただいま、パチュリー！」

その後はパチュリーにも私がこの世界で得た仲間や家族たちを紹介し、数ヶ月間の冒険の話をした。咲夜や美鈴は2度目だったけど、真剣に聞いてくれて嬉しかった。

話が終わった後は、私の持っているこの世界でもかなり珍しい魔導書にパチュリーが興味ありそうだったので渡して見てもらった。案の定、食い入るようにこれを見始め、自分の持っている魔導書と見比べてみたり、試しに生活系の魔法を唱えてみたり、色々やっていた。

「まさか、また異世界の魔導書をこの目で見る事になるうとは思いませんでしたわ。フランお願い、それをしばらく貸してもらえない？ 代わりにこっちの魔導書を貸

してあげるから」

「良いよ！」

魔導書の貸し借りをを行い、パチュリーが持っていたことはまた別の異世界の魔導書を貸してもらった。

早速開き、最初のページが自爆魔法の解説だったのには驚いたけど、他のページはいたって普通の魔導書と言う感じだった。

私の持っていた魔導書に負けず劣らず、いくつか物騒な効果を持つ魔法も中にはあった。

そんな感じの良い雰囲気では話を楽しんでいると、宿の廊下から物凄い足音が聞こえてきて、扉が勢い良く開く。すると、そこに居たのは……泣いていたレミリアお姉様だった。

「フラン……！ やつと……やつと会えた……！」

「ちよっ……お姉様!？」

部屋に入って来るなり、飛び付く勢いで抱きついてきたお姉様。いきなりの行動に一瞬ビックリしたけど、抱きつかれた時に感じたその暖かさに今まで耐えてきた

私の涙腺は崩壊した。泣く声は出なかったけど涙は止められず、お互いに落ち着くまで15分も掛かった。

「さて、フランも見つかった事だし早速幻想郷に帰る——」

「お姉様ごめん、実は……」

幻想郷に帰る前にまだ護衛依頼が残っている事を伝え、それまで帰るのは待つて貰う事お願いしてみた。これが駄目なら依頼途中で幻想郷へ戻る事も厭わないけど……

「成る程、冒険者ねえ……よく考えてみれば、異世界を少しの間フランと一緒に冒険するのも悪くないわね。という訳で、その依頼とやらが終わるまで付き合うわ。貴女が引き連れている仲間達についても色々聞きたいし、皆もそれで良いわよね？」

「構いませんよ」

「それで構わないわ」

「お嬢様がそう言うのであれば、構いません」

満場一致で依頼が終わるまで待つてくれる事になった。と言ってもここを出発す

るのは3日後である上、エンディアの町までの距離や盗賊等の襲撃頻度によって幻想郷に帰るまでかなりの時間を要する事になるだろう。

「皆、ありがとう！と言っても、出発までまだ3日あるんだよね。何してようかな？」

「う〜ん……町歩きとかどう？ 1週間前にこの町に来てから多少なら場所も知ってるし、それで良ければ付き合うわよ。と言うか、私がフランと一緒に歩きたいのだけど」

「もちろん、良いよ！ お姉様と一緒にのお出かけ、久しぶりなもの！」

こうしてエンディアの町に出発するまでの3日間、お姉様たちと一緒にルコーの町を見て歩く事になった。

ルコーの町に来てお姉様たちと再会してから3日後、商団が最後に寄る町ヱンディアへと向かい始めたので、私たちも一緒に向かっていた。

「しかし、良かったですよね。冒険者でも何でも私たちを受け入れてくれて」「と言うか、私はフランがこの世界でかなり有名になっていたのに驚いたわ。多分それで『フランドール・スカーレットの姉とその関係者一行』と言うのに影響力が現れて来たのだと思うわ。それか単純に戦力が増えるのはありがたいと、そう思っているだけなのかもしれないし」

ご覧の通り、高ランクの魔物や強盜等の襲撃もなく順調に進んでいた。たまに低ランクの魔物が現れたかと思えばお姉様が容赦なく1秒足らずで消し飛ばしてしまふ為、私たちどころか他の冒険者たちの出番すらない。

「あの青みがかかった銀髪の子がフランドールの姉らしい。妹の方も大概だが、姉の方もヤバイな」

「ああ、確かにあの紅い槍はヤバイ。オークが1秒で消し飛ばすなんて初めて見たぞ俺は」

「それに他の人も見た感じですけど、Bランク冒険者レベルの実力を持っていそうですよ……」

あまりにもお姉様が本気を出すから、商団内で早くも噂になってきていた。軽く

捻り潰すだけでも討ち取れるのに、なんでわざわざ全力グングニルを振るうのか聞いてみたら、久しぶりの私との話を妨害してきて非常に腹が立ったかららしい。なるほど。

そうして、邪魔な魔物を全部消して機嫌の良くなったお姉様との会話を再開してから7時間程経った頃、目の前にそれらしき町の姿が見えてきた。エンディアに着いたらとうとうこの世界での冒険も終わりかと思うと、何だか妙な気分だ。もちろん、幻想郷に帰れるのは凄く嬉しいんだけど。

町の入り口に居る兵士さんにギルドカードを見せ、持っていない咲夜たちは通行料を払って町に入った。ここで商団の護衛依頼が完全に終了した為、証拠となる紙達成紙を団長から貰い、エンディアのギルドの場所を教えてもらってから向かった。

「あの、これをお願い」

「……達成紙ですね、承りました。これが、今回渡す報酬です。聞いているとは思いますが、本来より少なくなっています」

「うん。あ、それともう1つ……」

幻想郷へ帰る上でやらなければいけない事、それは……冒険者を辞めると言う事

だ。別にそのまま無視して帰り、失効するのを待ってれば簡単だけど、それだと何か私にとって引っかかるような気がしてならない。だから、今ここで冒険者を辞めてきっぱり断ち切ってから帰った方が、心残りもなく帰れると言う物だ。

それを受付の人に伝えると、少し驚いたような顔をしたもののすぐに手続きを済ませてくれた。こうして、私たち3人は冒険者ではなくなつた。

「お姉様、全部終わったよ」

「分かったわ……紫！出てきて良いわよ！」

「……もう済んだ？じゃあ帰るわ——」

「それと1つ聞きたいのだけど、フランが連れてきた3人を幻想郷に連れてってくれないかしら？」

お姉様がスキマから顔を覗かせた紫にそう質問すると、ヴァーミラたちの方をじっと見つめ始めた。

「ええ、良いわ。幻想郷を滅ぼす様な輩ではなさそうだし」

「そう。良かったわね、フラン」

「うん！ありがとう、紫！」

「どういたしまして。さあ、帰るわよ」

紫の一声で、私たちは目の前に開けられたスキマを通り抜け……紅魔館の庭に降り立った。

「ここが幻想郷……そしてここが、フランちゃんの暮らしてる館なの……？ 大きい！」

「でしょ？ 今日はまだ遅いからゆっくり休んで、明日から館の中と幻想郷を案内するね！」

「お楽しみ在所悪いけどフラン、その前に紅魔館で貴女の無事に帰ってこれた記念の即席パーティーを開くから、明日はここに居て欲しいの。ミラにミア、レイゼを実力者の面々に紹介するのも兼ねてるからね」

「あ、そうなの？ 分かった。じゃあ私も準備手伝わないとね」
「ええ。これから忙しくなるわよ！」

こうして、私の数ヶ月に渡る異世界冒険は終わりを告げた。

今回で最終回となります。ここまで読んでくれた方、お気に入り登録や星評価、感想を下さった方に感謝です！お陰様で完結まで書ききる事が出来ました！

最終章 主人公一行以外の登場人物・魔法解説

殆どどの人物が既に他の章で登場している為、説明が被ります。それと、解説を含めてこれが最後の更新となります。ただ、誤字脱字等の間違いに気づいた時は修正には来ます。

〈冒険団〉魔法の王〈メンバー〉マーカル〈【種族】人間

魔導師ばかりが在籍する冒険団〈魔法の王〉に所属する人間の魔導師。誰にでも丁寧で、かなり気が利く。

主に閥属性魔法を戦闘では好んで扱うが、他の属性魔法もかなりの範囲で扱える。その上ある程度武術も嗜んでおり、素人に毛が生えた程度の相手となら余裕で接近戦をこなせる実力を持つ。

〈回復魔導師 ヒリマ〉【種族】ハーフエルフ

非常に高度な回復魔法を使う魔導師で、ミアの師匠。あらゆる回復魔法を自由自在に操り、それを他人に教えるのは得意だが、つつい熱が入りすぎてしまう癖がある為、ミア以外の弟子からはあまり好かれてはいない。攻撃魔法もある程度扱える。

〈服飾屋 レオネ〉【種族】人間

元はカーテンド王国で服飾屋をやっていた男性。フランとミアに会い、襲撃から逃げるまではヴァーミラと一緒に暮らしていた。

服に付けるアクセサリーを作る店をやっていた一般人である為、戦闘能力は皆無ではあるが、魔法の才能自体はそれなりにある。

ルコーの町で遂に再会する事が出来、フラン達と共に幻想郷へと向かうことになった。

〈妖精のお姫様 エリエス〉【種族】妖精

ミロミスの村に良く訪れる、妖精の森に住む妖精のお姫様。誰にでも友達に接す

るかのような態度を取る為、種族問わずに友達は意外と多い。

妖精族は回復魔法とは違う『治癒術』と言う回復系術技を扱う。彼女だけはそれを住み処の森にいる限り、無限に使うことが可能。

〈紅魔館の主レミリア・スカーレット〉【種族】吸血鬼

幻想郷にある『紅魔館』の主で、『フランドール・スカーレット』の姉。

昔は、フランが能力を制御出来ていない事や狂気を危険視し、同時に彼女をあらゆる意味で守る為に地下室に閉じ込めて隔離していたのだが分かって貰えず、それ故に仲が非常に悪かった。

しかし、時が経つにつれて理解してくれたのか仲が徐々に良くなっていき、今では初めて見る人が引くレベルにまで互いに仲が良い。

〈紅魔館のメイド長十六夜咲夜〉【種族】人間

紅魔館で働くメイド達をまとめるメイド長。館の管理を任されている。

『時間を操る程度の能力』を持ち、それをフルに活用して非常に広い館の管理をこ

なしている。また、能力の応用で空間の広さを弄る事も可能であり、見た目よりも館が広いのはその為である。

〈紅魔館の門番紅美鈴〉【種族】妖怪

紅魔館を侵入者から守る為に門番をしている妖怪。

これといった弱点はない上、『氣を操る程度の能力』を駆使した体術が得意である。なので、スペルカードルールに則らない真っ向勝負を仮にするなら、相当の手練れでない限りは接近戦はしない方が良い。

門番の仕事をしている際立ったまま寝る事があり、良く咲夜にナイフを投げられている。

〈紅魔館の魔法使いパチュリー・ノーレッジ〉【種族】魔法使い

紅魔館の地下にある巨大図書館に居候している魔法使いで、レミリアとは互いに愛称で呼び合う仲である。

種族としての魔法使いである為睡眠や食事を必要とせず、それにより出来た膨大

な時を魔法に費やしている。なので、魔法に関しては彼女の右に出る者は居ないままで紅魔館の皆に言われている。

最近では、たまたま見つけた異世界の魔導書に書かれている魔法をを全て会得しようとして躍起になっている。

〈妖怪の賢者 八雲紫〉【種族】妖怪

現在の幻想郷を創った賢者の1人と言われている古参の妖怪。

あらゆる場所に気まぐれで現れ、いつの間にか居なくなっていると言う神出鬼没ぶりを発揮している為、彼女の現在地を掴む事は不可能と言っても過言ではない。考えが読めず、胡散臭さがある為信用があまり無い。その為か他人から避けられる事が多く、まともに相手にしてくるのは霊夢位。

【使用スペルカード】

『天水降りし氷星』

上空に展開された魔方陣から綺麗な輝きを放つ氷の弾を雨のように降らせ、攻撃

するヴァーミラのスペルカード。中には追尾効果のある弾や、不規則な軌道の弾もある為、回避は結構難しい。

『神滅 ミストルティン』

蒼く輝く長弓を生成し、それに紅い稲妻を纏わせた蒼く輝く矢をつがえて放つ、ヴァーミラコスペルカード。フランのレーヴァティンとほぼ同等の威力を誇る。氷結の状態異常付与に光属性の敵に対する非常に強力な特効効果も存在する。

『禁弾 スターボウブレイク』

フランの羽に付いている魔法石を象った、色とりどりの綺麗な光弾を上空に打ち上げ、落下させて攻撃するフランのスペルカード。

これにて解説も全て投稿し終えた為、更新を終了します。

後日談（時系列バラバラ）

友と呼ばれし皇帝

後日談のリクエストが来た為、連載に戻しました。本編自体は完結済みです。

フラン達『紅珀の月』がこの世界を去って幻想郷に行ってから20年と言う長い時を経たとある日、ノストライト皇国の皇都シェイニーグの城内ではある出来事によって、かなりの大騒ぎとなっていた。

「大変だ！ 皇帝陛下が城から居なくなられてしまわれた！」

「またですか……後1時間でいつもの会議が始まると言うのに、困った方です」

「シェール様、昔から全然変わっていませんよね。いつの間にか城を抜ける所とか、堅苦しいのを嫌がる所とか。まあ、そのお陰で民衆との距離も近く、まるで友人のような皇帝と慕われている為、反乱等もなく国は安定しているのですが」

「それに、あのメイドのレクノヤを娶るとは……他にも前例がない事を平然とやってのけ、貴族の反対などどこ吹く風の政策を打ち出すあの精神も凄いわ、本当に」父である前皇帝が病の為皇位を譲渡し、21歳と言う皇国では異例の若さで皇帝になったシエール。その彼が会議も兼ねた貴族パーティーをしよう時なのに、突然城から姿を消したからだ。彼は昔からそう言う癖があったが、それは皇帝となつた後も変わる事はなかった。

「とにかく、早急に探し当てなさい！早くしなければ面目が立ちませんよ」

「了解!!」

シエールの側近長の指示により、他の側近達は僅かな兵士を率いてシェイニークの町に拡散し始めた。

一方その頃、当の皇帝であるシエールは……

「おじさん、また来たぞー！」

「……昔から疑問なんですけど、どうしていつもここに来るのですか？」

「オレが皇帝になった後でも、昔と態度が変わらない所とかかな？ だからだと思っただけどこに来ると、皇帝の重圧から解放されるんだよね」

「ああ、成る程。確かに皇帝の重圧は凄まじそうですね」

「な？ そう思うだろ？」

7歳の頃から脱走時に良く寄っている傭兵や奴隸を斡旋する店に、癒しを求めてやって来ていた。まさかの現役皇帝が護衛もつけずにこの店にやってきて、店主と昔馴染みの様に会話をしているその光景に来ていた冒険者や奴隸、傭兵達は一瞬固まっていた。

しかし、店主を含めた店員や王都の住民達はいつもの光景だからか、特に驚く事もなく普段通りの仕事や生活をしている。

中には他国の王や皇帝の眼前でやったら速攻で逮捕されるような態度で接する集団も居たが、堅苦しいのが大嫌い『普通』の生活が大好きなシェールは咎めず、むしろ自分から絡みに行く始末であった。

「あ〜やっぱり堅苦しい貴族共の相手よりも、こっちでワイワイやってた方が楽し

いな！」

「シエールさん、やっぱり貴族はお嫌いまで？」

「おう！ 大嫌いだ！ 良い奴も居るが、大抵は民など知らんと言う奴か権力欲しさに娘をやるだの言って近寄ってくる糞ばっかだしな。オレにはレクノヤと言う最高の妻が居るって言ってるのにあの野郎共、元がメイドだからって調子に乗りやがって……！ 即刻牢獄にぶっ込んでやりたい位だ。やらないけどな」

絡まれた住民達はシエールの性格をよく知っている為、『陛下』や『様』と言った呼び方はせず、普段自分達が友人と会話する感じで話を進める。

「あんたみたいな皇帝……と言うか国のトップを見た事無いわ。護衛もつけずに町を出歩くんなんて、正気じゃないわね！」

「ハハ！ そりゃあ違ういな。確かにオレは正気じゃないかもしれん」

「そういや、これだけ出歩いていればあんたから国の秘密を聞き出そうとする輩だって結構出て来ないか？」

「確かに居るぞ。まあ、適当にあしらってるがな。それでもしつこかったり襲ってくる奴はねじ伏せて兵士に適当に渡す。こう言う時は身分に感謝だ」

自身の妻や信頼する側近以外では、こう言った悩み等の話は名前も顔も知らない住民にしかしない。当然ではあるが、機密情報等の重要な事は話さない。

そんな感じで仲良く住民達と話をしていると、この店にシエールを探しに来た側近の1人が入ってきた。

「やつぱりここに居ましたか。シエールさん、もうすぐ貴族パーティーの時間ですからお戻りになってください」

「ええ……はいはい、分かりましたよ。じゃあ、頑張ってくださいませ」

「頑張って！」

そう言うとシエールは、住民達に励まされながら側近に連れられてその場を後にし、城内にある会議室兼パーティー会場へと入っていった。

「うわあ……面倒臭い奴が結構居るな。て言うか、良い奴2人しかいねえ！ 救いは常識はある貴族もある程度居る事だが」

「シエールさん、確かにその通りですが正直に言い過ぎですよ。幸いにも聞こえていない様なので良かったですけど……」

「ああ、ごめん。確かにこの場で言う事じゃなかったな……さて、会議だったか？」

早速頼むぞ」

「了解です」

すると、シェールの隣に居た側近を含む数々の重職の人達が盛り上がっている貴族達を鎮め、会議を始められる雰囲気を作る。そうして彼が特注の椅子に座った所で、側近の 1 人が議長となって会議が始まろうとしていた。

ただ、会議と言ってもそれほど重圧が掛かる物ではなく、美味しい料理や飲み物を食べたり飲んだりしながら話す事が可能な、比較的リラックス出来る感じの会議となっている。ちなみに、こう言う会議を考案したのはシェールであった。

「では、これから会議を始めます。と言っても、皇帝陛下のご意向で堅苦しいのは無しで、何か意見等があればご自由にどうぞ」

「はい。まずは私から、良いですか？」

「ミイさん、どうぞ」

そうして会議が始まると、ミイと呼ばれる女性貴族が最初に手を上げてこう言い始めた。彼女曰く、領地付近に私兵だけでは対処しきれない程の魔物の大群が現れてしまったらしい。

「冒険者ギルドにも緊急依頼をしましたが、やはり時間が掛かるとの事なのです。どうか、冒険者到着まで皇国精鋭の『弾幕魔導戦闘軍』の派遣のご検討をお願い致します……」

「ああ、分かった。それにしても確か、ミイの所の私兵は1300人程だったよな。腕利きの戦士や魔導師も居た筈だが、それでも無理となると……魔物の戦力は最低でも同数か——」

「いえ、ざっと3000以上は居るとの報告が……」

「は!? 小規模戦争並みって、大ピンチじゃねえか! 念には念を入れて1000人送っておくか……」

それを聞いたシエールは速攻で弾幕魔導戦闘軍7000人の内の1000人を派遣する事に決めたが、敵のあまりの規模に衝撃を隠せない様だった。いくら鍛え上げた精鋭とは言え、数の差が大きいとそれだけでも致命的な事態になりうるからだ。

かといって7000人全員を送ってしまえば、その間に他国の軍や高ランクの魔物が皇都やその他の場所に襲撃してきた場合、通常兵力だけでは被害が大きくな

り、国力に影響を及ぼしてしまう事もあり得る。

「そう考えると、冒険者の人達に頼らないと厳しいな……全く、こう言う時に彼女達さえ居ればなあ」

「あのシェールさん、彼女達とは一体誰なのですか？」

「えっとな……お前は知らないだろうが、オレがまだ7歳の小さい子供だった20年前に出会った、吸血鬼姉妹と回復魔導師のパーティーの事さ。もうとっくの前に冒険者を辞め、故郷に帰ってしまったがな」

そんな時にふと、シェールは20年前に出会ったフラン達一行の事を思い出し、もしも彼女達が居たらなどと考えた。

しかし、居ない人の事を望んだとて来る訳でもない事は理解している彼は考えるのを止め、今日の前の課題をどうにかする方に力を注ぐ。

「さて、魔物襲撃には弾幕魔導戦闘軍1000人に兵士2500人を対応に当たらせるでしょうか。位置的にも都に近いし、これ位は妥当だろう。必要に応じて援軍の用意もしておくと、軍部にもそう伝えておく」

「ありがとうございます！」

「よし、この話はこれで一旦おしまいな。さて次は……」

その後は、貴族の一部がシエールを妻関係でからかう等をしてやらかし過ぎてしまつて連行される場面があったものの、その後は良い雰囲気のまま会議は進み、無事に終える事が出来た。

(はあ……これからやること沢山増えそうだ。まあ、頑張るか)

心の中でそう決意した後、シエールは会議室兼パーティー会場を後にした。

後日談の方も読んで頂けて感謝です！

学園交流会 その1

都合により、2回に分けて投稿する事にしました。なので少し短めです。
その2の方は遅くとも4日後には投稿します。

「オウラン学園強すぎだろう……選手全員がああ厄介極まらない『弾幕』と『スペルカード』を会得していたなんてな。そりゃあ中級以下の魔法は役に立たん訳だ」
「本当、そう思うよ！ 3年前に冒険者辞めて故郷に帰ったらしいフランって吸血鬼、とんでもない置き土産を残してたよね。まあ、お陰でボクが楽しめてるから感謝だけど」

「これからジェノやシルフィオ率いるオウランの精鋭選手達と練習試合込みの交流会だけど、勝てる気がしねえ」

フラン達が帰ってから3年と言う月日が経ったとある日、アルゼとサラの率いるルーフィオレ学園の大会出場選手達は、その年から早速行われているオウラン学

園選手との交流会の為にシャームの町に向かっていた。

弾幕の圧倒的手数、スペルカードの手数の多さに威力の高さによって今年の大会まで三強以外を全く寄せ付けない強さを見せ、中でも1番強いルーフィオレ学園ですら勝つことが非常に難しくなった程強くなってしまったオウラン学園。その状況に危機感を覚えた各校の選手達が技術を会得しようと、交流会と称して選手達を派遣したり等躍起になっている。ルーフィオレ学園もその内の1つだ。

「うーん。ジェノ君はどうかならぬ事もないけど、シルフィオがね。去年の大会で何とか弾幕の嵐を抜けたかと思っただら……」

「『風霊一体』か」

「そう。あれをどうしても突破出来ないんだよね。すっごく気になったんで本人に聞いたら、あまりの効果に仰天したよ」

「あの魔法の唯一の欠点は効果時間の短さだから、それを何とかして耐えて突くしかないな」

「まあね。途中で襲ってきた糞盗賊で新魔法の実験も出来たし、今日こそボクは勝って見せるよ！」

「ちょっとあれは……確かに流石に不味いと思うがな」

そんな感じでオウラン学園のエースであるシルフィオをどう倒そうかサラとアルゼが相談していると、選手達を乗せた荷馬車が学園の門前に止まった。道中で盗賊に襲われるなどと言うとんでもないトラブルに巻き込まれ、到着予定が大幅に遅れた為に全員疲労困憊だが、ほぼ怪我はなかった。

何故なら、盗賊達がとある弱小商団の馬車と見違えたが故に油断して襲いかかってしまった上、彼ら自身もそれほど強いとは言えない為であった。

並かそれ以下の盗賊団であれば余裕で壊滅させられる程強いルーフィオレ学園の荷馬車に襲いかかったのが彼らの運の尽きで、サラの新魔法の実験台にされて黒焦げになり、返り討ちにされたのだ。不幸中の幸いなのが、その魔法が不完全であったと言う事だろう。

「ようこそおいで下さいました、ルーフィオレ学園の皆さん。疲れたでしょうから、会場で少しお休みになって下さい」

そうして出迎えてくれたオウラン学園側の先生の案内で、30人のサラ達一行は魔法や弾幕の訓練の為だけに作られた巨大なドーム状の建物に誘導された。

到着すると、先生が彼らにこの建物の説明をし始めた。彼曰く、魔法を大幅に遮断する結界が満遍なく張られていて、たとえ大魔導師が最上級魔法を全開で放ったとしても、傷をつけるのが精一杯な位には丈夫らしい。勿論、物理的にも同程度に強くなる結界もセットで張られているとの事。

当然、これだけの大掛かりな結界魔法を少人数で維持する事など出来る訳がない為、定期的にギルドの魔導師も呼んで維持に勤しんでいるらしい。

「これだけの広範囲に最上級魔法を防ぐ結界……一体どれだけの魔力を使っているか想像出来ないな」

「良いなあ。ボクの学園にも欲しい……」

「確かに、これだけの設備が整っていればオウラン学園の選手達の魔法の腕や魔力が大きくなるのも納得です」

説明を聞き、ルーフィオレ学園の皆は思い思いの感想を述べたり、試しに魔法を天井に放ってみたり、様々な反応を見せている。

そうしている内に、オウラン学園側の選手30人もこの建物に入ってきて、ルーフィオレ学園側の選手達と対面した。

サラとアルゼは他の選手には目もくれず、永遠のライバルとお互いを認めあっているジェノやシルフィオの元へと一直線に向かって行き、声を掛ける。

「シルフィオ、今日こそは勝ってみせるよ！ ボクだって君の風霊一体に対抗する為に魔法を開発してきたんだから！」

「……確かに、貴女から凄い力を感じますね。これは不味いかもしれませんが……私だって風霊一体を更に進化させましたから、そう簡単には負けませんよ」

すると、声を掛けられたサラが周りに誰もいない場所まで歩いていった後、身体から青白い雷光を放ち始めた。どうやらシルフィオの風霊一体と新開発の魔法との対決をするつもりの様だ。

「じゃあ、行くよー！ 『原初げんしよの雷霊らいれい』」

「こちらも行きます…… 『風霊ふうれい一体・天翔てんしやう』」

すると、サラの身体が雷の影響で神々しく光り始める。同時に周囲の空気がシルフィオに集まり始め、最終的にはそれが風の衣となって彼女を包み込んだ。

準備が終わると、選手の中でもジェノとアルゼ以外が耐えきるのは非常に難しい程の高威力・高密度の魔法と弾幕の撃ち合いが始まった。

お互いの最終奥義とも言える強化系魔法を発動させた影響で建物内部には風が吹き荒れ、雷が空を走った。普通なら慌てる所ではあるが、周りの他の選手達は落ち着いてその場を離れたり、防御結界を張って観戦し始める猛者まで現れる始末であった。

しかし、魔法の撃ち合いではほぼ互角の為決着がなかなかつかないと見るや、超高速での格闘戦へと移行し始めた2人。こうなってくると一部の実力者以外は視認すら出来なくなってきたてしまう。

「なあ、この交流会って……魔法や弾幕の腕を磨くんだったよな？ いつの間に殴り合い込みの戦術練習になってんだ？」

「まあ、あの動きはお互いの強化系魔法あってこそだから俺はありだと思えますけど、詭弁でしょうか？ アルゼさん」

「うゝむ……一応、良いんじゃないか？」

実践形式の戦術練習と化してしまったこの交流会に若干呆れながら観戦していたアルゼとジェノ。そうして少し経った頃に魔法の効果時間が切れたらしく、空中に居た2人が力尽きて落下してしまっただが、側に駆け寄った先生達が風魔法を使用

して衝撃を和らげた為、大した怪我もなく無事に地面に到達する事に成功した。

後日談まで読んで頂けて感謝です！

学園交流会 その2

予定より大幅に遅れてしまい、申し訳ありません。後、追加し忘れてしまった文章を追加しました。

「なあ、ジェノ。あの戦いを見てどう思ったんだ？」

「えっと……あれだけ見れば軍隊の隊長かそれ以上の実力者が全力でやり合ってたって感じでしょうか。たった3分の戦いでしたが、物凄い迫力でしたよねアルゼさん」

「ああ。それにしても、あいつら見てると俺やお前が雑魚みたいに見えるくるんだよなあ」

「俺もアルゼさんと同じ思いです。付け入るとするなら3分間だけしか出せず、出した後は大幅に魔力が低下すると言う弱点でしょうね。現に効果が切れた瞬間、空中から落下してきましたし、何とか3分耐えきる事が出来れば確実に勝てると思

います」

オウラン学園の魔法訓練用ドームにて、シルフィオとサラの全魔力を使用した最終奥義込みの戦闘を見終えたアルゼとジェノの2人は、そのあまりの実力差に気圧されつつも、勝つための分析をしていた。

最終奥義魔法込みであれば、近接・魔法戦闘共に両学園では抜きん出ている実力者である2人。そんな彼女達とまともに戦える者は居るものの、勝てる学園生は今現在両学園には居ないと言われている。

「いや、あれを3分耐えるとか鬼畜すぎないか？ それこそお前らに『弹幕』や『スペルカード』を教えたって言う吸血鬼の女の子『フランドール・スカーレット』じゃなきゃ無理だろ。それとも何か対策でもあるのか？」

「勿論です！ ついこの間、あれに耐える為だけの魔法がようやく様になってきました。まあ、まだ完全とは言いがたいですが……見ます？」

「ああ、頼む」

アルゼとの会話中にジェノが2人の最終奥義魔法に対抗する為の魔法を開発してであると、自信ありげにそう言った。

それ程までに自信を持って言うのだから、きつと凄い物なのだろう。心の中でアルゼは思いながら、魔法の発動準備を始めたジェノを見ている。

「では、見ていて下さいね……我が身よ、揺らげ！ 『不触ふしょくの陽炎かげろう』」

ジェノがそう言って魔法を発動させると、辺りにやかましい甲高い音が響き、眩い閃光が一瞬だけ辺りを覆い尽くした。アルゼ達は反射的に目を瞑り、耳を塞ぐ。時間が経った後に目を開けると……

「……ん？ 何だ、全然変わってないじゃないか。失敗か？」

「いえ、発動は成功しました。試しに本気で魔法攻撃をしてみして下さい。自分からは動きませんのでもし、何か不測の事態が起こったとしても俺は何も咎めないのです」

「は!? 何を言って……おう、分かった」

彼の目の前に現れたのは、先程までとはまるで変わりのないジェノであった。てっきり、シルフィオやサラの様なはつきりとした変化があるものだと思っていた為、失敗だと思ったアルゼがそう問いかけるが……どうやらあれで成功した様だ。

「それじゃ行くぞ！ 『エクスクアランサー』！」

そうして、魔法を発動に成功したらしいジェノが自分に攻撃してみてくださいとアル

ぜに頼んだ。

端から見れば何も変化のない様に見える上、逃げ隠れもせずに本気の攻撃を受けると言ってきた為、思わず声を荒げたアルゼ。だが、ジェノの真剣な表情を見てようやく決心がつき、水属性魔法を放つ。

対象に当たった瞬間小規模の水蒸気爆発を起こす槍を放つ攻撃力の高い魔法、使い方によっては属性相性すら無視する事がある。こんなのをまともに受けなければいくら実力者でもダメージは免れない筈なのだが……

「消え……!?!」

「どうですか？ だから俺は平気だと言ったんですよ」

「……なるほどな、一体どういうカラクリなんだ？」

「えっとですね……」

当たったと思ったら揺らぐようにして消え、またすぐに現れると言う、例えるなら光の点滅の様な現象を目の当たりにし、アルゼや遠巻きに見ていた他の生徒も衝撃を受けた。当然、どういう魔法を発動させたのか気になった彼はジェノに対して問いかける。

そう聞かれてジェノはまだ完全ではない、開発途中かつ欠点だらけの不完全なものである魔法について話すのを好ましく思っていない。ただ、知らない他人に町で聞かれたのならともかく、お互いに新魔法を披露しあったり等して高めあう為の交流会なのに、聞かれて答えないのは好ましくないと思っている。

なので前置きを入れつつ、完成している部分のみをアルゼに対して話した。だが、それだけでもアルゼにとっては十分衝撃に値するものであったらしく、凄いものだと感心していた。

「自身に向けられた魔法から放たれる魔力を感知し、それが術者本人に当たるギリギリで身体が揺らぐように消えて避ける事が出来る魔法……か。反則だろ、それは」「いや、割りとそうでもないですよ。『魔法』でない駄目な上に、闇属性魔法には反応を示してくれないので。それに回避する度に魔力が湯水のごとく減っていきますし、致命的なのがこれを使っていると光属性魔法以外の攻撃の威力が極めて低くなると思う……」

「まあ、不完全でそれは凄いいんじゃないのか？ あ、もう昼飯の時間だな……おーい！ お前ら昼飯行こうぜー！」

そうしてジェノが不触の陽炎を解除したのと同時に、室内に備え付けられていた巨大魔導時計の針がちょうど昼食の時間を差していた事に気づいたアルゼ。

すると彼は早速、その場に居たジェノとルーフィオレ学園の生徒達に呼び掛け、オウラン学園内の食堂に昼食を取りに向かった。

「ジェノ君、聞きましたよ。私とサラの2人が魔力切れで休んでいる時に、とんでもない魔法を披露してくれたらしいじゃないですか。何故私との手合わせには使ってくれなかったのですか？」

「ねえジェノ。ボクにも今すぐ見せてくれない？ 後、また戦わない？ 不触の陽炎使って良いからさ」

「何で見ていないのに知ってるの？ シルフィオさん。今食事中だから後にして……後、戦うのは良いですけど今日は勘弁してもらえませんか？ サラさん」

「そんなぁ……」

魔法の披露や練習を終え、食堂で昼食を取っていたジェノ達の元に、歩けるまでに回復したサラとシルフィオが合流していた。

あの時その場に居なかった2人が、魔法訓練ドームでしか披露していないはずの『不触の陽炎』の事についてしつこい程聞いてきている為、ジェノは食事が殆んど取れずに時間だけが無情にも過ぎて行く。

「本当、それにしてもあの4人はアホみたいに高レベルなんで、ぶっちゃけ大会出禁にするべきじゃない？」

「いや、それはないでしょ。この前の大会でオウラン学園のジェノさんとほぼ互角に戦っていた弱小学園の大将もいたし……油断しているとうちらも足元を救われかねないわね」

そんな4人を見て、両学園の他選手も思い思いの会話を交わしながら出された食事を美味しく食べていた。

確かに両学園で際立って高レベルなのはジェノ・アルゼ・シルフィオ・サラの4人ではある。しかし、この3年の間に他の選手達のレベルもぐんぐん上昇していて、差は少しずつ確実に縮まりつつあった。このまま行けば、次の大会の決勝戦ま

でにきつと……

「ふう。時間ギリギリで何とか食べ終わった……」

「あ、終わりましたか。では早くドームに戻ってあの魔法を披露してください」

「早くしてよー！」

「サラさん達が俺の食事を邪魔をするからですよ。まあ、急かさずとも急いで準備をしていますから」

こうして急いで準備をした後、皆で再び魔法の披露や訓練をする為にドームへと向かい、日が暮れるまで休憩を挟みつつ楽しみながら訓練等を行い、幕を閉じた。

余談ではあるが開発中の『不触の陽炎』が皆に披露されてから1ヶ月経った頃、それが学園からカーテンド王国の軍隊の耳に入った。

以降、王都での全面バックアップの元死に物狂いで改良を重ね、1年と言う長い月日を経て効果が落ちたものの、実用性が大幅に改善されたものが軍隊の前衛職に採用されると言う快挙を成し遂げ、ジェノは一躍時の人となった。

それにより、軍隊の前衛職に採用された魔法を開発した生徒を輩出したとしてオウラン学園は表彰され、数ヶ月後には王国一の人気学園として名を上げる事になる。それから更に3ヶ月程経ったある日、だったら同じ様に魔法で有名になってやろうと対抗心を燃やしたルーフィオレ学園の方でも先生組にサラとアルゼの2人が主導し、寝る間も惜しんで『滅弓』と命名した、相手の攻撃魔法に特殊な矢を誘導させ、激突・相殺させる魔法を開発した。

術式の複雑さやバックアップの少なさも相まって2年も掛かってしまったが、何とか実用性の問題をクリアした。そして王都守備隊に何度も売り込んだ結果、オウラン学園と同様に軍隊に採用される事に成功。

出遅れはしたものの、そこから1年経った頃にはオウラン学園と共に『国の命』と呼ばれるまでになり、彼ら彼女らの悲願が成し遂げられたのだった。

後日談も読んで頂けて感謝です！

フランの異世界召喚記

著者 松雨

発行日 2020年2月12日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/200149/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
